臼コクリ遺跡

(USUKOKURI)

大原遺跡

(ÔHARA)

一般国道9号(安来道路)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書V

本文編

1135463
島根大学附属図書館蔵書

3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

臼コクリ遺跡
(USUKOKURI)

大原遺跡
(ÔHARA)

一般国道9号(安来道路)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書V

本文編

1994年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道９号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道９号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当安来道路においても、道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成３・４年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成６年３月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長　神　長　耕　二

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成元年度から一般国道9号（安来道路）建設予定地内遺跡の発掘調査を行っております。この報告書は平成3年度に実施した臼コクリ遺跡と、平成4年度に実施しました大原遺跡の調査結果をとりまとめたものであります。

安来道路の建設が進められています安来平野一帯は、古代から文化が栄えた地域であり、多くの遺跡が確認されております。今回調査を実施しました臼コクリ遺跡からは、弥生時代～奈良時代の集落跡、古墳時代の横穴墓群等が多数発見されました。横穴墓からは、大刀をはじめたくさんの遺物が出土し、また、石棺を内蔵するものも見つかるなど貴重な資料になることと思われます。大原遺跡からは、古代玉作にかかる集落跡を検出し、玉作関連の多くの遺物が発見されました。これまでに、出雲地方では史跡出雲玉作跡をはじめ、多くの玉作遺跡が知られておりますが、調査が行われたものは少なく、大原遺跡の調査によって古代の玉生産の一端をうかがい知ることができました。

本報告書が多少なりとも安来平野周辺の歴史を解明する契機となり、また広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるうえで役立てば幸いと存じます。

本書を刊行するにあたり、調査にご協力をいただきました建設省中国地方建設局松江国道工事事務所をはじめ関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

島根県教育委員会

教育長　今　岡　義　治

臼コクリ遺跡全景

単竜環頭大刀

金環・辻金具

大原遺跡全景

勾玉・管玉製作工程

例　　言

1．本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成3年度に実施した、一般国道9号（安来道路）建設予定地内臼コクリ遺跡と平成4年度に実施した大原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査組織は次の通りである。

調査主体　島根県教育委員会

事務局　平成3年度［1991］

目次理雄（文化課長）、藤原義光（同課長補佐）、勝部　昭（同課長補佐）、高橋　研（同文化係長）、伊藤　宏（同文化係主事）、加田恵康（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　卜部吉博（文化課埋蔵文化財第二係長）、今岡一三（同主事）、大庭俊次（同主事）、寺尾　令（同教諭兼文化財保護主事）、倉敷　実（同教諭兼主事）、井上正志（同教諭兼主事）、土谷　徹（同教諭兼主事）

事務局　平成4年度［1992］

目次理雄（文化課長）、山根成二（同課長補佐）、高橋　研（同主幹＜文化係長＞）、伊藤　宏（同文化係主事）

勝部　昭（埋蔵文化財調査センター長）、久家儀夫（同課長補佐）、工藤直樹（同企画調整係主事）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　卜部吉博（文化課主幹＜調査第二係長＞）、今岡一三（同主事）、寺尾　令（同教諭兼文化財保護主事）、斉藤　勉（同教諭兼主事）、土谷　徹（同教諭兼主事）

事務局　平成5年度［1993］

広沢卓嗣（文化課長）、山根成二（同課長補佐）、中島　哲（同文化係長）、伊藤　宏（同文化係主事）

勝部　昭（埋蔵文化財調査センター長）、久家儀夫（同課長補佐）、工藤直樹（同企画調整係主事）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　卜部吉博（文化課主幹＜調査第二係長＞）、今岡一三（同主事）、寺尾　令（同教諭兼文化財保護主事）

調査指導者　山本　清（島根県文化財保護審議会委員）、池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、井上貴央（鳥取大学医学部教授）、三浦　清（島根大学教育学部教授）、勝部　衛（玉湯町教

育委員会)、須藤　隆（東北大学文学部教授)、穴沢咏光、村上　隆（奈良国立文化財研究所主任研究官)、佐藤　豊（和鋼博物館副館長）

遺物整理　野中洋子、長谷川弘子、桑谷美代恵、多久和文子、門脇卓子、来海順子、佐々木孝子、加藤往子、陶山佳代、高橋啓子、増田弘子、大島律江、佐伯明子、野坂栄子、牛尾リヨ子、淀江正子、家島千歳、柏谷恵以子

3．挿図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位である。

4．本書に掲載した「遺跡位置図」は、建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

5．本書で使用した遺構記号は次の通りである。

ＳＩ…竪穴住居跡　ＳＢ…掘立柱建物跡　ＳＸ…土壙墓　ＳＤ…溝状遺構　ＳＫ…土壙

6．本書の挿図では、基本的に縮尺を遺構1/60、遺物出土状況1/30に、また遺物では須恵器1/3、弥生土器・土師器1/4、鉄製品1/2に統一して載せた。

7．本書の執筆・編集は、今岡と寺尾が協議してこれを行った。

8．本遺跡出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会で保管している。

目　　次

I　位置と環境 …… 1

II　調査に至る経緯 …… 5

III　調査の経過 …… 5

IV　臼コクリ遺跡 …… 7

1　調査の概要 …… 7

2　各調査区の概要 …… 7

3　小　　結 ……163

V　大原遺跡 ……195

1　調査の概要 ……195

2　小　　結 ……261

VI　自然科学的分析 ……277

安来市臼コクリ遺跡より検出された人骨について（井上貴央） ……277

島根県安来市大原１号横穴出土の耳環の材質と構造（村上　隆） ……282

安来市大原遺跡、臼コクリ遺跡出土鉄滓の調査（佐藤　豊） ……284

挿　図　目　次

臼コクリ遺跡

第 1 図　臼コクリ・大原遺跡周辺の遺跡 …… 3
第 2 図　臼コクリ遺跡調査区設定図 …… 9～10
第 3 図　A区遺構配置図 …… 11～12
第 4 図　A区ＳＫ－01・02・03・04実測図 …… 13
第 5 図　B区遺構配置図 …… 14
第 6 図　B区遺構実測図 …… 15～16
第 7 図　D区臼コクリ古墳調査前地形測量図 …… 17
第 8 図　D区臼コクリ古墳調査後地形測量図 …… 18
第 9 図　D区臼コクリ古墳周溝内遺物出土状況図 …… 19
第10図　D区古墳周溝出土遺物実測図 …… 20
第11図　D区ＳＢ－01実測図 …… 21
第12図　D区ＳＢ－02実測図 …… 22
第13図　D区ＳＢ－03実測図 …… 23
第14図　D区ＳＢ－04・05実測図 …… 24
第15図　D区ＳＢ－06実測図 …… 25
第16図　D区加工段実測図 …… 26
第17図　加工段出土遺物実測図 …… 27
第18図　D・E区遺構配置図 …… 29～30
第19図　横穴及び後背墳丘位置図 …… 31～32
第20図　N－1号横穴実測図 …… 33～34
第21図　N－1号横穴玄室内土器屍床及び遺物出土状況実測図 …… 35
第22図　N－1号横穴土器屍床除去後実測図 …… 36
第23図　N－1号横穴出土遺物実測図(1) …… 37
第24図　N－1号横穴出土遺物実測図(2) …… 38
第25図　N－1号横穴出土金属製品実測図 …… 38
第26図　N－2号横穴実測図 …… 39～40
第27図　N－2号横穴前庭部及び土壙墓実測図 …… 41～42
第28図　N－2号横穴玄室内土器屍床及び遺物実測図 …… 43

第 29 図　N－2 号横穴土器屍床除去後実測図 …… 44
第 30 図　N－2 号横穴玄室内出土遺物実測図(1) …… 45
第 31 図　N－2 号横穴玄室内出土遺物実測図(2) …… 46
第 32 図　N－2 号横穴出土遺物実測図(1) …… 47
第 33 図　N－2 号横穴出土遺物実測図(2) …… 48
第 34 図　N－2 号横穴前庭部土壙墓出土遺物実測図 …… 49
第 35 図　N－2 号横穴出土金属製品実測図 …… 51～52
第 36 図　N－2 号横穴出土玉類実測図 …… 53
第 37 図　N－3 号横穴実測図 …… 55～56
第 38 図　N－3 号横穴玄室内土器屍床及び遺物出土状況実測図 …… 57
第 39 図　N－3 号横穴土器屍床除去後実測図 …… 58
第 40 図　N－3 号横穴玄室内出土遺物実測図 …… 58
第 41 図　N－3 号横穴羨道部出土遺物実測図 …… 59
第 42 図　N－3 号横穴出土鉄製品実測図 …… 61～62
第 43 図　N－1・2 号横穴須恵器床実測図 …… 63～64
第 44 図　N－4 号横穴実測図 …… 65
第 45 図　N－4 号横穴遺物出土状況実測図 …… 66
第 46 図　N－4 号横穴出土遺物実測図 …… 66
第 47 図　N－5 号横穴実測図 …… 67～68
第 48 図　N－5 号横穴前庭部遺物出土状況実測図 …… 69
第 49 図　N－5 号横穴玄室内遺物出土状況実測図 …… 70
第 50 図　N－5 号横穴出土遺物実測図 …… 71
第 51 図　N－5 号横穴出土鉄製品実測図 …… 72
第 52 図　N－6 号横穴実測図 …… 73
第 53 図　N－6 号横穴遺物出土状況実測図 …… 74
第 54 図　N－6 号横穴出土遺物実測図 …… 74
第 55 図　N－7 号横穴実測図 …… 75～76
第 56 図　N－7 号横穴前庭部遺物出土状況実測図 …… 77
第 57 図　N－7 号横穴玄室内遺物出土状況実測図 …… 78
第 58 図　N－7 号横穴出土遺物実測図 …… 79
第 59 図　N－7 号横穴出土鉄製品実測図 …… 79

第 60 図　N－8 号横穴実測図 …… 80
第 61 図　N－9 号横穴実測図 …… 81～82
第 62 図　N－9 号横穴羨道及び前庭部遺物出土状況実測図 …… 83
第 63 図　N－9 号横穴玄室内遺物出土状況実測図 …… 84
第 64 図　N－9 号横穴玄室内出土遺物実測図 …… 85
第 65 図　N－9 号横穴羨道部出土遺物実測図 …… 86
第 66 図　N－9 号横穴出土金属製品実測図 …… 86
第 67 図　N－10号横穴実測図 …… 87
第 68 図　S－1 号横穴実測図 …… 89～90
第 69 図　S－1 号横穴遺物出土状況実測図 …… 91
第 70 図　S－1 号横穴玄室内出土遺物実測図 …… 91
第 71 図　S－1 号横穴出土鉄器実測図 …… 92
第 72 図　S－2 号横穴実測図 …… 93～94
第 73 図　S－2 号横穴玄室内石棺及び遺物出土状況実測図 …… 95～96
第 74 図　S－2 号横穴前庭部遺物出土状況実測図 …… 97
第 75 図　S－2 号横穴石棺除去後実測図 …… 97
第 76 図　S－2 号横穴玄室内東隅出土遺物実測図 …… 98
第 77 図　S－2 号横穴玄室内出土遺物実測図(1) …… 99
第 78 図　S－2 号横穴玄室内出土遺物実測図(2) …… 100
第 79 図　S－2 号横穴玄室内出土遺物実測図(3) …… 101
第 80 図　S－2 号横穴前庭部出土遺物実測図(1) …… 102
第 81 図　S－2 号横穴前庭部出土遺物実測図(2) …… 103
第 82 図　S－2 号横穴前庭部出土遺物実測図(3) …… 103
第 83 図　S－2 号横穴出土金属製品実測図 …… 104
第 84 図　S－2 号横穴出土環頭大刀、玉実測図 …… 105～106
第 85 図　S－3 号横穴実測図 …… 109～110
第 86 図　S－3 号横穴玄室内石棺及び遺物出土状況実測図 …… 111～112
第 87 図　S－3 号横穴前庭部遺物出土状況実測図 …… 114
第 88 図　S－3 号横穴石棺除去後実測図 …… 115
第 89 図　S－3 号横穴出土遺物実測図 …… 115
第 90 図　S－3 号横穴出土金属製品実測図 …… 116

第91図　S－4号横穴実測図 …… 117～118
第92図　S－4号横穴玄室及び前庭部遺物出土状況実測図 ……119
第93図　S－4号横穴出土遺物実測図 ……120
第94図　S－4号横穴出土金属製品実測図 ……120
第95図　S－5号横穴実測図 ……122
第96図　S－5号横穴玄室内出土遺物実測図 ……122
第97図　S－5号横穴玄室内遺物出土状況実測図 ……123
第98図　S－6号横穴実測図 ……123
第99図　1号土器棺実測図 ……124
第100図　2号土器棺実測図 ……124
第101図　3号土器棺実測図 ……125
第102図　4号土器棺実測図 ……126
第103図　土器棺実測図 ……127
第104図　1号墓調査後測量図 …… 129～130
第105図　1号墓第1主体部実測図 ……131
第106図　1号墓第2・3主体部実測図 ……131
第107図　1号墓第4・5・6主体部実測図 ……132
第108図　1号墓SD－01遺物出土状況図 ……133
第109図　1号墓出土遺物実測図 ……134
第110図　2号墓調査後測量図 …… 135～136
第111図　2号墓第1・2・3・4主体部実測図 …… 137～138
第112図　SX－01・02実測図 ……139
第113図　SX－03・SD－02実測図 ……140
第114図　SX－04・05実測図 ……141
第115図　SX－06実測図 ……142
第116図　SX－07実測図 ……143
第117図　SX－08実測図 ……143
第118図　土壙墓出土遺物実測図 ……144
第119図　SI－01・03実測図 ……146
第120図　SI－02実測図 ……147
第121図　SI－03出土遺物実測図 ……148

第122図　ＳＩ－02出土遺物実測図 ……148
第123図　ＳＩ－04実測図 …… 149～150
第124図　ＳＫ－01・02・03実測図 ……151
第125図　ＳＩ－04出土遺物実測図 ……151
第126図　ＳＩ－05実測図 ……152
第127図　ＳＩ－05出土遺物実測図 ……153
第128図　ＳＩ－06実測図 ……154
第129図　ＳＩ－06出土遺物実測図 ……154
第130図　Ｅ区ＳＢ－01・02実測図 …… 155～156
第131図　ＳＢ－01・02出土遺物実測図 ……157
第132図　Ｅ区ＳＢ－03実測図 ……158
第133図　ＳＢ－03出土遺物実測図 ……159
第134図　Ｅ区ＳＢ－04・05実測図 ……160
第135図　ＳＫ－04・05・06実測図 ……162

大原遺跡

第 1 図　大原遺跡調査区位置図 ……195
第 2 図　大原遺跡遺構配置図 ……196
第 3 図　ＳＩ－01実測図 ……198
第 4 図　ＳＩ－01遺物出土状況図 ……199
第 5 図　ＳＩ－01出土遺物実測図 ……200
第 6 図　ＳＩ－01出土管玉製品実測図 ……200
第 7 図　ＳＩ－01出土勾玉、臼玉未製品実測図 ……201
第 8 図　ＳＩ－01出土砥石実測図 ……202
第 9 図　ＳＩ－02実測図 …… 203～204
第 10 図　ＳＩ－02工作用ピット実測図 ……205
第 11 図　ＳＩ－02遺物出土状況図 …… 207～208
第 12 図　ＳＩ－02出土遺物実測図 ……209
第 13 図　ＳＩ－02出土管玉未製品実測図 ……210
第 14 図　ＳＩ－02出土勾玉未製品実測図 ……211
第 15 図　ＳＩ－02出土砥石実測図 ……212

第16図　ＳＩ－03・ＳＢ－03実測図 …… 213～214
第17図　ＳＩ－03出土遺物実測図 ……215
第18図　ＳＩ－04実測図 ……216
第19図　ＳＩ－04出土遺物実測図 ……217
第20図　ＳＩ－05・ＳＢ－05・06・08・09実測図 …… 219～220
第21図　ＳＩ－05出土遺物実測図 ……221
第22図　ＳＢ－05出土遺物実測図 ……222
第23図　ＳＢ－06出土遺物実測図 ……222
第24図　ＳＢ－08・09出土遺物実測図 ……223
第25図　ＳＢ－01実測図 ……223
第26図　ＳＢ－02実測図 ……224
第27図　ＳＢ－01・02出土遺物実測図 ……225
第28図　ＳＢ－04ａ・04ｂ実測図 ……226
第29図　ＳＢ－07・10・11実測図 ……227
第30図　ＳＢ－07出土遺物実測図 ……228
第31図　ＳＢ－12・13ピット群実測図 …… 229～230
第32図　ＳＢ－12出土遺物実測図 ……231
第33図　ＳＢ－14加工段実測図 ……232
第34図　大原１号横穴実測図 …… 235～236
第35図　大原１号横穴玄室内石棺実測図 ……237
第36図　大原１号横穴石棺除去後実測図 ……238
第37図　大原１号横穴出土遺物実測図 ……239
第38図　大原１号横穴出土金属製品実測図 …… 241～242
第39図　大原２号横穴実測図 ……243
第40図　大原２号横穴閉塞用須恵器甕実測図 ……243
第41図　遺物包含層土層図 …… 245～246
第42図　包含層出土弥生土器実測図(1) ……248
第43図　包含層出土弥生土器実測図(2) ……249
第44図　包含層出土弥生土器実測図(3) ……250
第45図　包含層出土土師器実測図(1) ……251
第46図　包含層出土土師器実測図(2) ……252

第 47 図　包含層出土土師器実測図(3) ……253
第 48 図　包含層出土土師器実測図(4) ……254
第 49 図　包含層出土須恵器実測図 ……255
第 50 図　包含層出土管玉、勾玉未製品実測図 ……256
第 51 図　包含層出土勾玉、玉製品実測図 ……257
第 52 図　その他の遺物 ……258
第 53 図　鏡 ……260

I　位　置　と　環　境

臼コクリ遺跡・大原遺跡は、島根県安来市佐久保町に所在する。安来市は島根県の東端部に位置し、北に中海を望み、市の中央には飯梨、吉田、伯太の三河川によって形成された安来平野が広がっている。安来平野は東西約13km、南北約13kmの広がりをもち、出雲平野につぐ穀倉地帯である。両遺跡は、伯太川の堆積作用で形成された低地と東部の丘陵地が接する安来市街地の南側に位置しており、「出雲国風土記」で言う意宇郡安来郷・楯縫郷あたりに位置し、近くの十神山が「砥神島」と記載されていることからも、当時は、中海が近くに迫っていたものと考えられる。

さて、両遺跡の所在する安来平野周辺は、県内でも有数の遺跡分布密度の高い地域である。しかし縄文時代以前の遺跡は、ほとんど発見されていない。それは諸河川の侵食作用によって下流に多量の土砂を流し、当時の遺跡が地下に埋められたためと考えられる。

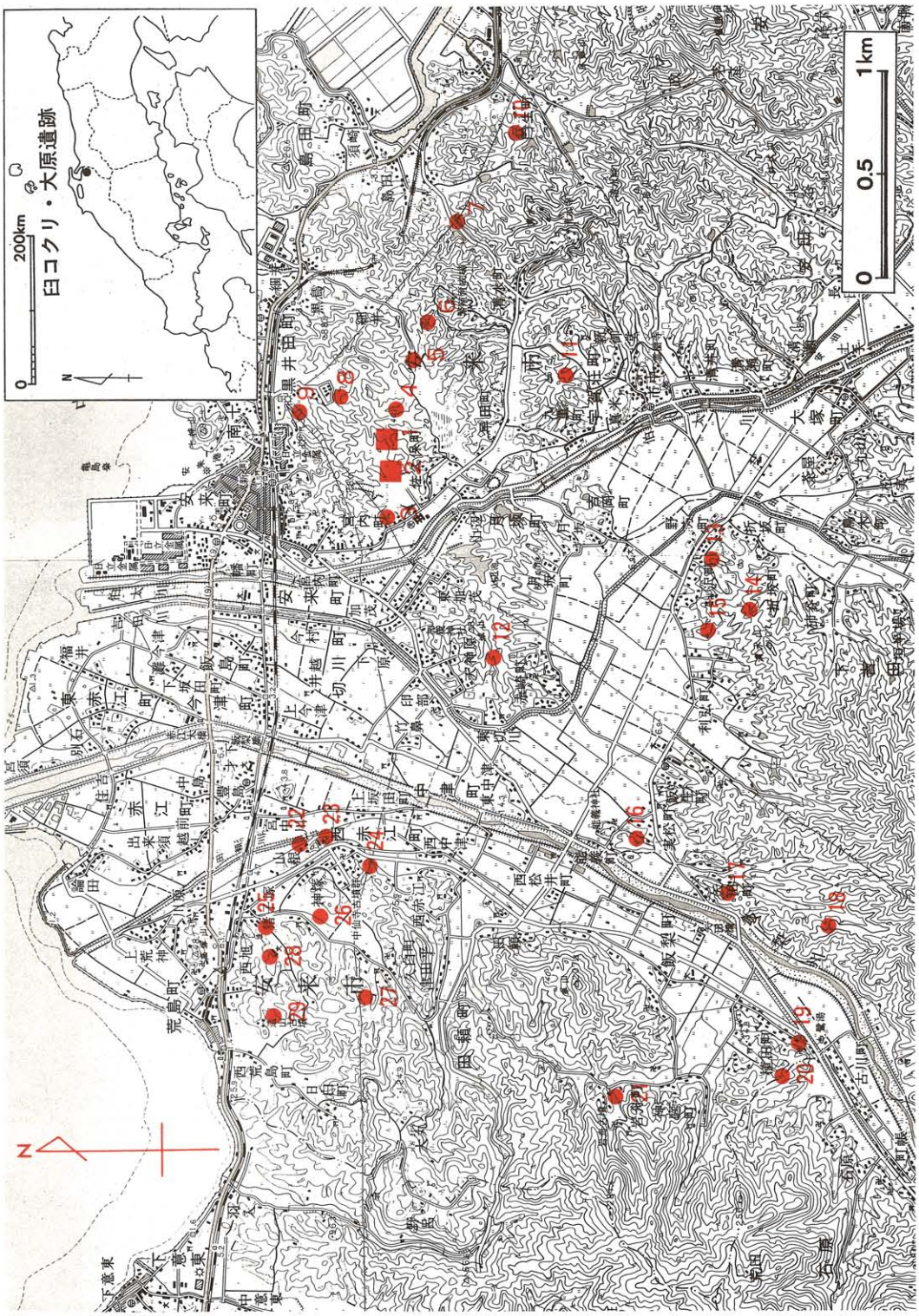
現在知られている弥生時代の遺跡は50カ所ほどで、丘陵や台地上で多く発見されている。時期的には、弥生時代後期のものが多い。安来平野では確実な前期の遺跡はまだ見つかっておらず、おそらく現在の水田の地下深くに眠っているものと考えられる。弥生時代の集落遺跡としては、八脇谷遺跡・潜戸山遺跡・十善遺跡も同様に、弥生時代中期～後期の土器を伴う竪穴住居が検出されている。埋葬遺跡としては、九重町の丘陵上で発見された九重土壙墓群が知られている。ここで出土した土器群は「九重式土器」と呼ばれ、山陰の弥生土器編年において後期の標式とされている。また終末期には、飯梨川以西の西赤江町の仲仙寺墳墓群や安養寺墳墓群で、四隅突出型墳丘墓と呼ばれる地域色の濃い墳丘墓が造られた。

古墳時代には安来平野周辺では多くの古墳が造られ、飯梨川以西の荒島町の丘陵上に造山古墳や大成古墳など、竪穴式石室を内蔵する前期の大型方墳が連続的に築かれている。中期には前方後円墳が築造されるようになり、飯梨川以東の伯太川・吉田川流域には全長25m以上の前方後円墳が7基確認されている。特に、中海を望み、伯太川河口に位置する毘売塚古墳は、舟形石棺を持つ全長43mの前方後円墳としてよく知られている。後期には横穴墓が多く造られ、特に安来平野の場合は、特筆すべき副葬品を伴うものが多いことに特徴がある。大原遺跡に隣接する宮内遺跡では、2基の横穴墓が検出されたが、そのうち1基は、比較的狭長な羨道と、ドーム形の玄室を持ち、組み合わせ式家形石棺を埋葬施設に持つもので、鞍金具、壺鐙などの馬具、大刀、鉄鏃などの武器が副葬されており、注目される。さらに臼コクリ遺跡から北東約1kmに位置する高広遺跡では丘陵斜面に合計13基の横穴墓が検出され、このうち1基の組み合わせ式家形石棺の中から金銅装の双竜環頭や馬具などが発見されている。ほかにも、臼コクリ遺跡の南東約7kmに位置する鷺ノ湯温泉近くの鷺ノ湯病院跡横穴からは環頭大刀や耳飾り、金銅装の冠立飾りなどきわめてすぐれた副葬品を出土して

いる。横穴墓のほかには、飯梨川以西の岩舟古墳、塩津神社古墳、若塚古墳など、出雲地方の後期古墳を特徴づける石棺式石室が造られている。

奈良時代の遺跡としては、本遺跡の南約3kmの丘陵縁辺に舎人郷正倉跡推定地や出雲地方最古の仏教寺院とされる教昊寺などの存在が知られている。

生産遺跡としては、今回報告する大原遺跡のほか、南東約4kmの谷奥部に出雲地方最古の須恵器窯のひとつに数えられる高畑古窯跡群（操業開始時期は5世紀と推定）が存在する。



第１図　臼コクリ、大原遺跡周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	所　在　地	種　別	概　要
1	臼コクリ遺跡	佐久保町臼コクリ	住居跡、横穴	竪穴住居跡６棟、横穴墓15基他
2	大原遺跡	佐久保町大原	玉作跡	勾玉、管玉未製品、碧玉
3	宮内遺跡	宮内町屋並	住居跡、横穴	竪穴住居跡７棟、横穴墓２基他
4	岩屋口遺跡	佐久保町カワラケ免	住居跡、横穴	横穴墓12基他
5	越峠遺跡	黒井田町高垣	住居跡	竪穴住居跡６棟、掘立柱建物跡12棟他
6	才ノ神遺跡	黒井田町越峠	住居跡	掘立柱建物跡４棟他
7	島田南遺跡	島田町雨谷	住居跡	掘立柱建物跡６棟他
8	高広遺跡	黒井田町	横穴他	横穴墓13基、環頭大刀、馬具
9	昆売塚古墳	黒井田町浜垣	古墳	前方後円墳、舟形石棺
10	高畑須恵器窯跡群	門生町高畑	窯跡	窯跡３基以上、工房跡４基
11	九重遺跡	九重町地獄谷	土壙墓他	弥生土器
12	小谷遺跡	東切川町小谷	土壙墓	仿製内行花文鏡、刀子、土師器
13	教昊寺跡	野方町真崎	寺院跡	心礎、瓦、泥仏
14	鍵尾遺跡	沢町鍵尾谷	土壙墓他	土師器
15	潜戸山遺跡	沢町潜戸山	住居跡	竪穴住居跡、弥生土器
16	能義神社奥の院古墳群	能義町能義	古墳群	円墳
17	矢田横穴群	矢田町須賀谷	横穴群	横穴墓10基、家形石棺
18	椿谷古墳群	矢田町椿谷・宮谷	古墳群	前方後円墳５基、横穴墓10基以上
19	鷺の湯病院跡横穴群	植田町植田	横穴群	横穴墓８基以上、組合式石棺、環頭大刀
20	かわらけ谷横穴群	植田町林原	横穴群	横穴墓13基、環頭大刀、金環
21	岩舟古墳	岩舟町岩屋	古墳	石棺式石室
22	安養寺墳墓群	西赤江町	墳墓群	円墳、四隅突出型墳丘墓
23	宮山墳墓群	西赤江町宮山	墳墓、住居跡	方墳、四隅突出型墳丘墓、円墳他
24	仲仙寺墳墓群	西赤江町	墳墓群	円墳、方墳、四隅突出型墳丘墓
25	仏山古墳	荒島町仏山	古墳	箱式石棺、環頭大刀
26	塩津神社古墳	久白町	古墳	石棺式石室
27	若塚古墳	久白町	古墳	方墳、石棺式石室
28	大成古墳	荒島町大成	古墳	方墳、竪穴式石室、二神二獣鏡、素環頭大刀
29	造山古墳群	荒島町造山	古墳群	方墳、前方後円墳、竪穴式石室、鏡他

II　調査に至る経緯

昭和47年５月26日付けで建設省松江国道工事事務所から県教育委員会あて国道９号のバイパス建設の基本設計資料作成のため、安来市吉佐町から松江市乃白町に至る30.3km区間における埋蔵文化財の有無について照会があった。これを受けて、県教育委員会では昭和47年と昭和48年に分布調査を実施した。この結果をふまえてルート案が作成され、昭和50年度と昭和51年度に一部の発掘調査を実施した。昭和61年度になると安来市島田町から同市赤江町に至る延長6.9km区間が「安来バイパス」として事業化されたが、昭和63年度には高規格幹線道路（自動車専用道路）に計画変更され延長18.7kmの「安来道路」として実施されることとなった。この計画変更に伴い予定ルートも変更になったため、昭和62年度と昭和63年度に再度分布調査を実施し、１－２・２－１工区の延長6.9km区間の発掘調査を平成元年度から開始し、インターチェンジ予定地の一部を除き平成４年度で現地調査がほぼ終了した。

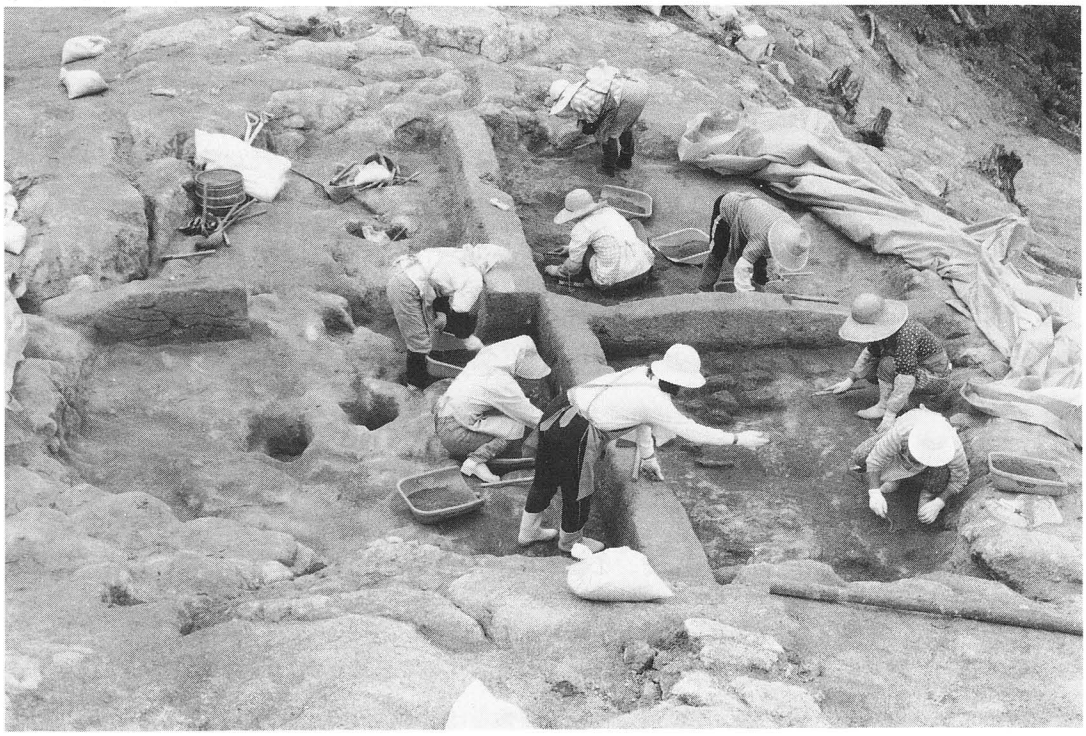
臼コクリ遺跡は平成３年度、大原遺跡は平成４年度に発掘調査を実施した。

III　調査の経過

臼コクリ遺跡は、調査区をＡ～Ｅ区の５カ所設定して、平成３年４月26日にＡ区から調査を開始した。Ａ区では土壙状遺構４基とピット数穴を検出した。引き続きＢ区は５月17日から調査を実施し、土壙状遺構２基、加工段１を検出した。Ｃ区はＢ区とほぼ同時並行で調査を開始したが、遺構・遺物等は認められなかった。Ｄ区は５月21日から古墳の地形測量を行い、同23日から調査を開始した。古墳１基と掘立柱建物跡１棟を検出し、写真撮影、遺構実測の後、７月２日に調査を終了したが、その後、古墳の下方斜面に遺構が存在しているのが判明し、11月26日から再び調査を開始した。その結果、掘立柱建物跡４棟、加工段１棟を検出した。写真撮影、遺構実測を行い、12月20日に調査を終了した。Ｅ区は７月８日から調査を実施した。事前の範囲確認調査で、古墳状の高まり２カ所と横穴墓・土壙墓及び集落跡が確認されており、遺構が密集している地点であった。調査の結果、丘陵尾根上から竪穴住居跡６棟、掘立柱建物跡５棟、土器棺墓４基、土壙墓群を検出した。また、丘陵斜面からは横穴墓16基を確認した。また、古墳状の高まりは、主体部や周溝等は認められず、横穴墓の後背墳丘であることが判明した。これらの写真撮影、遺構実測を行った後、12月20日に現地調査を終了した。

大原遺跡は、丘陵部と水田部が調査対象範囲で、平成４年６月15日から調査を開始した。まず、水田部から調査を行い、須恵器、土師器などの土器類をはじめ、勾玉・管玉の未製品、碧玉・瑪瑙

の剝片等が多量に出土したが、遺構は認められなかった。8月7日に写真撮影等を行い、終了後、丘陵部の調査にとりかかった。丘陵部からは玉作工房跡2棟、竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡15棟、横穴墓2基を検出し、丘陵から水田に移る途中の平坦面で遺物包含層を確認した。この遺物包含層からは水田部以上に多量の遺物が出土した。写真撮影、実測を行った後、12月18日に現地調査を終了した。



Ⅳ　臼コクリ遺跡

1　調査の概要

臼コクリ遺跡は、東西方向に延びる２本の丘陵部に位置し、ここに調査区を５箇所設定して調査を行った。調査区の設定は、安来道路のインター部に当たる北側丘陵部にＡ～Ｃ区を設定し、本線部分に当たる、南側丘陵のほぼ全域をＤ・Ｅ区とした。

Ａ区からは土壙状遺構４基とピットを検出したが、時期の判明するのは、土壙１基だけであった。Ｂ区からは土壙状遺構２基と加工段１を検出したが、時期等については不明であった。Ｃ区については、古墳状の高まりが存在したため、調査を開始したが、遺構等は検出できなかった。Ｄ区からは、調査区最高所の丘陵尾根上で古墳１基、掘立柱建物跡６棟を検出している。古墳は径約10mの小型の円墳で、墳丘の半分近くが削平されていたため、幅約1.0mの周溝を検出しただけである。この周溝内から須恵器２個と円筒埴輪の破片が出土している。また、後世、この古墳を含めた尾根上平坦面に建物が建てられていたようであり、掘立柱建物跡１棟を検出した。このほかの建物跡は、古墳の位置する尾根頂上部から約20m下方の南側斜面に位置し、大半が流出していた。土器は少量で時期については明確にできなかったが、古墳時代後期～奈良時代頃の建物跡と考えられる。また、土器の他に鉄滓が多数出土したが、鈩等の遺構は検出できなかった。Ｅ区は南側丘陵のほぼ全域に当たり、尾根上から弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃の竪穴住居跡６棟、掘立柱建物跡５棟、墳丘墓２基、土壙墓８基、古墳時代前期～中期にかけての土器棺墓４基を検出した。また、斜面からは古墳時代後期の横穴墓を検出しており、北側斜面から10基、南側斜面から６基の計16基を検出した。横穴墓については、北側斜面で検出したものをＮ－１～Ｎ－10号横穴墓、南側斜面で検出したものをＳ－１～Ｓ－６号横穴墓と呼称した。このうち主要なものとしては、北側のＮ－１～Ｎ－３号横穴の玄室内には須恵器屍床が作られていた。また、Ｎ－２号の前庭部には４基の墓壙が掘り込まれており、注意をひいた。Ｎ－７号の前庭部には石棺の蓋石が置かれており、玄室内に石棺が存在するものと思われたが、調査の結果、石棺は壊されて運び出されたようで、玄室内には存在しなかった。南側斜面ではＳ－２・３号から横口の組み合わせ式家形石棺３基を検出した。また、Ｓ－２号の石棺横から単竜環頭大刀の柄頭が出土している。

2　各調査区の概要

【Ａ区】

北側丘陵部の先端尾根上がＡ区である（第３図）。尾根上平坦面の標高は、27～28mを測り、調査対象面積は約720m²であった。検出遺構は、土壙４基と少数のピットだけである。

ＳＫ－01（第４図）

調査区中央、やや東寄りで検出した。上縁径3.1m、深さ40cmを測り、平面形は不整形な円形を呈している。壁面は、やや傾斜して掘り込まれていた。南側底面には、もう１段浅い落ち込みが認められたが、性格は不明である。内部からは、弥生時代後期後半の土器小片が少量出土したが、図化はできなかった。

ＳＫ－02（第４図）

調査区中央で検出した。上縁径1.8m、深さ38cmを測り、平面形は円形を呈している。壁面は、傾斜して掘り込まれていた。埋土は明黄褐色砂質土１層で、遺物は何も出土していない。

ＳＫ－03（第４図）

調査区中央、ＳＫ－02の２m北に位置する。長軸1.7m、短軸1.2m、深さ60cmを測り、平面形は楕円形を呈している。壁面は、垂直気味に掘り込まれていた。埋土は黄褐色砂質土１層で、遺物は何も出土していない。

ＳＫ－04（第４図）

調査区西端の中央部に位置する。長軸2.1m、短軸1.7m、深さ1.1mを測り、平面形は不整な楕円形を呈している。壁面は、若干えぐるように掘り込まれていた。埋土は５層に分かれるが、遺物は何も出土していない。

これらの他にピット10個を検出したが、建物跡を復元するまでには至らなかった。また、土壙の時期についても、ＳＫ－01以外は遺物が出土していないため不明であり、性格についても、判断できなかった。

【Ｂ区】

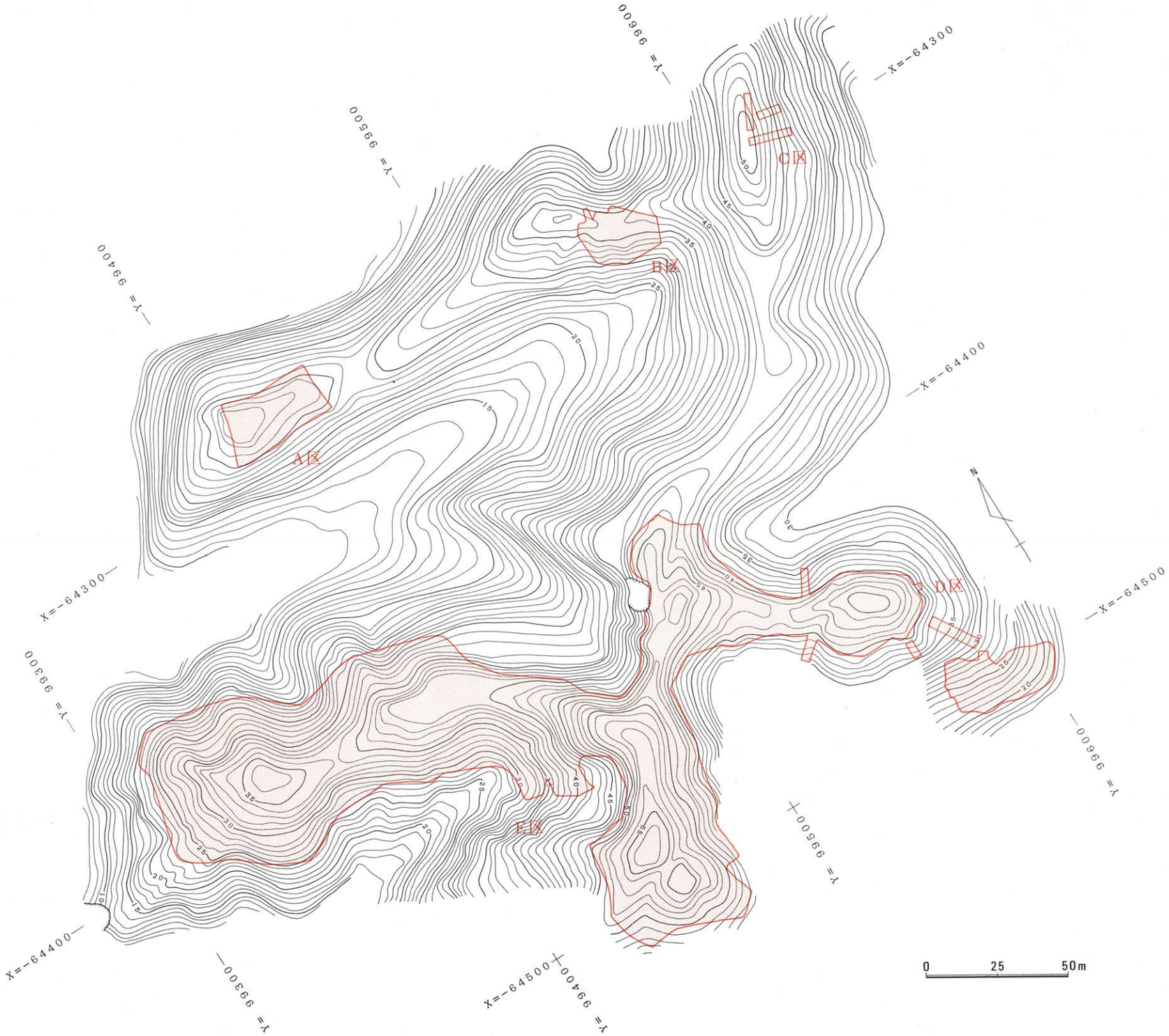
Ａ区の東約100mの丘陵尾根上がＢ区である。尾根上平坦面の標高は約37mを測り、検出遺構は、土壙２、加工段１である（第５図）。

ＳＫ－01（第６図）

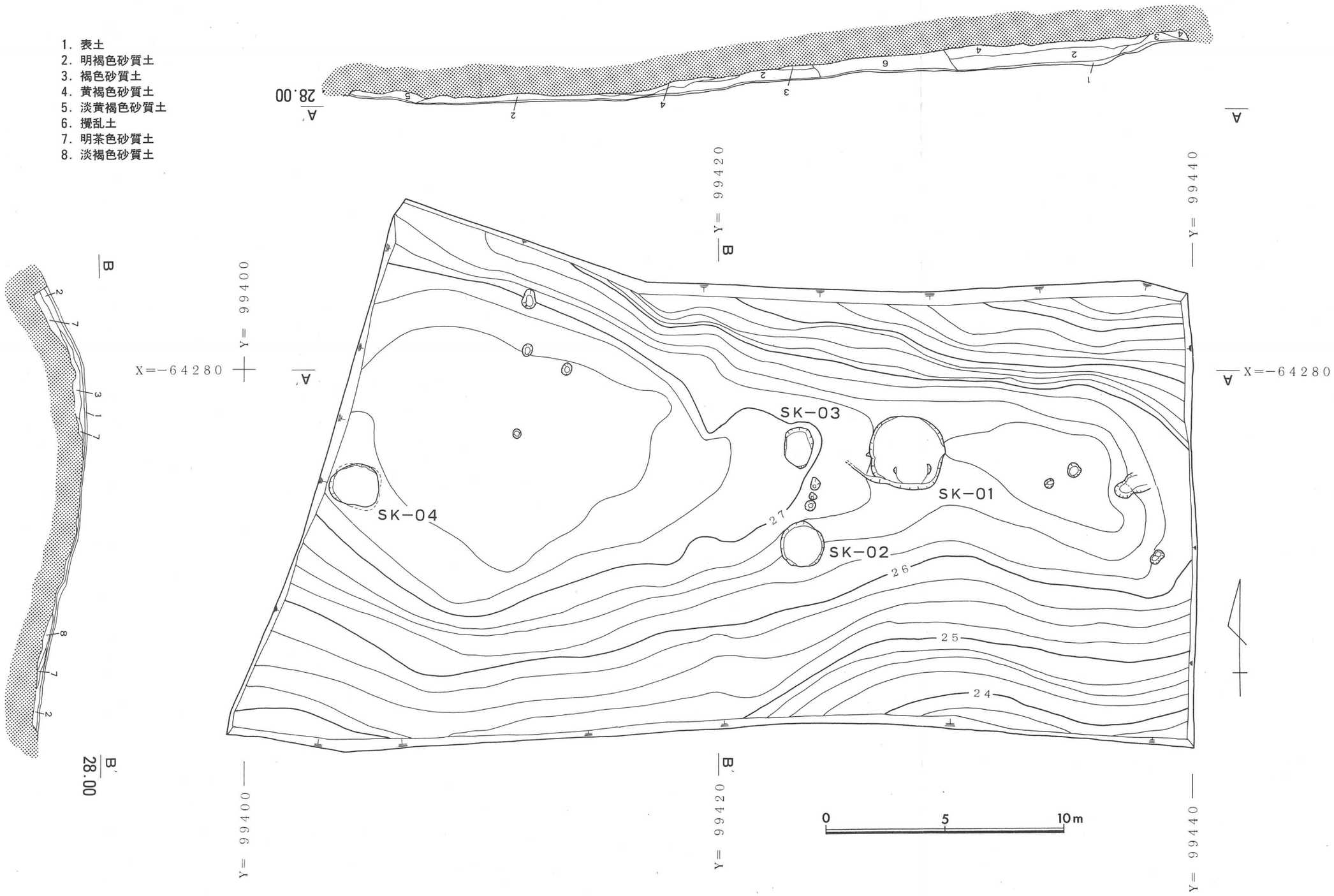
調査区尾根上の東寄りで検出した。長軸3.3m、短軸0.8～1.6m、深さ40cmを測り、平面形は不整な楕円形を呈している。埋土は２層に分かれるが、遺物は何も出土していない。

ＳＫ－02（第６図）

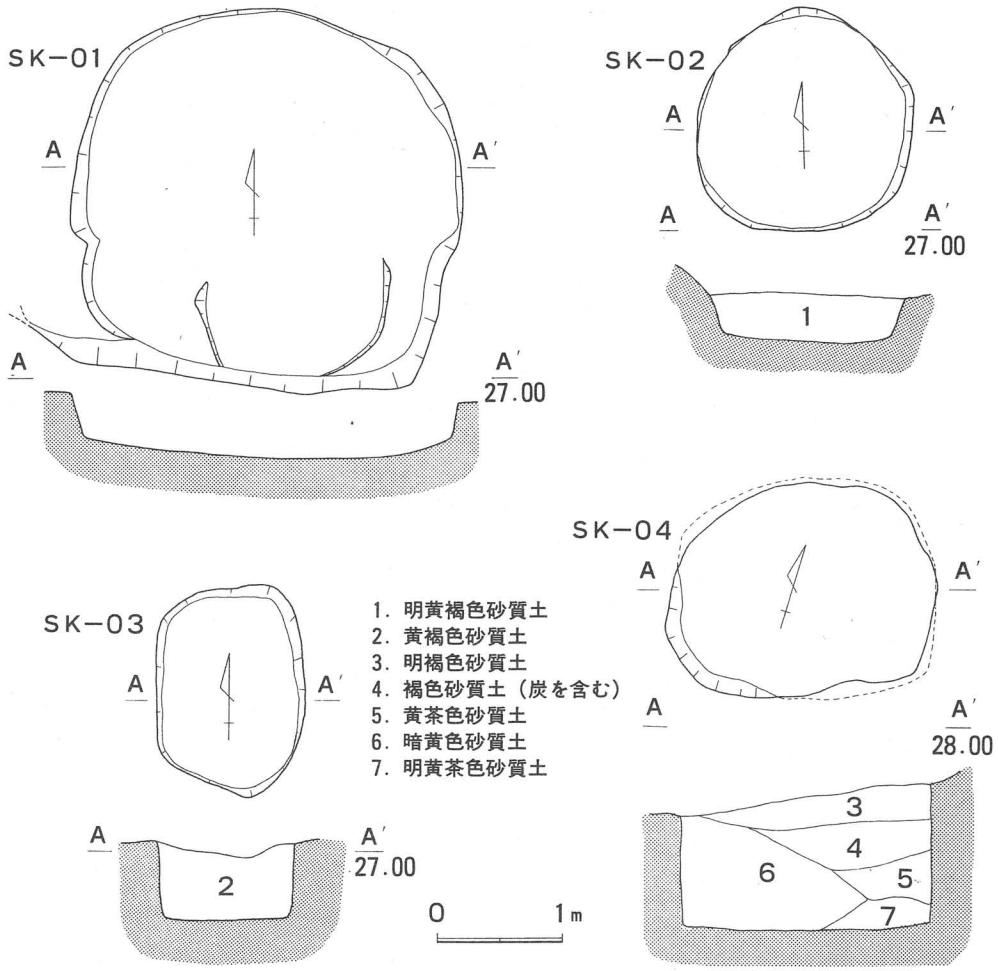
調査区東端の尾根上で検出した。長軸3.2m、短軸2.2m、深さ60cmを測り、平面形は不整形な楕円状を呈している。埋土は３層に分かれるが、遺物は何も出土していない。西側の一部はピットと切り合っていたが、このほかにピットは確認できなかった。



第２図　臼コクリ遺跡調査区設定図


1. 表土
2. 明褐色砂質土
3. 褐色砂質土
4. 黄褐色砂質土
5. 淡黄褐色砂質土
6. 攪乱土
7. 明茶色砂質土
8. 淡褐色砂質土
A
A'
28.00
B
B'
28.00
X=−64280
Y= 99400
Y= 99420
Y= 99440
SK−01
SK−02
SK−03
SK−04
27
26
25
24
0
5
10m

第３図　Ａ区遺構配置図



第４図　Ａ区ＳＫ−01、02、03、04実測図

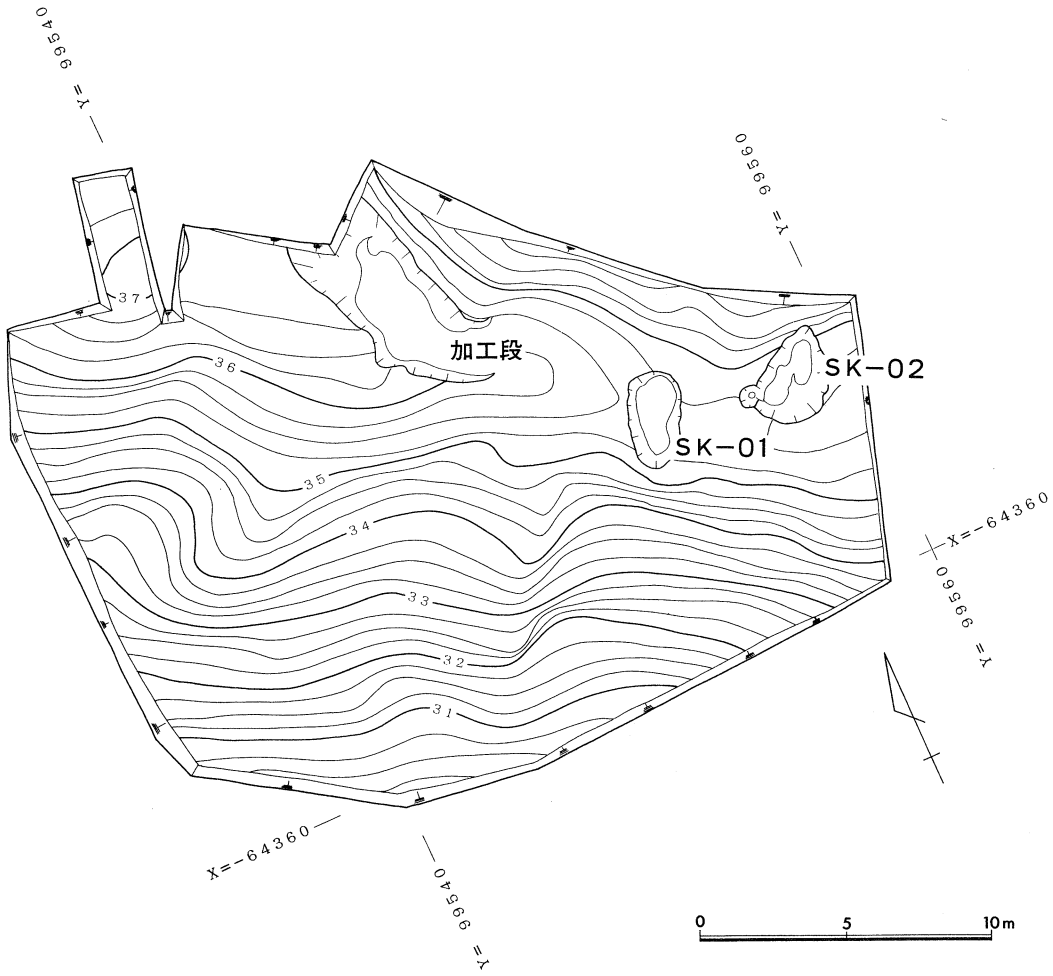
加工段（第６図）

調査区中央の尾根上で検出した。現状では２段になっていたが、下段部分は削平されていた。上段の平坦面の規模は、残存長で長軸6.0m、短軸2.2mを測り、壁高は最大で60cmを測る。柱穴や遺物は確認できなかった。

Ｂ区からは何も遺物が出土していないため、遺構の時期や性格については判断できなかった。

【Ｃ区】

Ｃ区は、Ｂ区から東に延びる丘陵の最高所に当たり、標高は約50mを測る。丘陵頂上部に古墳状



第５図　Ｂ区遺構配置図

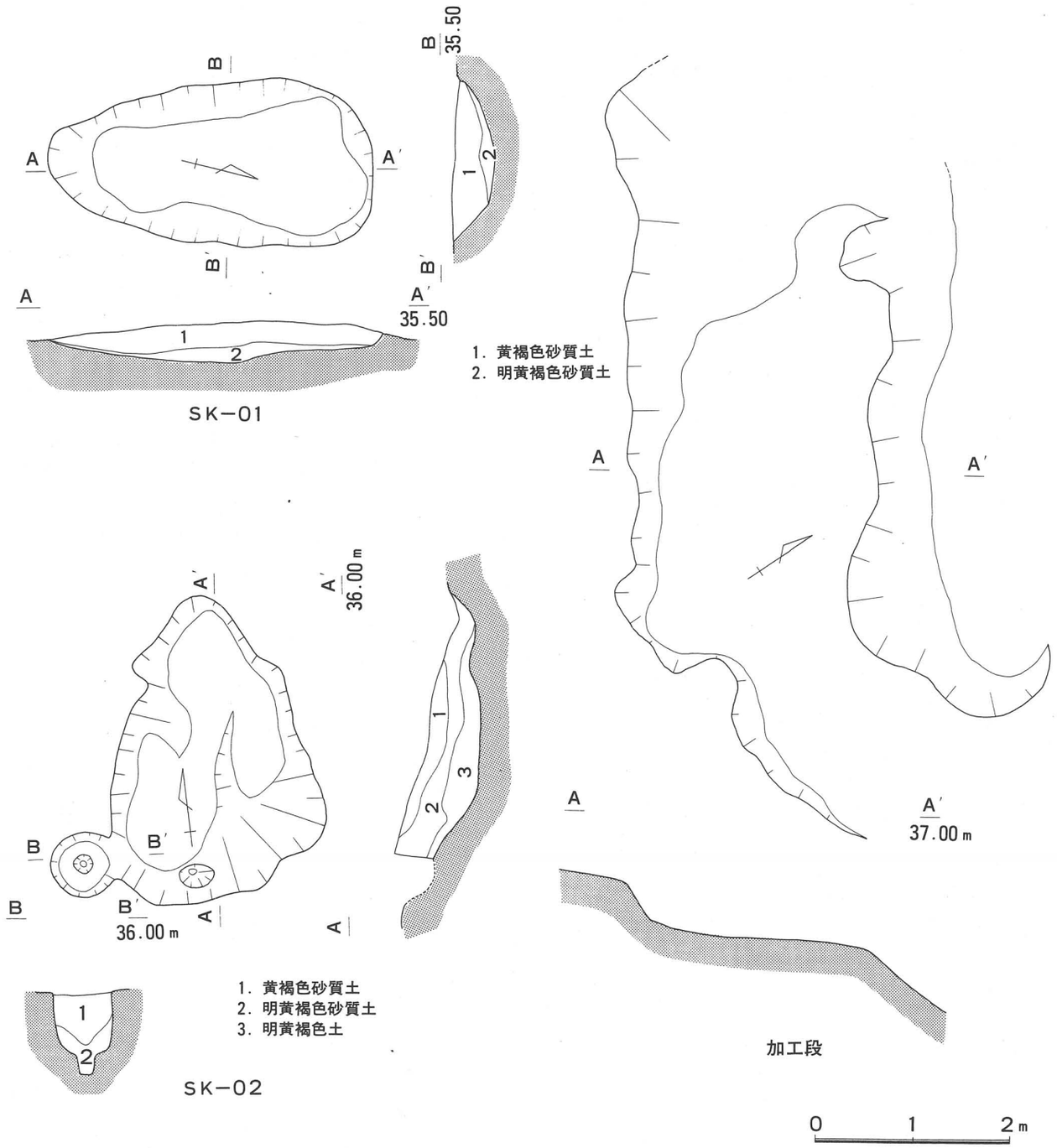
の高まりがあったため、頂上部と斜面に長さ10m、幅２mのトレンチを３本設定して調査を行ったが、遺構・遺物は検出できなかった。

【Ｄ区】

Ｃ区の南、Ｅ区から続く東に延びる丘陵尾根上および南へ下る緩斜面がＤ区である。丘陵尾根上の、標高約46mの地点で古墳１基、掘立柱建物跡１棟を検出した。また、そこから南へ下る緩斜面の、標高23～27mの地点で掘立柱建物跡４棟、加工段１を検出した。

臼コクリ古墳

調査区最高所の丘陵先端頂上部に位置する。Ｅ区から続く尾根上平坦面は狭く、先端部分は舌状に若干開くものの、幅約12mと狭いものであった。臼コクリ古墳は、こうした狭い丘陵先端部のや


B
A
A′
B′
B
35.50
1
2
A
A′
35.50
1
2
SK−01
1. 黄褐色砂質土
2. 明黄褐色砂質土
A
A′
37.00 m
A′
36.00 m
B
B′
B
B′
36.00 m
A
A
1
2
3
1
2
SK−02
1. 黄褐色砂質土
2. 明黄褐色砂質土
3. 明黄褐色土
加工段
0
1
2 m

第６図　Ｂ区遺構実測図

や高まった部分に築造されており、調査前の状況は、南側半分近くが削平されて、半月状を呈していた（第７図）。

墳丘（第８図）

調査の結果、墳丘は東西軸約10m、南北軸約8.5mを測り、高さは約40cmと低いものであった。南側は削られているものの、本来は円形を呈していたと考えられる。墳頂部は広い平坦面になっていたが、中央部から南にかけての盛土がかなり流出していたためか、主体部は検出できなかった。

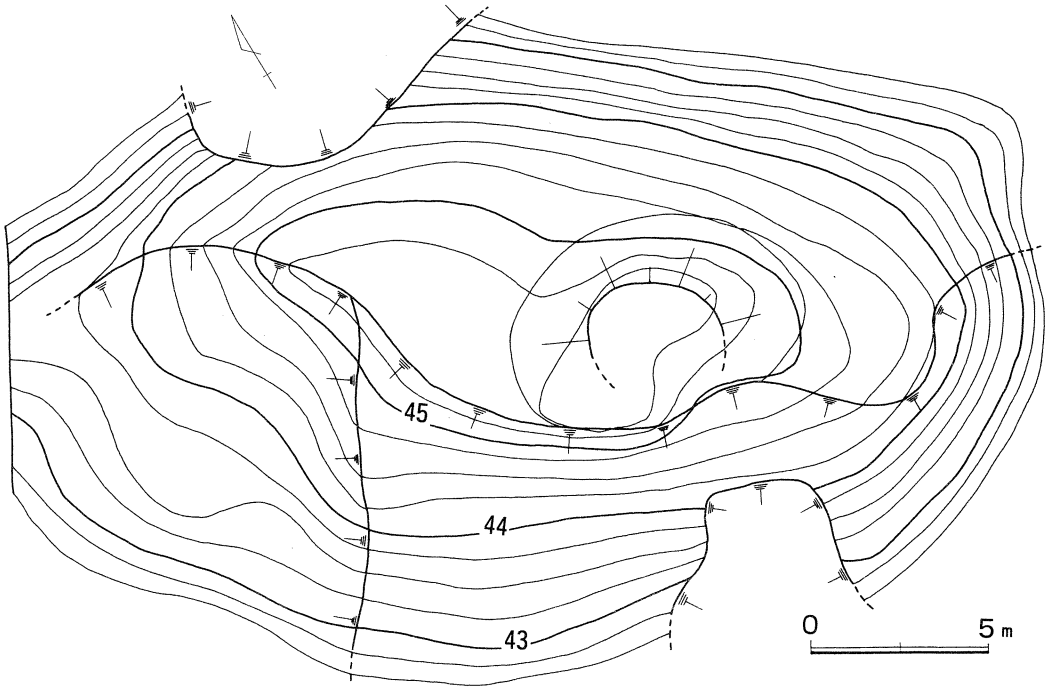
西側墳裾には周溝が廻っていたが、その他は流出により確認できなかった。周溝は上縁幅約1.9m、底面幅0.6～1.0m、深さ40cmを測り、底面から円筒埴輪の破片と、須恵器有蓋高坏の蓋２個が重ねて伏せた状態で出土した（第９図）。

遺物は周溝底面の他に、周溝を中心とする周辺から円筒埴輪の破片が出土している。また、北西墳裾の外方から、糸切り底の須恵器の小片が出土しており、後世、何らかの祭祀が行われたものと考えられる。

このほかに、墳頂部・周溝等に柱穴が穿たれており、後世ここに建物が建てられていたことを示している（ＳＢ－01）。

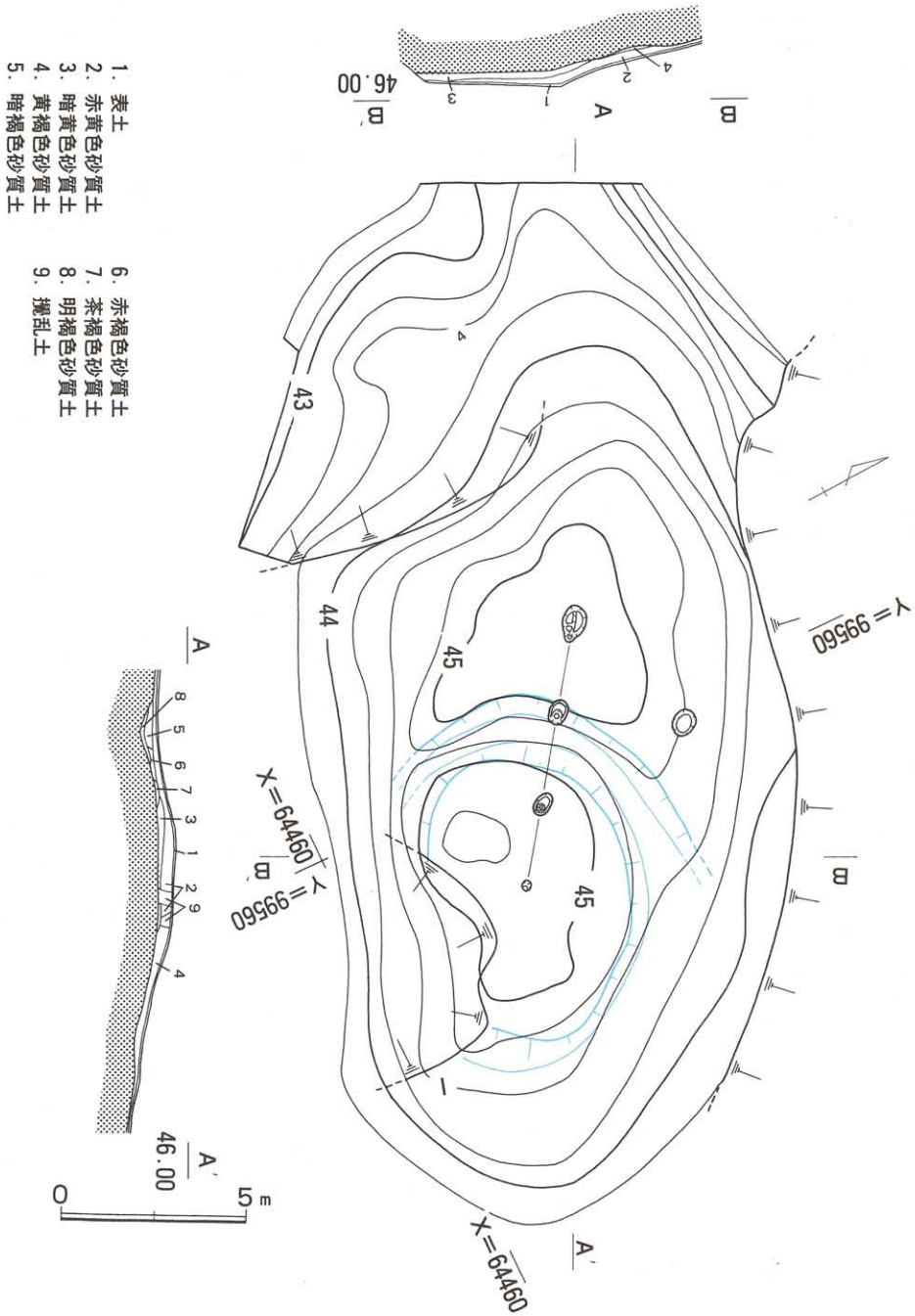
出土遺物（第10図）

１・２は周溝底面から出土した須恵器有蓋高坏の蓋である。１は垂直に下る口縁部で、端部内側

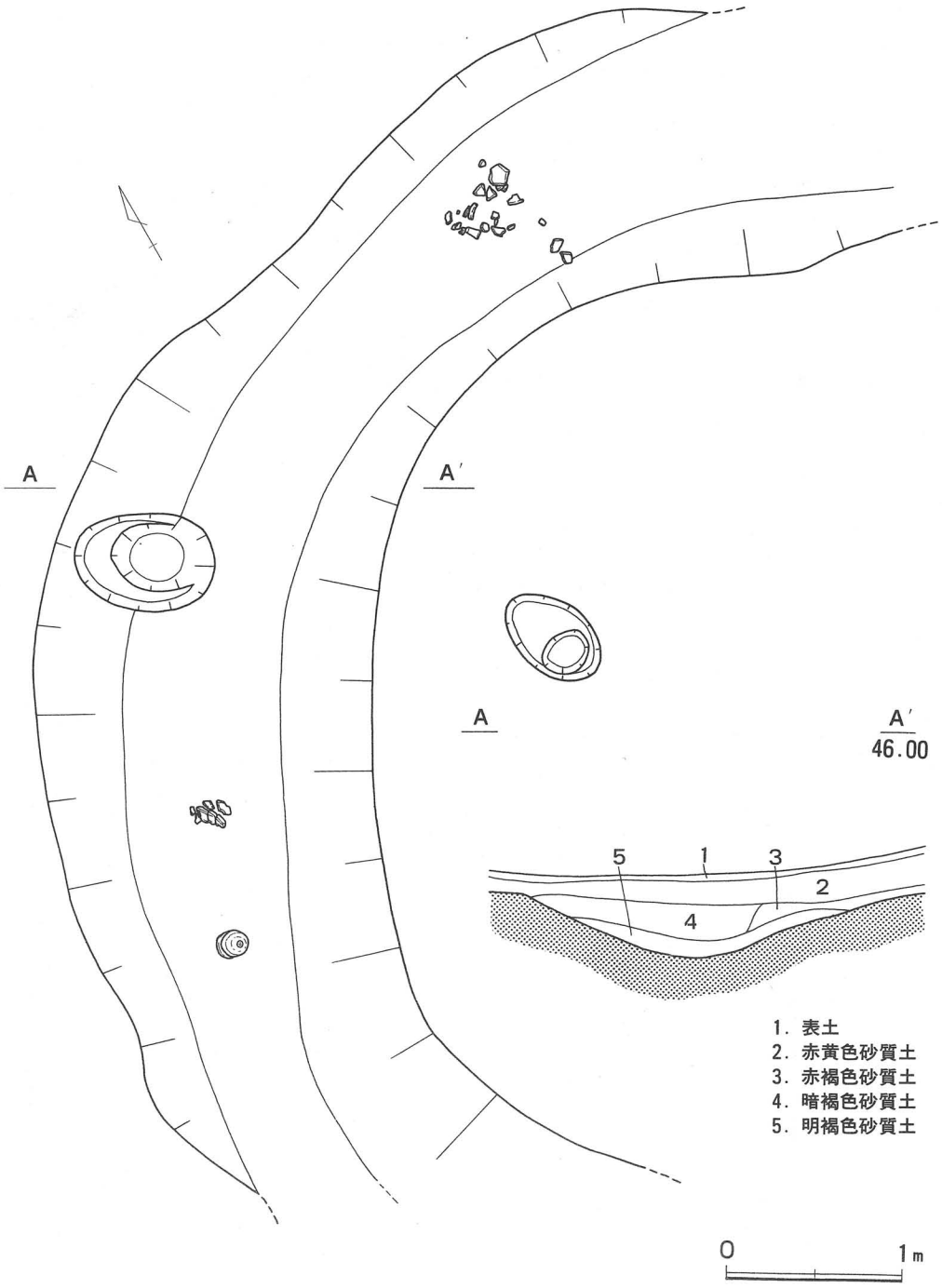


第７図　Ｄ区臼コクリ古墳調査前地形測量図

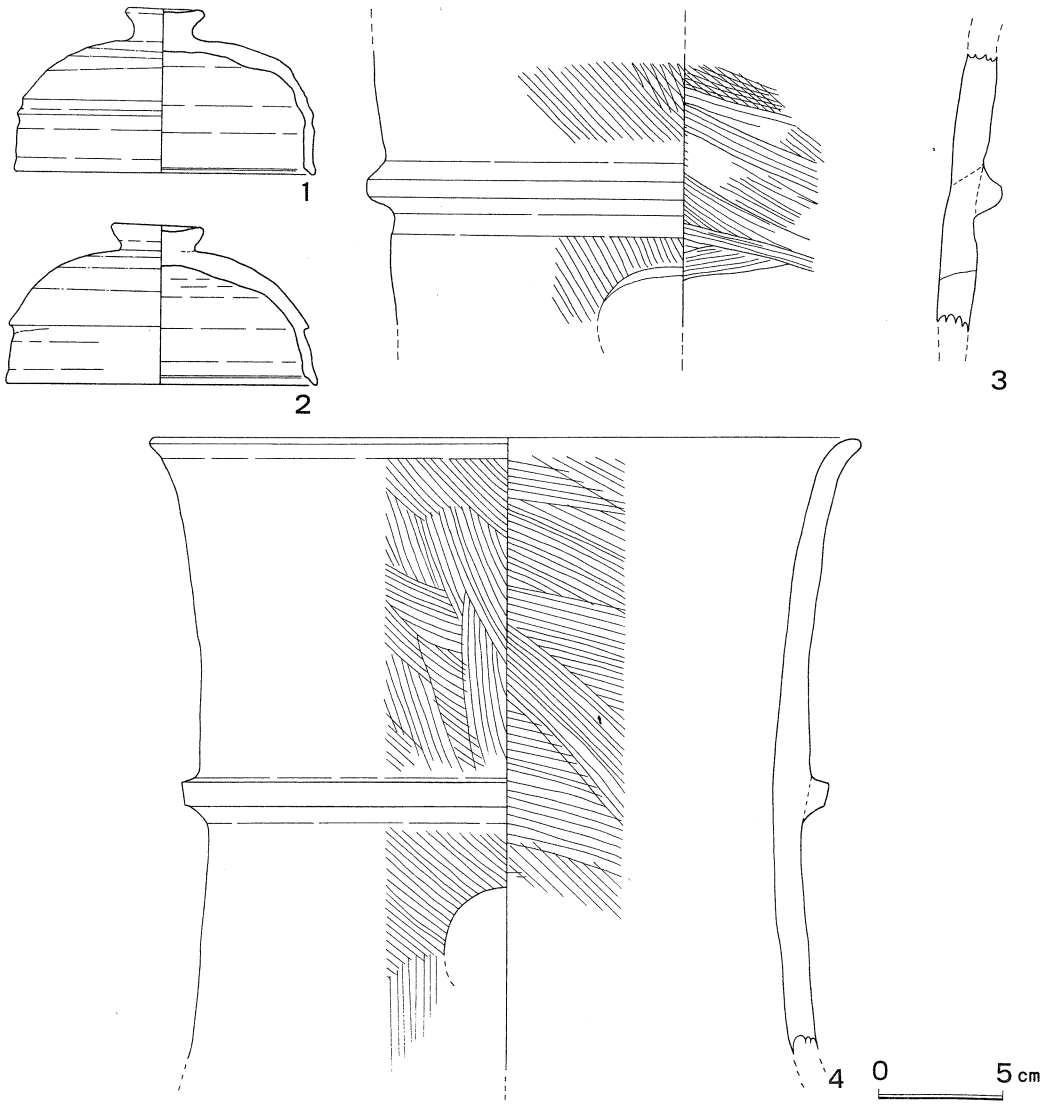
に段をもつ。丸みをもつ天井部の中央には高さ1.1cmのつまみが付き、外面３分の２はヘラ削りが施される。肩部の稜は段のやや退化したものである。２はやや外傾して下る口縁部で、端部内側に段をもつ。丸みをもつ天井部の中央に高さ1.0cmのつまみが付き、外面３分の２はヘラ削りを施す。肩



第８図　Ｄ区臼コクリ古墳調査後地形測量図



第９図　Ｄ区臼コクリ古墳周溝内遺物出土状況図

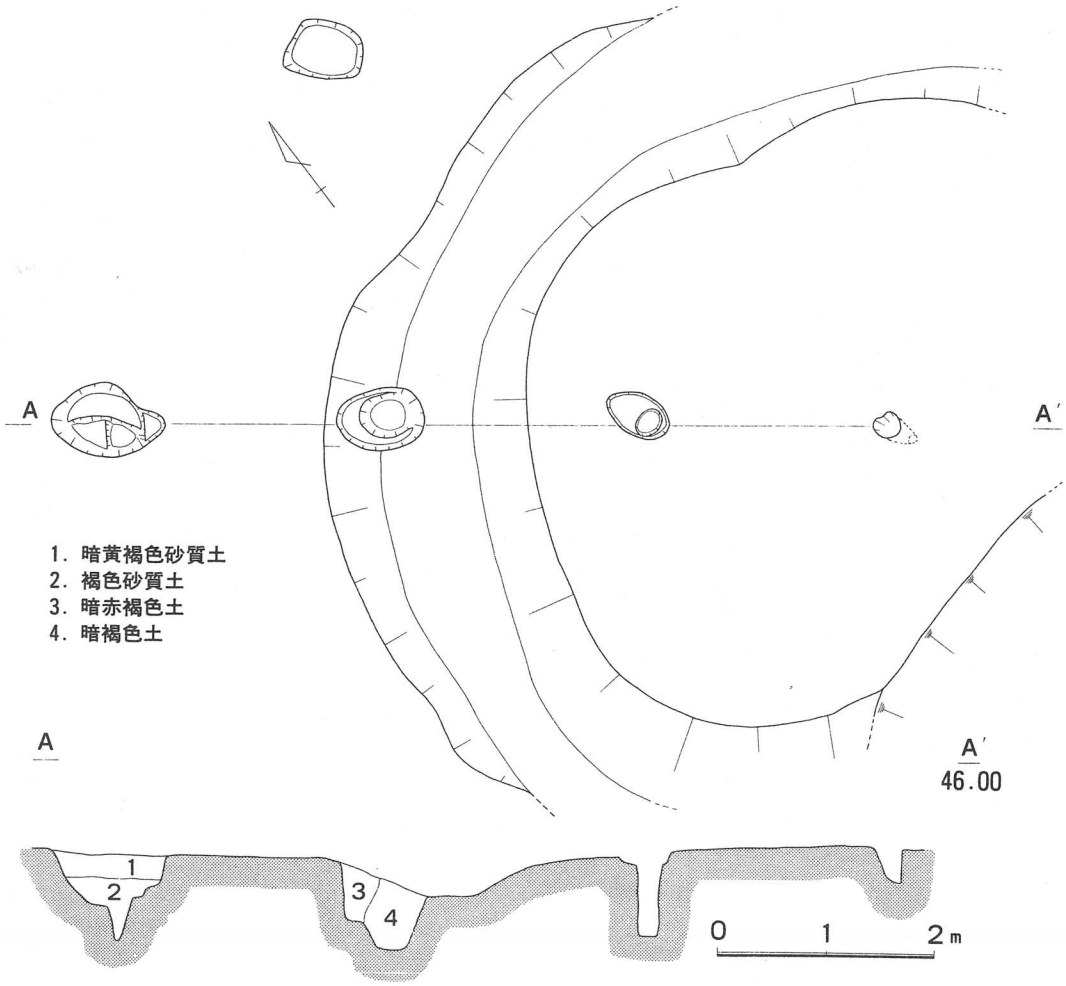


第10図　D区古墳周溝出土遺物実測図

部の稜はしっかりした段をもつ。3・4は円筒埴輪で全形は伺えない。タガは断面台形状のもので、3は下端がナデにより若干くぼむ。外面はタテハケ、内面はタテハケ・ヨコハケを施す。これらの遺物から古墳の時期は、5世紀末～6世紀初頭と考えられる。

ＳＢ－01（第11図）

臼コクリ古墳上に位置する。東西方向に並ぶ4個の柱穴を検出した。桁行3間の距離は7.2mを測り、各柱穴間の距離は2.4mと一定である。柱穴は東端のものが小さくて、上縁径22cm、深さ30cmを



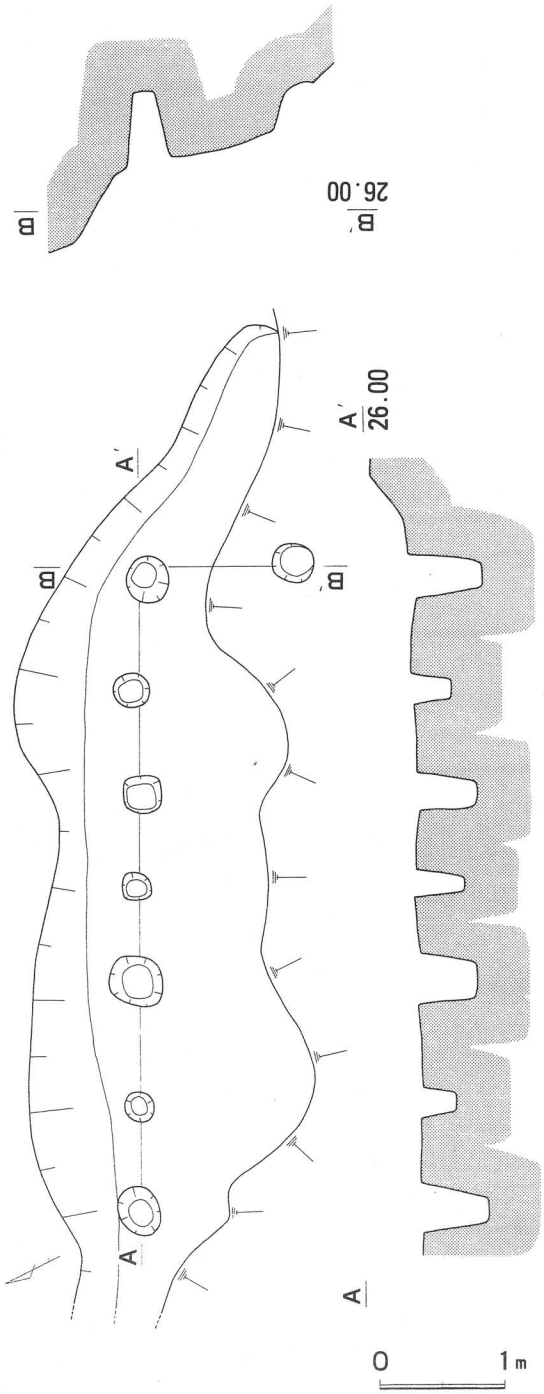
第11図　D区SB－01実測図

測る。その他は平面形が不整形な楕円形を呈しており、長軸0.6～1.0m、短軸40～70cm、深さ60～80cmを測り、柱痕跡が認められる。東端の柱穴は、他の柱穴と違い若干斜めに穿たれており、補助柱的な役割も考えられるであろう。

これに伴う遺物は何も出土していないので、時期については不明である。

ＳＢ－02（第12図）

臼コクリ古墳の下方、南向き斜面に位置する。斜面を削って平坦面を作り出しているが、南側は削平されていた。床面規模は残存長で長軸7.9m、短軸0.5～1.7m、床面標高は25.6mを測る。壁高は最大で86cmを測り、傾斜して立ち上がる。床面は南側に向かって、緩やかに下っており、貼り床などは確認できなかった。柱穴は８個検出しており、現存では桁行６間（5.0m）×梁間１間（1.2m）の建物跡であった。柱穴の規模は、上縁径22～40cm、深さ30～58cmを測る。



第12図　D区SB－02実測図

遺物は覆土中から流れ込みの須恵器小片と鉄滓が出土しているが、須恵器は実測不可能であったが、糸切り底をもつものがみられた。

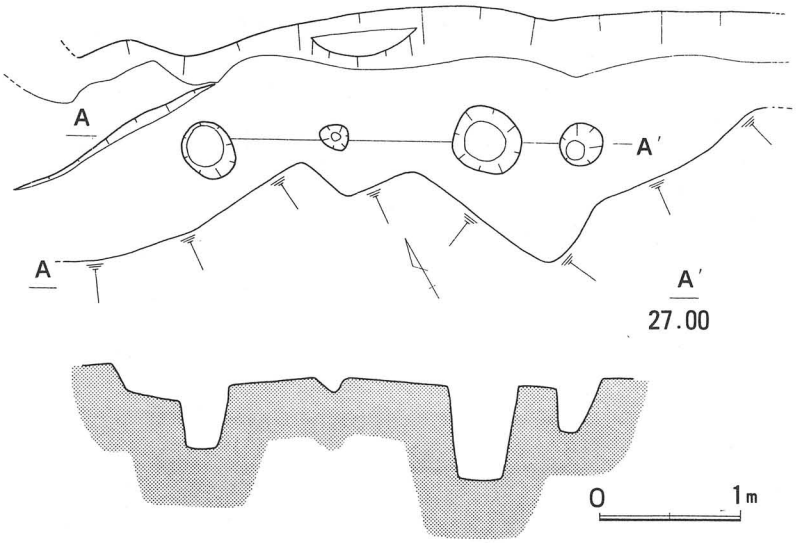
ＳＢ－03（第13図）

ＳＢ－02の西隣りに位置し、斜面奥壁はＳＢ－02から続くものである。床面規模は長軸5.0m、短軸0.4～1.3mを測り、南側は削平されていた。床面標高は25.3mを測り、ＳＢ－02より若干低い位置にある。壁高は最大で約60cmを測り、傾斜して立ち上がる。柱穴は東西方向に４個検出したが、この内の１つは小さく、浅めのもので、主柱穴とは考えられないものである。柱穴の規模は上縁径32～50cm、深さ36～64cmを測り、東西長2.7mの距離である。

遺物は覆土中から鉄滓が少量出土していたが、土器が出土していないため、時期等については判断できなかった。

ＳＢ－04（第14図）

ＳＢ－02の下方、南東側に位置する。斜面を削って平坦面を作り出しているが、南側は削平されていた。残存する床面規模は、長軸5.0m、短軸0.8～1.5mを測り、床面標高は24.0mである。壁高は最大で69cmを測り、傾斜して立ち上がる。柱穴は５個検出したが、主柱穴に対応するのは３個と思われる。床面中央の柱穴は、攪乱を受けて原形を保っていないが、深さは38cmを測る。その他の２個の柱穴



第13図　D区SB－03実測図

規模は、上縁径26～34cm、深さ22～42cmを測る。現存では桁行２間（3.1m）の建物跡であった。

遺物は覆土中から流れ込みと思われる鉄滓が出土しているが、土器が出土していないため、時期等については判断できなかった。

ＳＢ－05（第14図）

ＳＢ－04の下方、南西側に位置する。流出のためか、平坦面や壁等は検出されなかった。緩斜面で、東西方向に並ぶ３個の柱穴を検出した。柱穴の規模は、上縁径24～38cm、深さ10～24cmを測り、現存で２間（2.7m）の建物跡であった。

遺物は何も出土していないので、時期等については不明である。

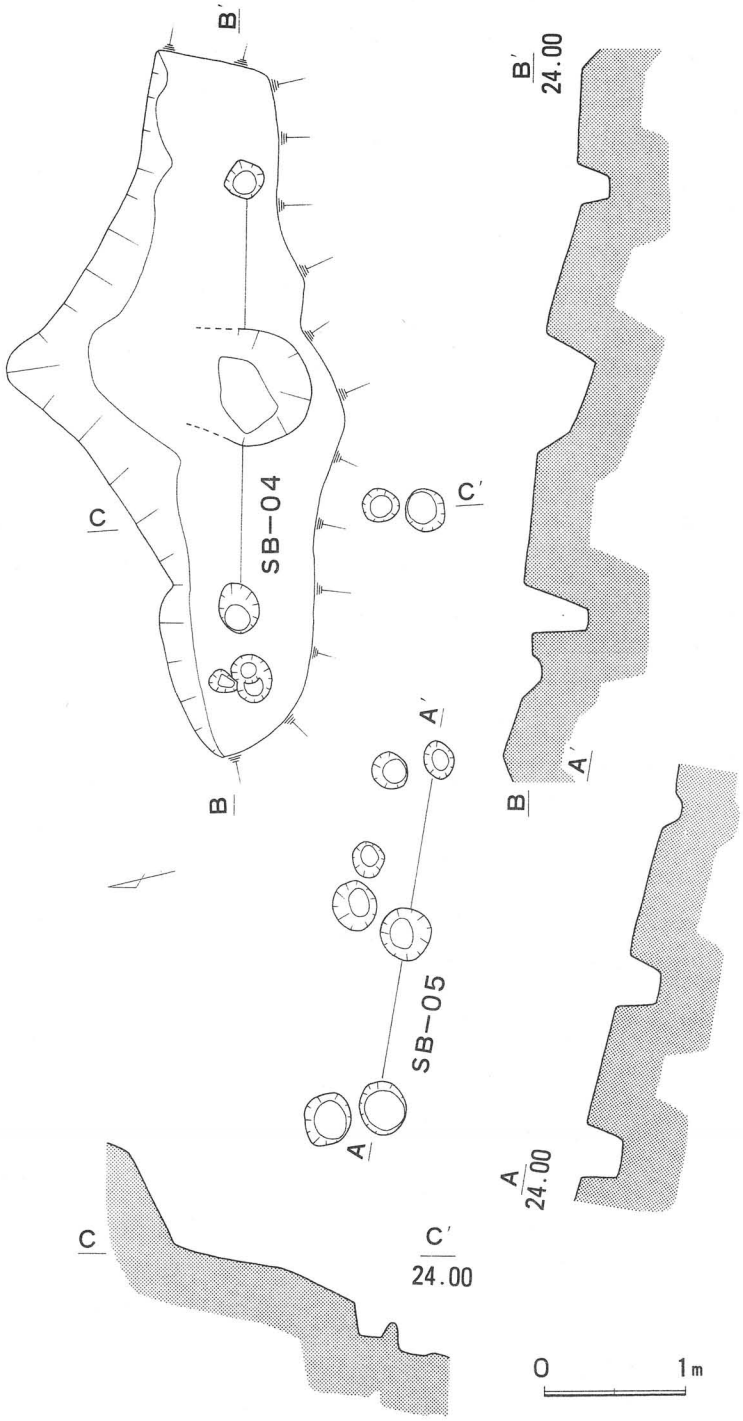
ＳＢ－06（第15図）

ＳＢ－03の下方に位置する。緩斜面を削り出すことによって、平坦面を作っていた。南側は流出して残存していない。床面規模は、残存長で長軸7.2m、短軸1.5～2.2mを測り、床面標高は24.0mである。壁高は最大で56cmを測り、緩やかに傾斜して立ち上がる。壁沿いに、部分的ではあるが、幅20cm、深さ約５cmの溝が残っていた。床面で柱穴を７個検出したが、この内、主柱穴に対応するのは東西方向に並ぶ４個である。柱穴の規模は、上縁径30～50cm、深さ44～64cmを測り、現存では桁行３間（5.1m）の建物跡であった。

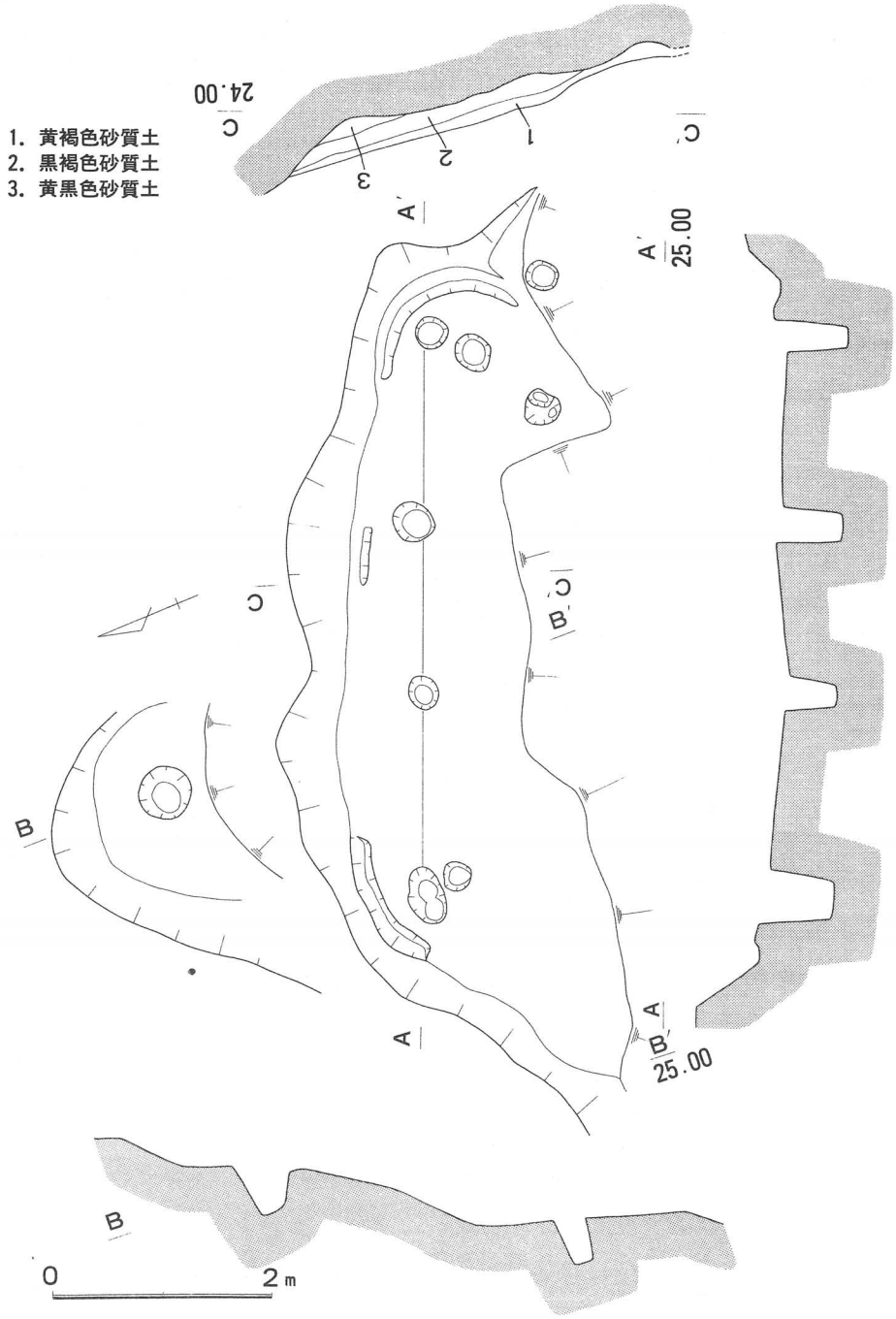
遺物は何も出土していないので、時期等については不明である。

加工段（第16図）

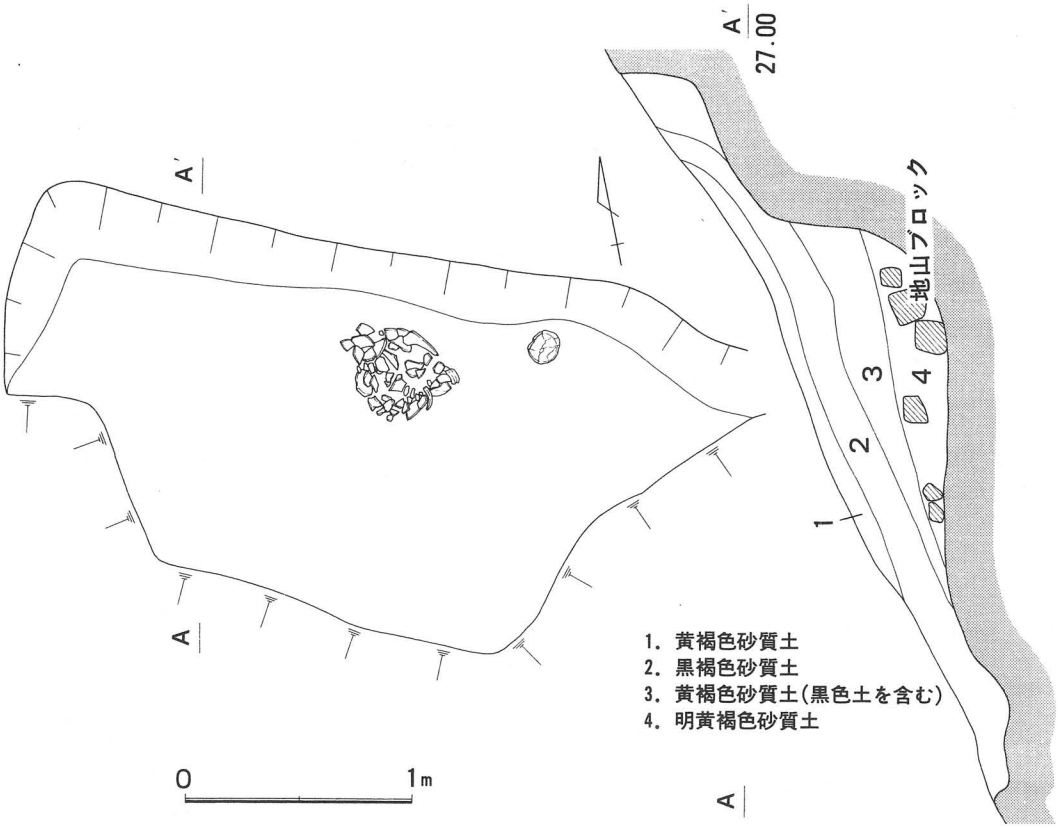
ＳＢ－02の上方に位置する。他の建物跡と同様に、斜面を削って平坦面を作り出しているが、床面に柱穴は穿たれていなかった。床面規模は、残存長で長軸3.0m、短軸1.4mを測り、床面標高は



第14図　D区SB−04、05実測図



第15図　D区SB−06実測図



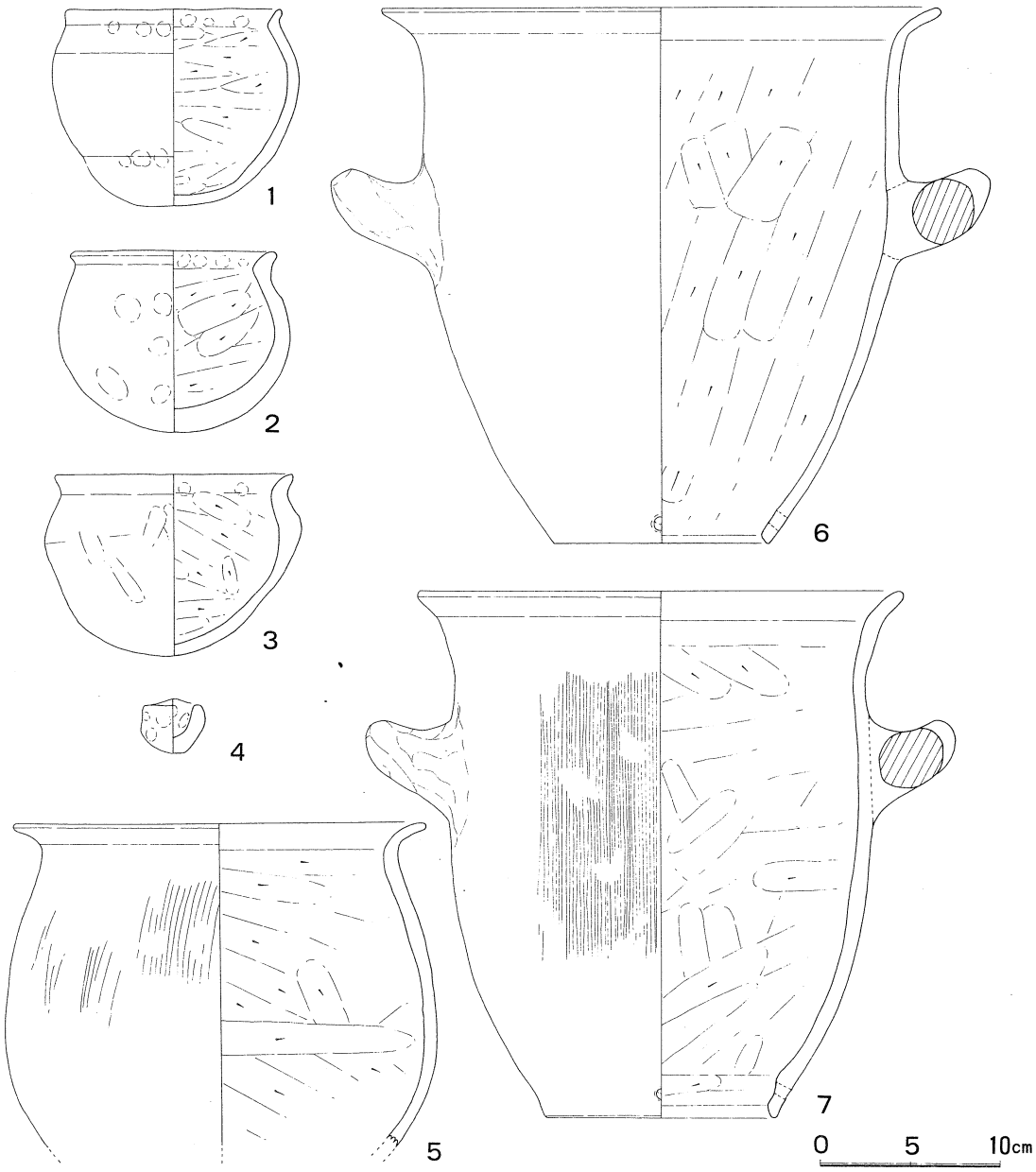
第16図　D区加工段実測図

26.1mである。壁高は最大で70cmを測り、やや傾斜をもって立ち上がる。

遺物は床面から、土師器甕４、手捏土器１、土師器甑２が出土している。

出土遺物（第17図）

１～３は土師器の小型の甕である。口縁部は短く外反し、端部は丸みをもつ。肩部から胴部中央に最大径をもち、底部は丸い。外面はナデと指頭圧で調整され、内面は口縁部がナデと指頭圧、それ以下にヘラ削りを施している。４は手捏土器で、指頭が観察される。５はやや大きな土師器の甕で、口縁部は外反して横方向にのびるものである。外面にハケ目、内面にヘラ削りを施す。６・７は土師器の甑である。口縁部は外反してのび、端部は丸い。底部は内湾気味に下り、端部付近に円孔が入る。７は底部内面に段をもっている。



第17図　加工段出土遺物実測図

【E区】

A・B区から谷一つへだてた南側丘陵部全域がE区である（第18図）。北側斜面の標高25m～35mの間に横穴墓10基、南側斜面の標高28m～35mの間に横穴墓6基の計16基を検出した。横穴群は北側斜面のものを西から順にN－1～10号横穴墓、南側斜面のものを検出順にS－1～6号横穴墓と呼称した。また、これら横穴墓の後背尾根上に2基の墳丘を確認したが主体部等は検出できず、この2基の墳丘周辺の斜面に横穴墓が穿たれていることから、横穴墓に付随する後背墳丘と考えられ、西端のものを後背墳丘1、東を後背墳丘2とする（第19図）。これらの他に、横穴墓の位置する尾根上から斜面にかけて弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡6棟、掘立柱建物跡5棟、古墳時代前期～中期にかけての土器棺墓4基を検出した。また、標高約60mを測る最高所の南北に延びる丘陵尾根上に土壙墓群を検出した。

N－1号横穴墓（第20図）

調査区西端の標高24～27mの丘陵北側斜面に穿たれている。北東方向に開口しており、玄室床面の標高は24.3mである。

〔前庭・羨道・玄門〕

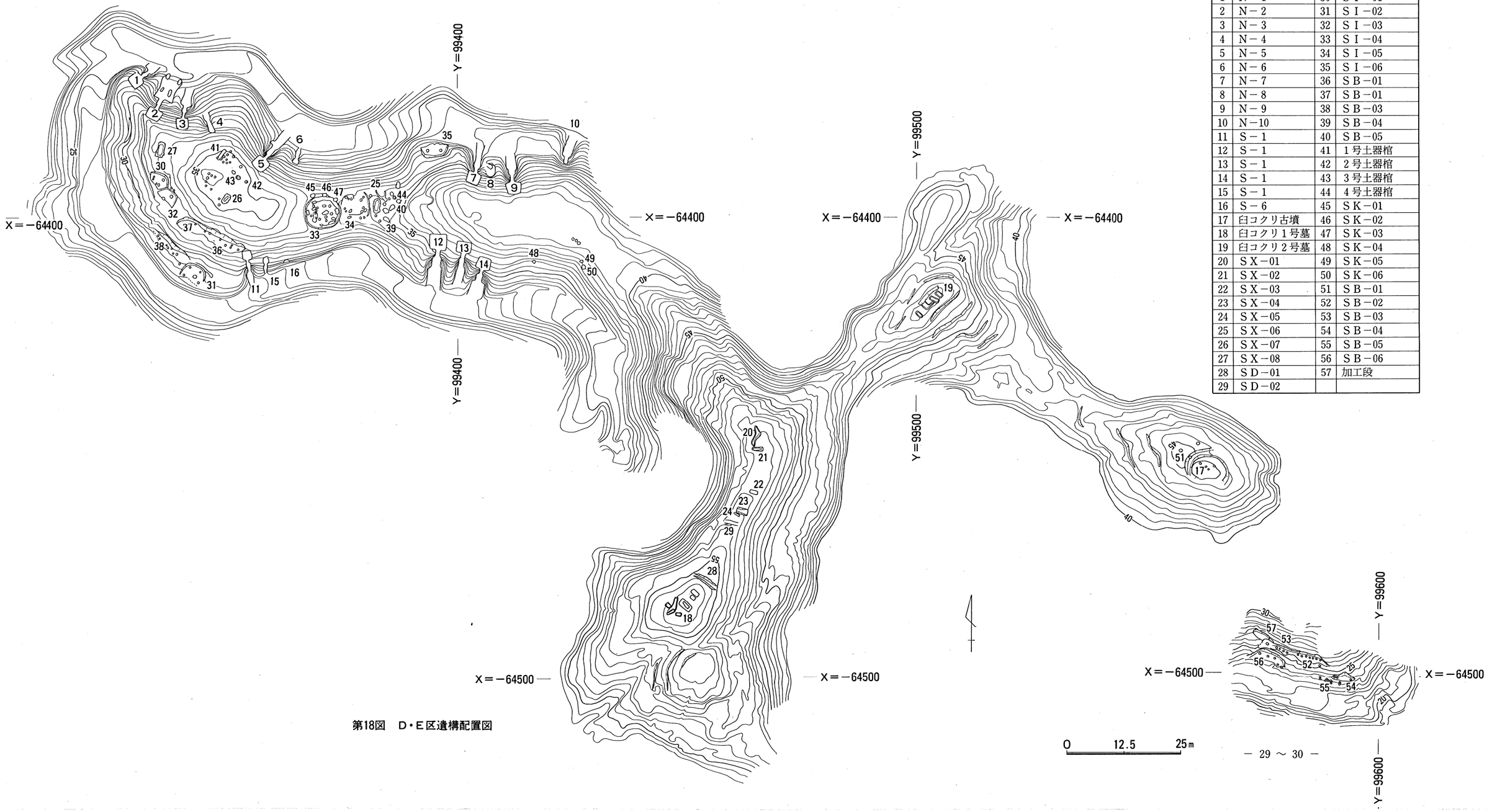
急峻な斜面のためか、かなり削平されていた。残存長で東壁側2.6m、西壁側0.5m、幅2.6mを測る。壁高は西壁で2.4mを測るが、地形の制約によるものか、内傾して造られている。また、東に隣接するN－2号横穴の前庭床面の高さから掘り込まれているため、N－2号より約1.8m低い位置にある。床面は羨道側に向かって緩やかに下っている。羨道は前庭部奥壁東寄りに穿たれており、長さ1.3m、幅は羨門側で0.8m、羨道奥壁部分でやや広くなって1.2mを測り、天井部は崩壊のため不明である。玄門は羨道よりも狭く、天井部も低くなっている。長さ0.7m、幅は玄門前面で0.7m、玄室側で1.0mを測り、玄室に向かって若干開いている。天井部の高さは中央付近で約0.9mを測り、アーチ形を呈していた。入口に閉塞施設等の痕跡は何も認められなかった。

遺物は羨道部床面から須恵器蓋坏類と壺、高坏、提瓶、瑕が出土している（第21図）。

〔玄室〕（第21図）

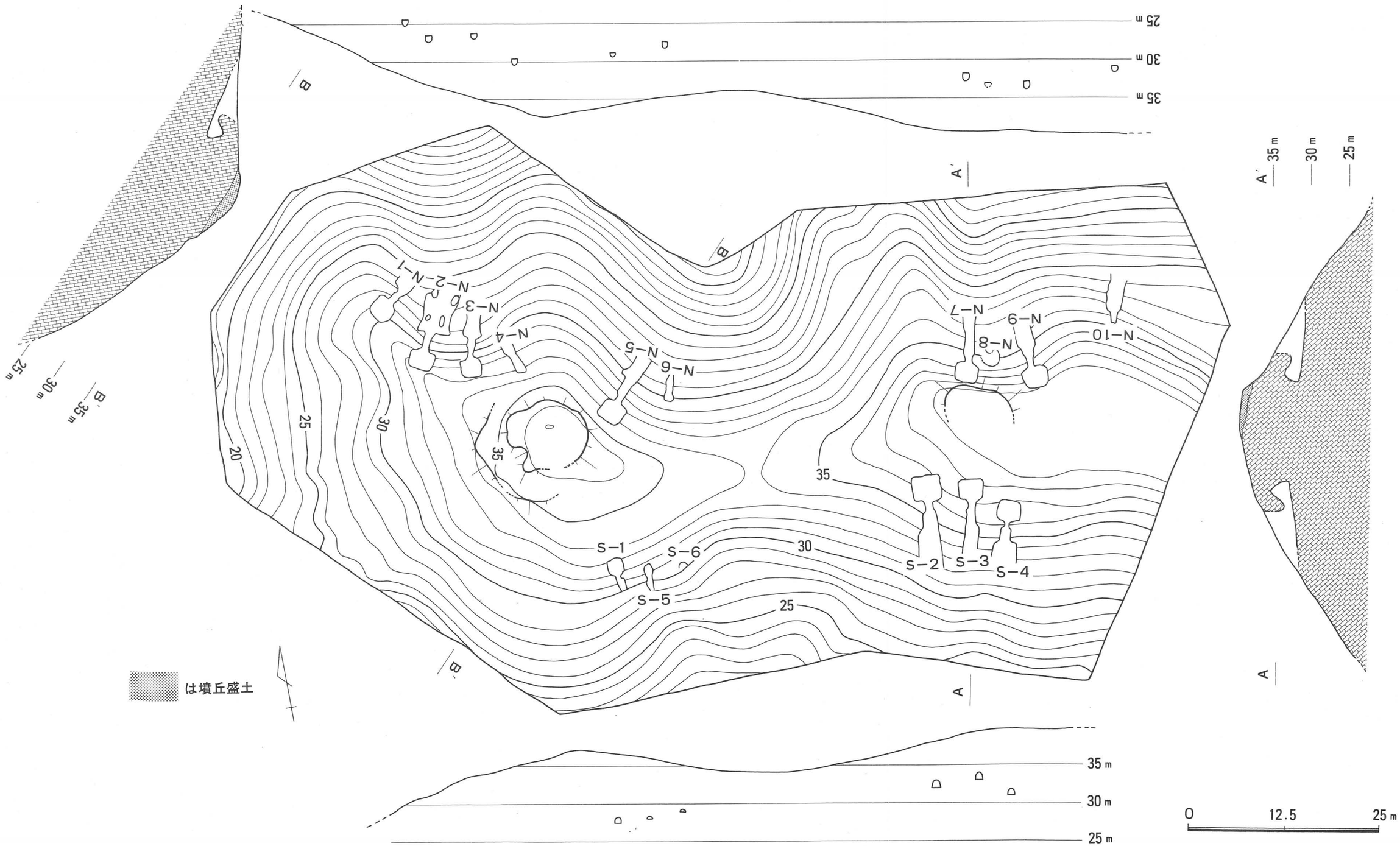
玄室は、奥行き2.8m、幅2.95m、高さ2.5mを測り、平面プランはほぼ正方形で、天井と壁面の境界線のない平入りの擬似四注式を呈している。玄室床面中央から左側半分に須恵器大甕を割った破片を敷き詰めて、須恵器屍床を形成していた。須恵器片の大きさはまちまちであるが、ほとんどの破片が表面を表にして緻密に敷かれ、屍床上面に枕にしたと思われる蓋坏類が置かれていることから、埋葬時のままの状態を留めている可能性がある。

須恵器屍床除去後、床面中央には玄室中軸線に沿って幅約30cm、深さ3cmの排水溝が延びていた。

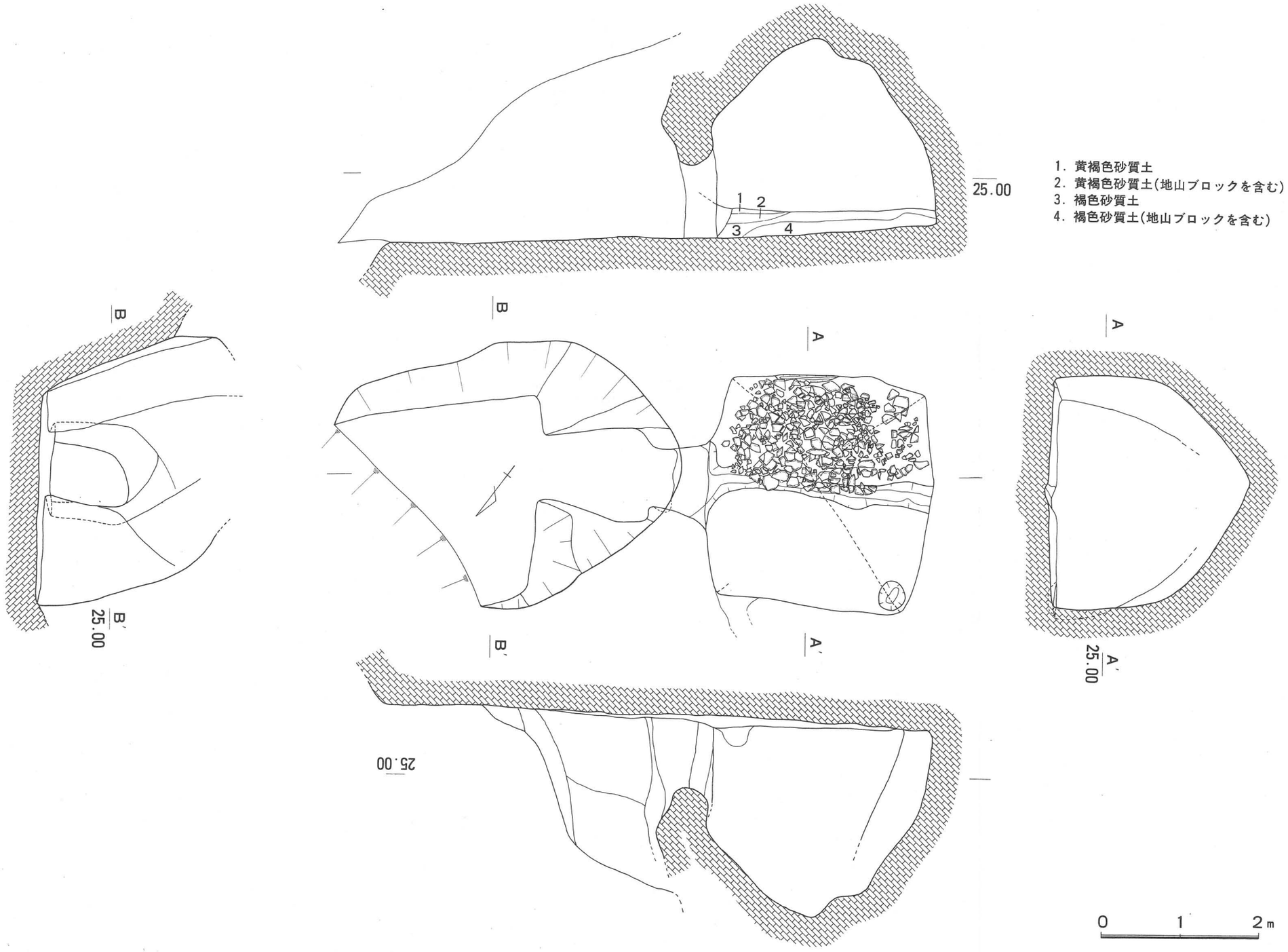


1	N－1	30	SI－01
2	N－2	31	SI－02
3	N－3	32	SI－03
4	N－4	33	SI－04
5	N－5	34	SI－05
6	N－6	35	SI－06
7	N－7	36	SB－01
8	N－8	37	SB－01
9	N－9	38	SB－03
10	N－10	39	SB－04
11	S－1	40	SB－05
12	S－1	41	1号土器棺
13	S－1	42	2号土器棺
14	S－1	43	3号土器棺
15	S－1	44	4号土器棺
16	S－6	45	SK－01
17	臼コクリ古墳	46	SK－02
18	臼コクリ1号墓	47	SK－03
19	臼コクリ2号墓	48	SK－04
20	SX－01	49	SK－05
21	SX－02	50	SK－06
22	SX－03	51	SB－01
23	SX－04	52	SB－02
24	SX－05	53	SB－03
25	SX－06	54	SB－04
26	SX－07	55	SB－05
27	SX－08	56	SB－06
28	SD－01	57	加工段
29	SD－02		

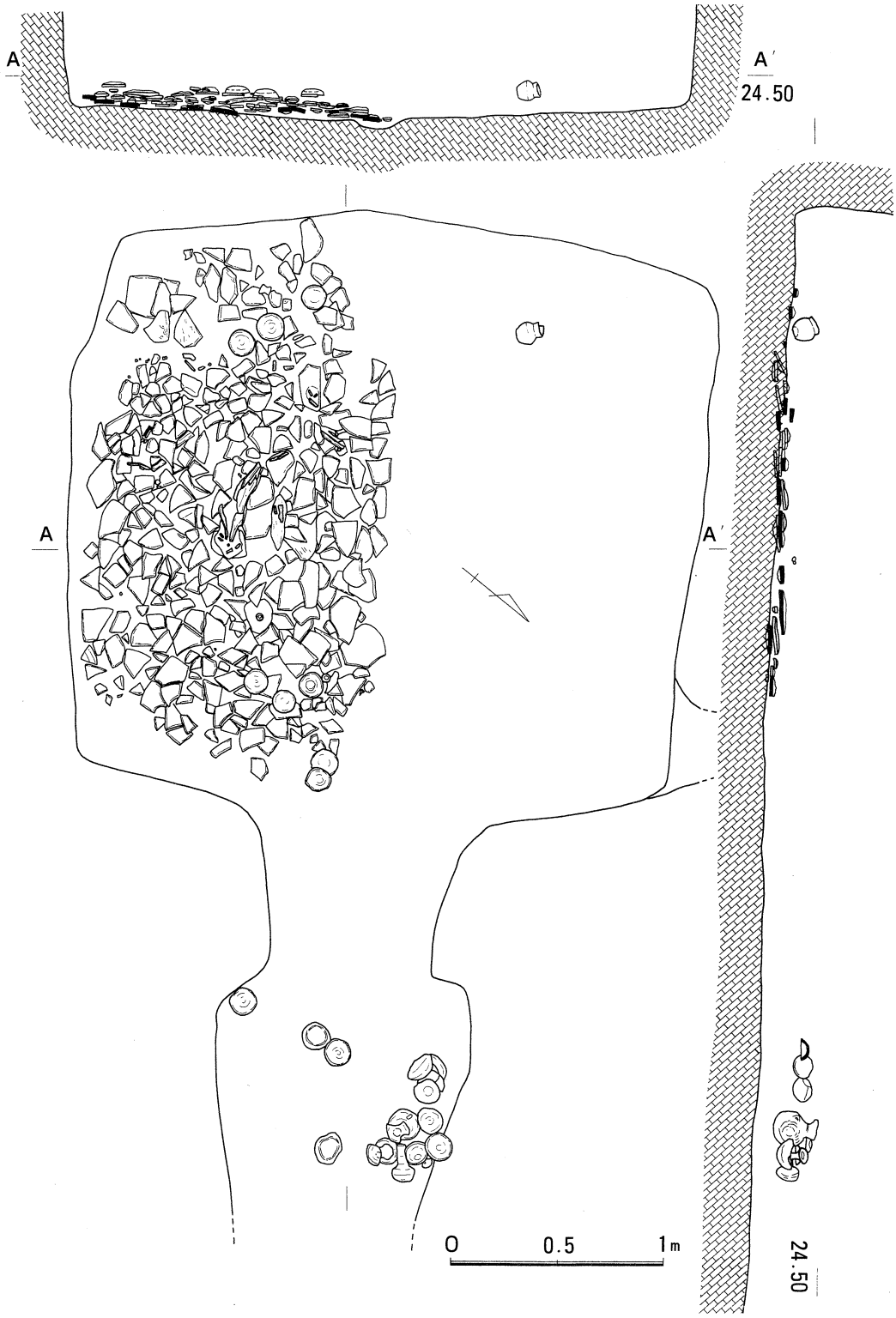
第18図　D・E区遺構配置図



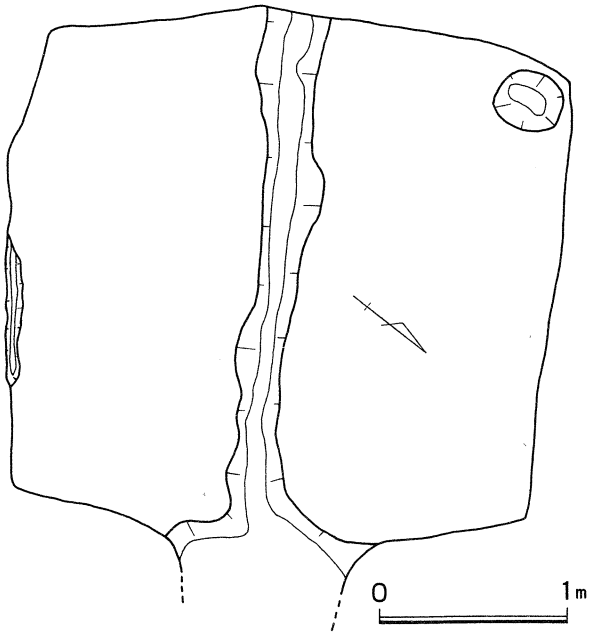
第19図　横穴及び後背墳丘位置図



第20図　N−1号横穴実測図



第21図　N−1号横穴玄室内土器屍床及び遺物出土状況実測図



第22図　N－1号横穴土器屍床除去後実測図

また、東壁側にも長さ80cm、幅８cmの浅い溝が設けられていた(第22図)。壁面は風化の為かノミ痕は観察できなかったが、右袖隅に原因不明の小穴が穿たれていた。

遺物は須恵器蓋坏類、耳環が出土している。また、須恵器屍床上面に遺存状態は悪いものの、人骨が残存していた。

〔土層堆積状況〕

前庭から羨道にかけては、天井崩壊等により、土層を観察できなかった。玄室内には入口から奥壁にかけて厚さが18cm程度と一定の高さで土が堆積しており、自然流入ではなく人為的に埋めたものと考えられる。第４層の地山礫を含む褐色砂質土が須恵器屍床を覆うように埋めて、さらにその上を第３層の地山礫を含まない褐色砂質土で覆っていた。

〔玄室出土遺物〕

遺物は須恵器蓋坏類８、直口壺１、耳環３、刀子１が出土している。

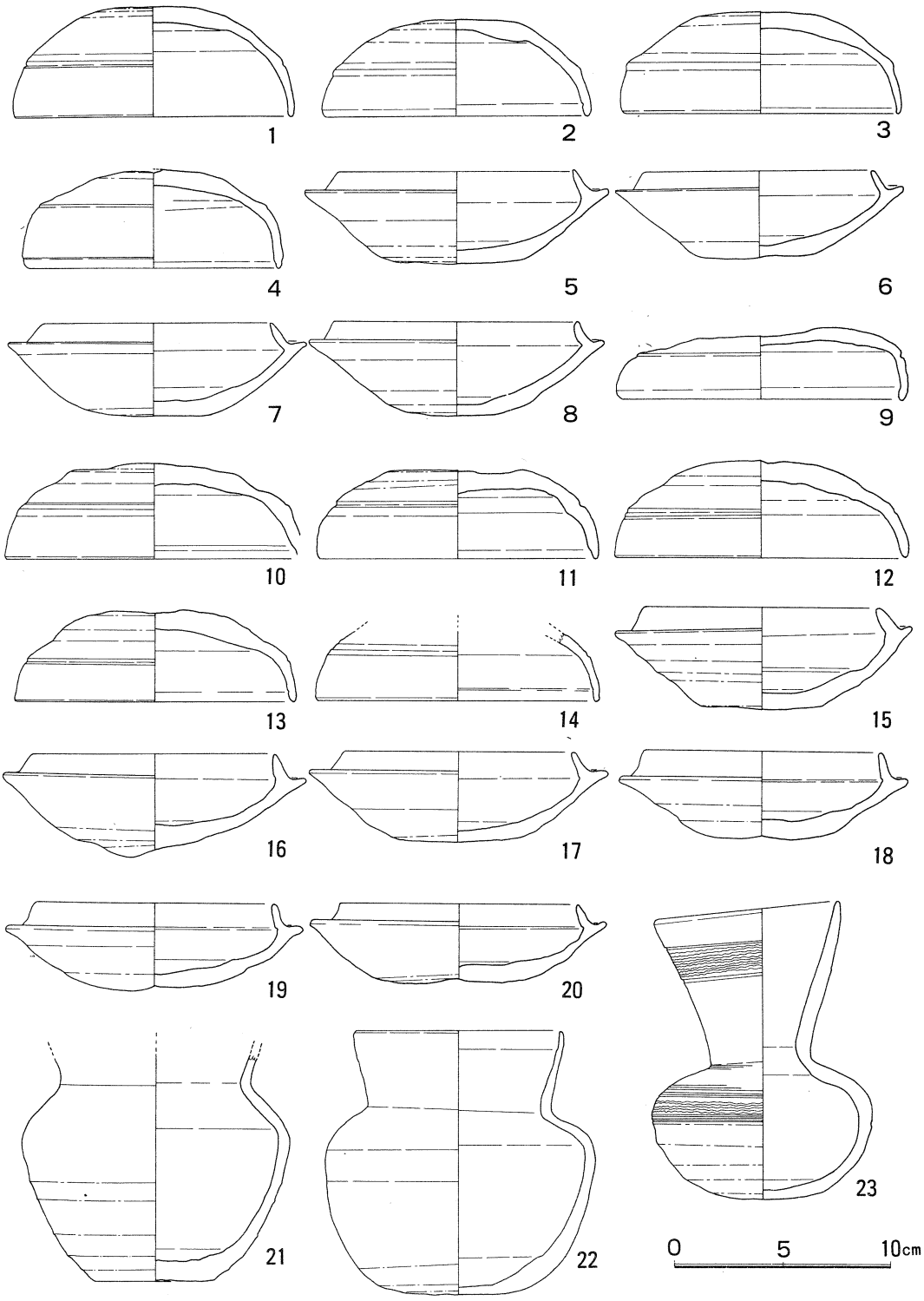
須恵器（第23図）　蓋（１～４）は天井部と体部の境に稜をもち、口縁部がやや内湾するもので、２～４は口縁内面に沈線及び段を有している。天井部はやや丸みをもち、外面にヘラ削りを施す。坏身（５～８）は口縁部がやや内傾して立ち上がり、受け部は短く外上方にのびる。底部は平らに近く、外面にヘラ削りを施す。直口壺（22）は内湾気味に外傾してのびる口縁部を有し、肩部に最大径をもつ。底部は平らに近く、ヘラ削りを施す。

金属器（第25図）　耳環（１～３）は長径2.9cm、短径2.6～2.8cmを測る。刀子（４）は長さ9.1cm、幅1.1cm、厚さ0.5を測り、銹化が著しい。

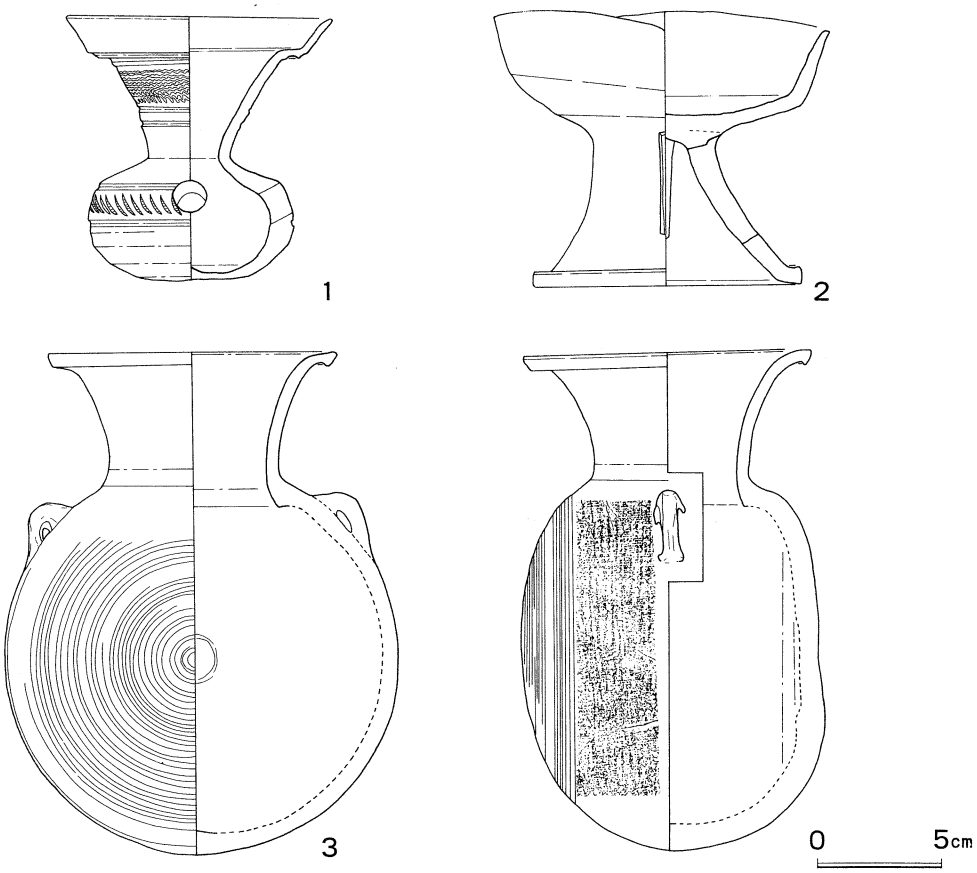
〔羨道部出土遺物〕

羨道部床面から須恵器蓋坏類12、直口壺１、長頸壺１、瑳１、高坏１、提瓶１が出土している。

須恵器（第23・24図）　蓋（９～14）はそれぞれ同様な作りをしており、天井部と体部の境に１～２条の沈線を施すことにより、稜を作り出している。12以外は口縁部内面に沈線及び段を有する。坏身（15～20）も同様な作りで、口縁部は内傾気味に立ち上がり、受け部は短く外方にのびる。底

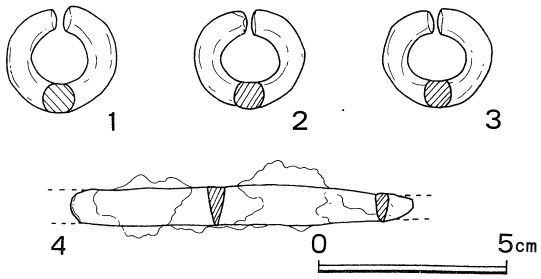


第23図　N−1号横穴出土遺物実測図(1)



第24図　N−1号横穴出土遺物実測図(2)

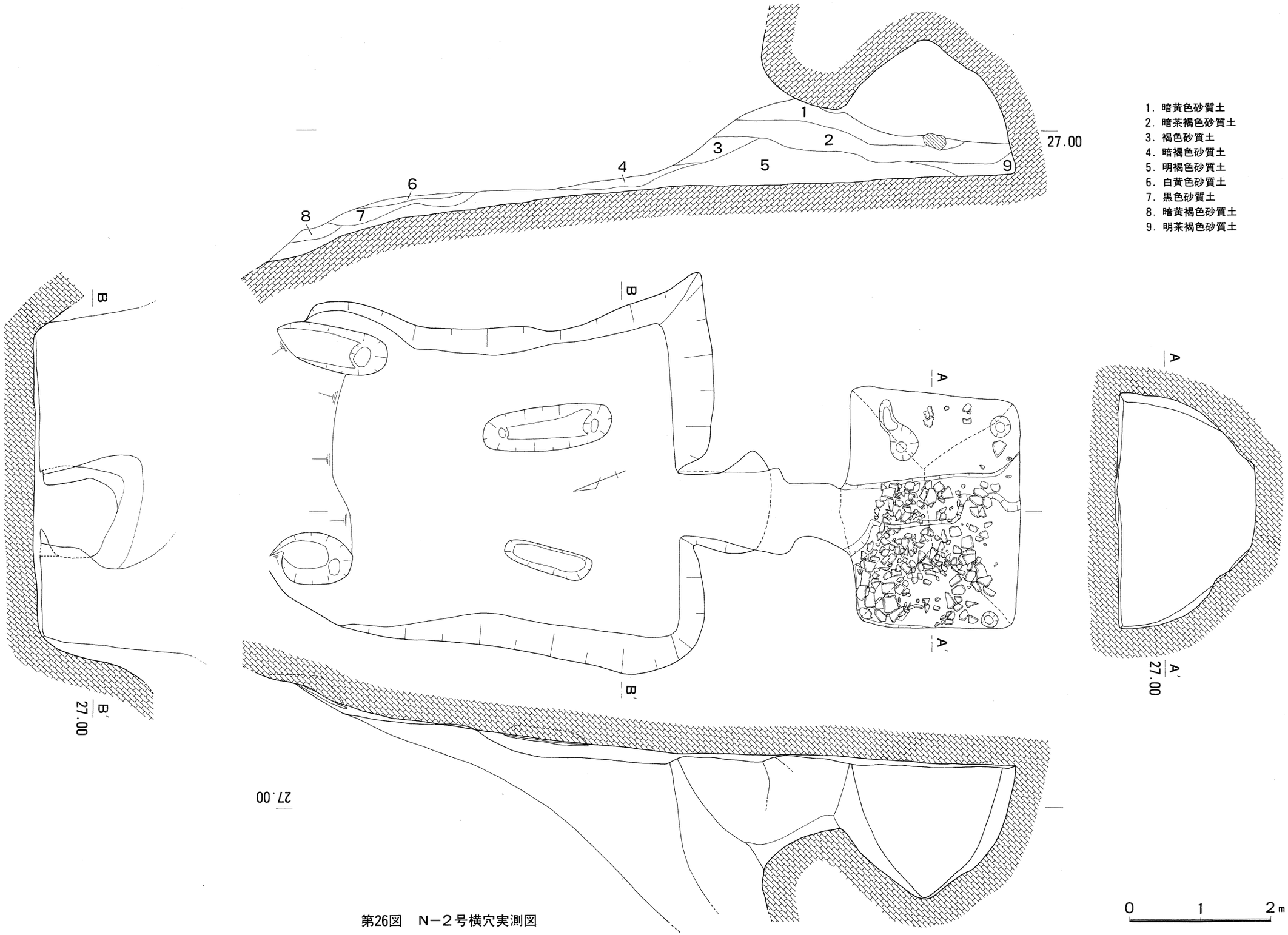
部外面にヘラ削りを施す。直口壺（21）は口縁部を欠き、肩部がよく張って底部に至る。胴部下半からヘラ削りを施す。長頸壺（23）は外傾してのびる口縁部を有し、端部は丸い。口縁部と肩部を２条の沈線と波状文で飾り、胴部下半にヘラ削りを施す。瑟(第24図１)は頸部が狭く口縁部はラッパ状に開く。頸部に沈線と波状文、胴部に沈線と櫛状工具による刺突文で飾り、胴部下半にヘラ削りを施す。高坏（２）は外傾して開く口縁部に、裾が大きく開く脚部を有す。脚部に二方向の透しをいれる。提瓶（３）は口縁部が外傾するもので、端部は断面三角形を呈する。体部前面が丸くふくれ、背面はほぼ平らである。前面から側面にかけて、回転カキ目を施す。肩部に粘土紐を貼り付けた把手が一対付いている。



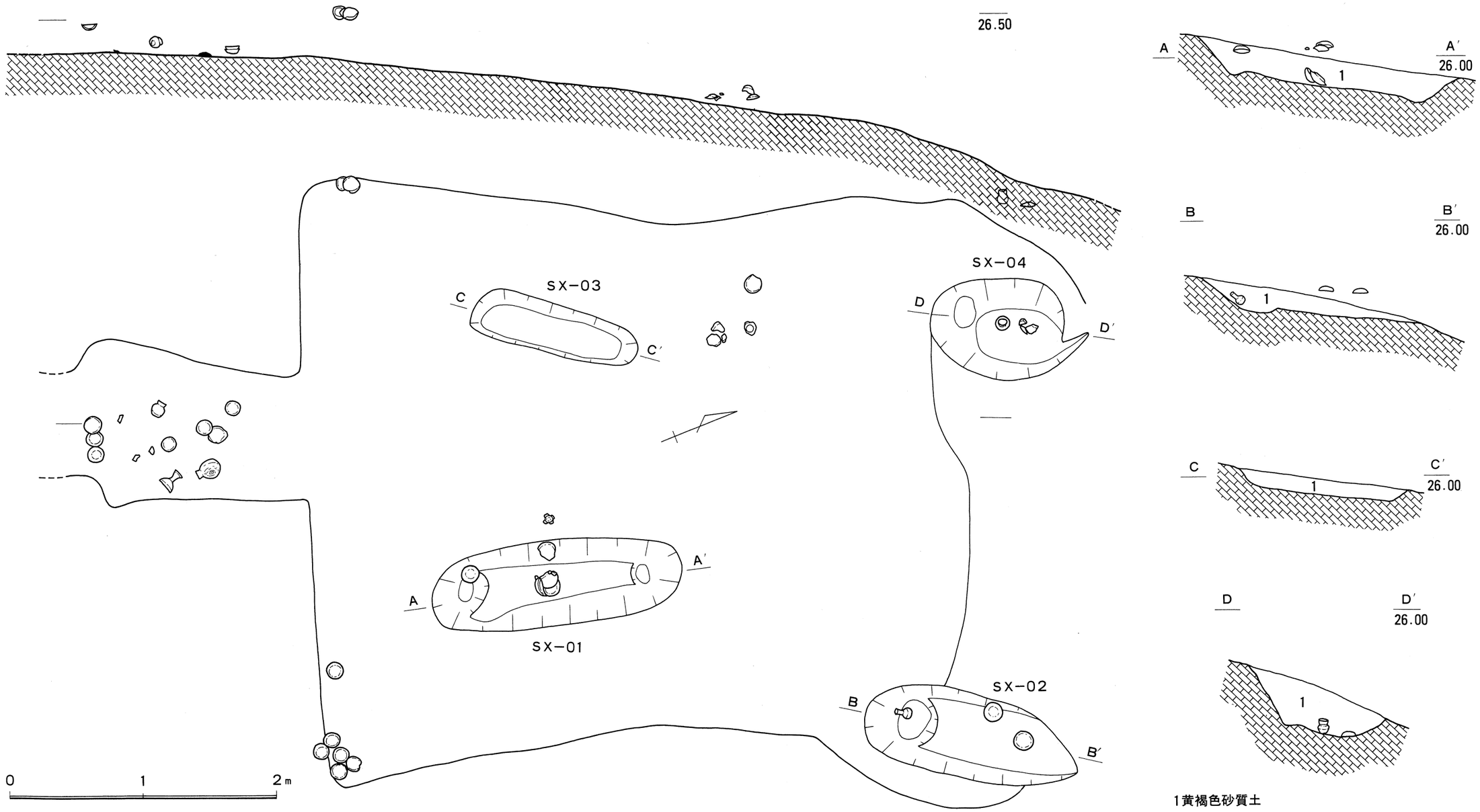
第25図　N−1号横穴出土金属製品実測図

Ｎ－２号横穴墓（第26図）

Ｎ－１号横穴の東、標高25～29mの丘陵斜面に



第26図　N－2号横穴実測図



第27図　N−2号横穴前庭部及び土壙墓実測図

第28図　N－2号横穴玄室内土器屍床及び遺物実測図

穿たれている。北北東方向に開口しており、玄室床面の標高は26.4mである。

〔前庭・羨道・玄門〕（第27図）

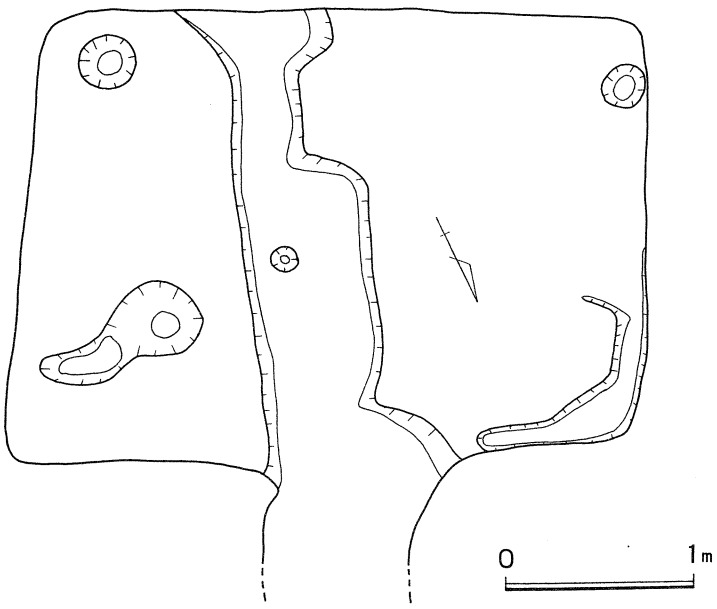
地山斜面を大きく削って広い前庭部を造り出している。長さ4.0m、幅4.4m、壁高2.2mを測り、先端側に向かって緩やかに傾斜している。横断面は浅い「コ」の字状を呈している。この床面に4基の墓壙（ＳＸ－01～04）が掘り込まれていた。ＳＸ－01は長さ1.86m、幅0.6m、深さ30cmを測り、平面形は楕円形、断面はＵ字形を呈し、底面は南側が広くなっている。底面の南北両側に小口穴があり、南側の小口穴は長さ20cm、幅10cm、深さ３cmで、北側の小口穴は長さ14cm、幅10cm、深さ２cmを測る。墓壙内からは須恵器が出土している。ＳＸ－02は北端が削られていたが残存長で1.6m、幅0.6m、深さ30cmを測り、平面形は楕円形、断面はＵ字形を呈している。底面の南側に小口穴があり、長さ28cm、幅20cm、深さ７cmを測る。墓壙内からは須恵器が出土している。ＳＸ－03は長さ1.28m、幅0.38m、深さ20cmを測る。平面形は楕円形で、断面は方形に近い。遺物は何も出土していない。ＳＸ－04は北端が削られていたが、長さ1.2m、幅0.75m、深さ35cmを測り、平面形は楕円形、断面はＵ字形を呈している。底面の北側に小口穴があり、長さ22cm、幅16cm、深さ６cmを測る。墓壙内からは須恵器が出土している。また、ＳＸ－01の約50cm西側の前庭床面で馬具（辻金具）が出土している。

羨道は前庭奥壁の中軸線西寄りに穿たれており、長さ1.6m、幅は羨門部で0.85m、羨道奥壁側で広くなって1.2mを測る。天井部の高さは1.5～1.0mで玄門に向かって低くなっている。玄門は羨道より狭く、若干右に振っており、長さ0.8m、幅は0.6～0.9ｍで玄室側が広くなっている。Ｎ－１号横穴同様、閉塞施設等の痕跡は何も認められなかった。

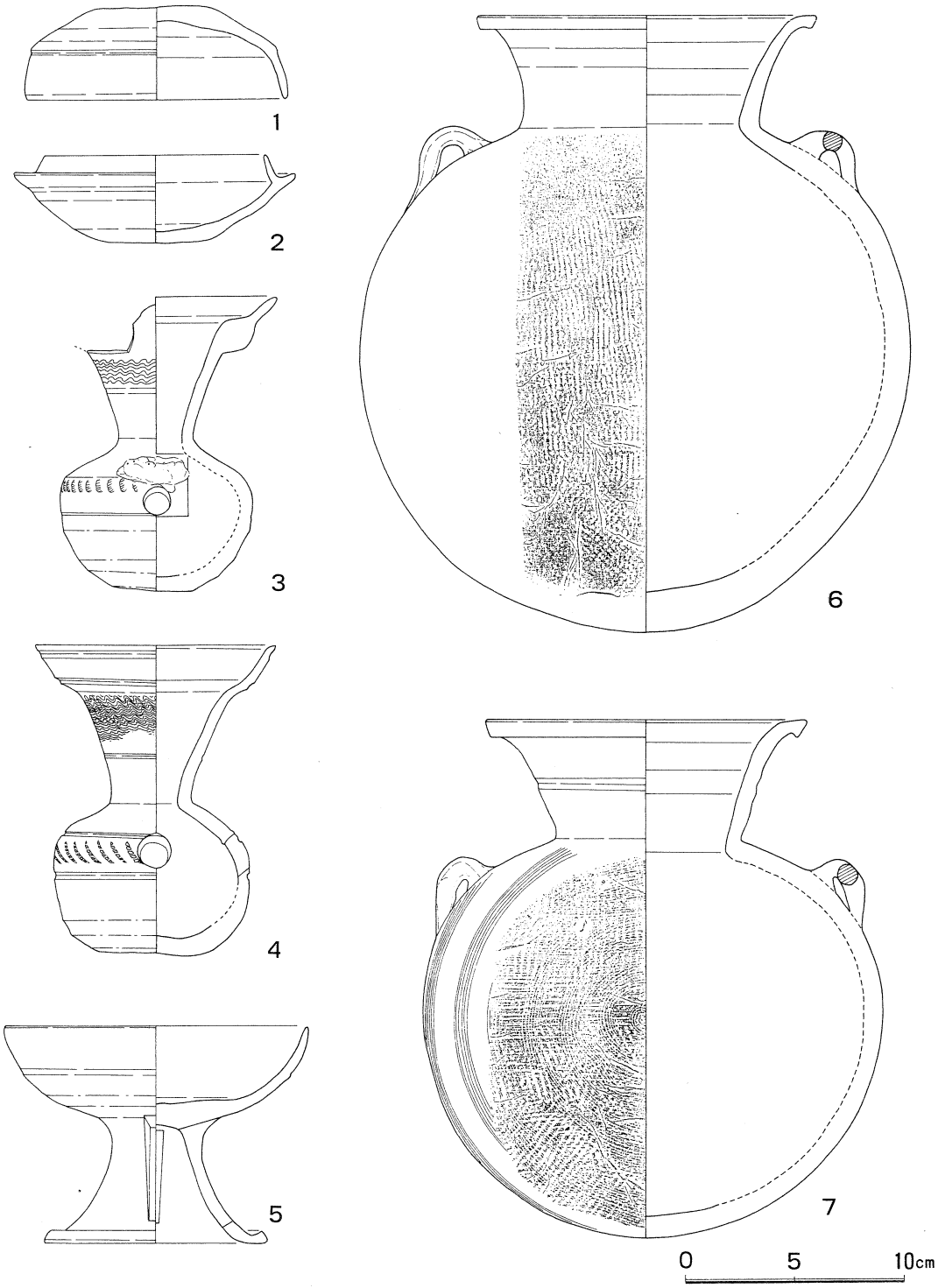
遺物は前庭・羨道部床面から須恵器が出土している。

〔玄室〕（第29図）

玄室は、奥行き2.5m、幅3.3m、高さ1.9mを測り、平面プランは長方形で四壁と天井との間に境界線のな



第29図　Ｎ－２号横穴土器屍床除去後実測図



第30図　N－2号横穴玄室内出土遺物実測図(1)

い擬似四注式を呈し、平入りである。壁面は風化の為かノミ痕は観察されなかった。

玄室の床面2/3に須恵器大甕を割った破片を敷き詰めて、須恵器屍床を形成していた。検出時において、須恵器片の敷き方には粗密があり、大きさや破片表裏の敷き方に規則性は認められず、屍床の下から玉類が出土していることから判断すれば、敷かれた当時の旧状を留めておらず、追葬時に動かされたものと考えられる。

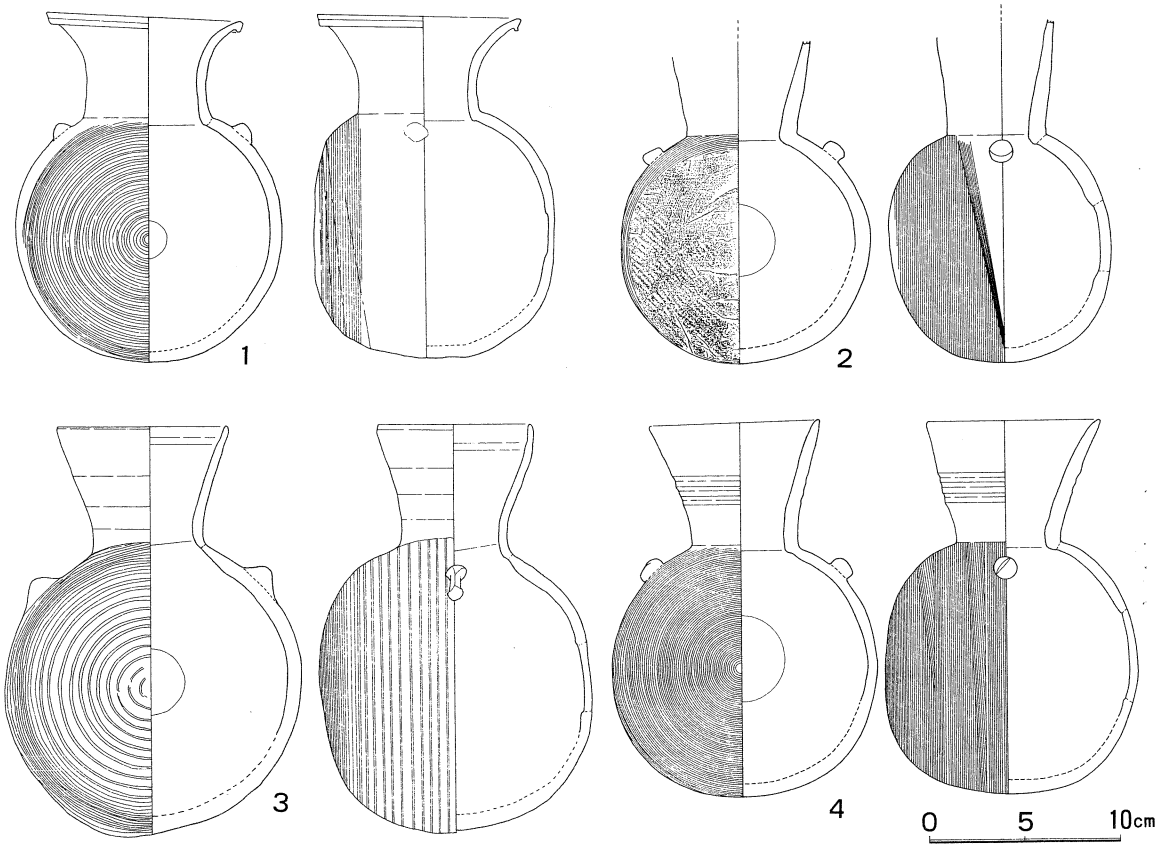
須恵器屍床除去後の床面中央には、玄室中軸線に沿って、幅40～70cm、深さ6cmの排水溝が延びていた。またこの他に、西袖隅に幅20cm、深さ3cmの溝と奥壁側に2ヶ所凹みがあった。(第29図)

遺物は須恵器、金属製品が出土している。

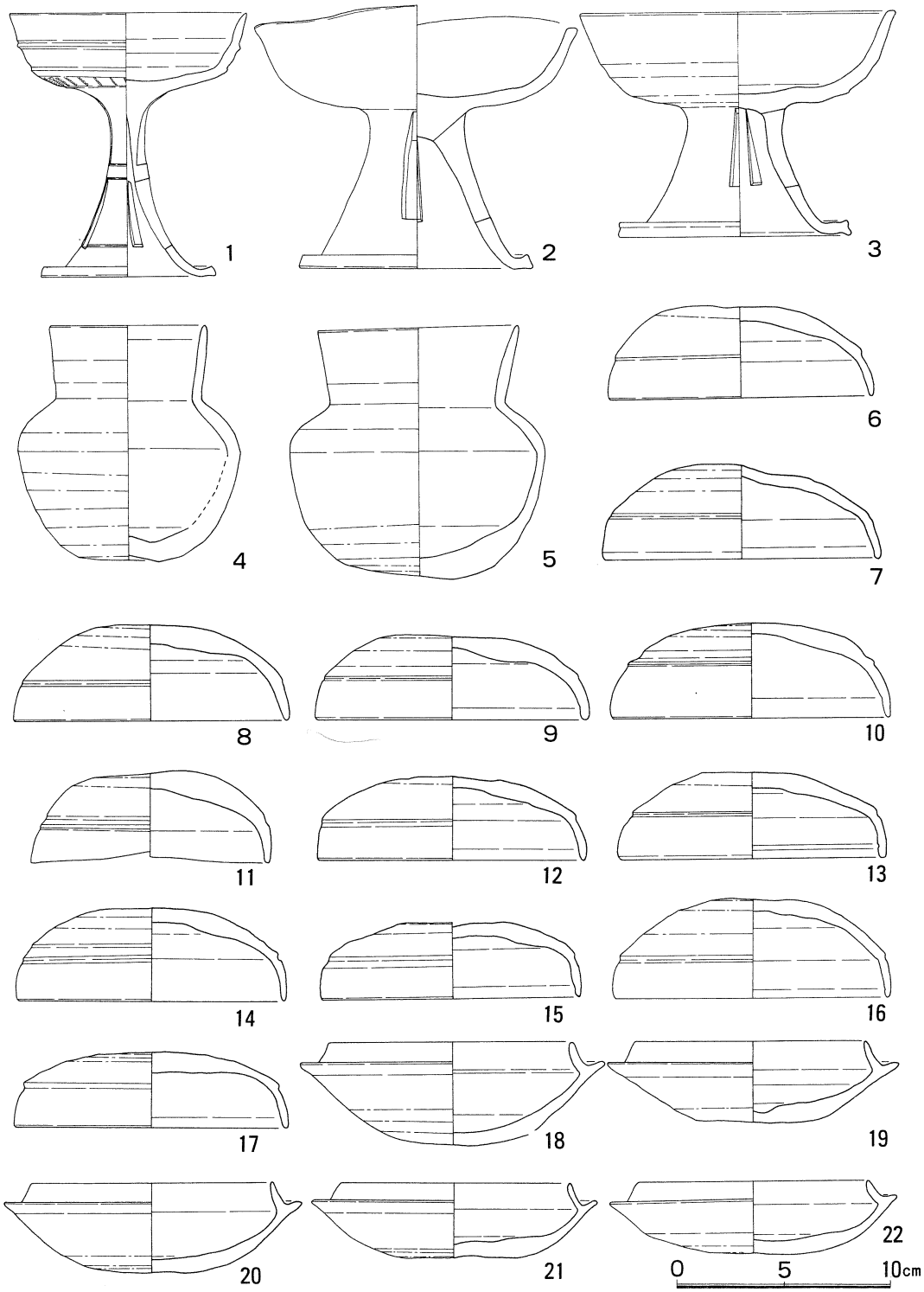
〔玄室出土遺物〕(第30～32・35・36図)

遺物は須恵器蓋坏類2、瑕2、高坏4、提瓶6、直口壺2、大刀1、刀子3、鉄鏃3、耳環4、玉類23が出土している。

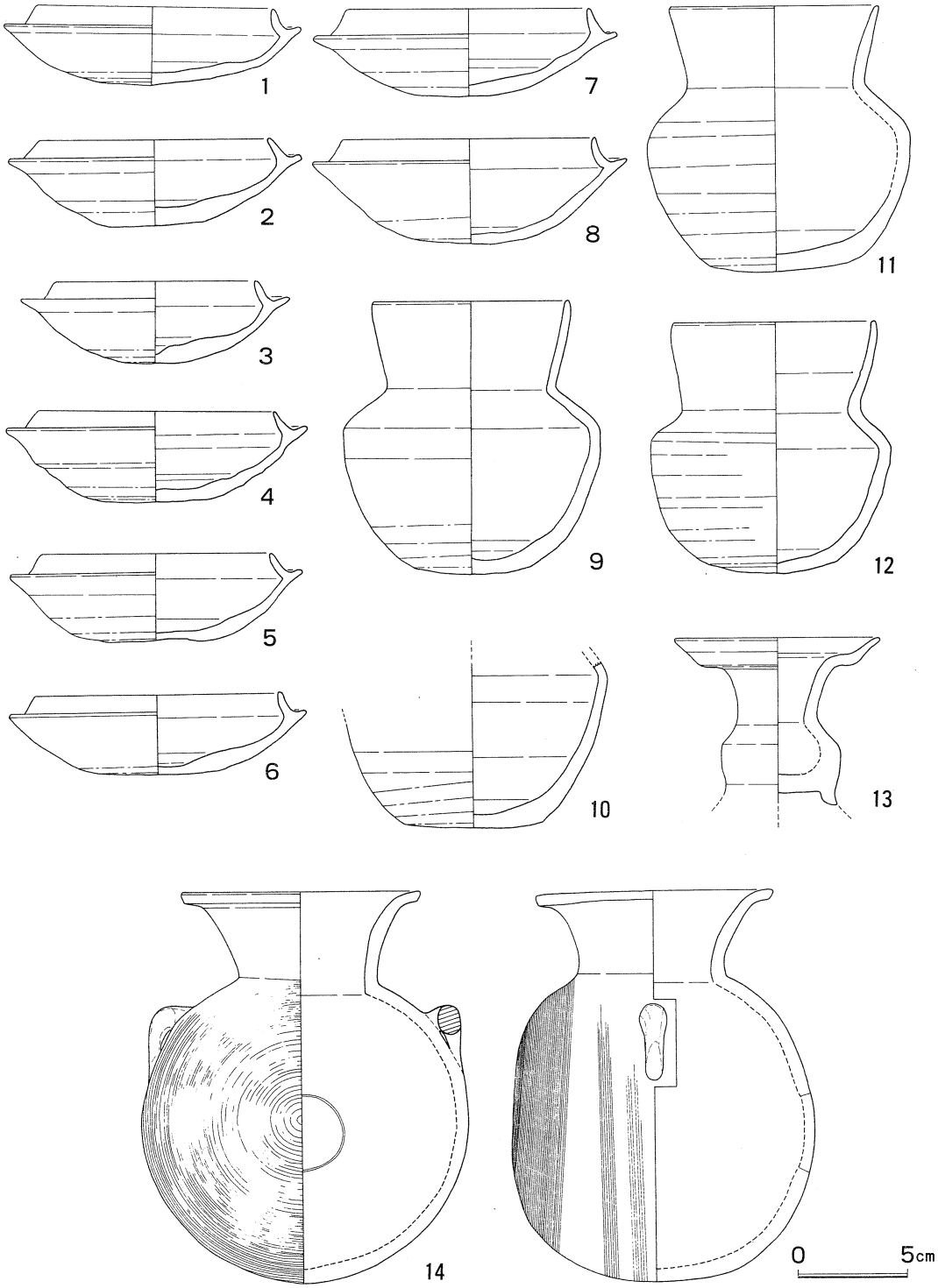
須恵器　蓋(1)は天井部と体部の境に沈線を施して稜を作り出すもので、天井部外面にはヘラ削りを施す。坏身(2)は内傾気味にのびる口縁部で、受け部は短く外方にのびる。底部は平らに



第31図　N－2号横穴玄室内出土遺物実測図(2)



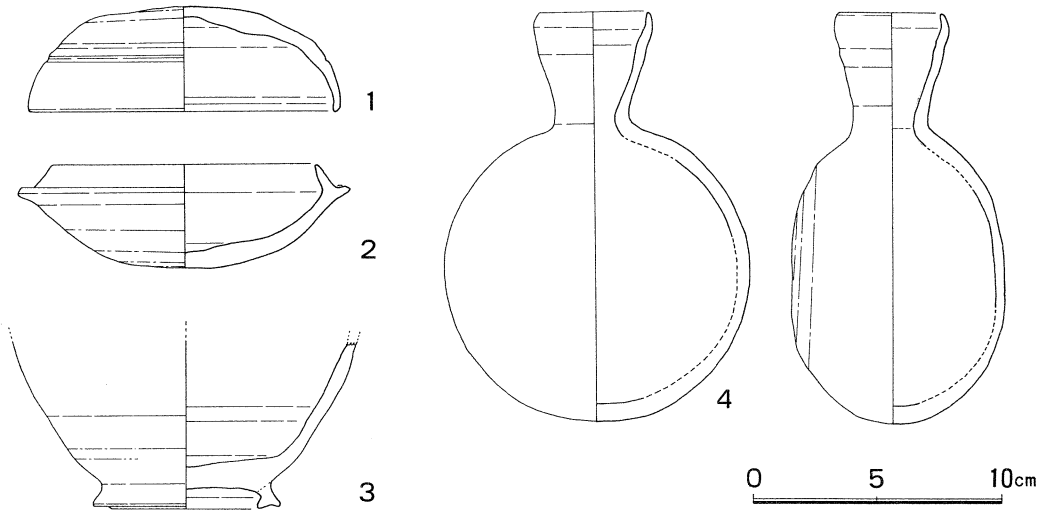
第32図　N－2号横穴出土遺物実測図(1)



第33図　N－2号横穴出土遺物実測図(2)

近くヘラ削りを施す。瑳（3・4）は頸部が狭く、口縁部はラッパ状に開く。頸部外面に沈線と波状文、胴部に沈線と櫛描刺突文を施すが、4はさらに口縁部に2条の沈線が廻る。高坏（5）は内湾する口縁部で、体部に若干稜を作り出す。脚部に二方向の透孔を有す。提瓶（32図6・7、33図1～4）は大形のもの（6・7）、小形のもの（1～4）がある。6・7は外傾する口縁部で端部は断面三角形を呈す。体部は球形で、6は外面に格子状叩き、7は叩きの後回転カキ目を施す。肩部に粘土紐を貼り付けた把手が付いている。1～4は球形に近い体部で、回転カキ目を施す。1は口縁端部が断面三角形を呈するが、他は丸い。肩部に把手の痕跡化した突起が付く。高坏（34図1～3）は1が二段三方透孔、2・3は一段二方向透孔のものである。1は体部外面に稜をもち、底部外面に櫛描刺突文を施す。脚部はそれぞれ端部付近で屈曲する。直口壺（4・5）は外傾してのびる口縁部を有し、肩部が張って底部に至る。外面にヘラ削りを施す。

金属製品（第35図）　大刀（1）は刀身の長さ53cm、茎の長さ6.6cmを測る。長径5.2cm、短径4.8cm、厚さ0.8cmの倒卵形の鐔および鉄板を楕円形に曲げた鋏が装着される。茎に木質が残るが、銹化が著しい。刀子は3点（2・3・5）あり、2は全長27.8cm、最大幅3.0cm、最大厚1.3cmと、かなりの大型品である。刀身の長さは21.3cmで、両関と思われる。茎に目釘穴がある。3は茎部分のみで、5は刀身だけで、銹化が著しい。鏃は3点（4・6・7）あり、4・6は茎部分のみで断面方形を呈している。7は広根式で八の字状に広がる逆刺をもち、鏃身長2.8cmを測る。耳環は金環（8・9・10）と銅部分のみ（11）があり、8・9は長径3.1、3.2cm、短径2.8cmを測り、どちらとも一部金箔が剝離しかけている。10は長径3.0cm、短径2.6cmを測り、一部金箔が残っている。11は長径3.0cm、短径2.7cmを測る。馬具（12）は辻金具で、辻金具の径8.5cm、伏鉢径5.1cm、高さ2.6cmを測



第34図　N－2号横穴前庭部土壙墓出土遺物実測図

り、鉄地金銅張である。脚は×字に配し、先端は半円状を呈している。幅は2.3cmあり、これに鋲頭径0.9cm、高さ1.3cmの鋲を1個づつ打ち付けているが、1つは損失していた。

玉類（第36図）　勾玉（1～3）、管玉（4・5）、切子玉（6・7）、小玉（8～23）がある。1は瑪瑙製、2は水晶製、3は滑石製で、片面穿孔である。4・5はガラス製の管玉で孔径1.3mm～1.9mmを測る。穿孔は片面から行っている。6・7は水晶製で断面六角形を呈し、穿孔は片面から行っている。小玉はガラス製のもので、8～11は直径3.6～4.1mm、長さ2.2～3.0mm、孔径1.1～1.4mmと小さく、12～23は直径6.7～8.5mm、長さ4.0～7.5mm、孔径1.2～2.7mmを測る。色は青と水色の2種類ある。

〔羨道・前庭出土遺物〕（第32～34図）

羨道・前庭から須恵器蓋坏類27、直口壺4、子持壺1、提瓶2、長頸壺1が出土している。

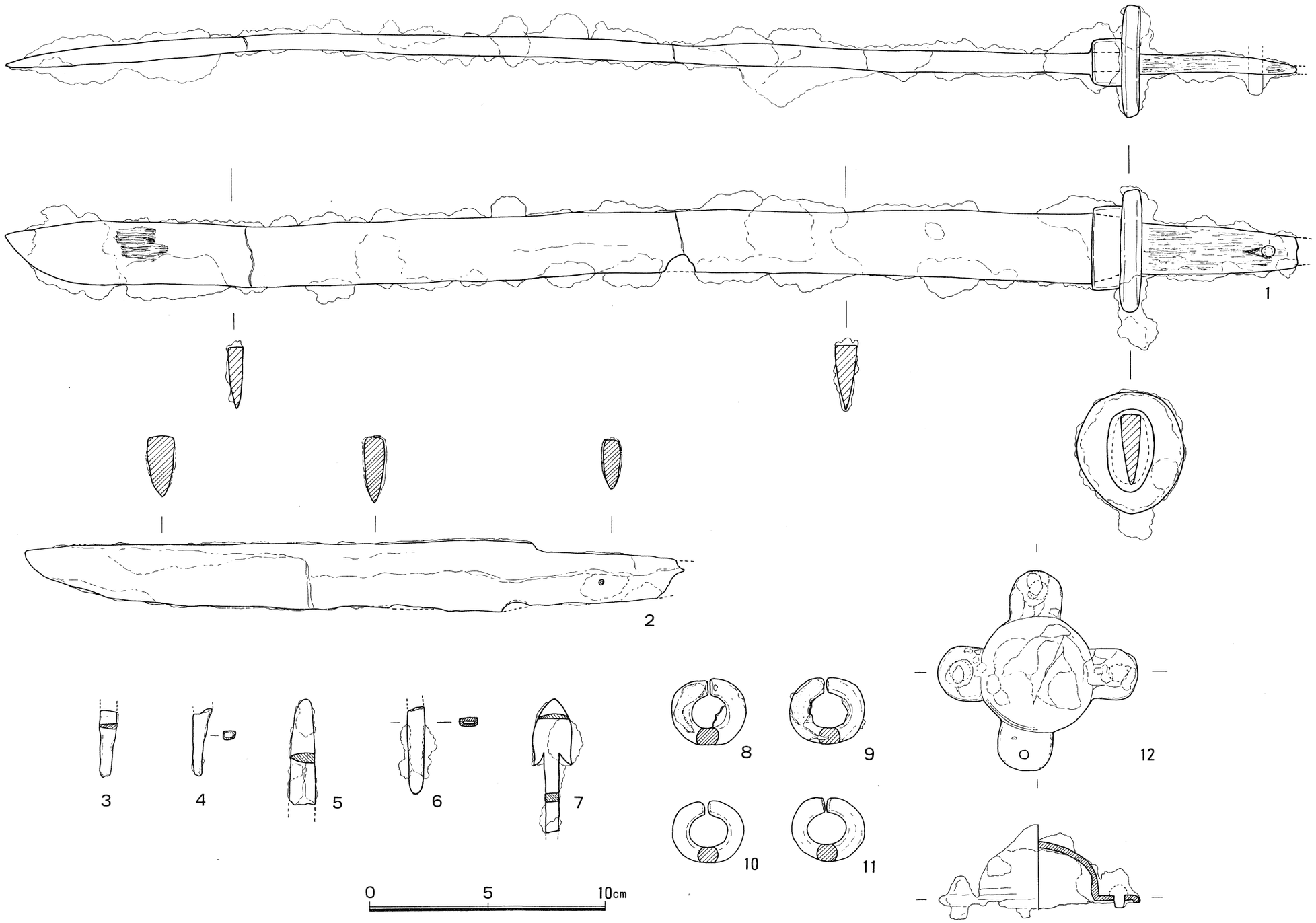
蓋（32図6～17、34図1）および坏身（32図18～22、33図1～8、34図2）はいずれも似た作りをしている。蓋は肩部に稜を設け、6・8以外は口縁内面に沈線及び段を有している。天井部外面にはヘラ削りを施している。坏身は口縁部が内傾気味に立ち上がり、受け部は外上方へのびる。底部外面にヘラ削りを施す。直口壺（33図9～12）は口縁部が外傾してのび、肩部が「く」の字状に張り出すもので、胴部下半にヘラ削りを施す。子持壺の子壺(13)は瓢の形態に近く、口縁部はラッパ状に開く。底部に孔は無く平行叩きが残る。提瓶は2点（33図14・34図4）あり、4は把手の無いもので、偏平な体部を持つ。14は口縁端部が断面三角形を呈し、体部は球形に近い。外面に回転カキ目を施す。肩部に粘土紐を貼り付けた把手が付いている。長頸壺（3）は底部のみであるが高台がくびれている。

N－3号横穴墓（第37図）

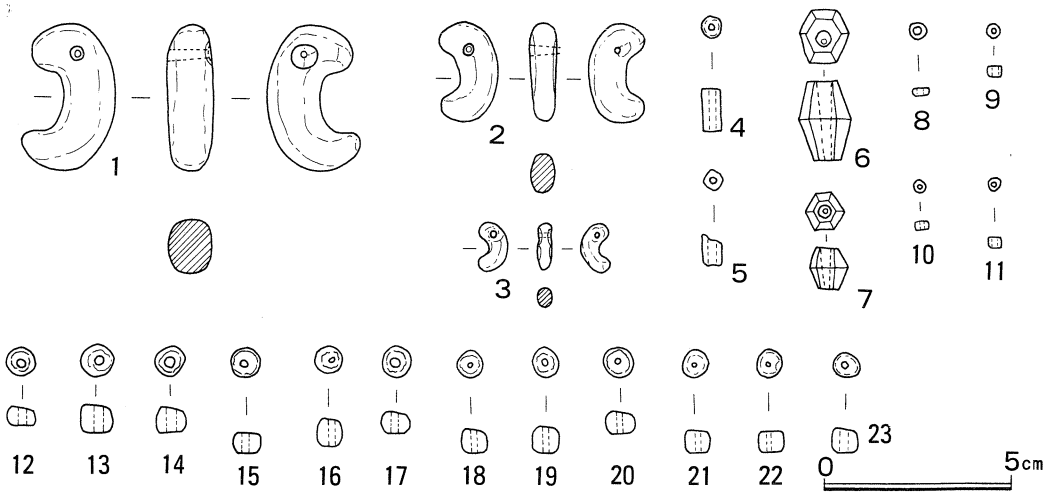
N－2号横穴墓の東、標高26～29mに穿たれている。北方向に開口しており、玄室床面の標高は26.2mである。

〔前庭・羨道・玄門〕

前庭部は、地山斜面を削って長方形に作り出している。長さ4.5m、幅は1.7～2.5mで前庭奥壁側が広くなっている。壁高は西壁で1.2m、東壁で1.5mを測り、横断面は「コ」の字状に近い。床面は平坦に作られている。羨道部は、前庭奥壁中央に穿たれており、長さ1.4m、幅1.0～1.3mで羨門側が狭くなっている。天井部は残りがよく、高さ約1.0mを測り、長方形の横断面を呈する。玄門部は羨道部よりも一段と狭く、天井部も低くなっている。長さ1.2m、幅は玄門入口で64cm、玄室側で54cmを測る。閉塞石は認められなかったが、玄門と羨道の境の床面に長さ1.1m、幅30cm、深さ10cmの断面「U」字形の溝が掘り込まれており、ここで閉塞装置を安定させていたと思われるが、閉塞



第35図　N－2号横穴出土金属製品実測図



第36図　N－2号横穴出土玉類実測図

石等の痕跡は何も認められなかった。遺物は玄門入口に設けられている閉塞用の溝上面から須恵器が出土している（第38図）。

〔玄室〕（第38図）

玄室は、奥行き2.3m、幅2.65m、高さ2.0mを測り、平面プランは正方形に近い方形を呈する擬似四注式の平入りである。壁面にノミ痕は認められなかった。羨道から玄門にかけての中軸線に対して、玄室の中央軸が若干東に振れている。

玄室床面には、N－1・2号同様に須恵器屍床が形成されており、玄室右側半分に須恵器大甕を割った破片が敷き詰められていた。須恵器片は緻密に敷き詰められ、大きさはまちまちであるものの、ほとんどの破片が表面を表にして敷かれていた。このことから考えれば、埋葬時のままの状態を留めている可能性が高いものと思われる。

須恵器屍床除去後の玄室床面には、玄室中軸線に沿って、長さ2.3mの排水溝が設けられていた。幅は12～84cmで玄室入口が広く作られ70cm奥へ延びてから狭くなっている（第39図）。

遺物は須恵器と鉄器が出土している。

〔土層堆積状況〕

玄室内にはN－1号横穴同様の土層の堆積状況が観察された。第2層が前庭部側から流れ込んでいるが、玄室入口から奥には入り込まず、玄室内では水平に土が堆積していたことから、人為的に埋められたものと考えられる。

〔玄室出土遺物〕（第40・42図）

遺物は須恵器提瓶1、円頭大刀1、鏃3が出土している。

須恵器　外傾してのびる口縁部で端部は断面三角形を呈し、頸部外面に2条の沈線を施す。体部

はほとんど球形で、叩きの後カキ目を施す。

鉄器　円頭大刀（1）は最大長42.7cm、最大幅3.3cm、最大厚0.9cmを測り、茎を欠いている。関部に長径5.3cm、短径4.1cm、厚さ0.5cmの鐔および幅2.7cmの鉄板を楕円形に折り曲げた鋤が装着される。円頭は長径3.2cm、短径2.1cm、長さ3.6cmを測るが、銹化が著しい。鏃は3点（2～4）あり、いずれも細根長頸式である。2は鏃身長2.2cm、篦被部8.4cm、3は鏃身長1.9cm、篦被部9.6cmを測り、茎部を欠くものの、棘篦被が付いている。4は鏃身長2.2cm、篦被部9.5cmを測り、棘篦被をもち、茎部には紐巻痕が残っている。

〔羨道部出土遺物〕（第41図）

遺物は須恵器蓋坏類10、高坏1が出土している。蓋（1～5）は肩部に沈線を施して稜を作り出している。口縁部内面に沈線および段は認められない。天井部外面にヘラ削りを施す。坏身（6～10）は口縁部が内傾気味に立ち上がり、受け部は外方にのびる。底部は平らに近く、ヘラ削りを施す。高坏(11)は口縁部が外傾してのびるもので、体部に3条の沈線と、底部に櫛描刺突文を施す。脚部は細くのび、二段三方透孔を施す。下段は台形、上段は刻み込むだけで貫通していない。

須恵器屍床（第43図）

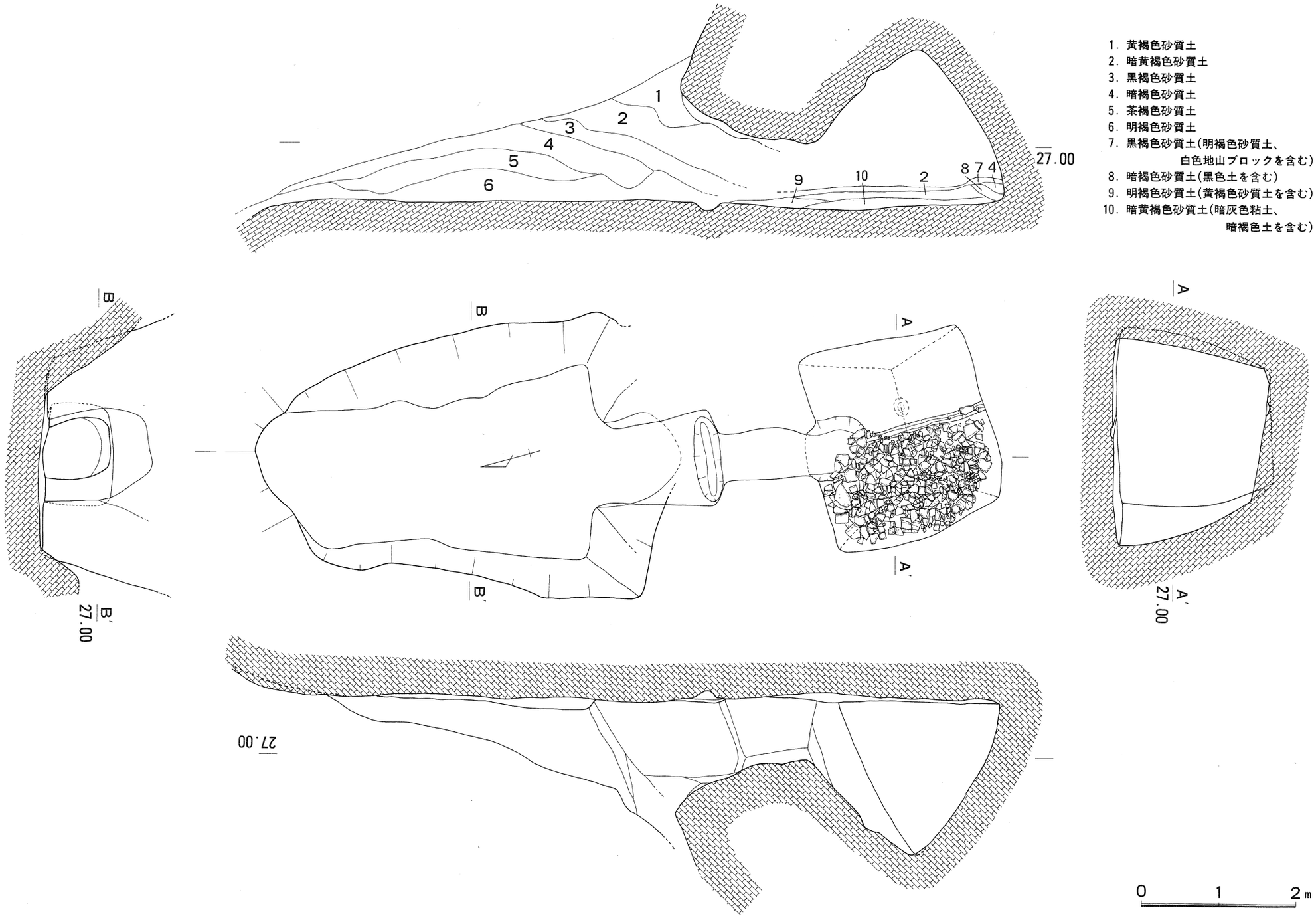
1はN－1号、2・3はN－2号横穴墓の須恵器屍床を復原したものである。N－3号横穴墓の屍床については復原できなかった。1は口径50.6cm、器高102.8cmを測る大形の甕である。口縁部は外反気味にのび、端部付近で段をもって端部に至る。口縁部外面に波状文、平行沈線、カキ目を施す。体部外面は平行叩き、内面は同心円状叩きを施している。2は口縁部を欠き、全体的にひずみが著しいが、大形の甕である。残存高107.8cm、体部最大径100cmを測る。外面は平行叩きおよびカキ目、内面は同心円状叩きを施す。3は底部のみ復原できたもので、外面平行叩き・カキ目、内面同心円状の叩きを施す。

N－4号横穴墓（第44図）

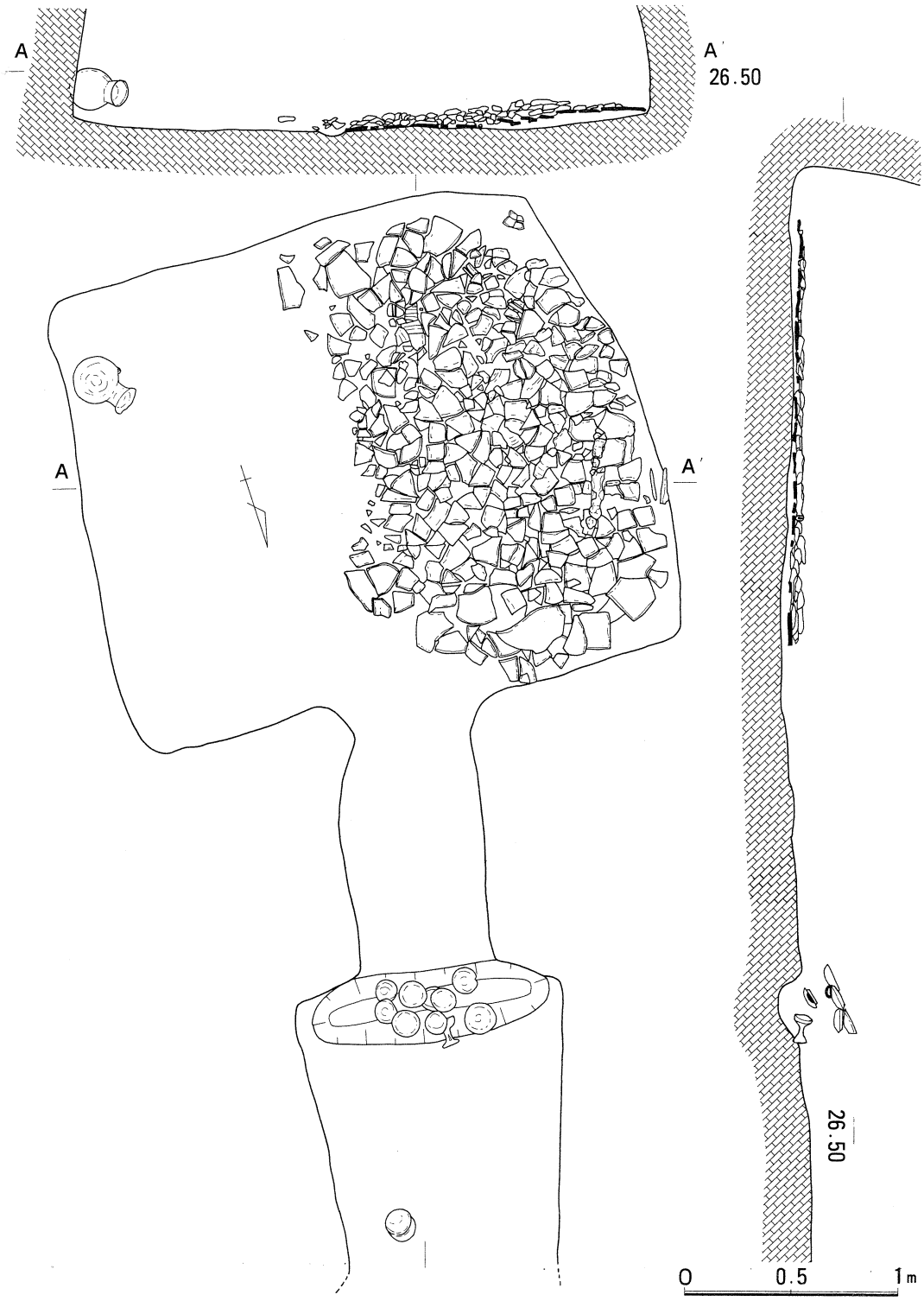
N－3号横穴より3.3m高所の標高約29～31mの斜面に穿たれている。北北西方向に開口しており、玄室床面の標高は29.6mである。全体的に縦長長方形の形態であり、玄室と羨道の境界が明確にし難く、壁面のかすかな稜線を手がかりに境の目安とした。

〔墓道・羨道〕

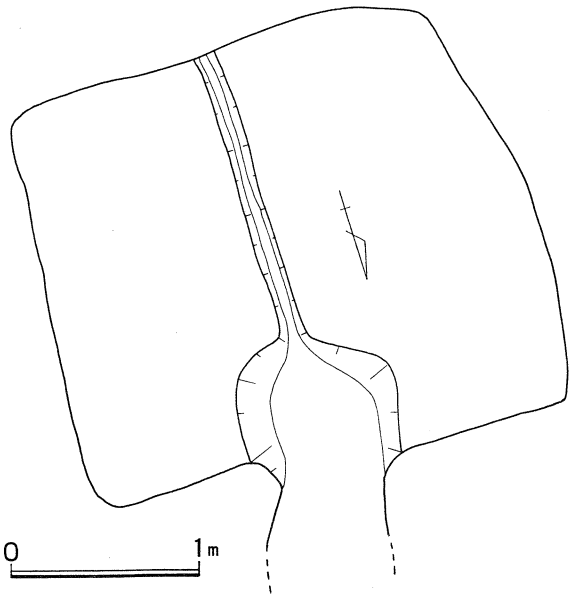
墓道は、長さ1.8m、床面幅0.5～0.9mを測るもので、先端部が狭くなっている。断面は浅い「U」字形を呈し、床面は羨道に向かって緩やかに高くなる。羨道部との境に長さ1.0m、幅28cm、深さ3～9cmの閉塞装置用の溝が掘り込まれているが、閉塞石等の痕跡は何も認められなかった。羨道は



第37図　N－3号横穴実測図



第38図　N－3号横穴玄室内土器屍床及び遺物出土状況実測図



第39図　N－3号横穴土器屍床除去後実測図

墓道よりも約5cm高く、長さ0.5m、幅0.8mを測り、天井部は崩壊している。

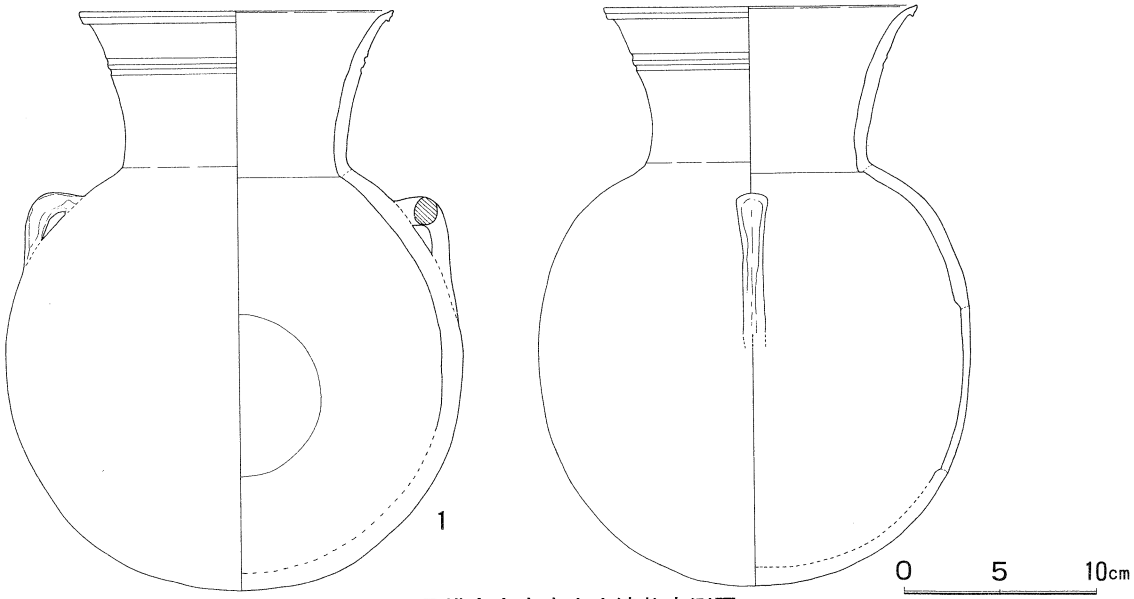
〔玄室〕

玄室は長さ2.4m、幅0.9～1.4mで奥壁側に広がっている。天井までの高さは1.1～0.4mを測り、奥壁に向かってカーブを描きながら緩やかに傾斜してゆく。側壁がやや垂直に立ち上がるが、丸天井形に属するものと思われる。

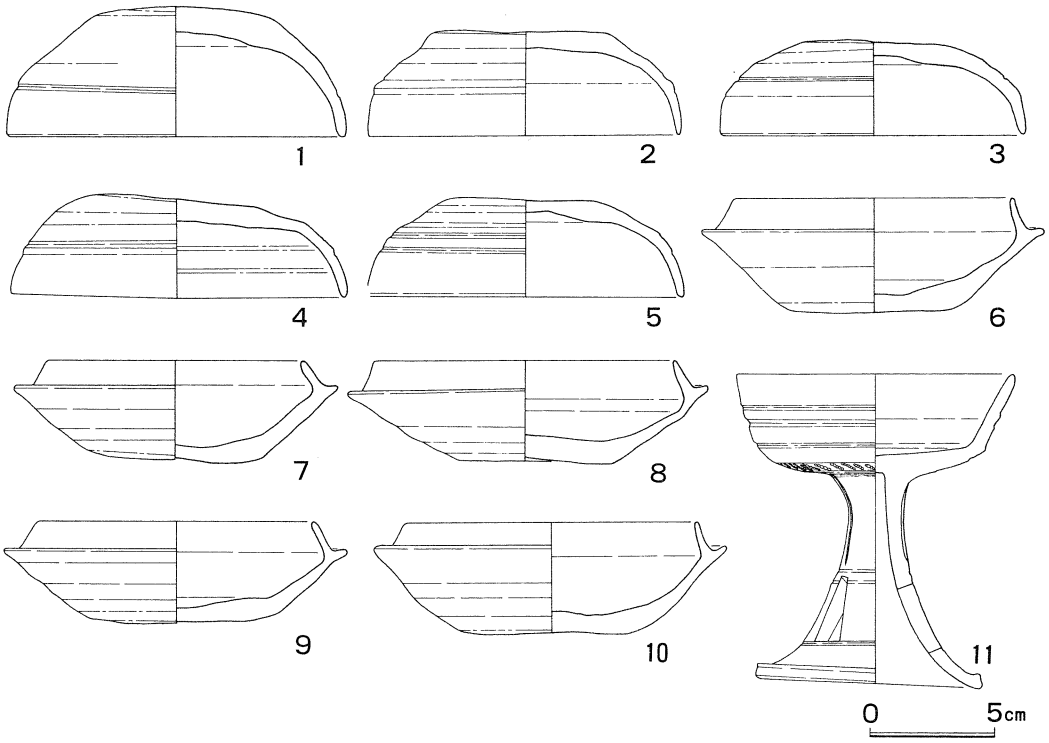
〔出土遺物〕（第46図）

遺物は玄室と羨道から須恵器蓋坏類3、直口壺1が出土している（第45図）。蓋（1・2）は肩部に沈線を施して稜を作り出し、口縁部内面に沈線を施すものである。天井部外面にはヘラ削りを施している。坏身（3）は外傾気味の口縁部と外方にのびる受け部をもつ。底部にはヘラ削りを施す。直口壺（4）は口縁部が外傾してのび、肩部が張って底部に至るものである。体部下半から底部にかけてヘラ削りを施す。

N－5号横穴墓（第47図）



第40図　N－3号横穴玄室内出土遺物実測図



第41図　N－3号横穴羨道部出土遺物実測図

N－4号横穴墓の東、標高28～30mの斜面に穿たれている。北東方向に開口しており、玄室床面の標高は28.5mである。

〔前庭・羨道・玄門〕（第48図）

前庭部は地山斜面を削って長方形に作り出したもので、長さ4.1m、幅1.7～2.0mを測り、床面は羨道へ向かって徐々に高くなっている。西壁の羨道部寄りに、小横穴が穿たれていた。

小横穴は奥行き0.7m、最大幅0.8m、高さ0.5mの規模で内部平面は楕円形に近く、断面は三角形を呈している。入口の壁面には閉塞用の刳り込みが設けられていたが、閉塞石は追葬時かそれ以降に抜き取られたものと思われ、前庭埋土第4層の黒色砂質土中に認められた。閉塞石は、長さ70cm、幅40cm、厚さ6cm程度の板石2枚で構成されていたが、検出時には破損していた。内部から遺物等は出土していない。

羨道部は長さ1.8m、幅1.3～1.5mを測り、天井部は崩壊していた。玄門は長さ1.3m、幅1.05～0.85mを測り、玄室側が狭くなっており、天井部は高さ1.0mでドーム形に近い。玄門入口で2枚の閉塞石を検出したが、羨道側に倒れており、床面よりも10～40cm浮いた状態であった。それぞれ長さ1.1m、1.0m、幅52cm、48cm、厚さ18cmを測り、やや雑なつくりであるが幅約4cmのノミ痕が認められた。この閉塞石下方の羨道と玄門の境の床面には、長さ1.5m、幅38cm、深さ5cmの断面「U」

字形の閉塞石を安定させるための溝が設けられていた。

遺物は前庭床面と第4層中から須恵器蓋坏類や子持壺が出土している。

〔**玄室**〕（第49図）

玄室は奥行き2.84m、幅3.3m、高さ2.4mを測り、平面プランは長方形を呈し、いわゆる擬似四注式の平入りである。床面は奥壁に向かって若干高くなっており、玄室中軸線に沿って長さ2.84m、幅80cm、深さ6～10cmの断面「コ」の字状の排水溝が設けられている。壁面は風化のためか表面調整のノミ痕等は認められなかった。

遺物は少量であるが、須恵器蓋坏類と高坏、砥石などが出土している。

〔**玄室出土遺物**〕（第50・51図）

遺物は須恵器蓋坏類5、低脚坏2、高坏1、土錘1、砥石1、刀子1、鐔1、鏃1が出土している。

須恵器　蓋（50図1）は肩部に稜を設け、口縁部内面に浅い沈線をもつ。天井部にはヘラ削りを施す。坏身は5点（2～5）ある。2・3は口縁部がやや内傾してたちあがり、端部は丸い。底部外面にヘラ削りを施す。4は高台の付くものであり、口縁部は外傾してのび、端部は丸い。5は外傾して直線的にのびる口縁部をもち、底部は平らである。低脚坏（6・7）はハの字状に広がる脚部で端部は丸い。7は口縁部を欠くが、6は内湾する体部から外反する口縁部をもつ。高坏（8）は直立気味にのびる口縁部をもち、底部との境に稜を設ける。底部外面に櫛描刺突文を施す。脚部は細長く、二段三方透しを施す。下段は台形で、上段は刻み込むだけのものである。

土錘・砥石　土錘（9）は土師質で長さ6.5cm、最大径1.9cm、孔径5.5mmを測る。砥石（10）は長さ13.2cm、最大幅4.4cmを測り、2面に使用痕が認められる。

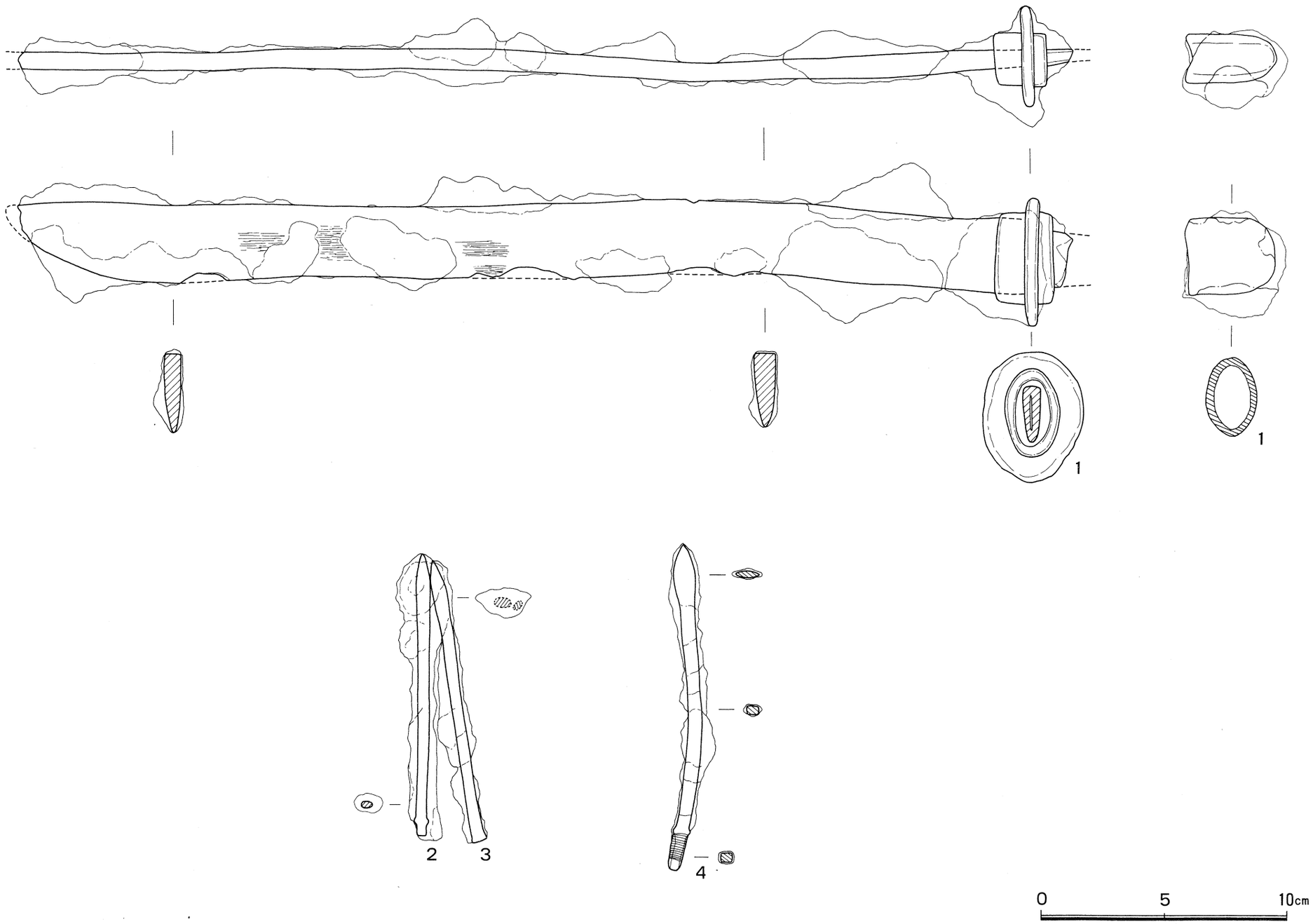
鉄器　刀子（51図1）は茎部だけで、木質が残る。鐔（2）は半分に折れたもので、銹化が著しい。鏃（3）は鏃身が幅広のもので、直角関をもつ。茎部に木質が残る。

〔**前庭出土遺物**〕（第50図）

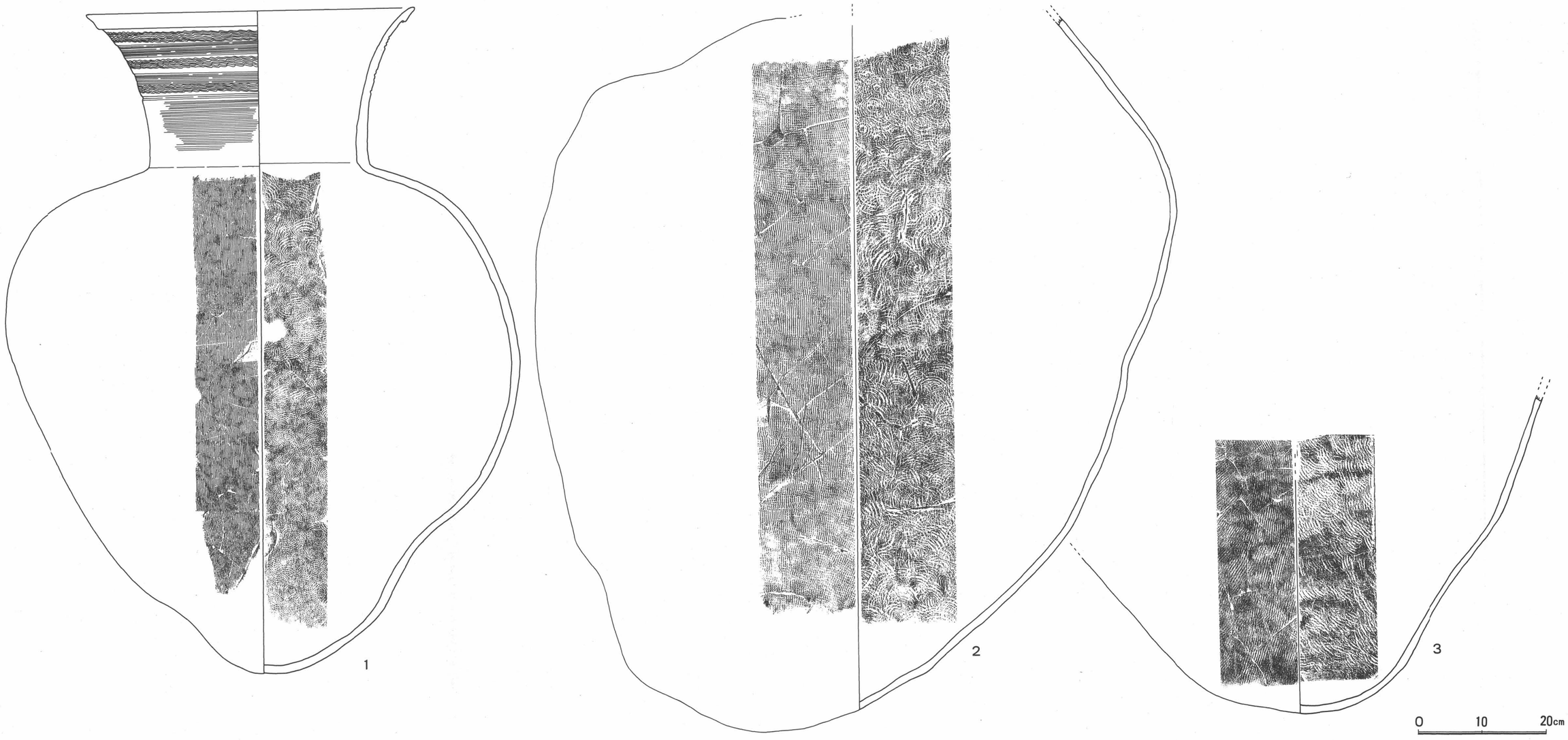
遺物は須恵器坏身2、壺1、子持壺8が出土している。坏身（11・12）は内傾して立ち上がる短い口縁部をもつもの（11）と、内湾気味に立ち上がる、やや長めの口縁部をもつもの（12）がある。どちらとも底部外面にヘラ削りを施す。壺（13）は内湾気味に外傾してのびる口縁部をもち、底部外面にヘラ削りを施す。子持壺（14～21）は21が親壺であとは子壺である。子壺はすべて口縁部を欠き、底部に穿孔がある。親壺は一部分であるが、有脚でタガを有するものである。

N－6号横穴墓（第52図）

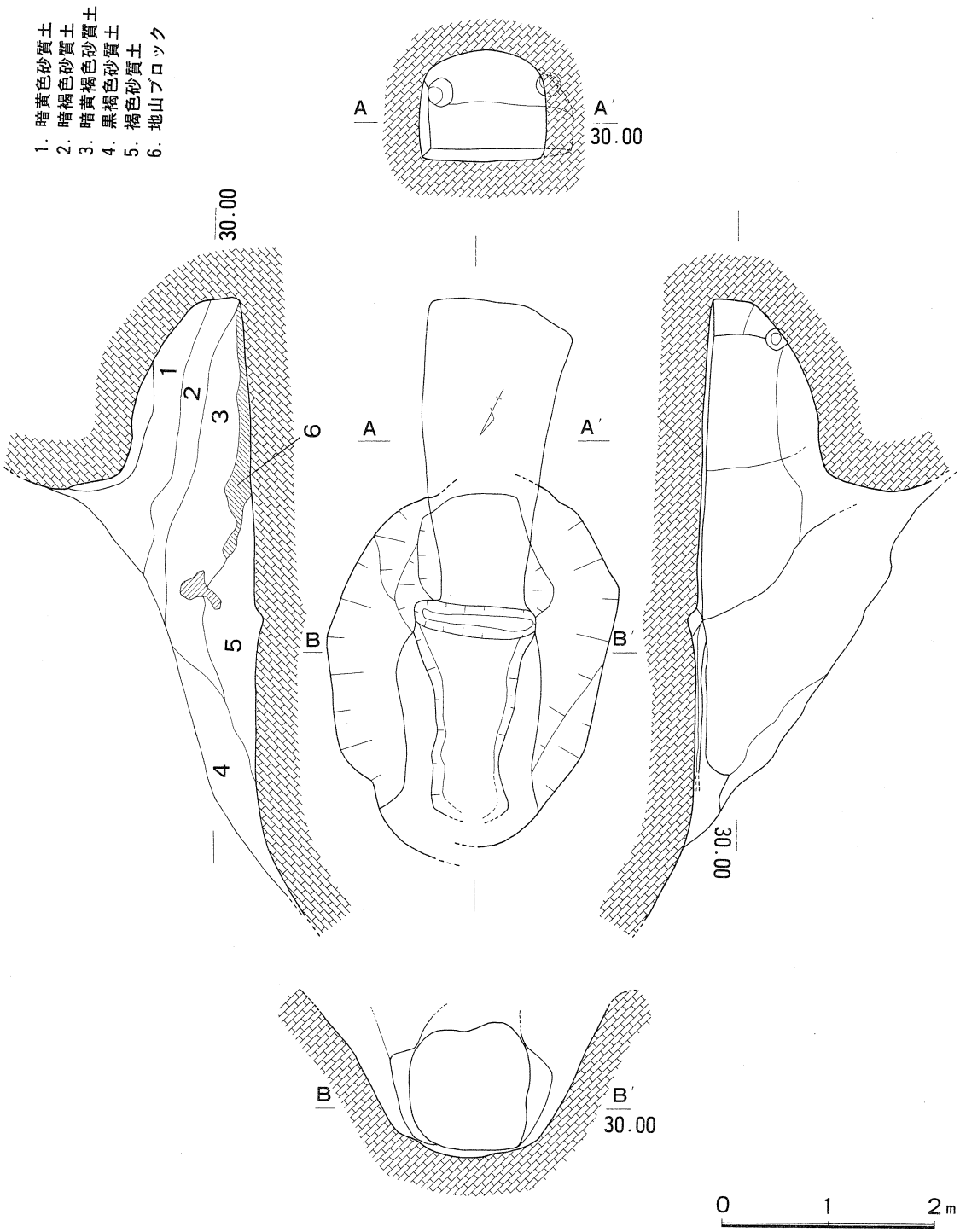
N－5号横穴の東、標高27.0～29.0mの丘陵斜面に穿たれているやや小型の横穴である。北北東



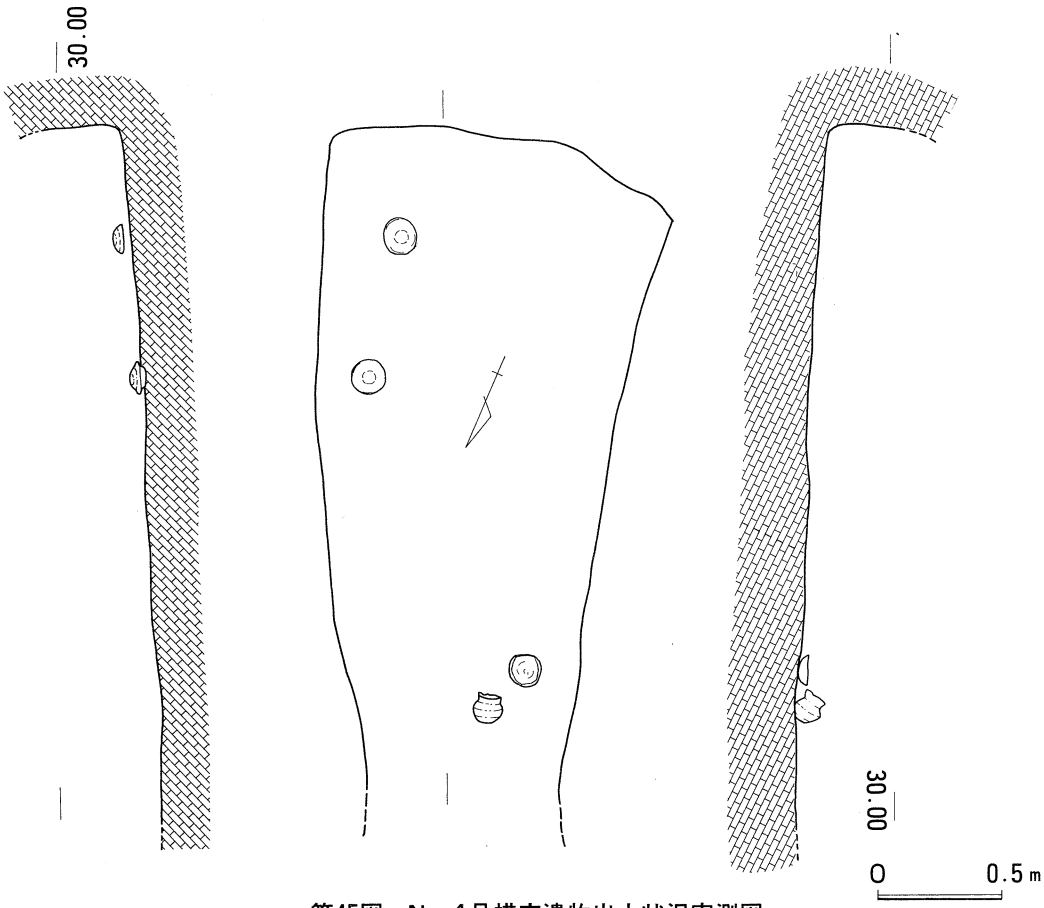
第42図　N－3号横穴出土鉄製品実測図



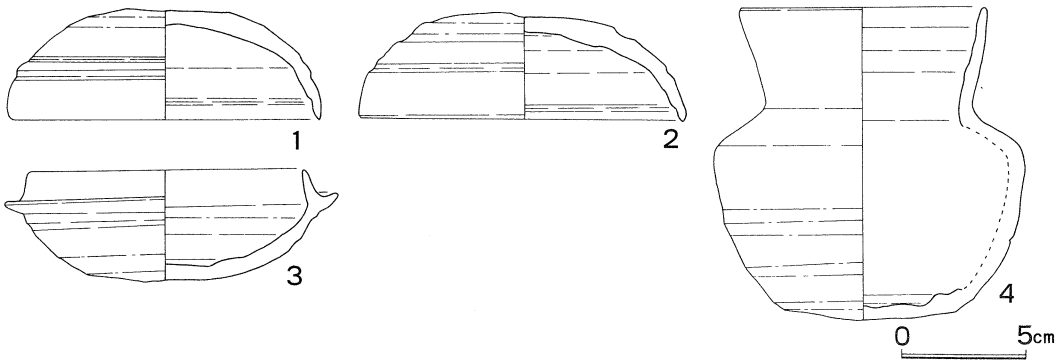
第43図　N−1、2号横穴須恵器床実測図



第44図　N－4号横穴実測図



第45図　N－4号横穴遺物出土状況実測図

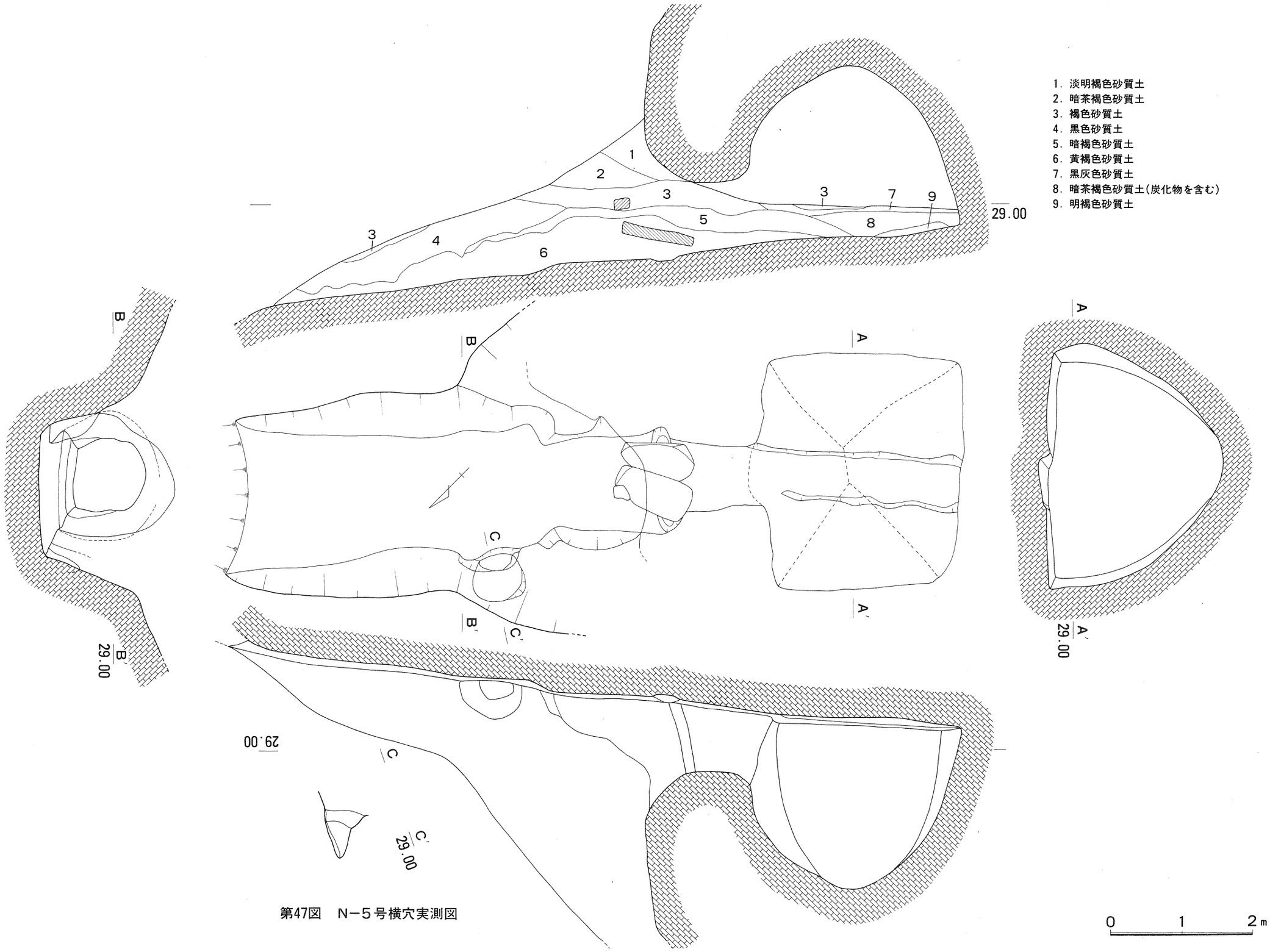


第46図　N－4号横穴出土遺物実測図

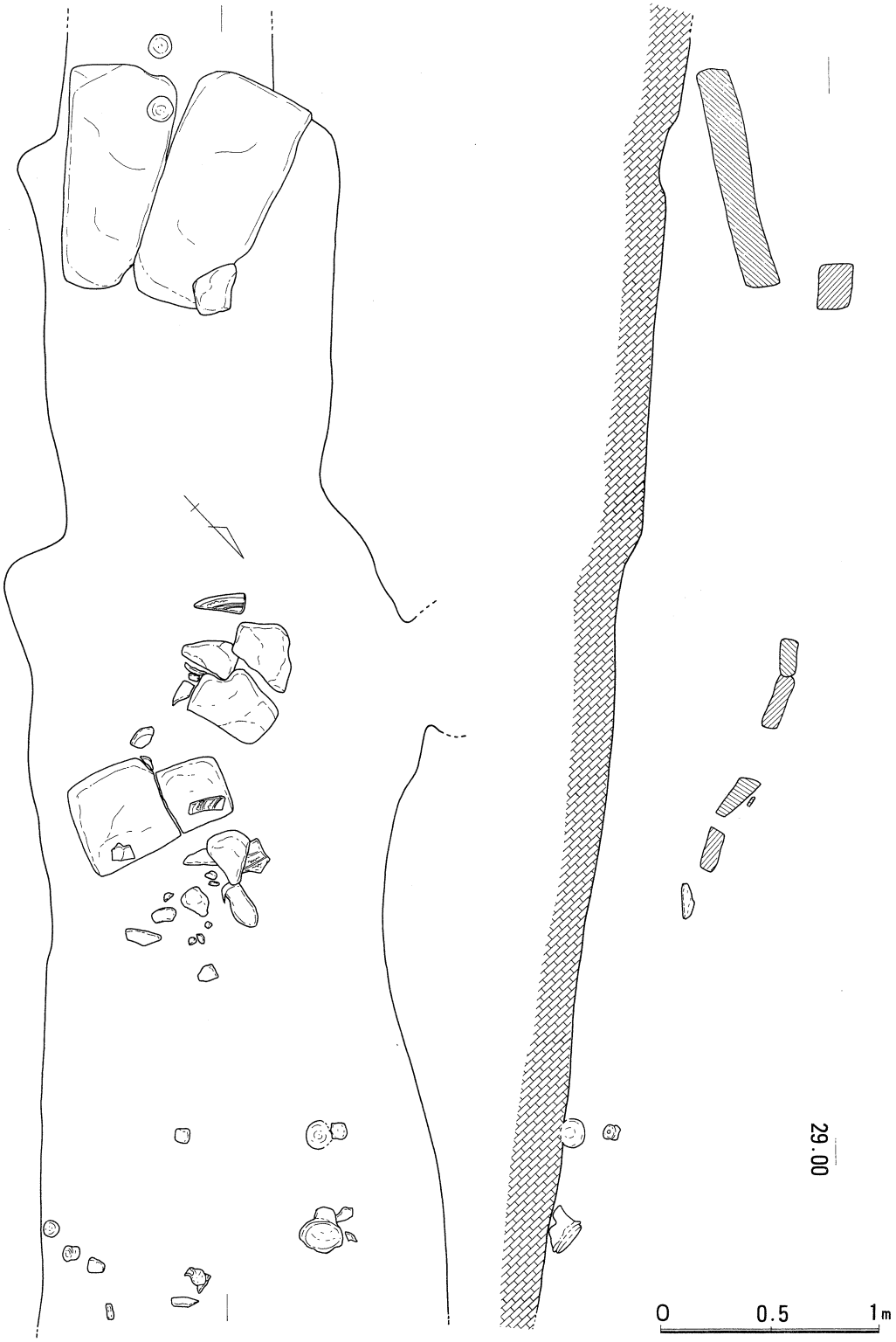
方向に開口しており、玄室床面の標高は27.6mである。

〔前庭・羨道・玄門〕（第53図）

前庭部は長さ1.8m、幅0.7～1.2mを測り、床面は平坦に作られている。羨道は長さ0.7mと短く、幅0.86～1.0mで玄門に向かって開いている。天井部は崩壊していて不明である。玄門は羨道部より



第47図　N－5号横穴実測図

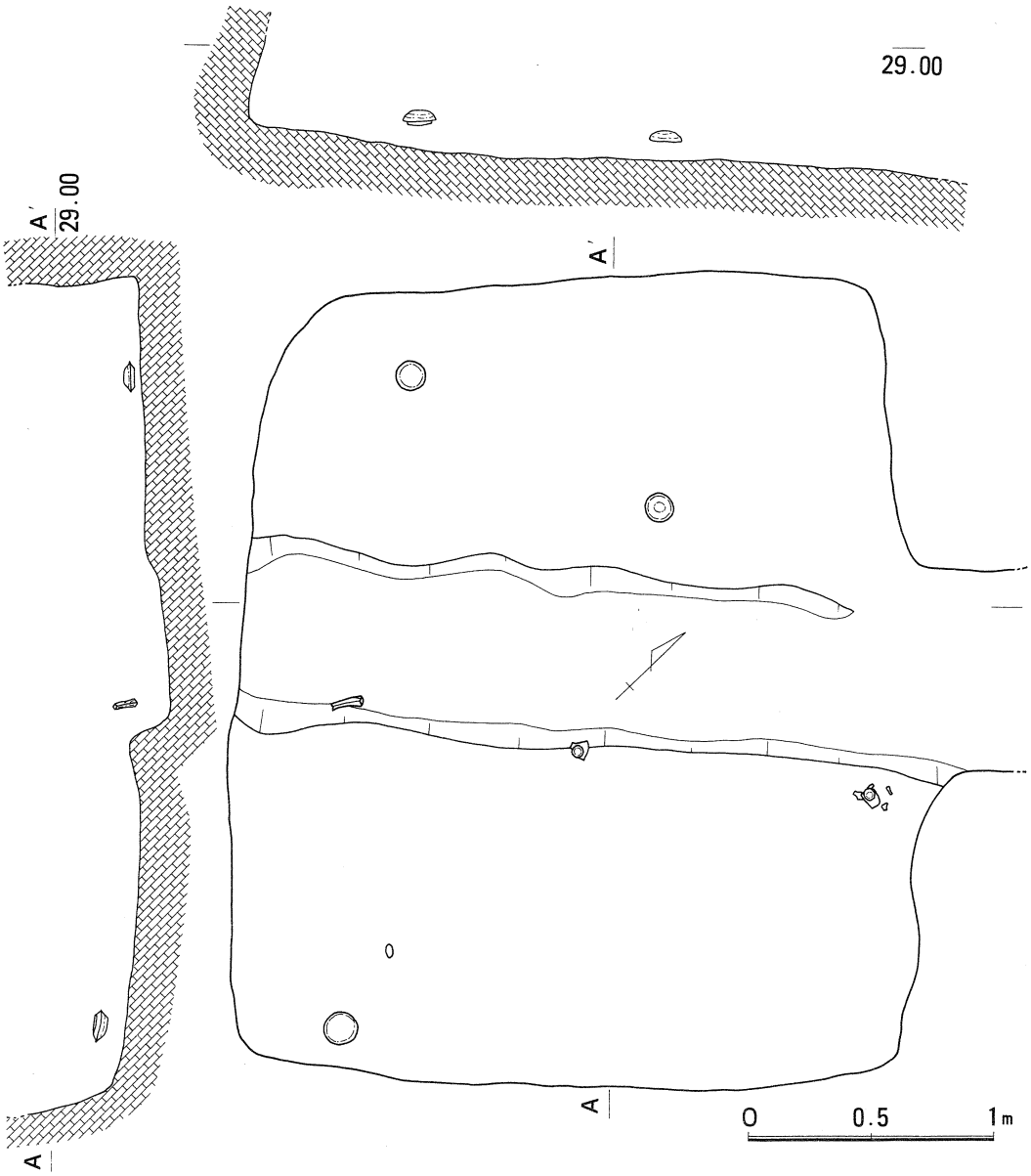


第48図　N－5号横穴前庭部遺物出土状況実測図

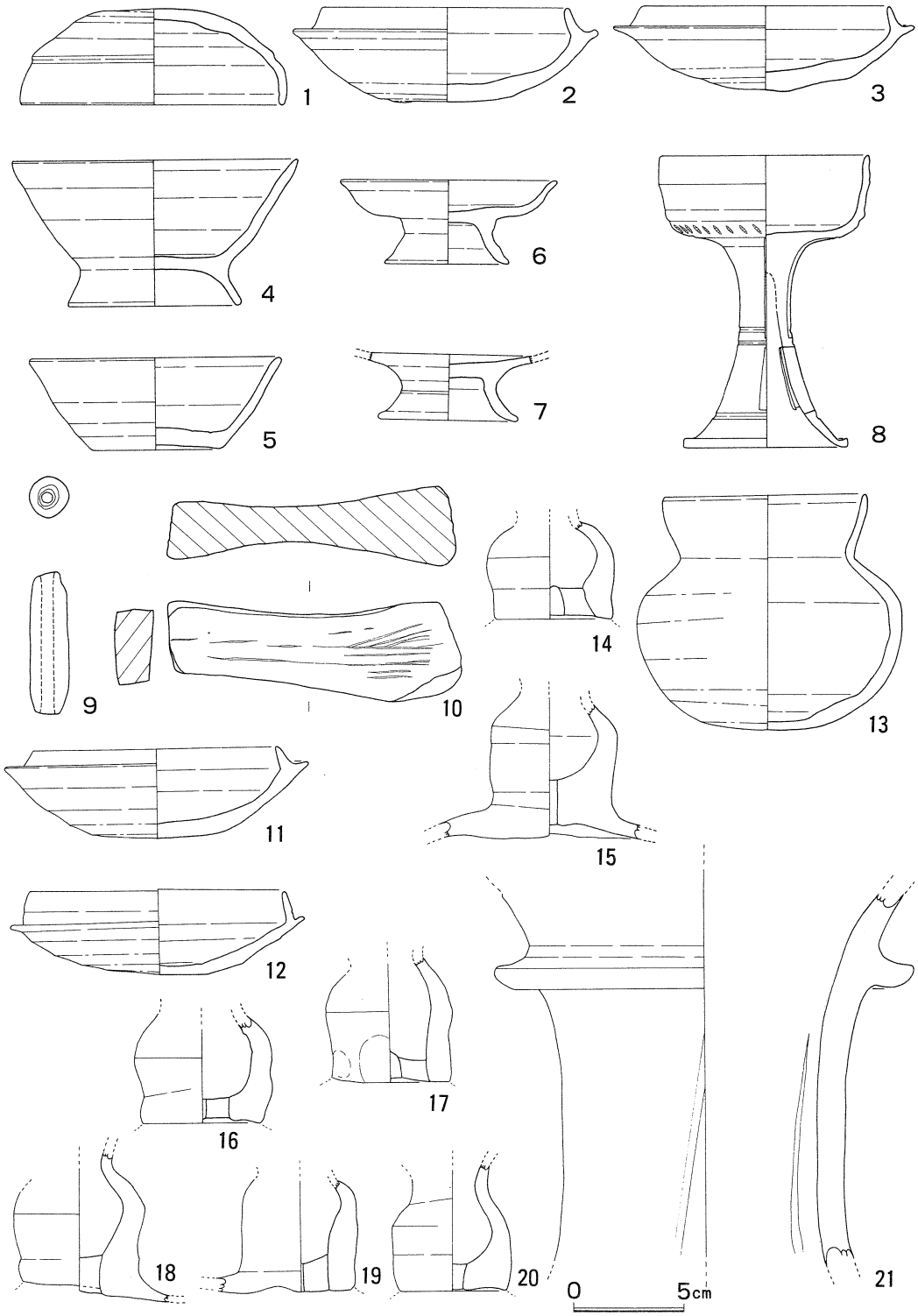
若干高く作られており、長さ0.7m、幅0.6〜0.9mで玄室に向かって若干開く。天井部は高さ0.66mを測る。羨道と玄門の境に長さ1.0m、幅30cm、深さ8cmの閉塞用の溝が設けられており、羨道側は緩やかな傾斜をつけているが、玄門側はやや傾斜して立ち上がっている。閉塞石等の痕跡は何も認められなかった。

遺物は前庭床面から須恵器蓋坏類が出土している。

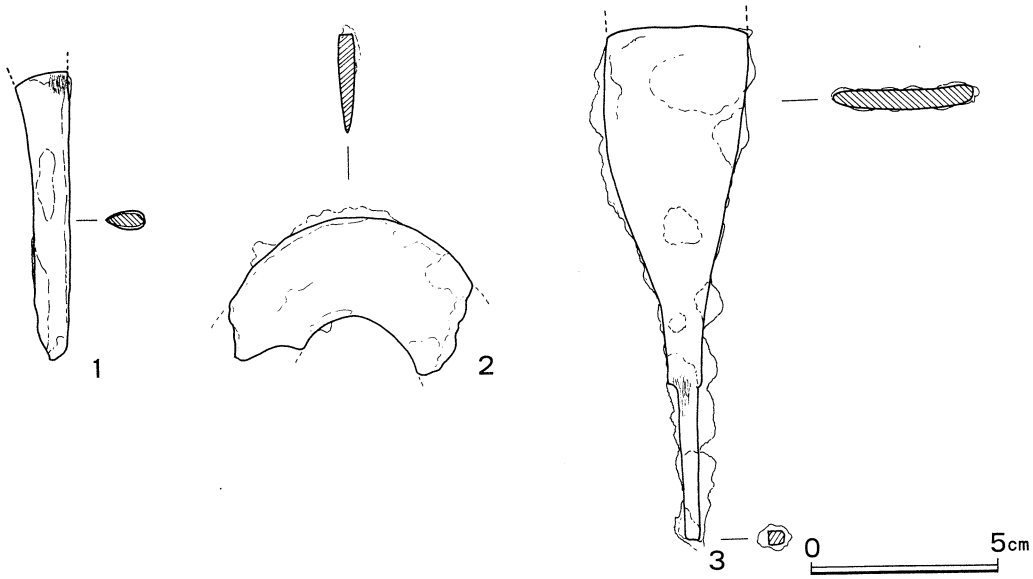
〔玄室〕



第49図　N−5号横穴玄室内遺物出土状況実測図



第50図　N－5号横穴出土遺物実測図



第51図　N－5号横穴出土鉄製品実測図

玄室は平面プランが卵形に近い長楕円形で、長さ0.74m、最大幅1.44mを測る。天井部はドーム形で高さ0.64m、四壁を画する明確な稜線は認められない。玄門と玄室との境の床面に細長い溝状の痕跡が認められたが性格は不明である。

〔出土遺物〕（第54図）

須恵器蓋坏がある。蓋（1）は肩部に沈線を施して、稜を作りだすもので、口縁部内面には浅い沈線が廻る。天井部外面にヘラ削りを施している。坏身（2）は内傾して立ち上がる口縁部で、端部は丸い。底部外面にヘラ削りを施す。

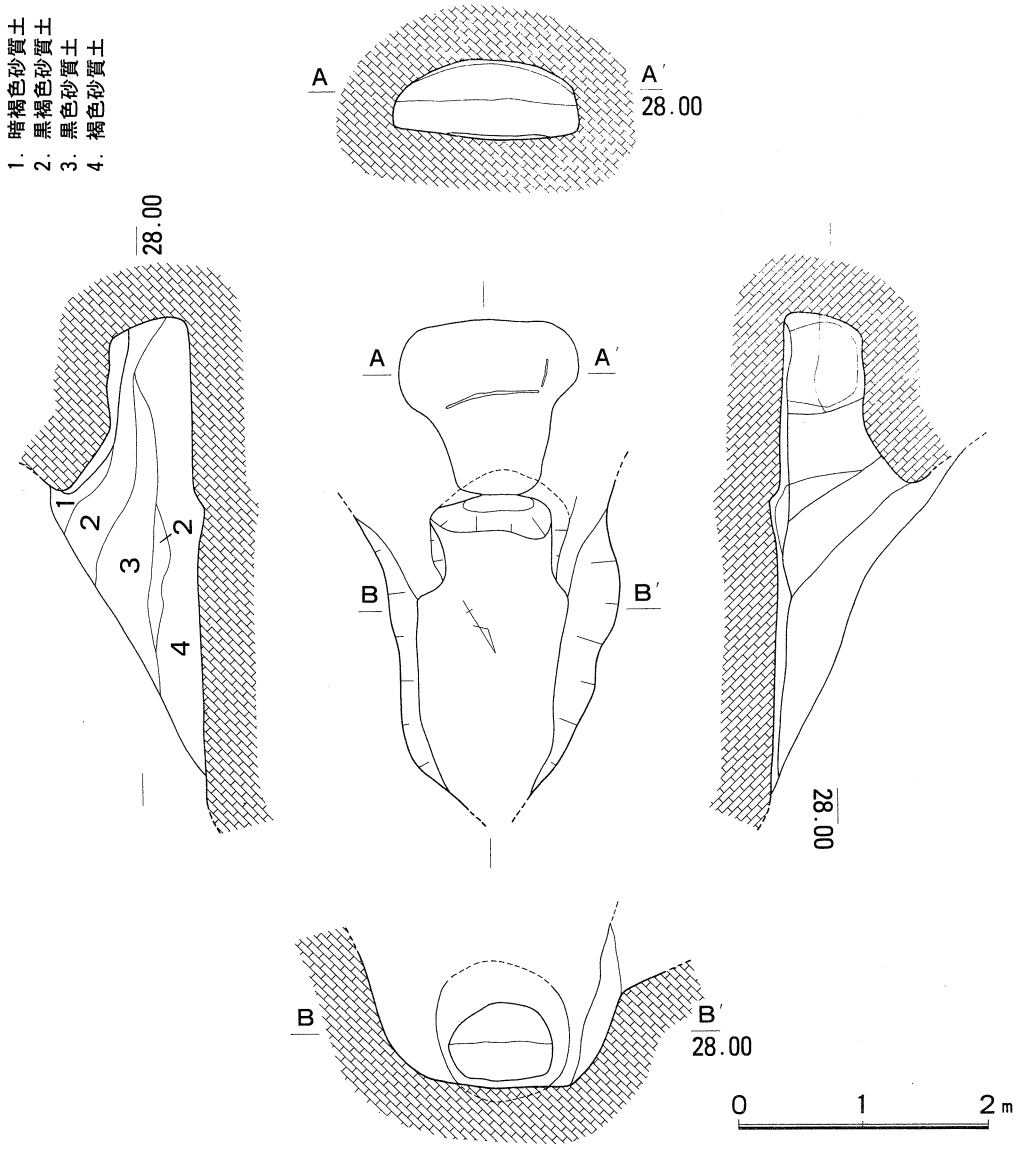
N－7号横穴墓（第55図）

N－6号横穴の東、丘陵が張り出す斜面を回り込んだ、標高31～33mの急斜面に穿たれている。北北東方向に開口しており、玄室床面の標高は31.9mである。

〔前庭・羨道・玄門〕（第56図）

前庭部は、先端部が削平されているため正確な数値は不明であるが、残存長で3.8m、幅1.6mを測る。床面は羨道に向かって徐々に高くなっている。東壁側で、後世（追葬時か）に運び出されたと考えられる石棺の蓋石を検出した。この蓋石は壁面に横倒して立てかけるような状態であったが、北側は破損していた。

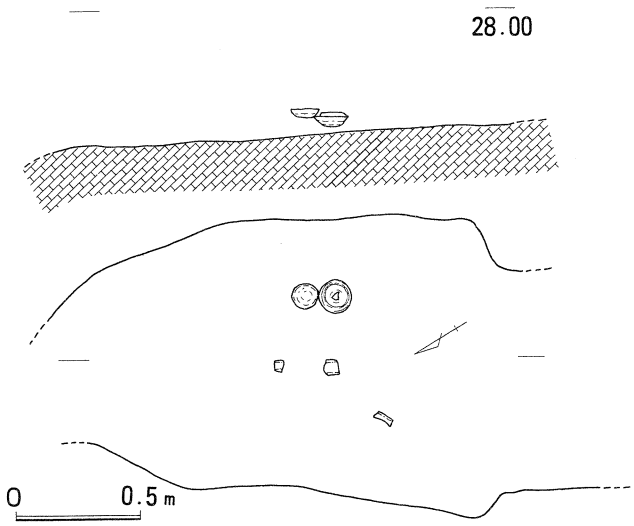
蓋石の平面形は、長さ1.78m、幅0.7m、最大厚20cmの隅丸長方形を呈している。外面は屋根形を呈しており、頂部に長さ1.2mの稜線をもち、そこから四隅に向けて稜が延びる。上面は稜で区画さ



第52図　N－6号横穴実測図

れた面が屋根のように四方に傾斜している。側面には幅約10cm程度の平坦面が廻る。内面には、身側石の上面に安置させるための、幅12～13cmの平坦面が廻り、その内側は若干掘りくぼめられていた。外面には幅約4cm程度のノミ痕が認められた。材質は通称「荒島石」と呼ばれる角礫凝灰岩である。

羨道部は前庭奥壁東端部に穿たれ、前庭より6cm高く作られている。長さ1.94m、幅1.38～1.7mを測り、玄門に向かって開いている。天井部は羨門側は崩壊しているが、玄門側で高さ1.35mを測



第53図　N－6号横穴遺物出土状況実測図

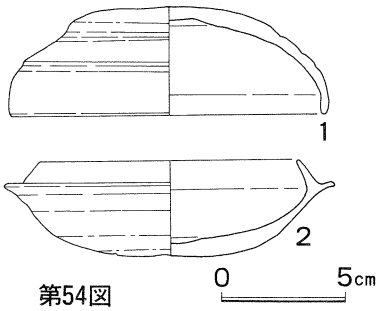
る。玄門は羨道より一段と狭く長さ0.88m、幅0.96～1.1m、天井部の高さ1.1mを測る。羨道部より一段高く作られており、ここに閉塞石を置いたとみられる長さ1.5m、幅25cmの浅い溝が認められた。閉塞石は床面から20～30cm浮いた位置で、羨道に向かって倒された状態で検出した。長さ74cm、幅38cm、厚さ14cmの板石1枚であったが、玄門中軸線の左側に位置していることから、本来は2枚で構成されていたものと思われる。しかし、もう1枚は確認できず、盗掘時に抜き取られたものと考えられる。

遺物は前庭部から須恵器蓋坏類が出土している。

〔玄室〕（第57図）

玄室は玄門よりさらに1段高くなっており、奥行き2.5m、幅は袖側で3.2m、奥壁側で3.0m、高さ2.2mを測る。平面プランは長方形で、平入りの擬似四注式を呈している。内部には石棺は認められなかったが、石棺の残骸と思われる20cm角の石を3片ほど検出した。床面には中軸線に沿って幅45cm、深さ5cmの溝が延びているが、奥壁から西壁にかけて廻っている溝に切られている。さらに東壁沿いにも溝が廻っており、これは奥壁の手前で西へ折れ、約70cm延びてから北へ折れている。この溝の50cm北側に凹みがある。この周辺に前述の石が散在していることから、本来この位置に石棺が安置されていたものと考えられる。壁面にはノミ痕等は認められなかった。

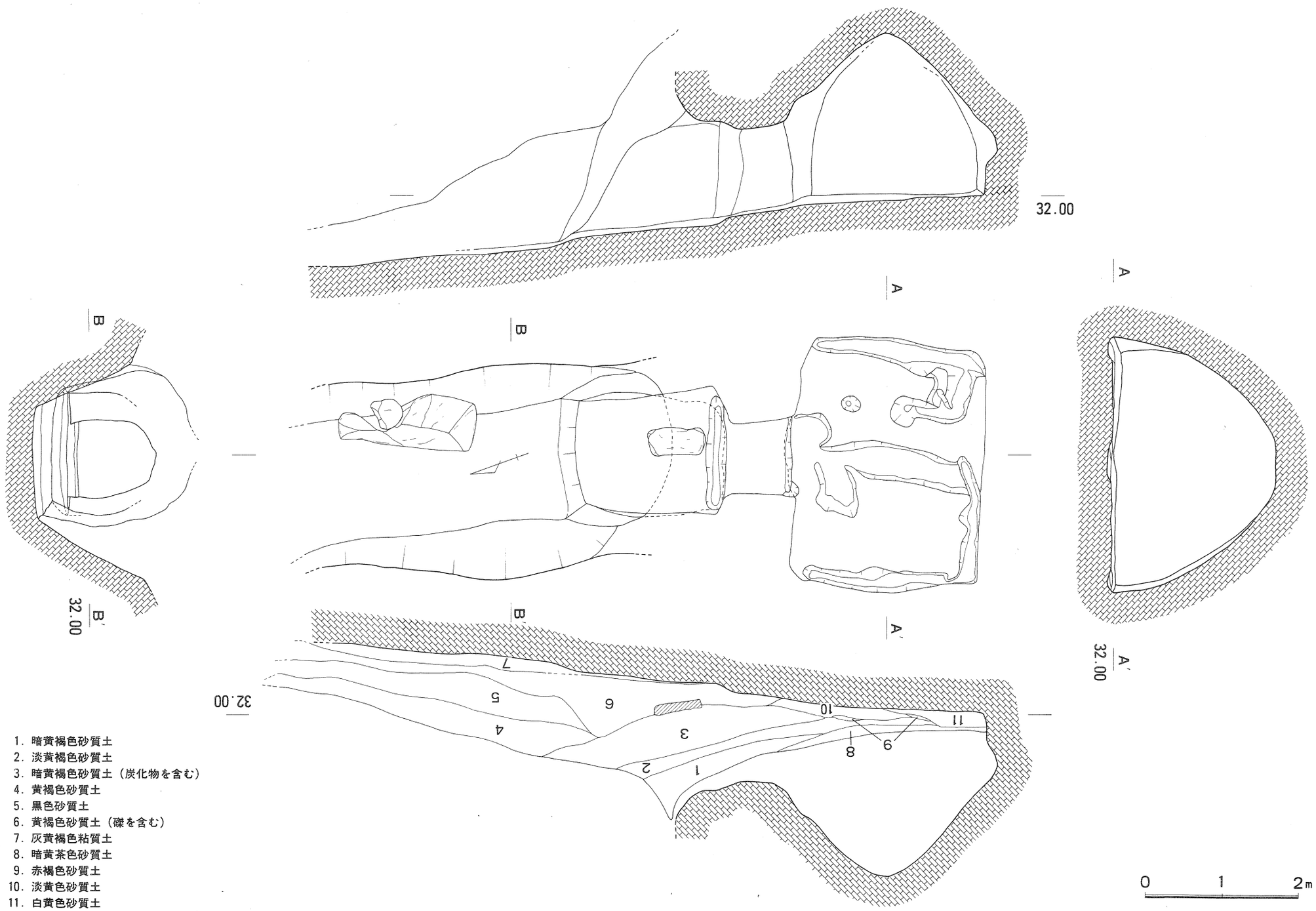
遺物は須恵器と鉄器が出土している。



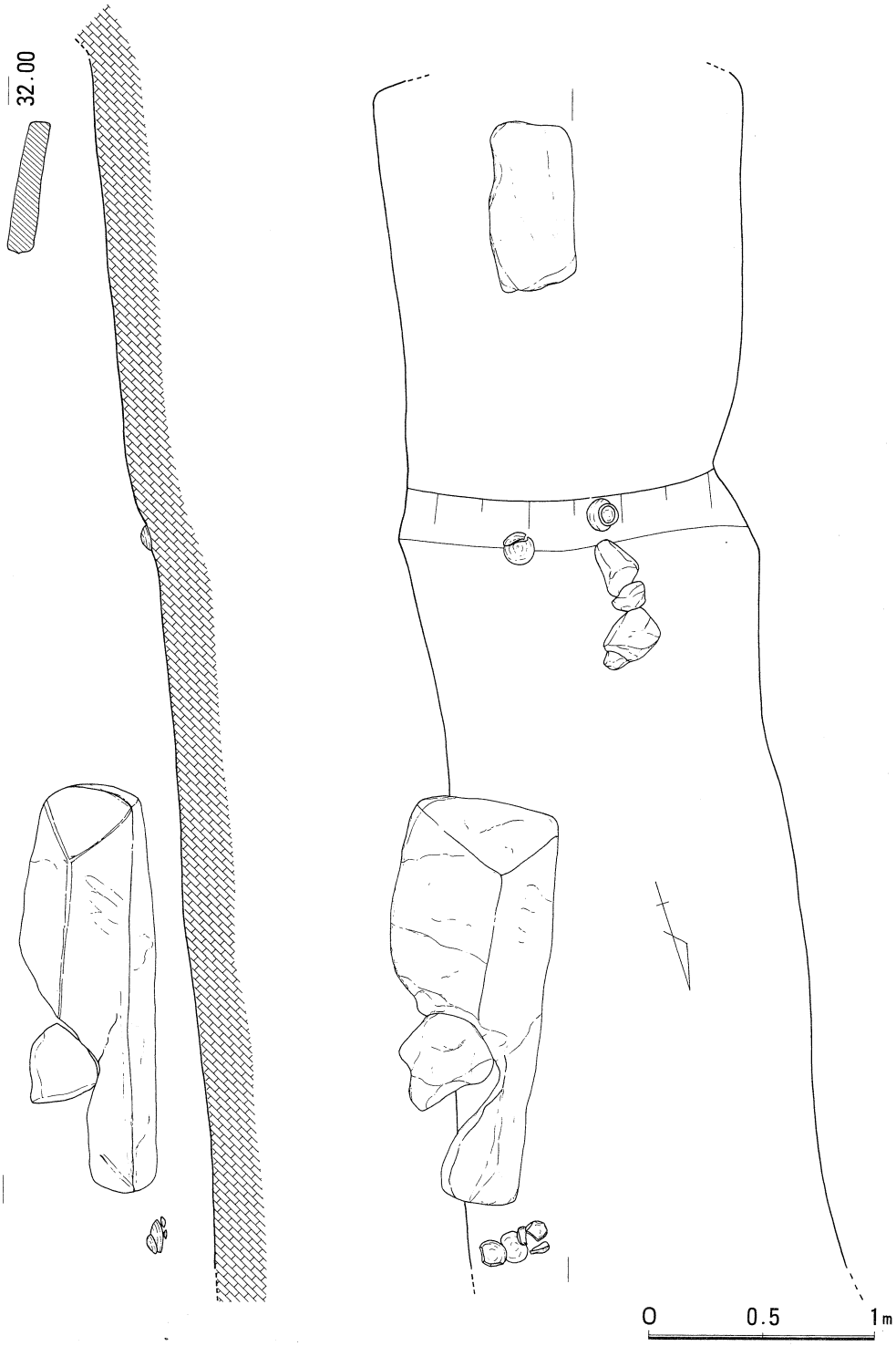
第54図
N－6号横穴出土遺物実測図

〔土層堆積状況〕

前庭から玄室にかけての土層を観察すると、不自然な堆積状況が確認できる。第4・5・6層は自然の流れ込み土であるが、これを切って第1・2・3層が玄室内に流れ込んでいる。このことは、明らかに第4層上面から玄室に向かって穴が掘られ、閉塞石を倒して玄室に侵入したことが判る。閉塞石が倒れた状態で第1～3層が堆積していることから、追葬



第55図　N－7号横穴実測図



第56図　N－7号横穴前庭部遺物出土状況実測図

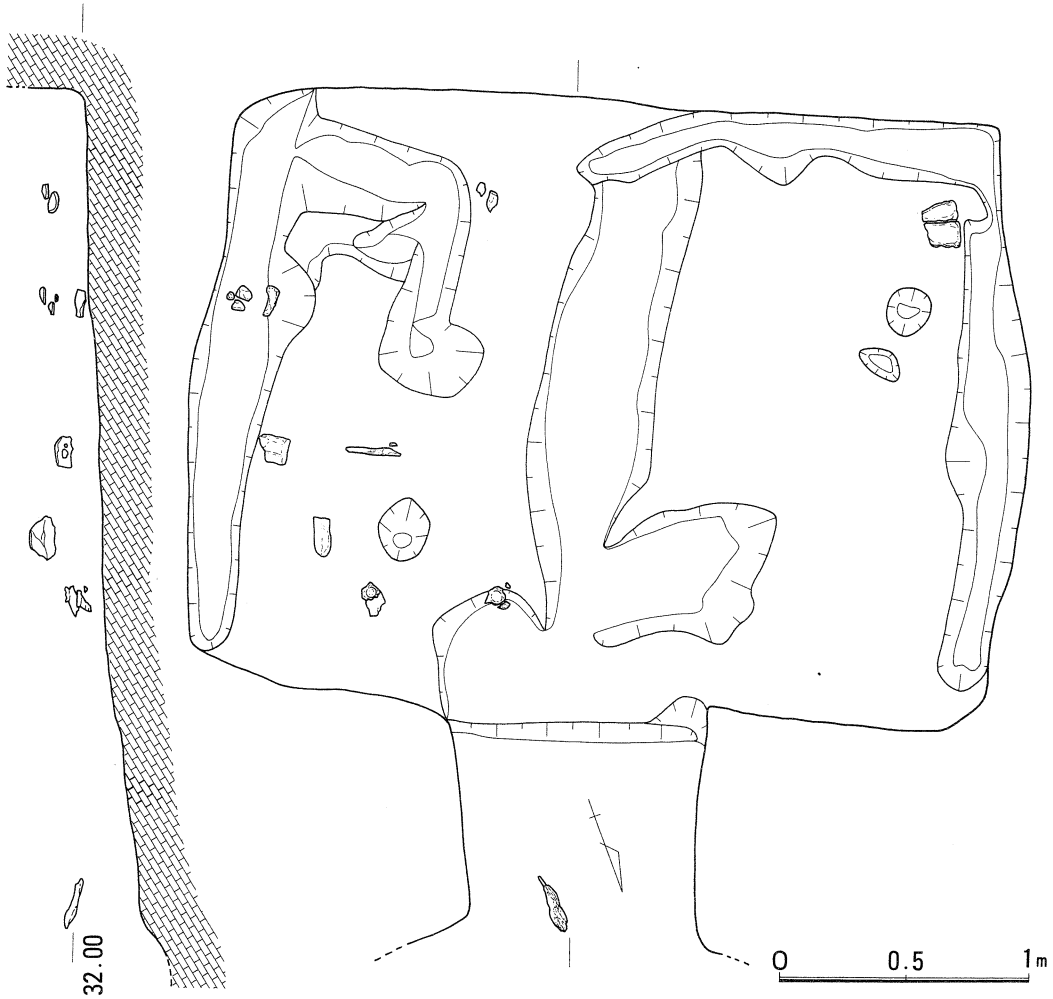
によるものでなく、後世に盗掘されたものと思われる。また、閉塞石が、カットされた第6層上面にあることから、この面で一度追葬が行われたことが考えられ、この時に何らかの原因で石棺が壊され、蓋石は前庭部に運び出されたものと思われる。

〔玄室出土遺物〕（第58・59図）

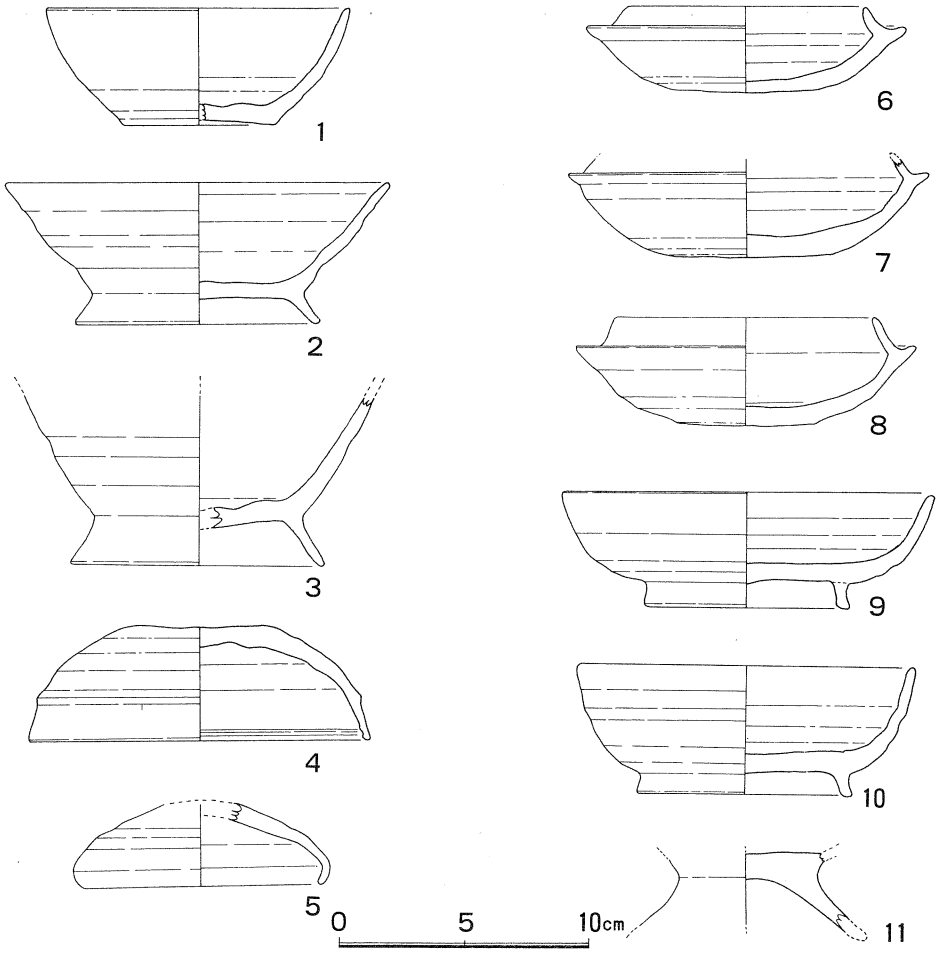
土師質土器3、刀子2、弓飾金具1が出土している。

土師質土器　坏身3点（58図1～3）があり、1は高台の付かないもの、2・3は高台の付くものである。体部は内湾気味にのびて、口縁部に至る。いずれも焼成が不良のため調整が判りにくいが、かすかに糸切り痕を残す。

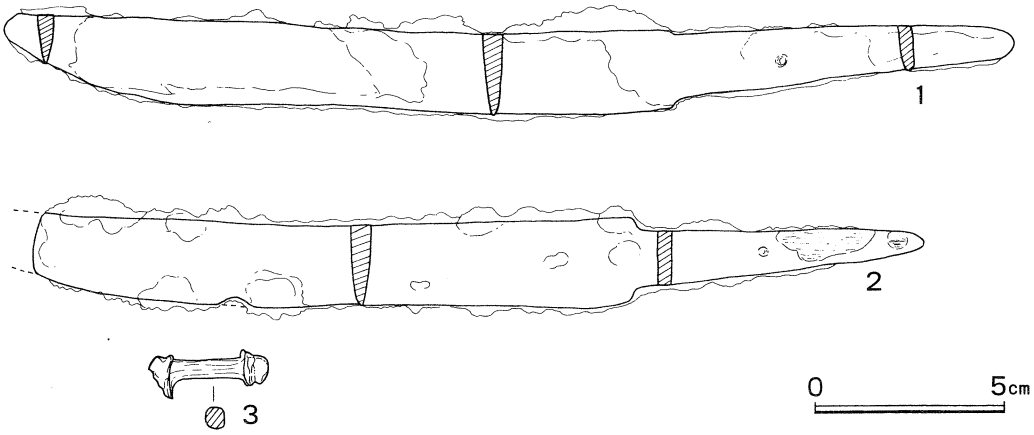
鉄器　刀子は2点（59図1・2）あり、やや大きめのもので、2は切先を欠いている。両方とも両関で、茎部に目釘穴がある。2の茎部には木質が残っている。弓飾金具（3）は1本しか出土し



第57図　N－7号横穴玄室内遺物出土状況実測図



第58図　N－7号横穴出土遺物実測図

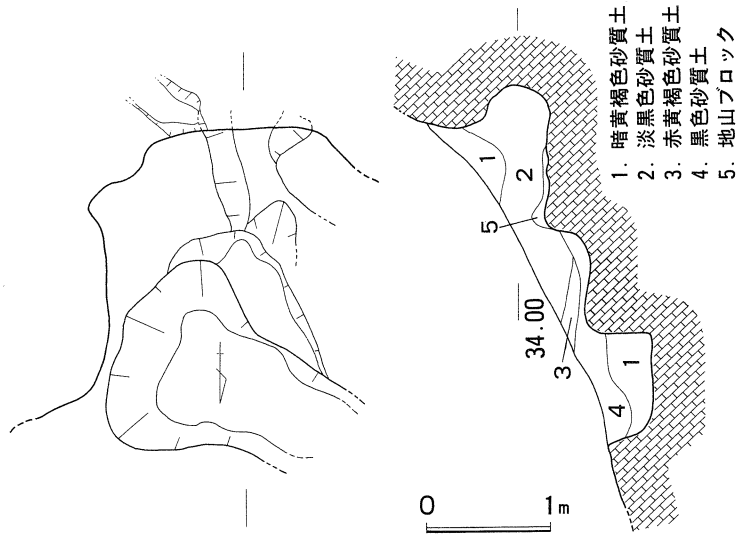


第59図　N－7号横穴出土鉄製品実測図

ていない。断面は方形を呈し、両端はマッチ棒の頭状に球形をなして突出している。

〔前庭出土遺物〕(第58図)

須恵器蓋2、坏身5、土師器低脚坏1がある。蓋は2点(4・5)あり、5は小形で、口縁部は内傾する。4は肩部に稜、口縁部内面に沈線を設け、天井部外面にヘラ削りを施す。坏身は6～8が内傾する立ち上がりを有するもので、9・10は高台が付き、内湾気味にのびる口縁部をもつ。土師器低脚坏は坏部と脚端部を欠いている。



第60図　N－8号横穴実測図

N－8号横穴墓(第60図)

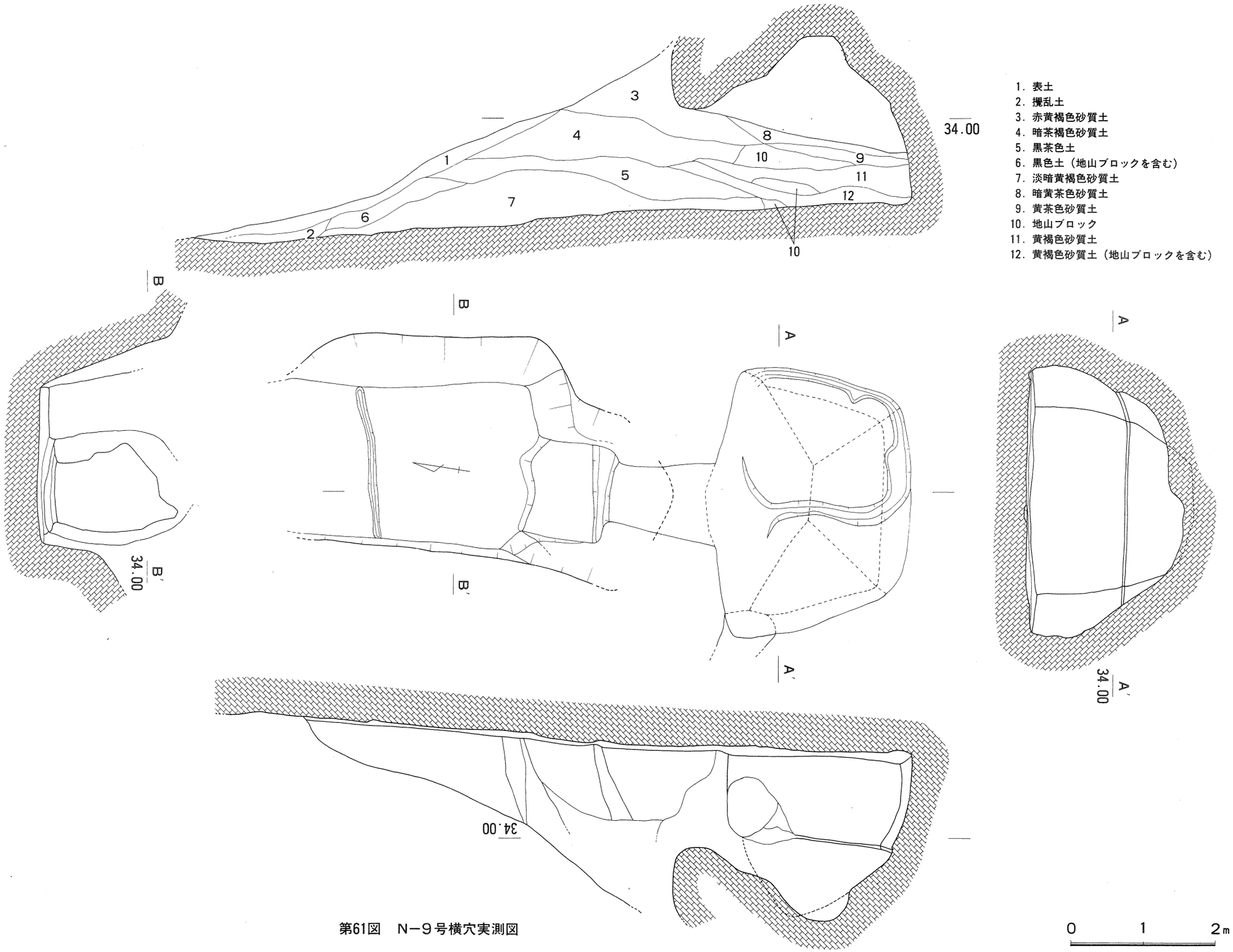
N－7号横穴墓の東隣、標高33～35mに位置している。平面形は不整形であり、縦断面では段状を呈しているが、上段部分は、本来は小横穴であった可能性も考えられる。この上段の東壁側からN－9号横穴に向かって、トンネル状の穴が穿たれていた。入口はやや広く掘られていたが、途中で径約30cmと狭くなり、N－9号横穴玄室側でまた広くなっている。この穴が人為的なものかどうかは判断できなかった。

N－9号横穴墓(第61図)

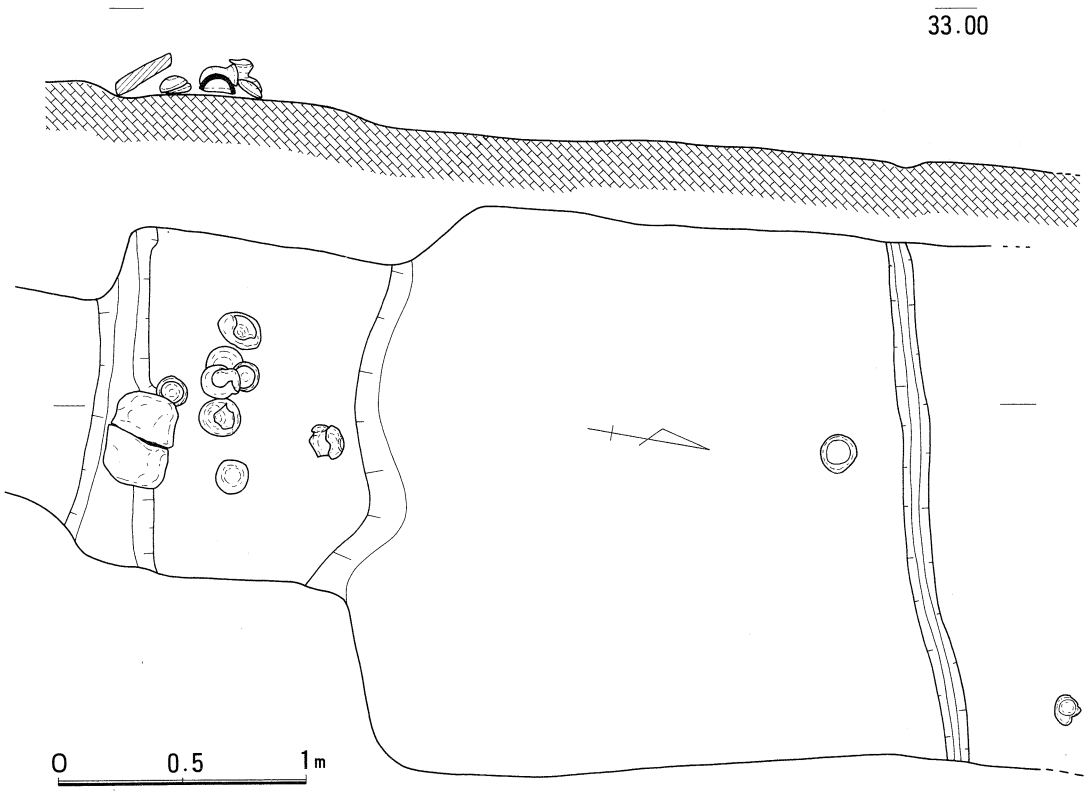
N－8号横穴の東隣、標高33～35mの斜面に穿たれている。北方向に開口しており、玄室床面の標高は32.8mである。

〔前庭・羨道・玄門〕(第62図)

前庭部北端は削平されていた。残存長3.4m、幅2.1～2.3mを測り、東壁は高い壁となっている。床面は羨道に向かって徐々に高くなり、先端部寄りで幅10cm、深さ5cmの東西に延びる溝を検出した。羨道部は前庭奥壁の西寄りに穿たれており、前庭より約6～9cm高く作られている。長さ1.1m、幅1.4mを測り、天井部は崩壊のため不明である。玄門は羨道より狭く、長さ1.4m、幅0.8～1.15mを測り、玄室に向かって開いている。天井部はほとんど崩壊していたが、玄室側で高さ1.4mを測る。



第61図　N－9号横穴実測図



第62図　N－9号横穴羨道及び前庭部遺物出土状況実測図

羨道との境に長さ1.4m、幅20～35cm、深さ4cmの閉塞用の溝があり、ここで長さ36cm、幅24cm、厚さ6cmの破損した閉塞石の一部を確認した。

遺物は玄門入口、閉塞石の手前に須恵器が置かれていた。

〔玄室〕（第63図）

玄室は奥行き2.7m、幅は両袖側で3.7m、奥壁側で2.8m、高さ2.34mを測り、平面プランは不整形の六角形を呈している。前壁以外の三壁と天井との間に3cm前後、軒先部分に掘り込みを設けて、壁と天井部を区別している。便化家形の範疇で平入りであるが、縦断面は三角形に近く、擬似四注式の形態に整形してから家形を意識して軒先部分を掘り込んだものと思われる。床面には幅20～35cm、深さ5～7cmの浅い溝が中軸線から東壁側へ廻っている。西壁袖部分にはN－8号からのトンネル状の穴が貫通している。壁面にノミ痕等は認められなかった。

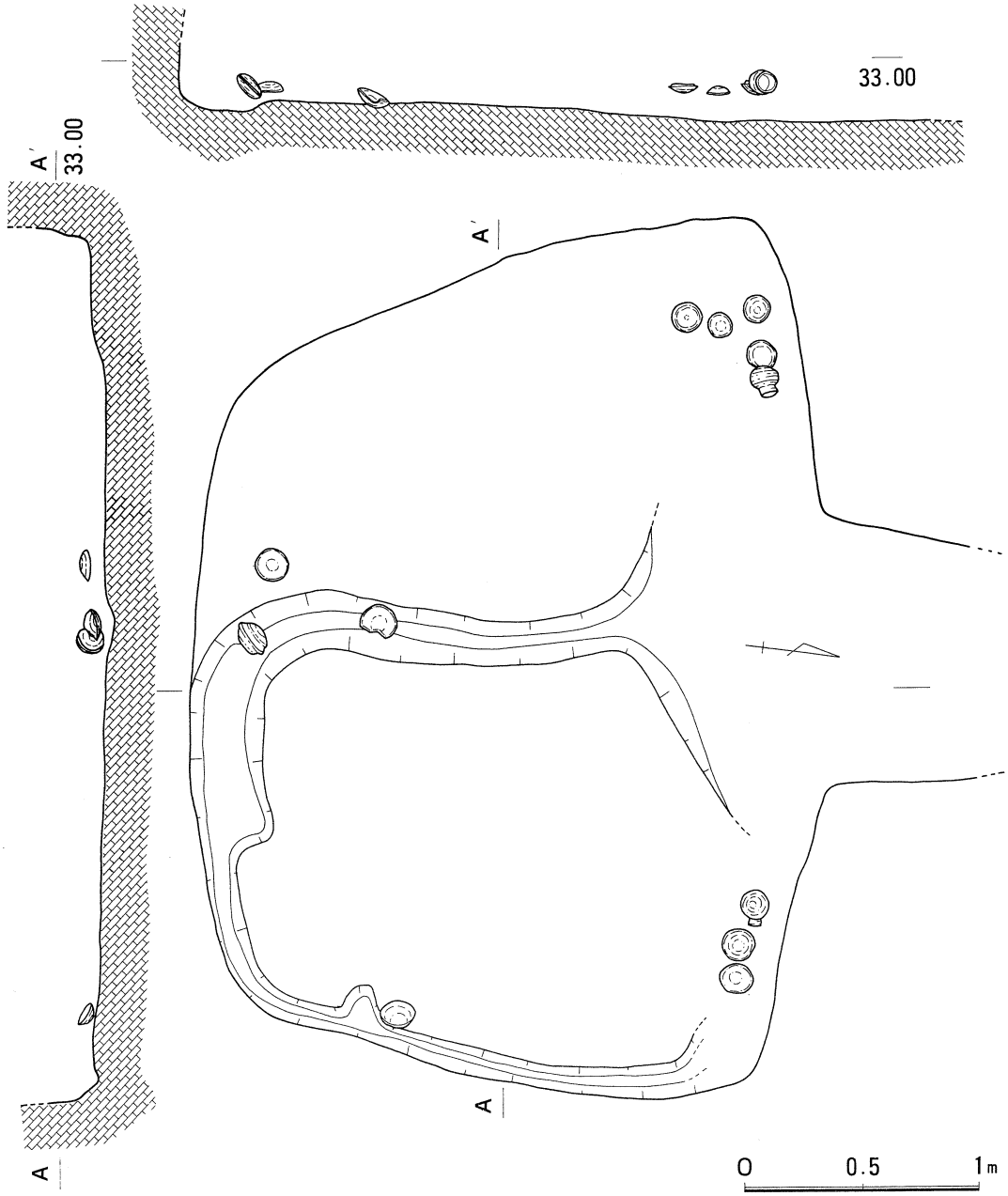
遺物は両袖隅と奥壁側から須恵器と金属製品が出土している。

〔玄室出土遺物〕（第64・66図）

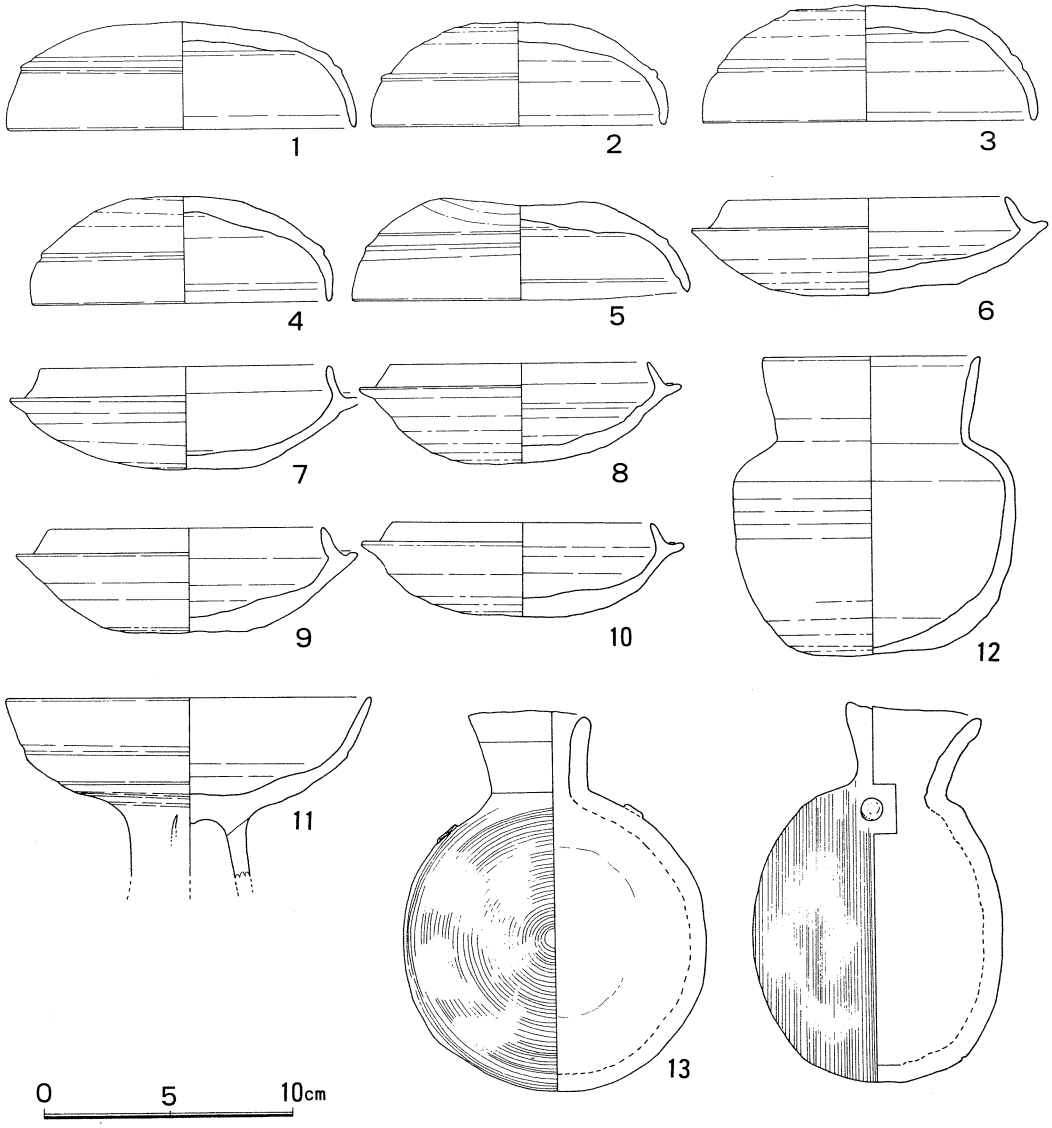
須恵器蓋坏類10、高坏1、直口壺1、提瓶1、耳環2、鏃2、釘1が出土している。

須恵器　蓋（64図1～5）はいずれも同じ作りで、肩部に沈線を廻して稜を作り出し、口縁部内

面にも沈線が廻る。天井部外面にヘラ削りを施す。坏身（6～10）は内傾気味に立ち上がる口縁部をもち、底部外面にヘラ削りを施す。高坏（11）は内湾気味の口縁部で、底部との境に稜をもつ。脚部は下半を欠くが、透孔が入る。直口壺（12）は肩部が張って底部に至り、外面にヘラ削りを施す。提瓶（13）は口縁部が外傾してのびるもので、端部は丸くおさめる。体部前面が丸く膨らみ、



第63図　N－9号横穴玄室内遺物出土状況実測図



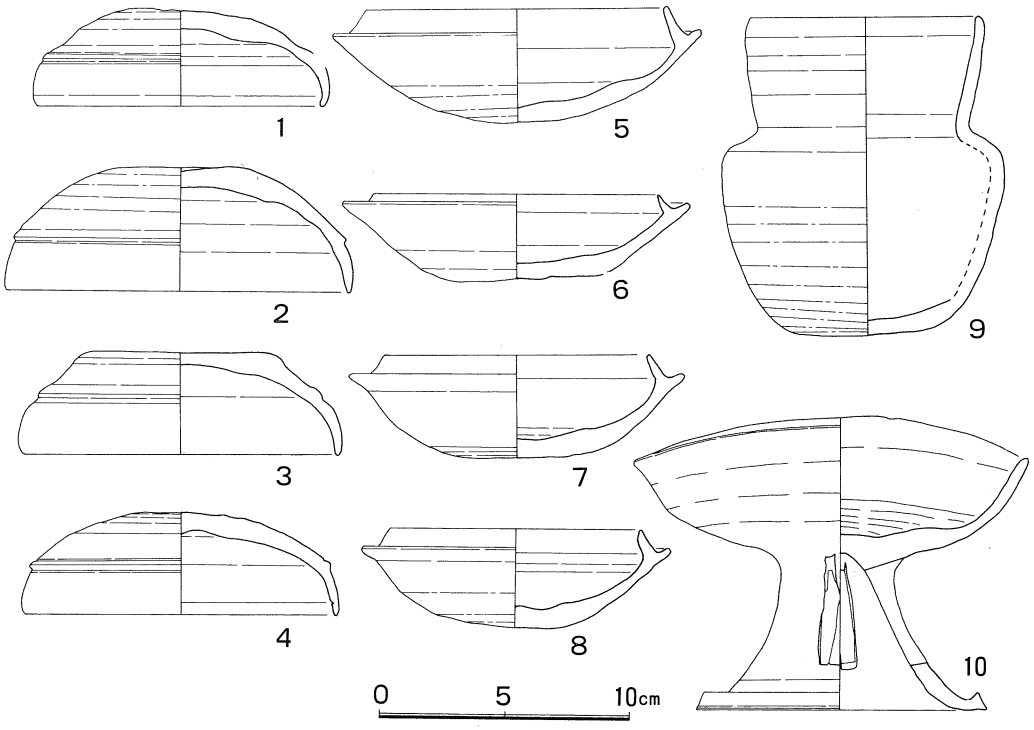
第64図　N－9号横穴玄室内出土遺物実測図

背面は偏平となり、前面から側面にかけて、カキ目を施す。肩部に円形の突起が付く。

金属製品　耳環（66図1・2）はいずれも長径2.9cm、短径2.7cmを測り、銅部分のみ残っている。鏃は2点（3・5）あり、3は茎部のみで棘篦被が付き、木質が残っている。5は鏃身先端を欠くが、細根長頸式である。釘（4）は断面長方形で、頭部は「L」字状に折れ曲がっている。

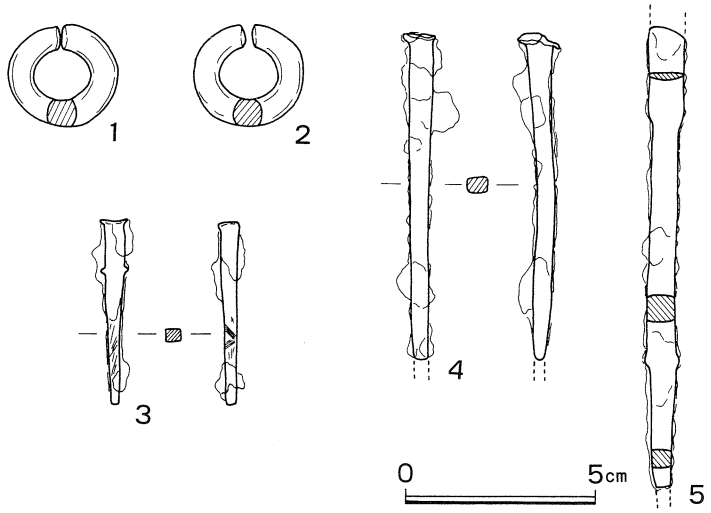
〔羨道出土遺物〕（第65図）

須恵器蓋坏類8、直口壺1、高坏1が出土している。蓋（1～4）は肩部に稜をもち、天井部外面にヘラ削りを施す。1・4は口縁部内面に浅い沈線が廻る。坏身（5～8）は内傾気味に立ち上がる口縁部をもつが、6は他のと比べて短い口縁部で、底部外面にナデを施す。他のものはヘラ削



第65図　N－9号横穴羨道部出土遺物実測図

りを施している。直口壺（9）は内湾気味にのびる口縁部で、端部は丸い。肩部が張って底部に至る。胴部下半にヘラ削りを施す。高坏（10）は脚部に二方向透孔を施すものである。



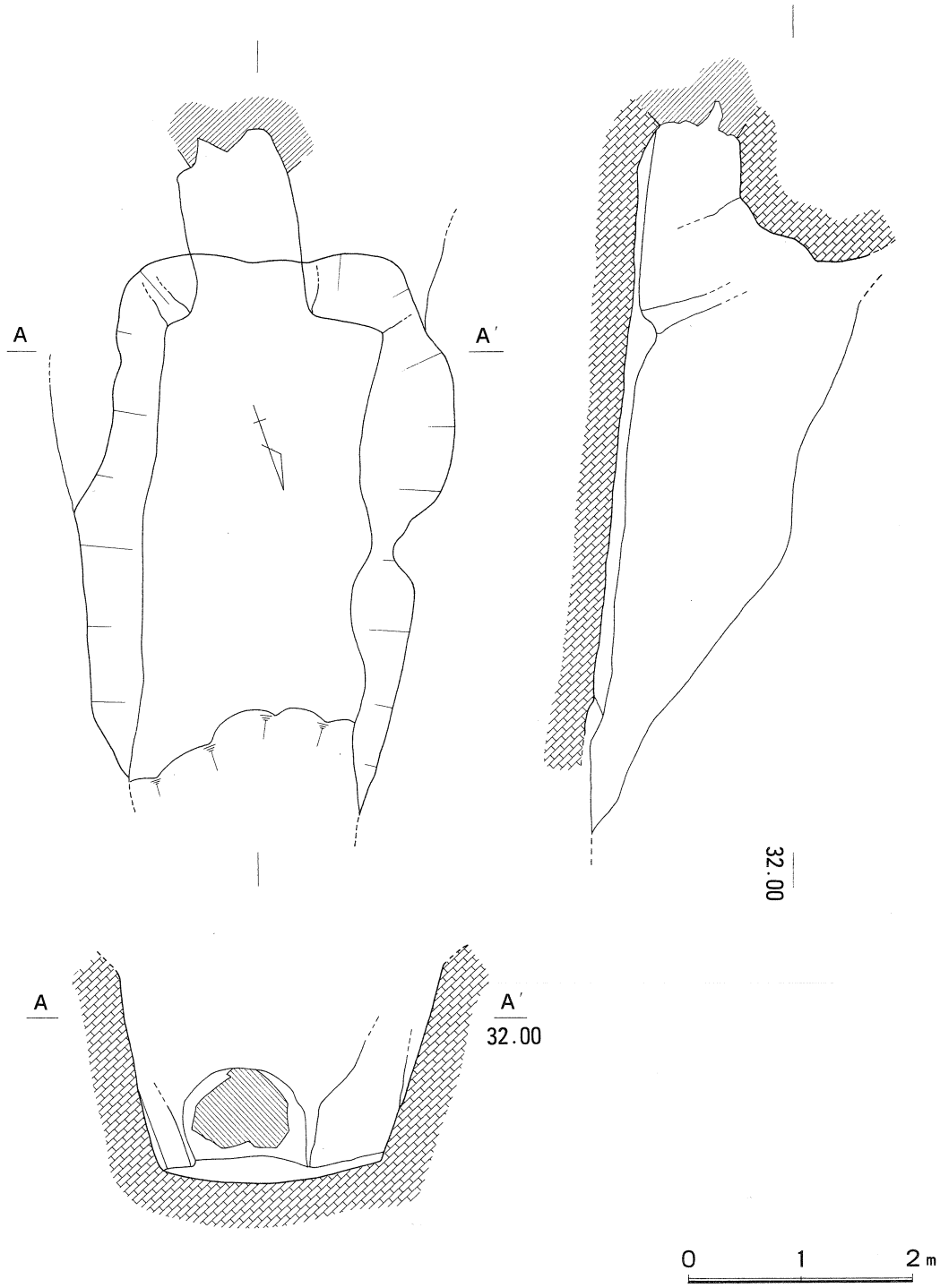
第66図　N－9号横穴出土金属製品実測図

N－10号横穴墓（第67図）

N－9号横穴墓の東、標高30～33mに穿たれている、未完成の横穴墓である。北北東方向に開口している。

〔前庭・羨道〕

前庭部は残存長で4.0m、幅2.0mを測り、横断面は「コ」の字状を呈している。床面は羨道に向



第67図　N－10号横穴実測図

かって徐々に高くなっている。羨道は前庭奥壁東寄りに穿たれており、長さ1.2m、幅1.0mを測るが、玄門入口で硬い流紋岩の岩盤に当たり途中放棄している。

遺物は何も出土していない。

Ｓ－１号横穴墓（第68図）

調査区西端の標高27～29mの丘陵南側斜面に穿たれている。南方向に開口しており、玄室床面の標高は27.5mである。

〔前庭・羨道・玄門〕

前庭部は先端部が削られているが、残存長で3.2m、幅1.6～1.8mを測り、羨道側に開いている。横断面は「コ」の字状を呈し、床面は羨道に向かって徐々に高くなっている。羨道部は比較的長いもので、長さ2.0m、幅0.9～1.1mを測る。玄門は長さ0.7m、幅0.7m、高さ1.05mを測り、羨道との境に長さ1.5m、幅60cm、深さ５cmの閉塞用の溝を設けている。閉塞石は長さ0.9m、幅0.7m、厚さ10cmの板状の一枚石を使用しているが、羨道側に倒れた状態で検出した。

〔玄室〕（第69図）

玄室は奥行き1.85m、幅は2.0～1.8mで奥壁側が狭く、高さ1.9mを測る。平面プランは正方形に近い方形で、平入りの擬似四注式を呈している。床面は奥壁に向かって徐々に高くなっており、玄室入口付近から中軸線に沿って、幅24cm、深さ３～６cmの浅い排水溝が延びている。四壁を画する稜線は緩やかにカーブを描きながら天井部に至るものであった。風化の為か壁面にノミ痕等は認められなかった。

遺物は玄門から玄室入口付近で須恵器蓋坏類と直刀が出土している。

〔出土遺物〕（第70・71図）

須恵器蓋７、坏身４、直刀１が出土している。

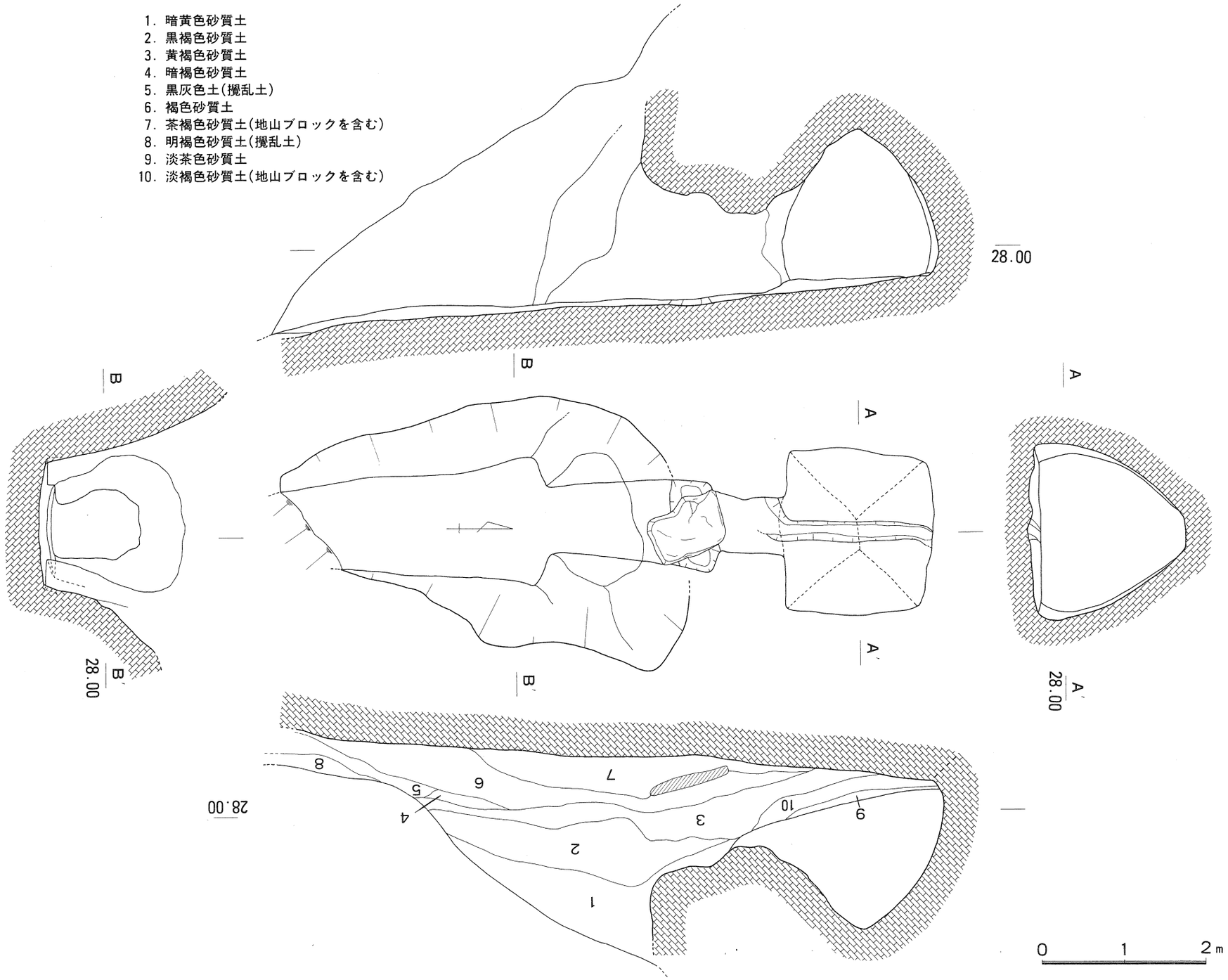
須恵器　蓋（70図１～７）はいずれも似た作りをしており、肩部に稜をもち、口縁部内面に沈線を廻す。天井部外面にヘラ削りを施している。坏身（８～11）は内傾気味に立ち上がる口縁部をもち、底部外面にヘラ削りを施す。

直刀（71図）　刀身の長さ29.5cmを測り、全体に銹化が著しい。茎には目釘が残る。

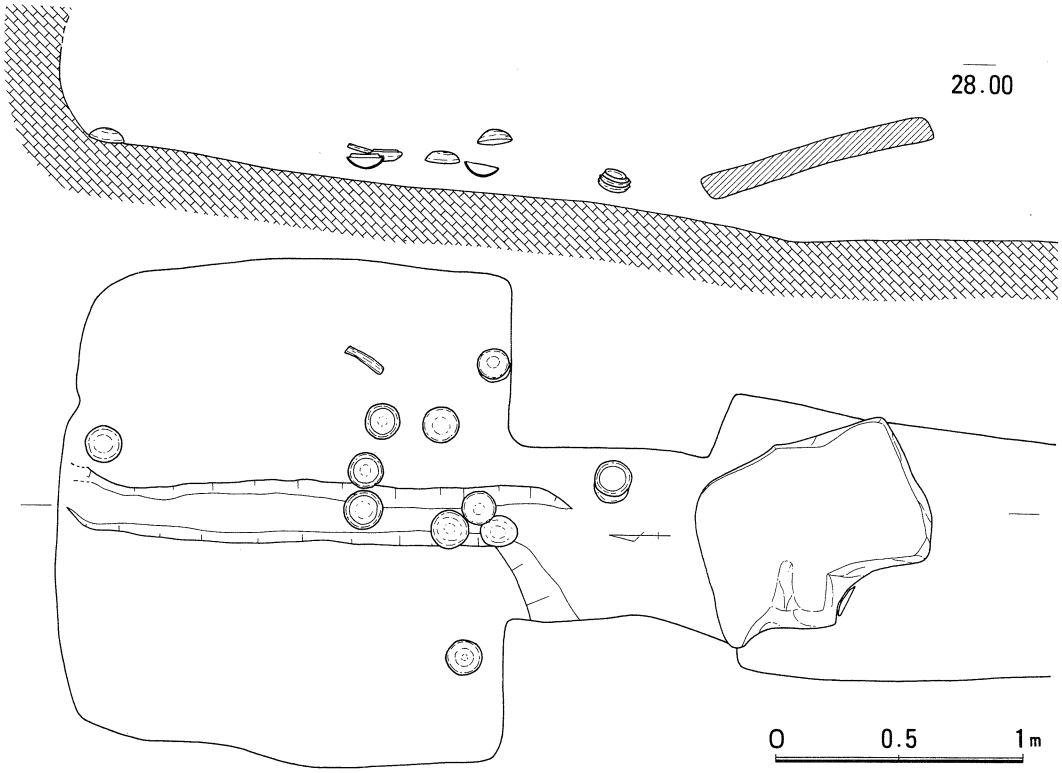
Ｓ－２号横穴墓（第72図）

Ｓ－１号横穴の約40m東、標高31～33mの丘陵斜面に穿たれている。南方向に開口しており、玄室床面の標高は31.3mである。

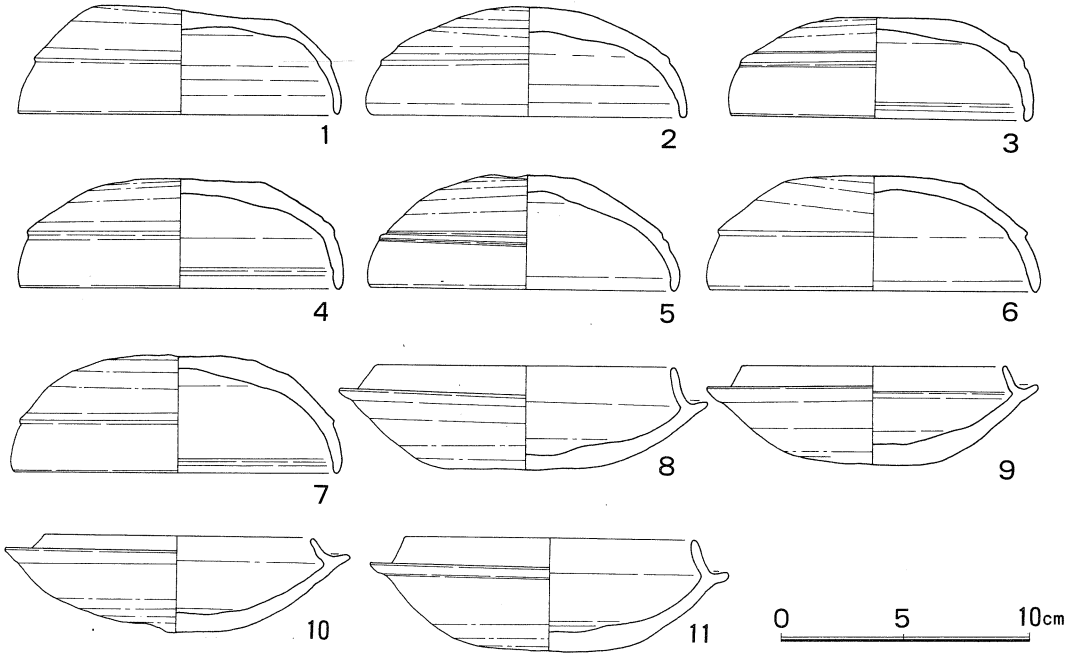
〔前庭・羨道・玄門〕（第74図）



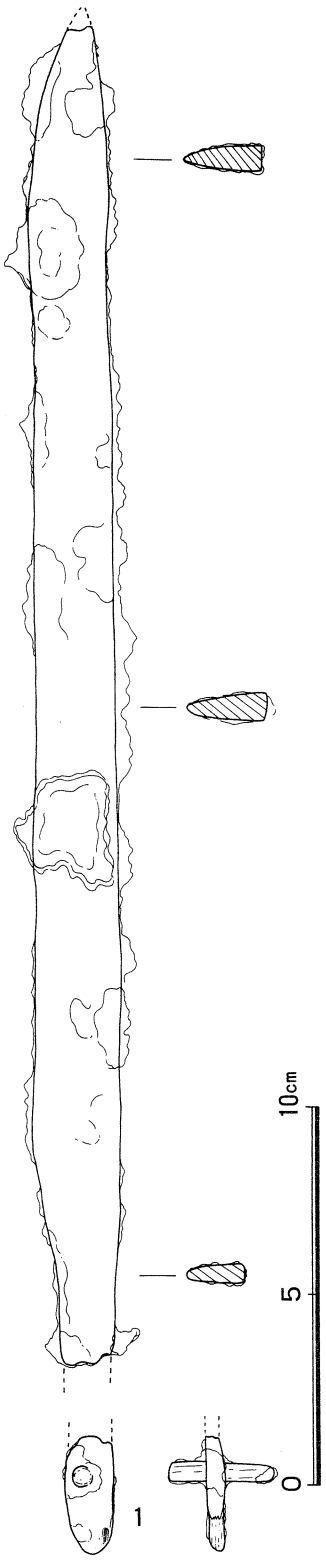
第68図　S－1号横穴実測図



第69図　S－1号横穴遺物出土状況実測図



第70図　S－1号横穴玄室内出土遺物実測図



第71図
S－1号横穴出土鉄器実測図

前庭部は長さ4.6m、幅2.9～3.1mで奥壁側が若干狭くなり、壁高は3.9mと、かなり高く作られている。床面は羨道に向かって徐々に高くなっている。羨道部は長さ2.1m、幅2.0～2.2mを測るが、天井部は崩壊のため不明であった。玄門入口に閉塞石がはめ込まれていたが、床面から40cmのところで破損して、玄門側に少しずれ込んでいた。復原すると長さ1.3m、幅0.9m、厚さ16cmを測る板状の一枚石であり、表面には幅3cmのノミ痕が認められた。玄門は長さ1.9m、幅0.9～1.3m、高さ1.5mを測り、横断面は隅丸長方形を呈している。

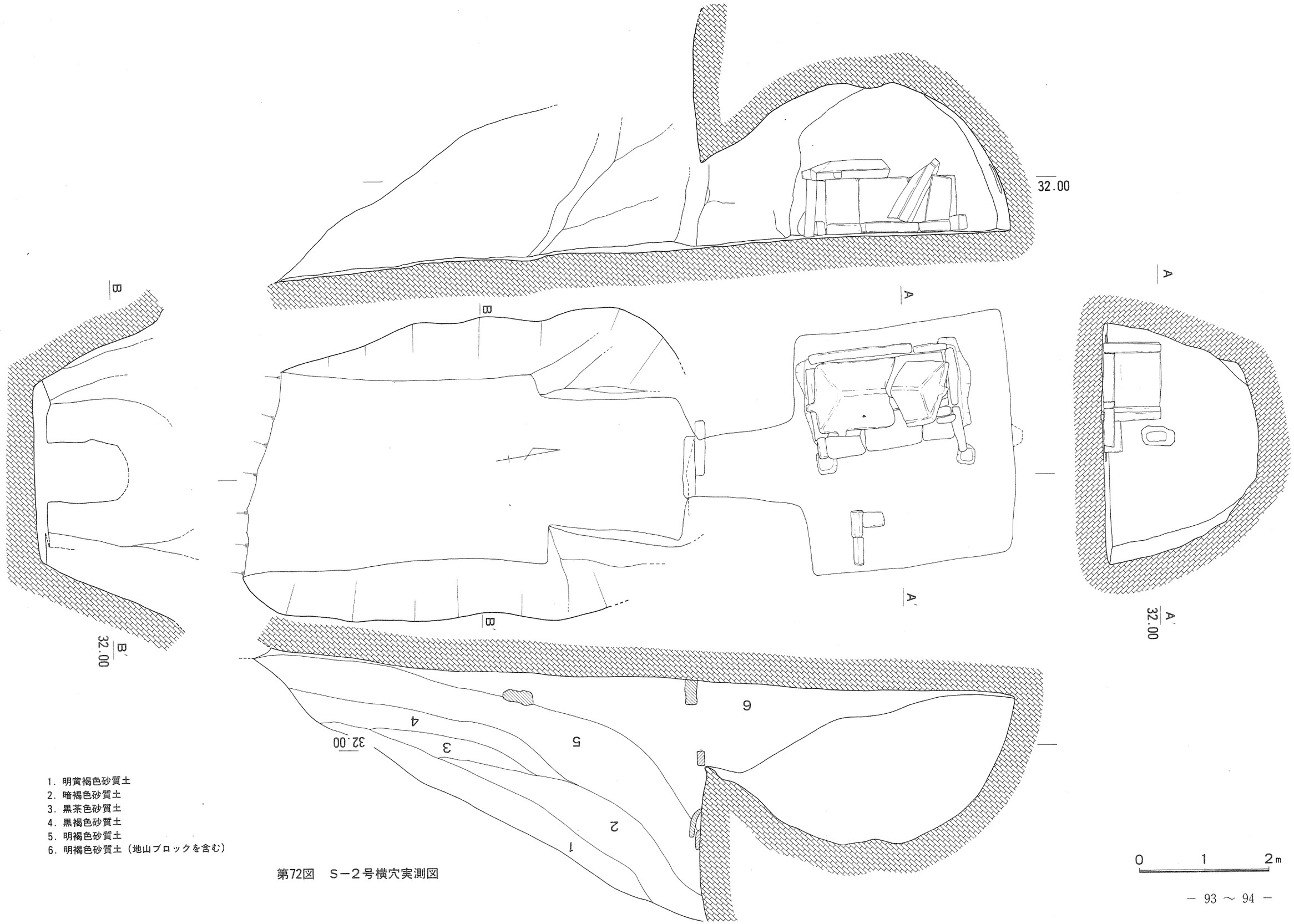
遺物は羨道両袖・床面、前庭床面から多数の須恵器が出土している。

〔玄室〕（第73図）

玄室は奥行き3.3m、幅3.8m、高さ2.38mを測り、平面プランは正方形に近い方形で、擬似四注式の平入りである。断面はややふくらんだ三角形を呈しているが、天井部は若干崩落していた。各壁面にノミ痕等は認められなかったが、奥壁の中央には50×30cm、深さ10cmの楕円形の穴が穿たれており、この穴の性格等については判断できなかった。玄室内には西壁側に組合わせ式の家形石棺が置かれていたが、蓋石は落盤のため、中央から割れていた。東袖隅には多角柱状の石柱が2本、前壁に平行して一直線に並べられており、この石柱と東袖隅の間に多数の須恵器が置かれていた。また、奥壁東隅にも多数の須恵器が並べるように置かれており、その前方と西隣りに遺存状態の悪い人骨片が散在していた。石棺の両側石手前に一辺30cm、深さ12～14cmの方形の穴が穿たれており、本来は前述の石柱を据えるための施設であったと考えられるが、追葬時に抜き取られたものと思われる。

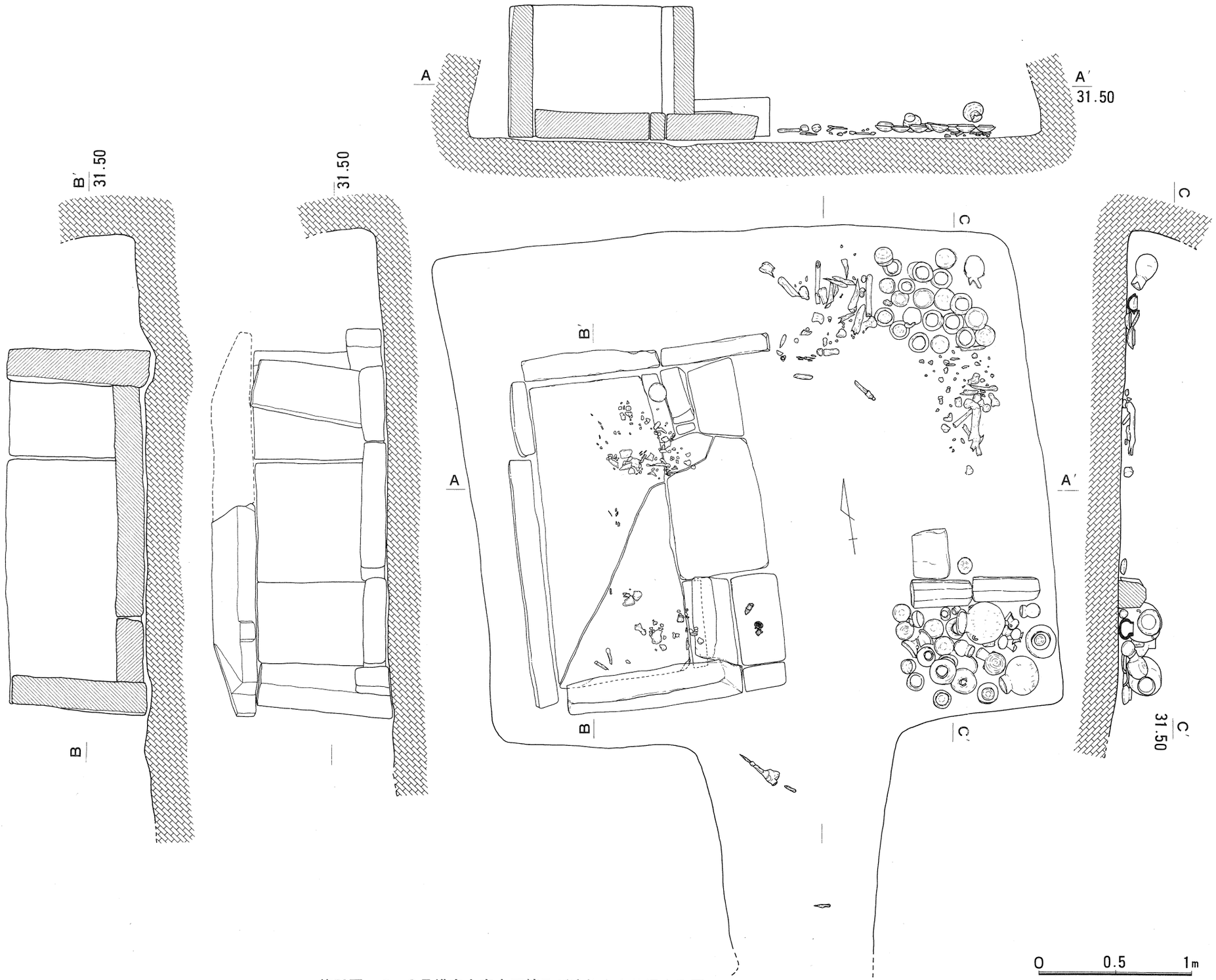
〔石棺〕

石棺は横口の組合わせ式家形石棺で、その前方には厚さ16cm程度の三枚の板石を敷き並べており、中央の板石は長さ95cm、幅60cmと大きく、石棺床石と接している。両側には高さ

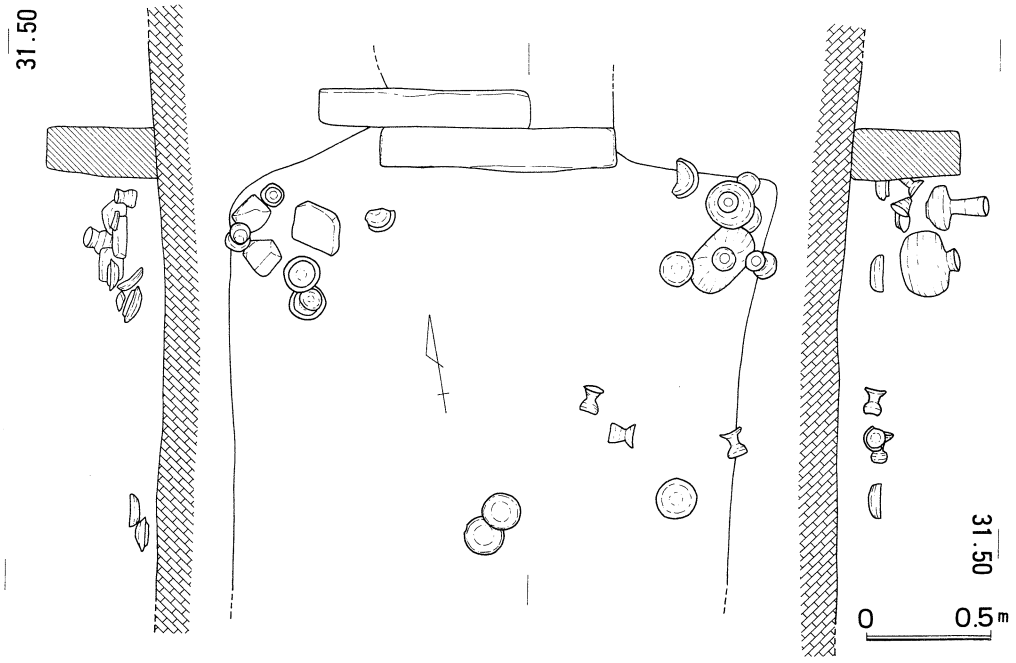


1. 明黄褐色砂質土
2. 暗褐色砂質土
3. 黒茶色砂質土
4. 黒褐色砂質土
5. 明褐色砂質土
6. 明褐色砂質土（地山ブロックを含む）

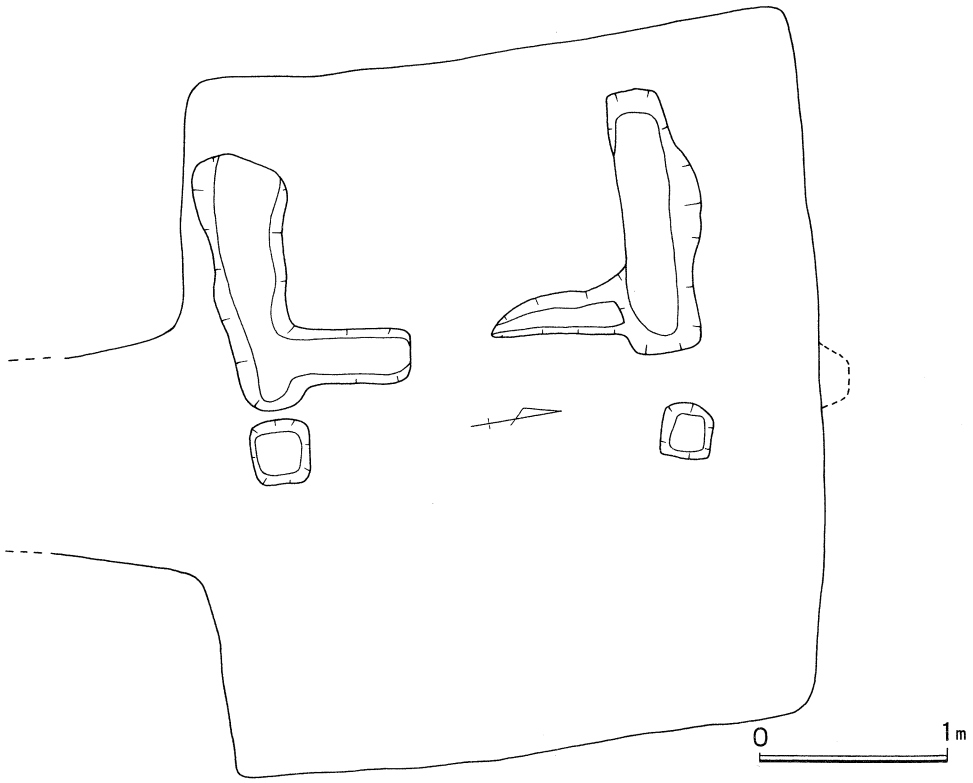
第72図　S－2号横穴実測図



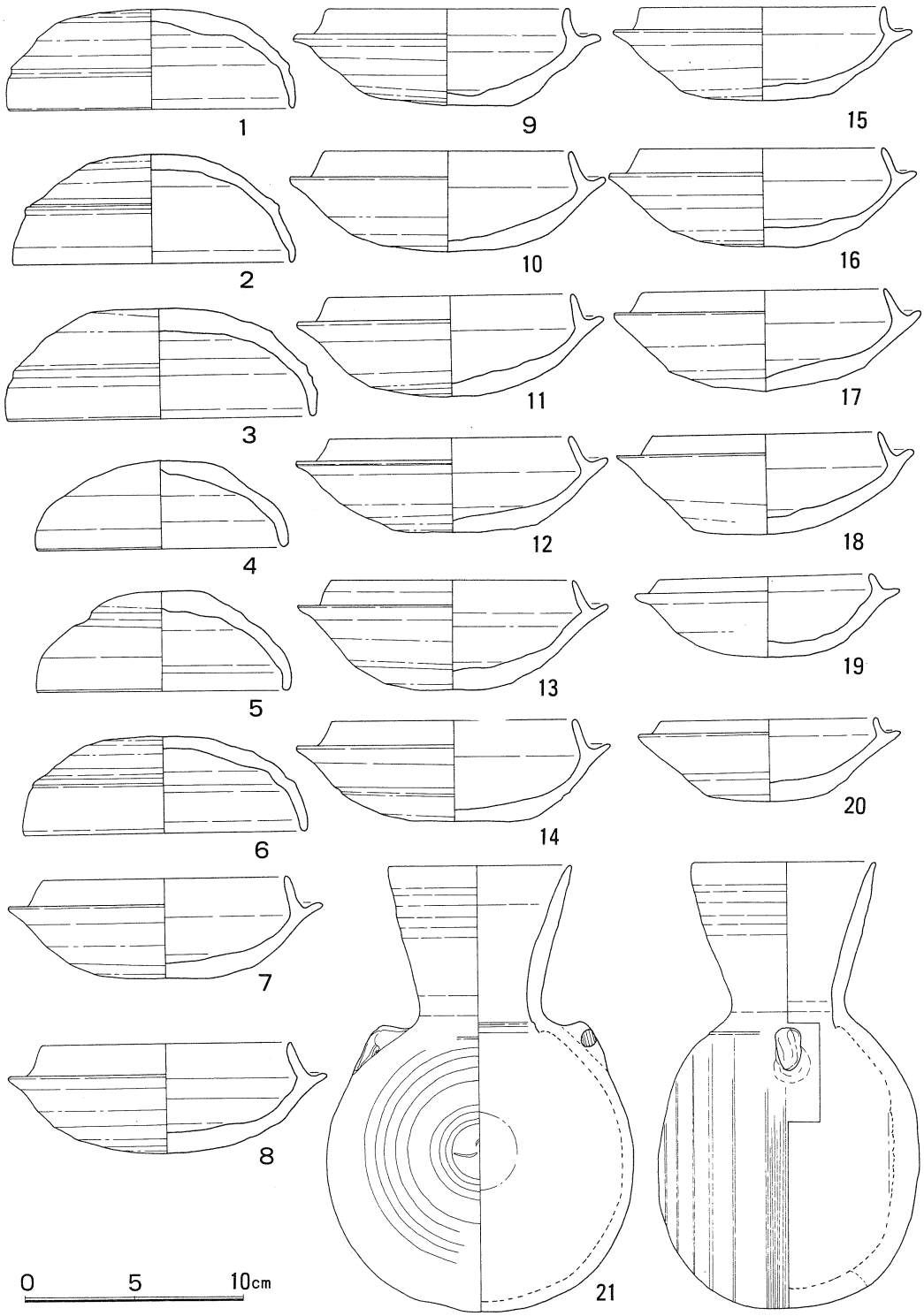
第73図　S－2号横穴玄室内石棺及び遺物出土状況実測図



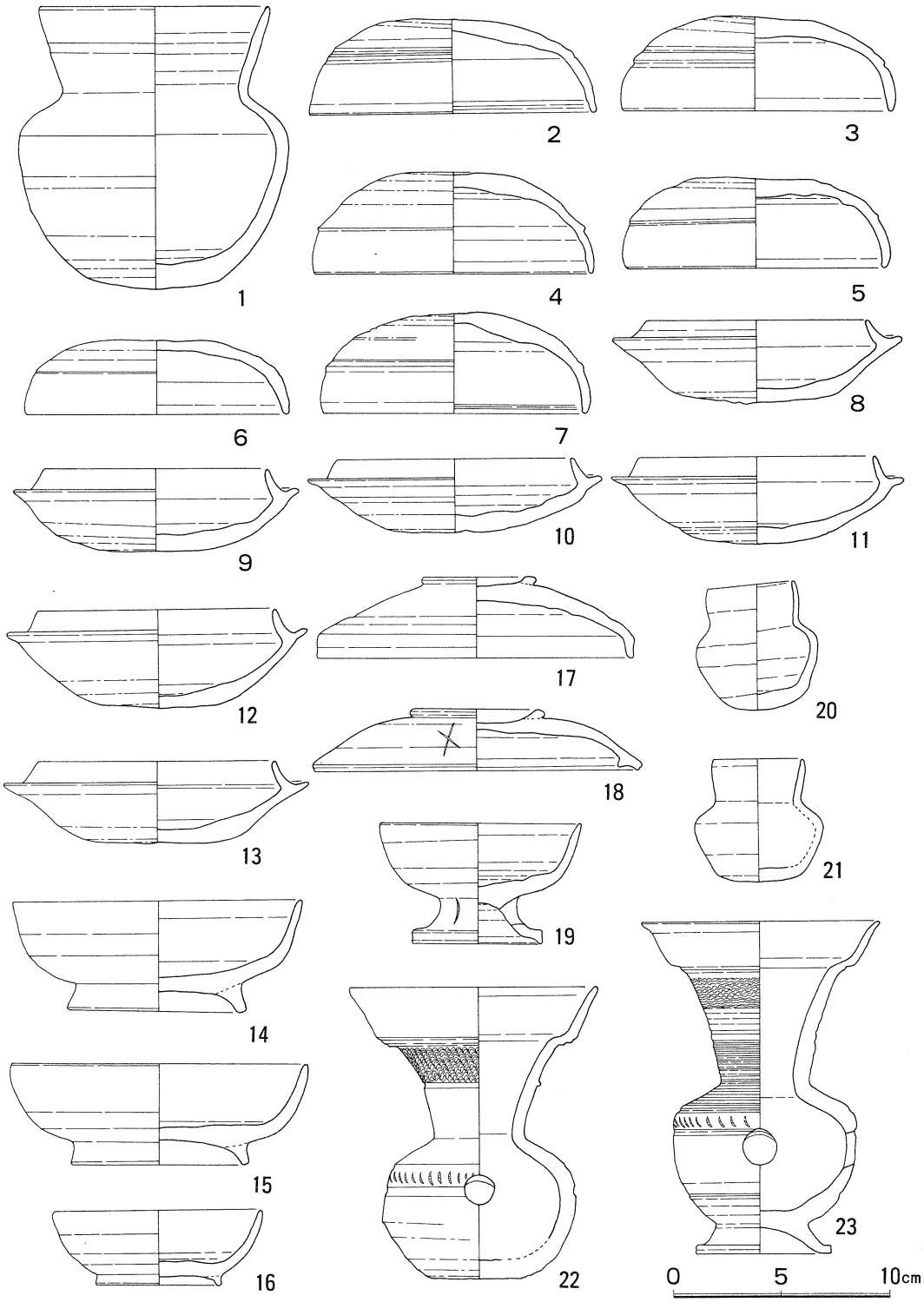
第74図　S－2号横穴前庭部遺物出土状況実測図



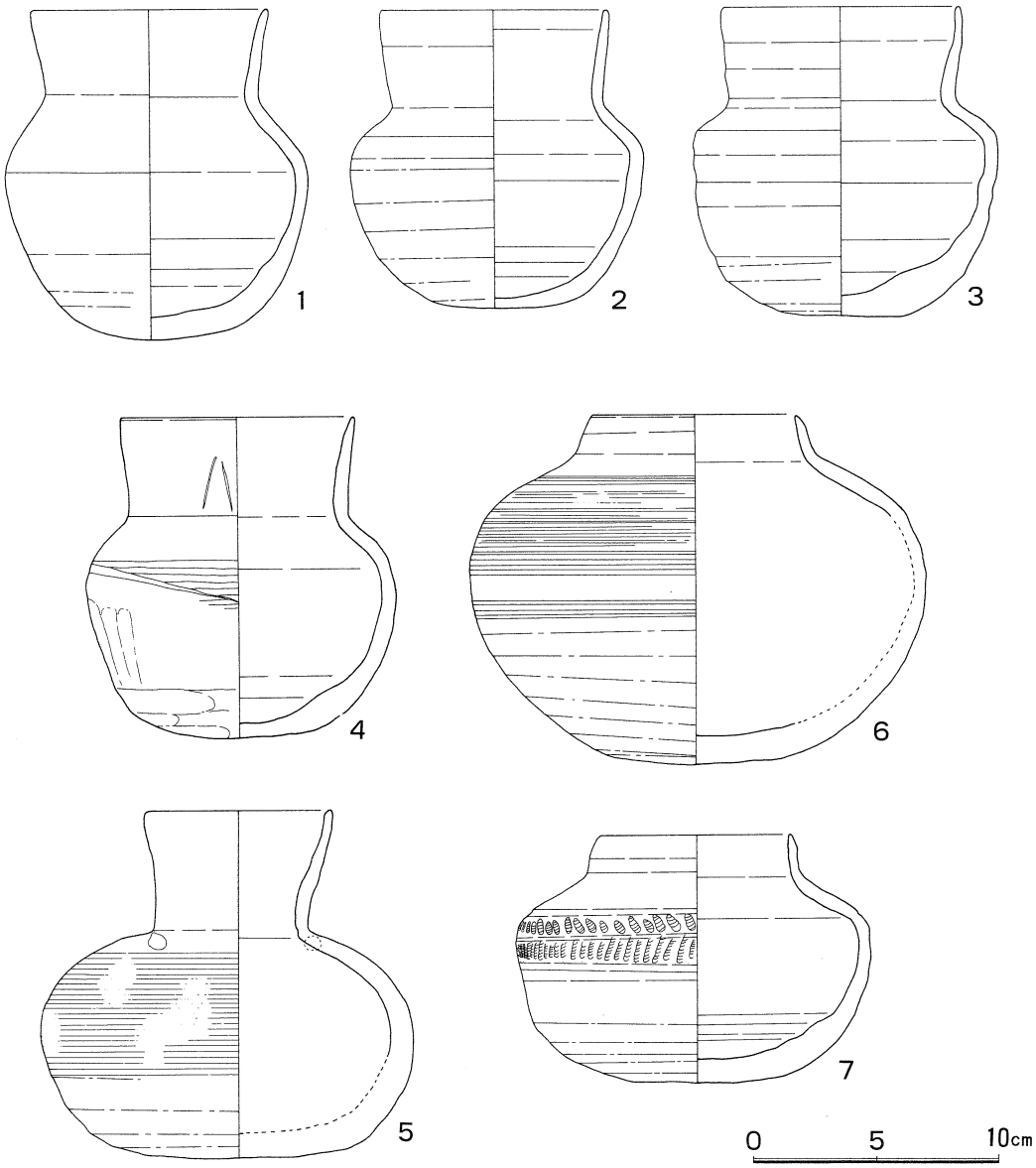
第75図　S－2号横穴石棺除去後実測図



第76図　S－2号横穴玄室内東隅出土遺物実測図



第77図　S－2号横穴玄室内出土遺物実測図(1)



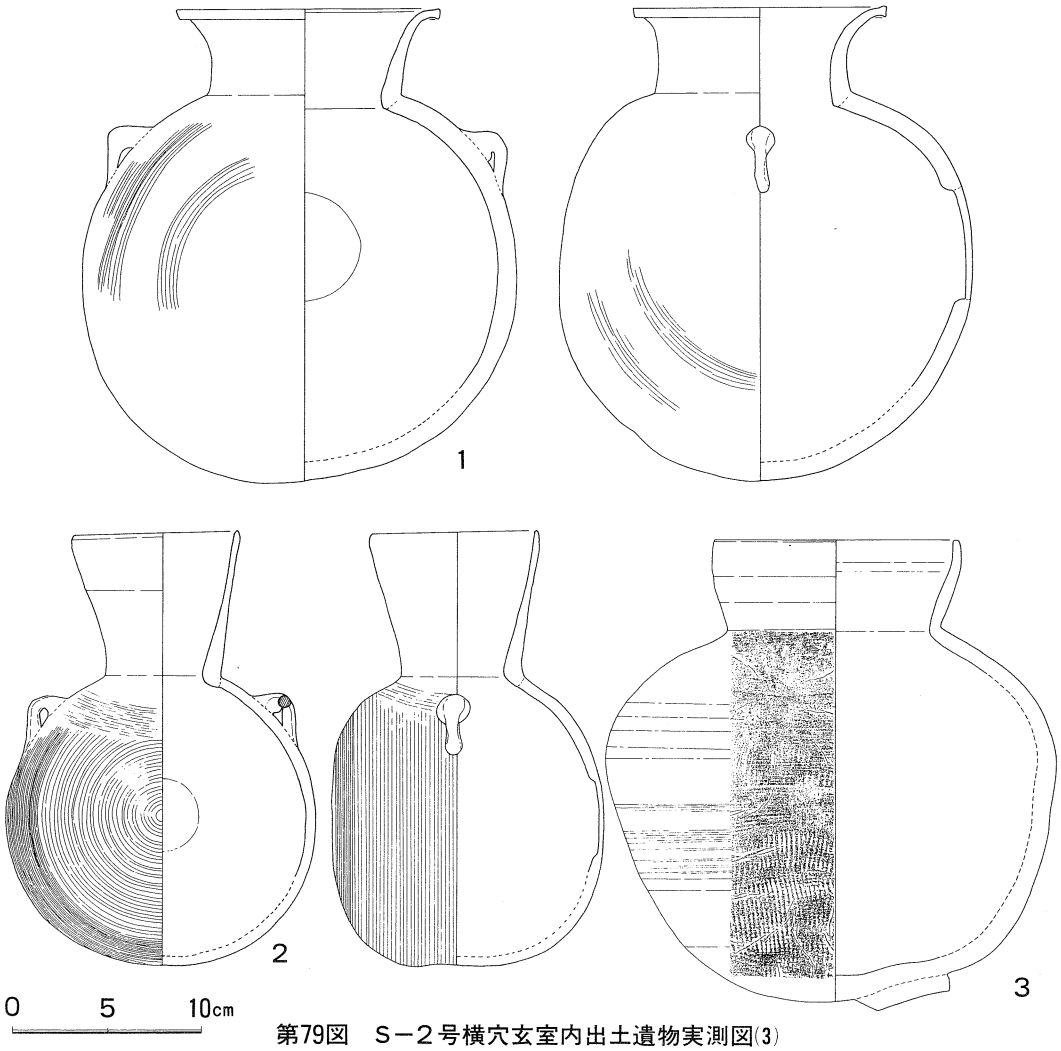
第78図　S－2号横穴玄室内出土遺物実測図(2)

23cm、幅12cmの板石を立てており、その前方に前述の方形状の穴が存在している。石棺身の長さ2.3m、幅1.2m、高さ0.8mを測り、側石は横口を設ける前壁が2枚、奥壁が大小2枚、左右側壁各1枚で構成され、若干内傾ぎみに立てられていた。各側石の厚さは約14cmと一定である。横口部は幅1.0m、高さ92cmを測る。床石は厚さ18cm程度の板石1枚からなるが、横口側の側石との間に幅約15cm、厚さ18cmの石を2枚置いている。側石、床石ともに丁寧な加工が施されており、幅4cm程度のノミ痕が観察される。

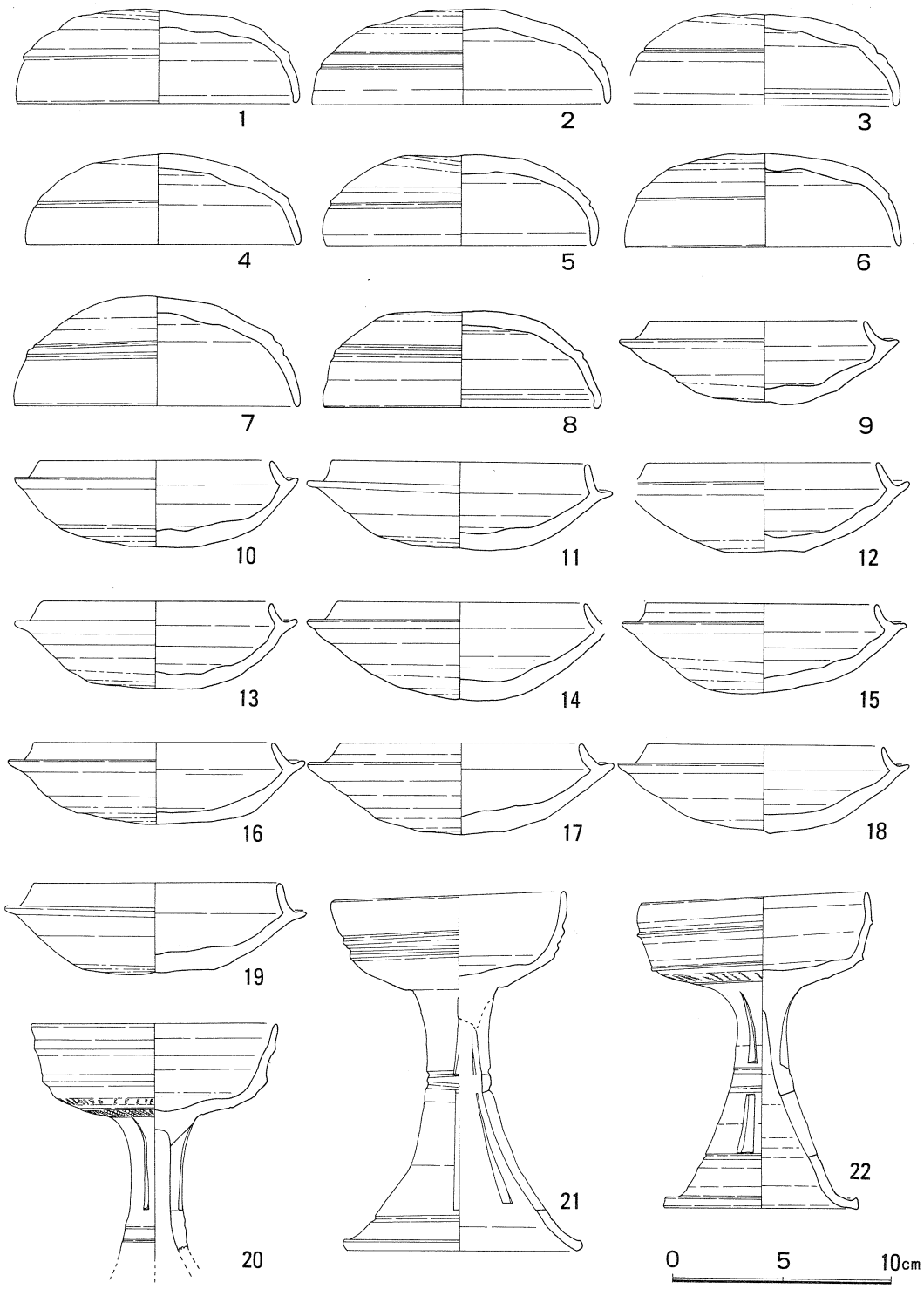
蓋石は１枚の板石で作られていたが落盤のため中央で割れていたものの、平面形は全長2.4m、幅1.1m、高さ30cmの方形を呈している。外面頂部には、長さ1.7m、幅８cmの平坦面があり、その両端から四隅に向かって稜線が延び、この平坦面と稜線で区画された面が屋根形を呈していた。側面には幅12cmの平坦面が廻り、左右と前面平坦面に各１本ずつ方形の縄掛突起が施されている。内面には幅20cm程度の平坦面が廻り、その内側はＵ字形に掘りくぼめられている。

石棺内には、少量の須恵器と人骨片が残存していただけであるが、前壁前方の板石上から単竜環頭大刀の柄頭が出土している。

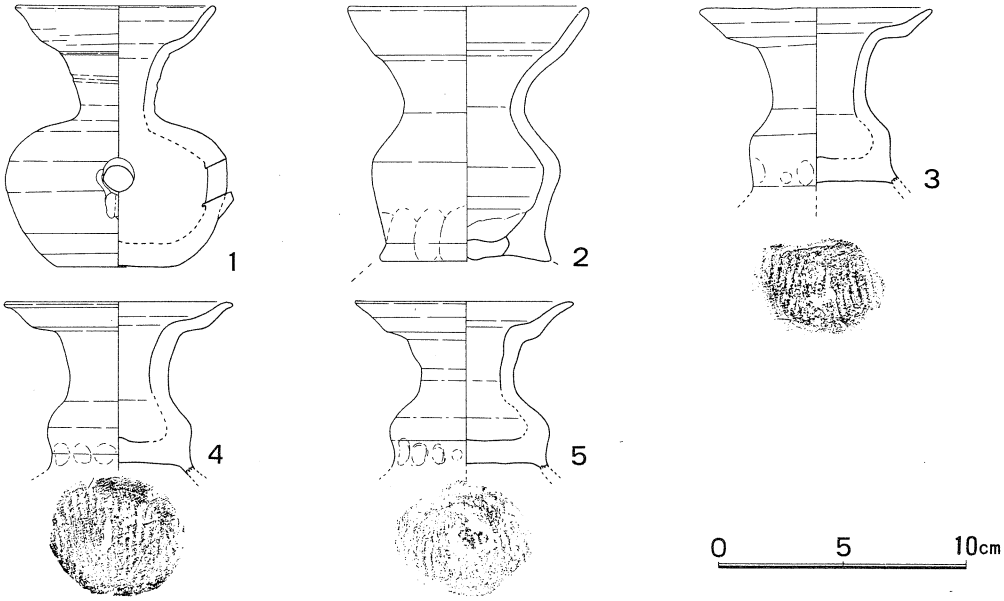
石棺下の床面には、左右側壁と前壁部分に、これらを設置するための掘り込みを設けていたが、奥壁部分には掘り込みは認められなかった(第75図)。また、石棺除去後の西壁には、径約50cmの小穴があいていた。



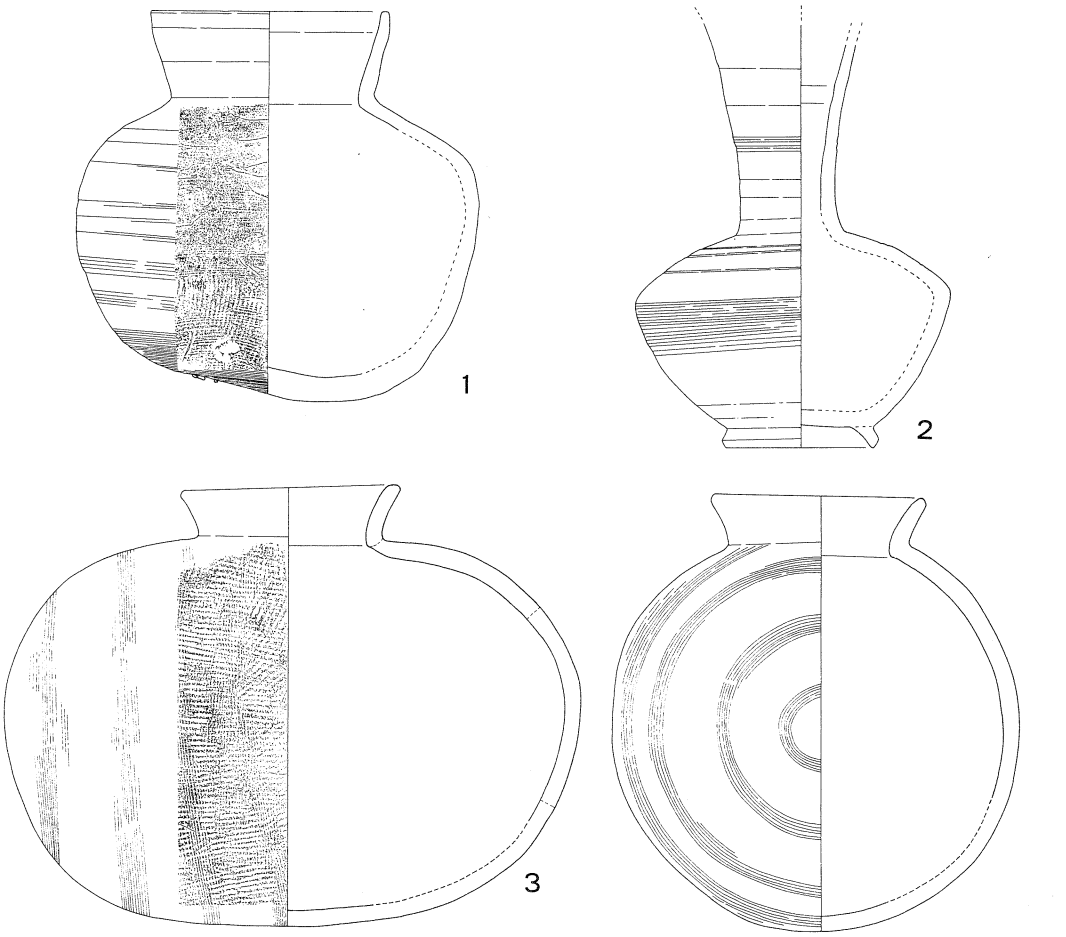
第79図　Ｓ－２号横穴玄室内出土遺物実測図(3)



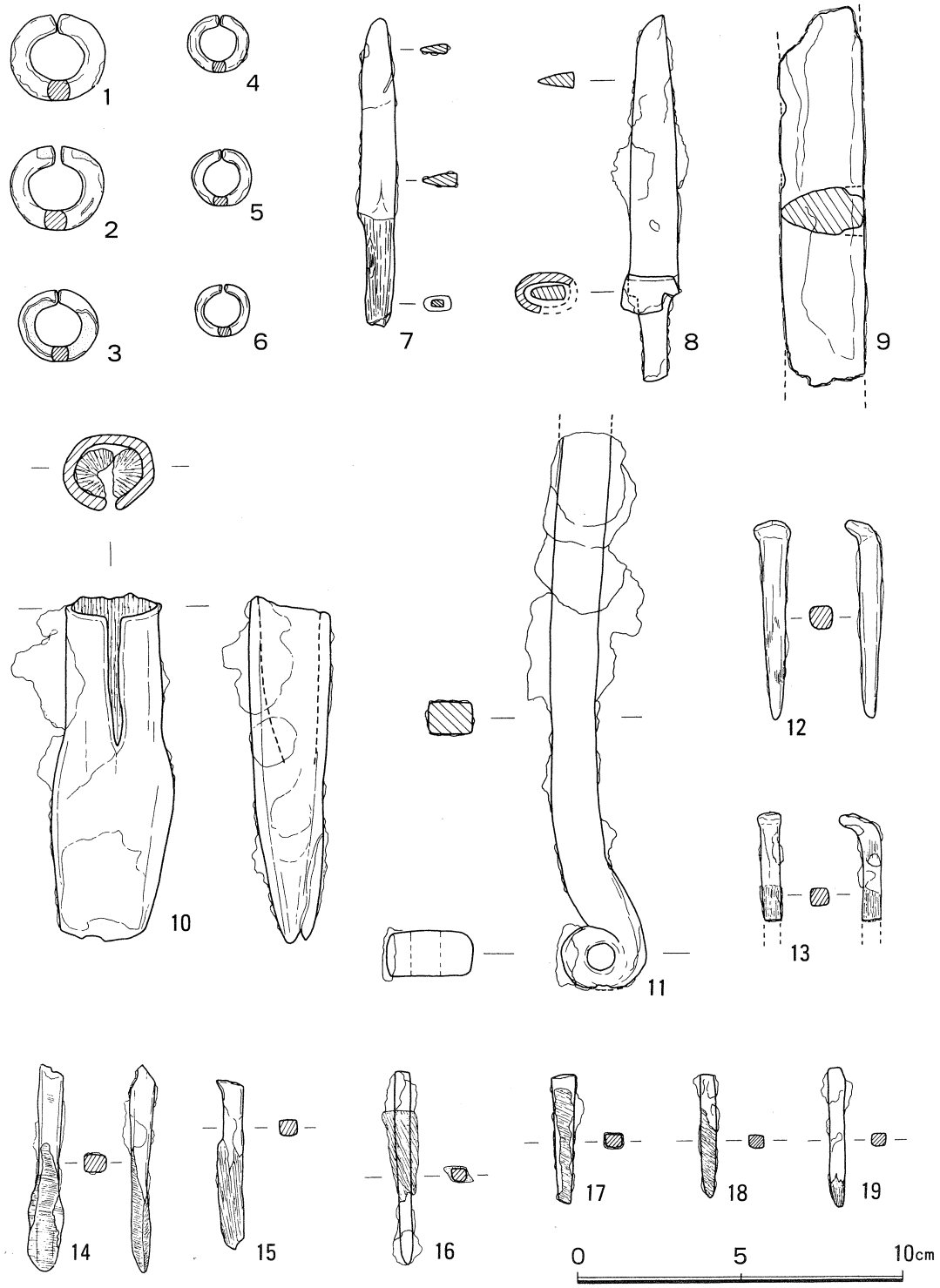
第80図　S－2号横穴前庭部出土遺物実測図(1)



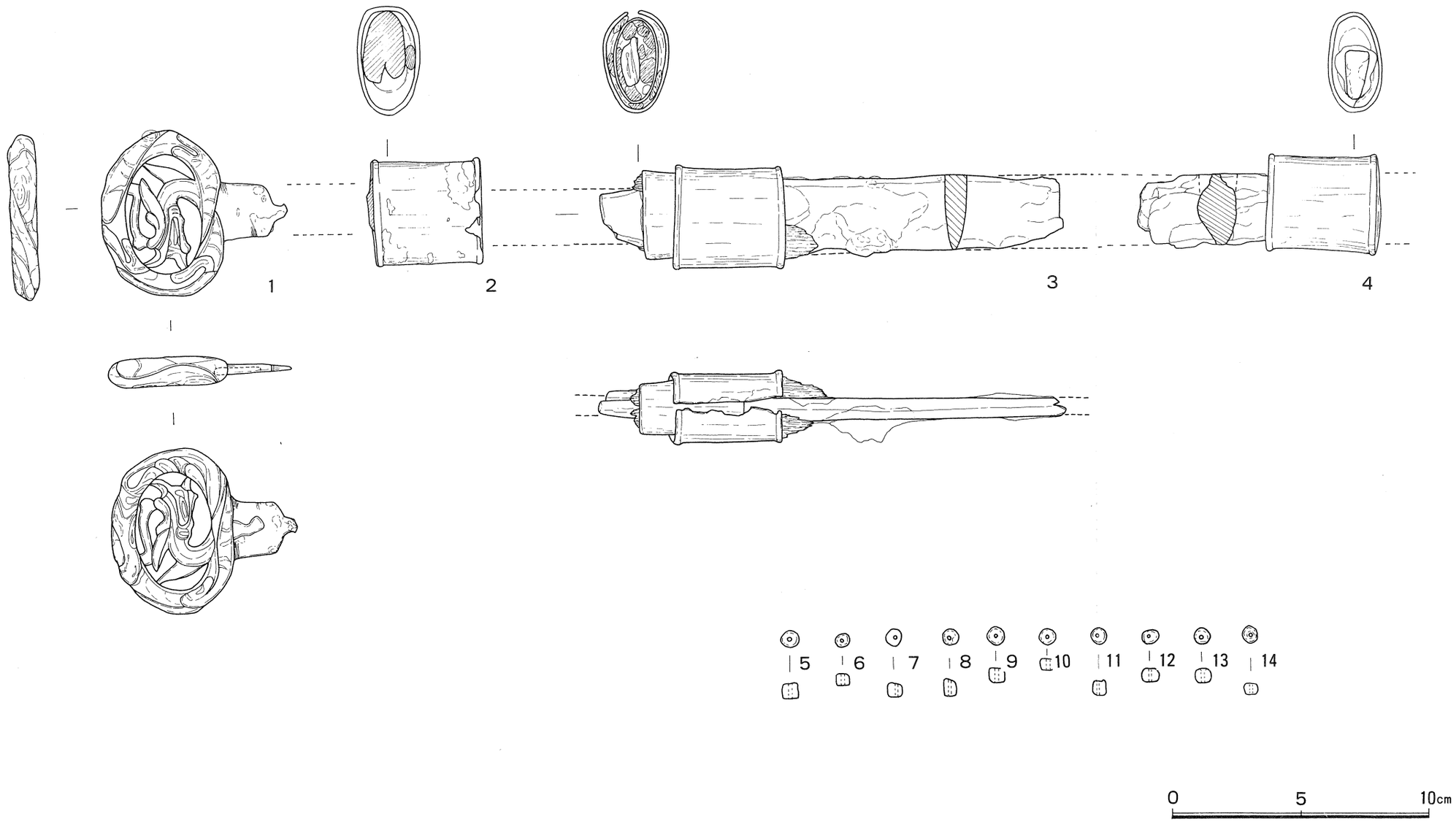
第81図　S－2号横穴前庭部出土遺物実測図(2)



第82図　S－2号横穴前庭部出土遺物実測図(3)



第83図　S－2号横穴出土金属製品実測図



第84図　S－2号横穴出土環頭大刀、玉実測図

〔玄室出土遺物〕

多数の須恵器と環頭大刀の柄頭、金属製品、玉類が出土している。須恵器については、出土状況から判断すると、追葬時に分けられたものと思われ、ここでも玄室奥壁東隅と東袖隅のものを分けて説明することにする。

奥壁東隅（第76・77図）　蓋６、坏身14、提瓶１、直口壺１がある。蓋は肩部に稜をもち、天井部外面にヘラ削りを施すもの（１～３・６）と、肩部に稜がなく、天井部外面はヘラ切り後ナデを施すもの（４・５）がある。坏身は内傾気味に立ち上がる口縁部をもち、底部外面にヘラ削りを施すもの（７～18）と、内傾するが短い口縁部で、底部外面にヘラ切り後ナデを施すもの（19・20）がある。提瓶（21）は外傾してのびる口縁部に、偏平な体部をもつもので、体部前面にカキ目を施す。肩部に粘土紐を貼り付けた把手が付いている。直口壺（77図１）は肩部がよく張り、胴部下半にヘラ削りを施す。

東袖隅（第77・78・79図）　蓋８、坏身９、低脚坏１、坩２、瑳２、直口壺５、短頸壺２、平瓶１、提瓶２がある。蓋は肩部に稜をもち、天井部外面にヘラ削りを施すもの（２～７）と、天井部に輪状つまみが付くもので、口縁部が短く屈曲するもの（17）、口縁部にかえりのつくもの（18）がある。18の外面にはヘラ記号が認められる。坏身は立ち上がりを有するもの（８～13）と、高台の付くもの（14～16）がある。立ち上がりは内傾し、端部を丸くおさめる。底部外面にはヘラ削りを施している。高台付坏は内湾してのびる口縁部で、端部は丸い。高台はハの字状に開く。低脚坏(19)は内湾してのびる口縁部に、ハの字状に開く脚部が付き、三方向の透孔が入るものである。坩(20・21）は直立気味にのびる口縁部に、肩が張る体部をもつ。瑳（22・23）はいずれも頸部が狭く、口縁部がラッパ状に開くもので、22は頸部に沈線と波状文を廻らせ、体部に櫛描刺突文を施している。23は高台が付いており、頸部に沈線と波状文、肩部にかけてカキ目を施している。直口壺（78図１～４、79図３）は肩部が張るもので、胴部下半にヘラ削りを施すが、４は底部の削りが不定形であり、肩部にカキ目を施す。また、口縁部にはヘラ記号が認められる。79図３は大形のものである。短頸壺（６・７）は内傾する短い口縁部で、端部は丸く、体部はよく張る。６は肩部周辺にカキ目、体部下半にヘラ削りを施す。７は肩部に櫛描刺突文を２段に飾り、下半にヘラ削りを施す。平瓶（５）は直立気味にのびる口縁部をもち、体部最大径が中位にある。体部上半カキ目、下半ヘラ削りを施す。提瓶は２点（79図１・２）あり、１は体部が球形を呈し、カキ目を施す。２は体部が偏平で、外面にカキ目を施す。いずれも肩部に粘土紐を貼り付けた把手が付く。

環頭大刀（第84図）　１は単竜環頭大刀の柄頭である。刀身の一部は玄室内に分散して出土しているが、全形は不明である。柄頭は金銅製で環の長径6.4cm、短径4.6cm、厚さ1.1cmを測る。保存状態は不良で緑青が全面に見られる。楕円形の環体の内側に側方を向いた竜頭が透彫りされ、外環に

竜身が表現されている。口は開口しているが、玉の有無については、銹が著しいため不明である。茎は環体部分から端部にむけて1.5cmのところで細くなり、先端部の幅5㎜で突出する。環体から長さ1.1cm、幅5㎜の不整形の目釘穴があるが、貫通していない。茎部に巻かれていたと思われる繊維質のものが少量ではあるが残っていた。2は筒金具であるが、保存状態が悪く緑青が著しい。内部には木質のみ残っていた。3は鞘口金具と把縁金具・刀身の一部である。金具類は銹化しているが、鍍金が認められる。刀身も銹化が著しいが、木質が残っている。4は鞘の筒金具と刀身の一部である。他と同様に銹化が著しい。

耳環（第83図）　6点（1～6）あり、1・2は長径2.9cm、短径2.6cm、3は長径2.4cm、短径2.2cm、4・5は長径1.9cm、短径1.75cm、6は長径1.7cm、短径1.6cmを測る。3は金箔の剝落が著しく、6は環の内側に金箔が少し残っている。

鉄製品（第83図）　刀子（7・8）、大刀の刀身（9）、鉄斧（10）、不明鉄器（11）、釘（12～19）がある。刀子7は茎部に木質が残り、8は両関で、関部に幅1.2cmの柄筒金具が付く。9は刀身の一部で、環頭大刀の一部の可能性がある。鉄斧は着柄部が袋状のもので内部に木質が残る。11は不明鉄器で断面長方形を呈し、端部を円形に折り曲げている。全体に銹が著しい。釘は8本あり、すべて断面長方形を呈す。12・13は頭部が「L」字状をに折れ曲がっている。12以外は木質が多く残っている。

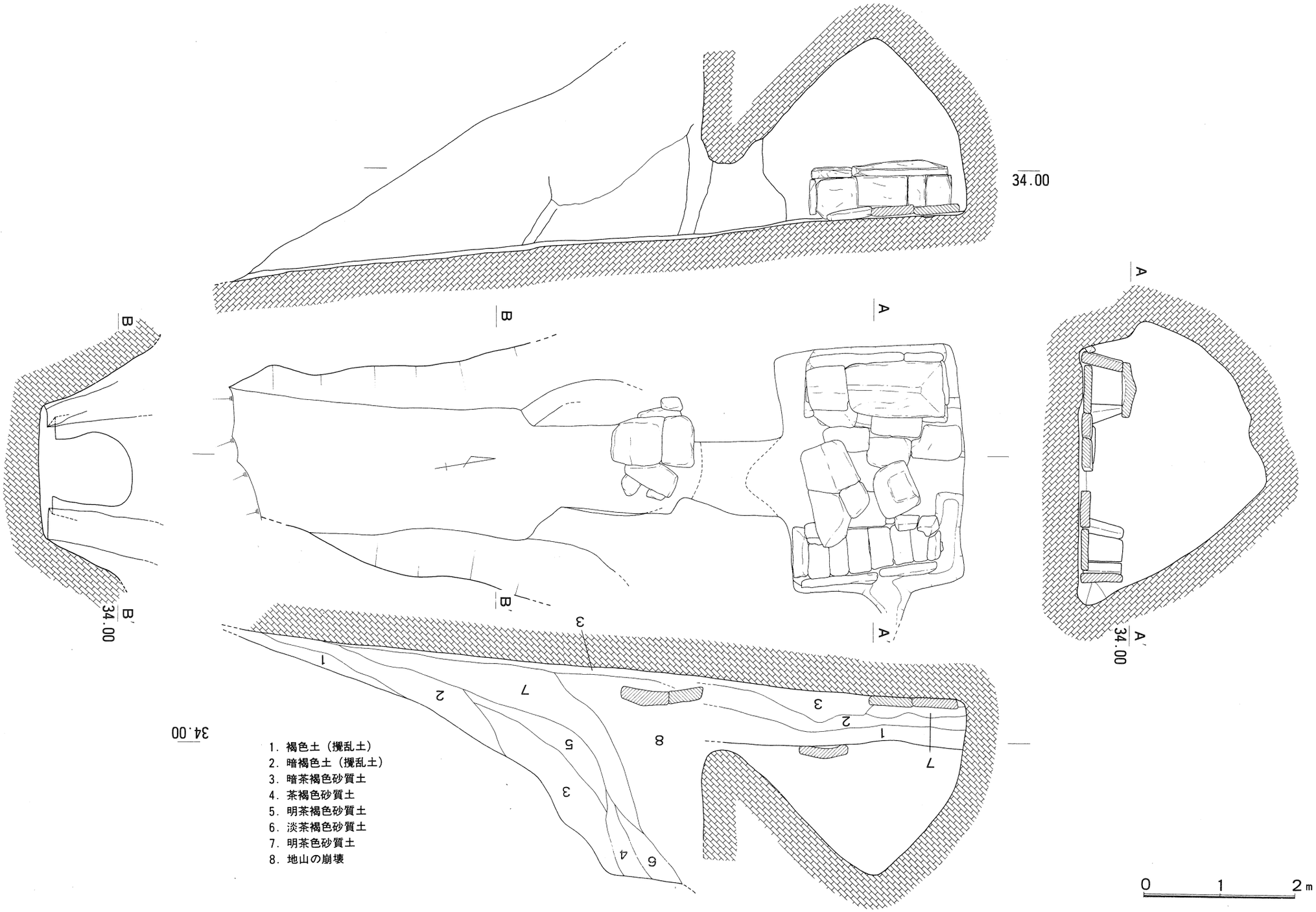
玉類（第84図）　10点あり、いずれも安山岩製の小玉で暗褐色を呈する。直径6.0～7.2cm、長さ4.1～6.2cm、孔径0.8～1.4cmを測る。

〔羨道・前庭出土遺物〕（第80～82図）

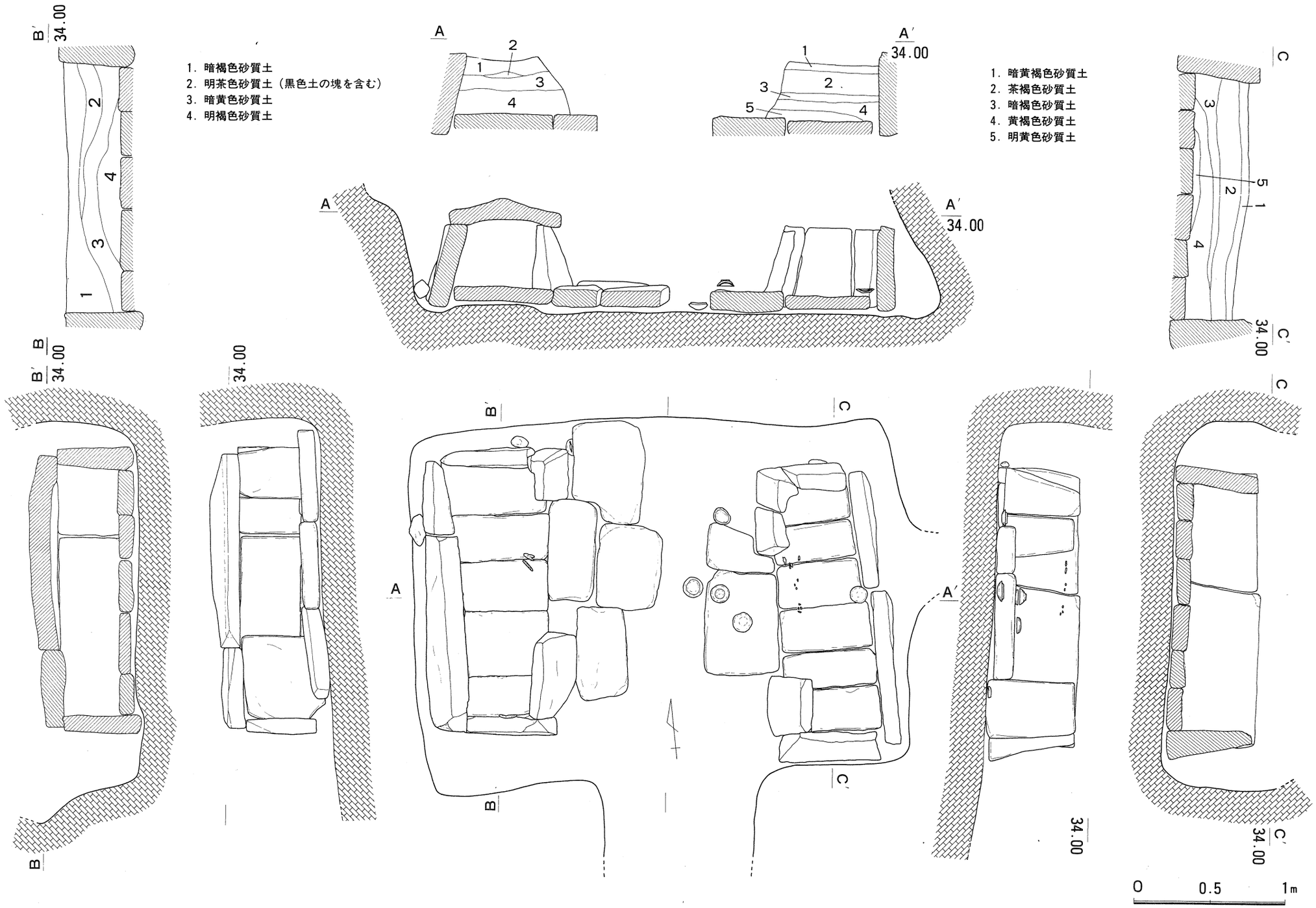
須恵器蓋8、坏身11、高坏3、瑞1、子持壺の子壺4、壺1、長頸壺1、横瓶1がある。蓋坏類（1～19）は玄室内のものと同じ作りをしている。高坏は3点（20～22）あり、いずれも二段三方向透孔である。20・22は坏部に2重の稜が廻り、底部に櫛描刺突文を施している。瑞（81図1）は頸部が狭く、ラッパ状に開く口縁部をもつ。子持壺の子壺（2～5）は瑞と同じ作りである。底部に穿孔が無く、叩き痕が残る。壺（82図1）は大形のもので、体部外面に叩きの後カキ目を施している。長頸壺（2）は口縁部を欠くが、頸部は外反してのび、2条の沈線を施す。肩部がよく張って高台が付き、底部外面にヘラ記号が認められる。横瓶（3）は口縁部が短く外反し、端部は丸みをもつ。胴部は外面に平行叩きの後カキ目、内面には同心円状の叩きが施されている。

S－3号横穴墓（第85図）

S－2号横穴の東隣、標高33～35mで、S－2号より約2m高い位置に穿たれていた。南南西方向に開口しており、玄室床面の標高は33.4mである。



第85図　S－3号横穴実測図



第86図　S－3号横穴玄室内石棺及び遺物出土状況実測図

〔前庭・羨道・玄門〕（第87図）

前庭部は長さ4.0m、幅約2.0mの長方形を呈し、床面は羨道に向かって徐々に高くなっている。羨道部は長さ1.9m、幅1.1～1.3mを測り、天井部は崩壊していた。玄門は長さ1.3m、幅0.74～1.05mを測り、玄室側に開いており、天井部の高さは94cmを測る。玄門入口で羨道側に水平に倒れている閉塞石を検出した。閉塞石は長さ1.1m、幅64cm、厚さ15cmと、長さ0.7m、幅38cm、厚さ14cmの2枚の板石を主閉塞にして、人頭大の石を支えにしていたようである。

遺物は前庭床面と埋土中から須恵器蓋坏類が出土している。

〔玄室〕（第86図）

玄室は奥行き2.4m、幅3.2m、高さ2.38mを測り、平面プランは長方形の擬似四注式の平入りを呈している。各壁面にノミ痕等は観察できなかった。玄室内には西壁と東壁側に横口式の組合わせ家形石棺2基を設置しており、西壁側を1号石棺、東壁側を2号石棺としたが、2号石棺の蓋石は玄室中央に動かされていた。閉塞石が倒れていたことから、内部には多量の土が流れ込んでおり、両石棺内にも土が詰まっていた。また、2号石棺除去後の玄室東壁には小穴が穿たれていた。

遺物は須恵器蓋坏類と鉄製品が出土している。

（1号石棺）

1号石棺は棺身の長さ1.9m、幅80～90cm、高さ50cmを測り、玄室奥壁側が広く作られている。側石は横口を設ける前壁が2枚、奥壁が大小2枚、左右側壁各1枚で構成され、若干内傾して立てられている。右前壁は左前壁に比べ小さなもので、右側壁に向けて「L」字状に刳り抜かれていた。2枚の奥壁の境目と玄室壁面の間に人頭大の石を置いて、奥壁を安定させている。側石の厚さは、前壁の2枚が6～8cmで、その他は12cmを測る。床石は厚さ8～10cmの5枚の板石を並べており、いずれも長方形を呈しているが、右側壁に向かって徐々に大きくなっている。各床石はほとんど隙間なく密着させて敷かれているが、右側壁に向かって若干高くなっている。床石の手前、横口を設ける部分に板石が敷かれており、これを囲むように3枚の板石が敷かれていた。玄室奥壁寄りの板石は横口部の板石と密着させるため、角が削り取られていた。

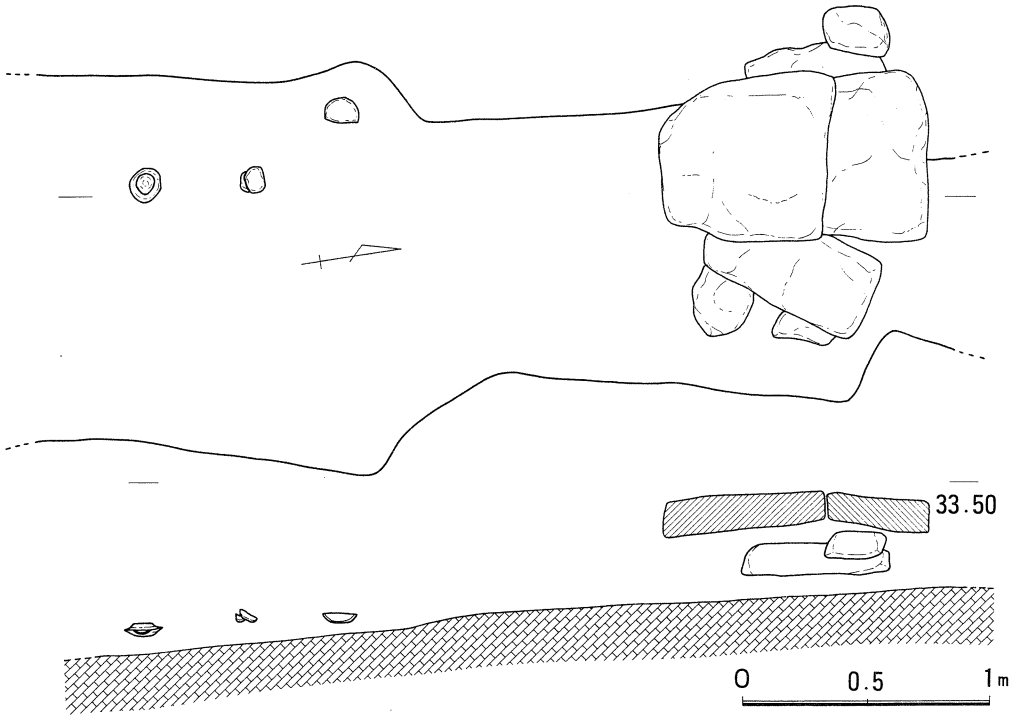
蓋石は長さ1.28m、幅65～75cmと長さ52cm、幅62cmの大小2枚の板石を組み合わせており、全長で1.8m、最大高20cmを測る。大きい方の蓋石は外面頂部に長さ96cm、幅6cmの平坦面があり、右端は角に向かって稜線が延びて、平坦面と稜線で区画された面が屋根形を呈するが、左端は稜線を施さずに、この平坦面を削って傾斜をつけている。小さい蓋石は外面頂部が平坦面でなく、稜線を施しており、断面三角形を呈している。これらの側面には幅10cmの平坦面が廻っている。内面には身側石に安定させるため、幅15cmの平坦面が廻り、その内側は掘りくぼめられている。蓋・身ともに表面には幅4cm程度のノミ痕が明瞭に観察される。

石棺内の床石と左側壁の間から須恵器蓋（第89図８）１個体が出土している。

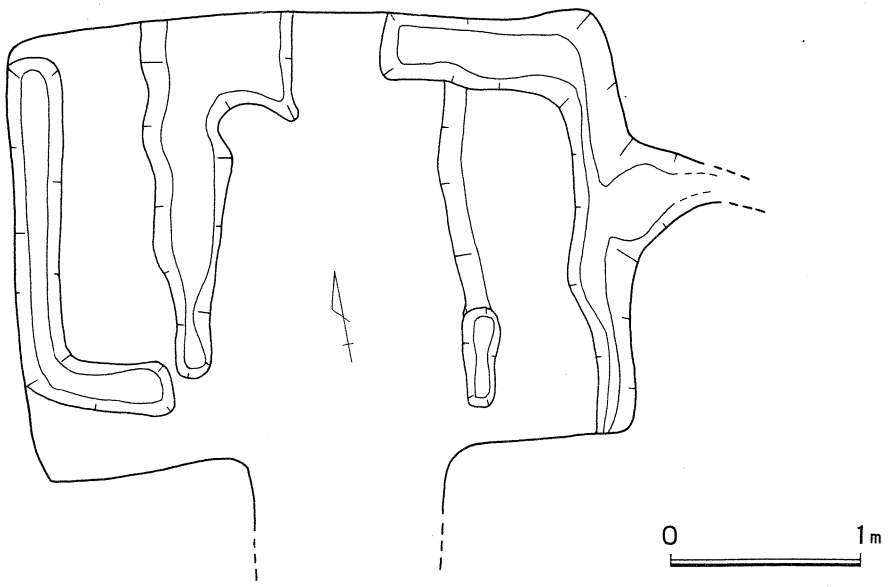
（２号石棺）

２号石棺も横口の組合わせ家形石棺であるが、蓋石は玄室中央に動いていた。棺身の長さ1.98m、幅70～85cm、高さ55cmを測り、玄室入口側が広く作られている。側石は横口を設ける前壁が３枚、奥壁が２枚、左右側壁各１枚で構成されており、奥壁は垂直に立てられているが、その他の側石は内傾して立てられている。玄室奥壁側の前壁は２枚の板石からなるが、ちょうど角に当たる側石は「Ｌ」字状に作り出され、側壁の一部となっていた。床石は厚さ９～11cmの板石を６枚敷き並べており、いずれも長方形を呈しているが、右側壁に向かって徐々に大きくなっている。床石上面は水平に作られているが、右側壁に向かって緩やかに傾斜している。横口の手前に大小２枚の板石を床石に接して敷いているが、小さい板石には前壁と重なる部分を削り取って、組み合わされている。

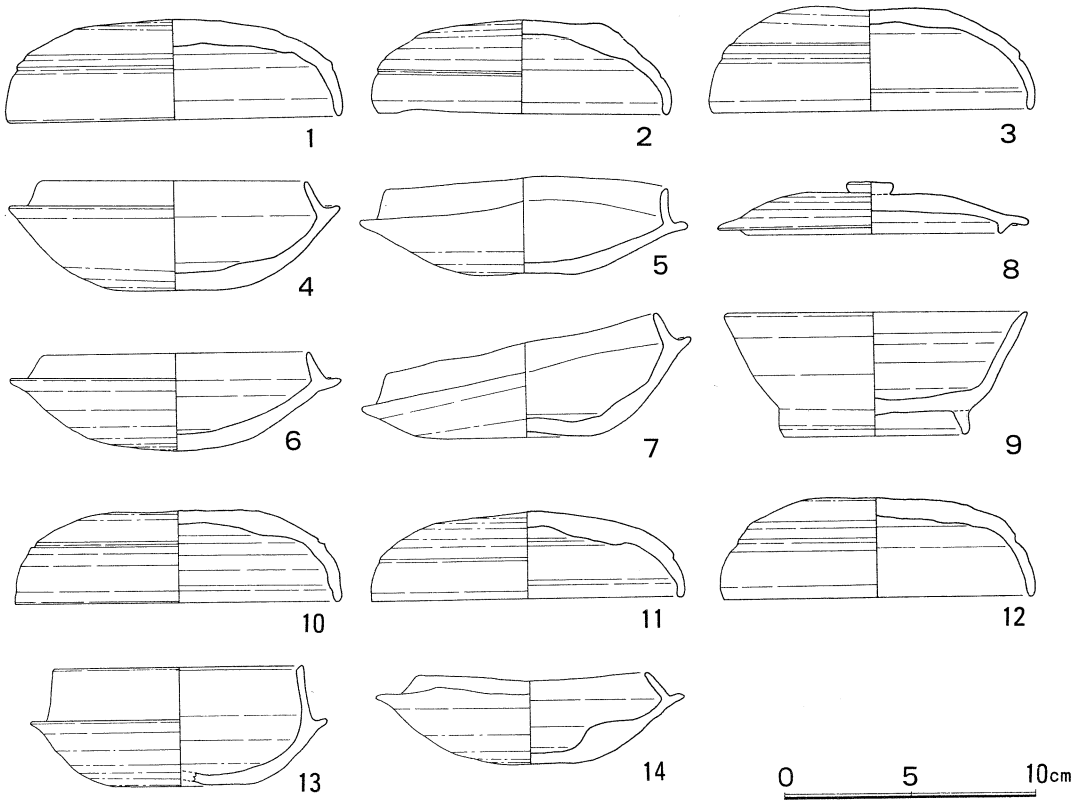
蓋石は玄室中央に動かされていたが、１号石棺同様に大小２枚の板石を組み合わせたものであり、小さいのは裏向きになっていた。大きい方は途中で割れていたが、長さ1.3m、幅60～80cm、小さいのは長さ50cm、幅65cmで、全長1.8mを測る。外面には長軸方向に稜線が延びて断面三角形を呈しており、側面には幅約10cmの平坦面が廻っている。内面には幅15～20cmの平坦面が廻り、その内側は浅く掘りくぼめられていた。蓋・身ともに表面にノミ痕が観察される。石棺床石上から須恵器坏身



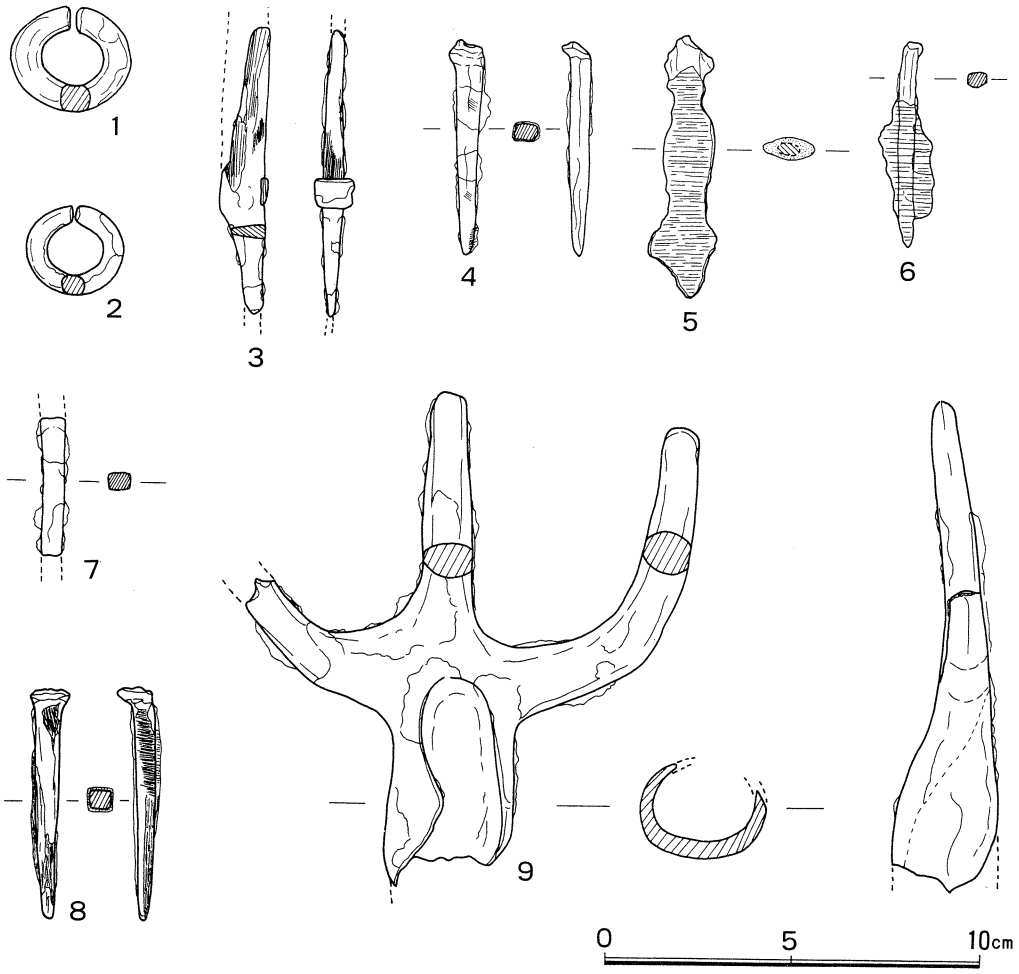
第87図　Ｓ－３号横穴前庭部遺物出土状況実測図



第88図　S－3号横穴石棺除去後実測図



第89図　S－3号横穴出土遺物実測図



第90図　S－3号横穴出土金属製品実測図

（第89図１）が１個体伏せた状態で出土している。

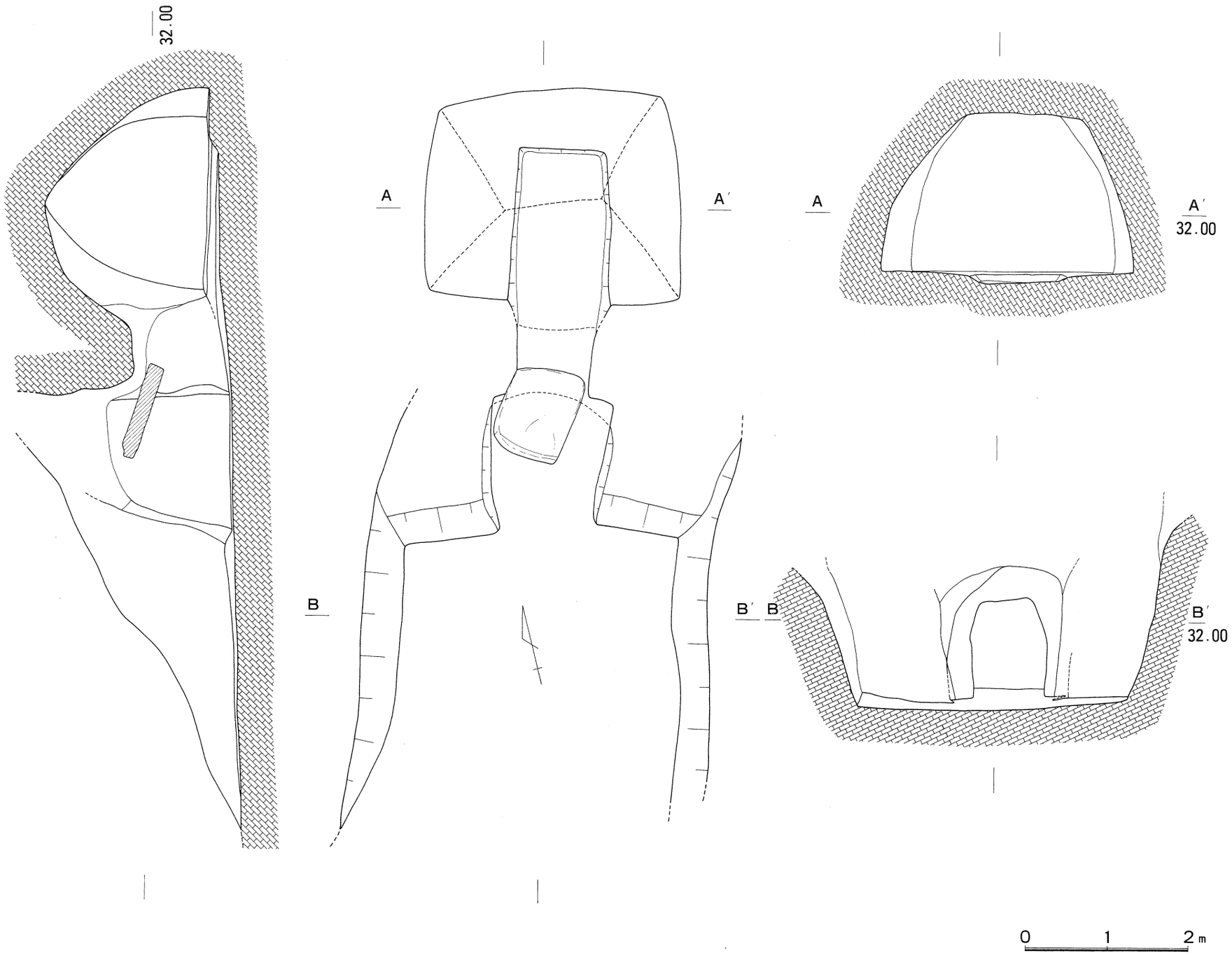
石棺除去後の玄室床面には、石材を据えるための溝が設けられていた（第88図）。

〔玄室出土遺物〕（第89・90図）

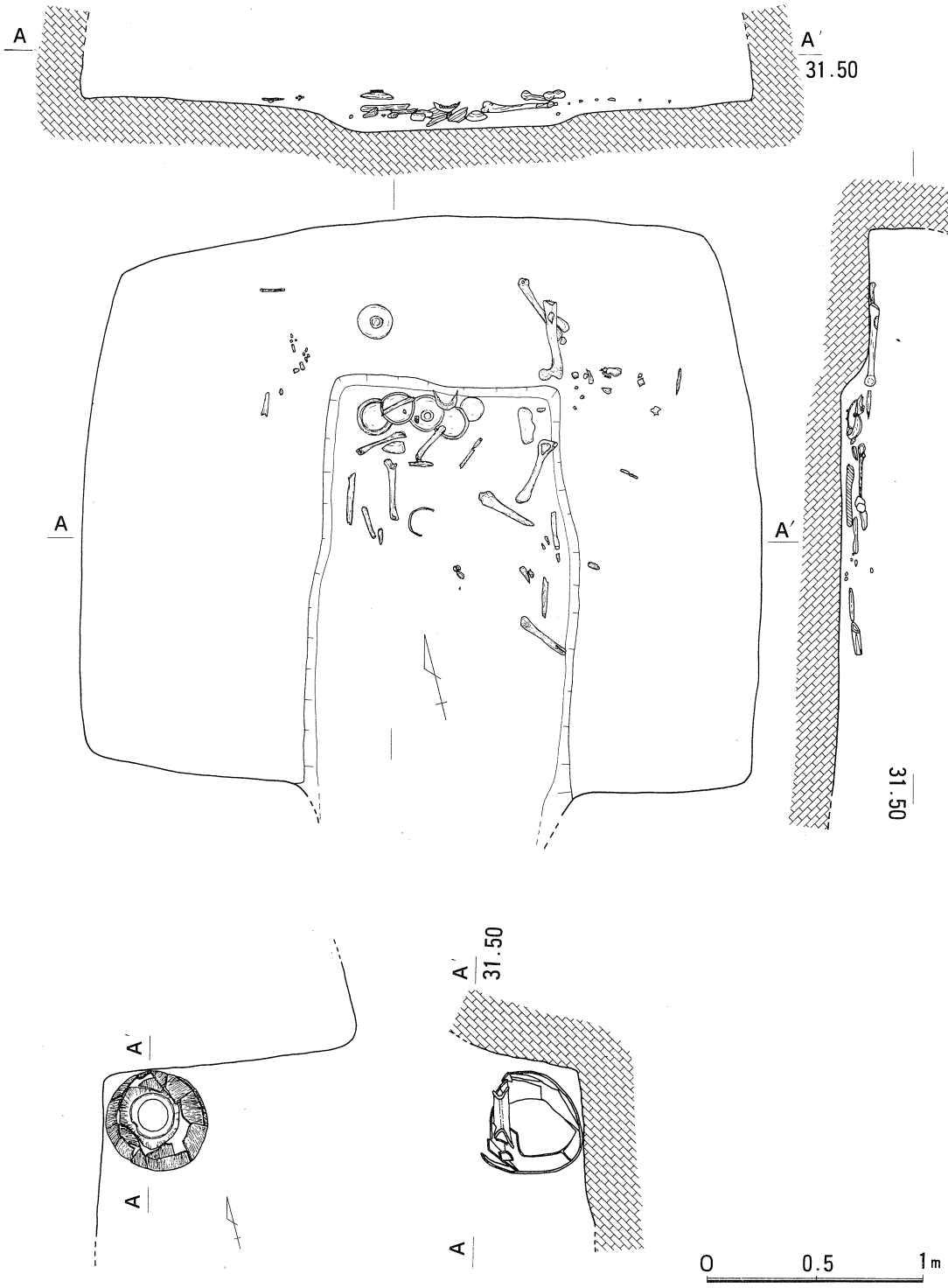
須恵器蓋坏類９、耳環２、刀子１、釘５、箍状鉄製品１が出土している。

須恵器　蓋は４点（89図１～３・８）あり、８は口縁部にかえりが付き、天井部外面はヘラ削りの後、宝珠状のつまみが付く。他は肩部に稜、口縁部内面に浅い沈線を施すもので、天井部外面にヘラ削りを施す。坏身は５点（４～７・９）あり、９は高台の付くものであるが、他は内傾気味に立ち上がる口縁部をもつもので、底部外面にヘラ削りを施す。

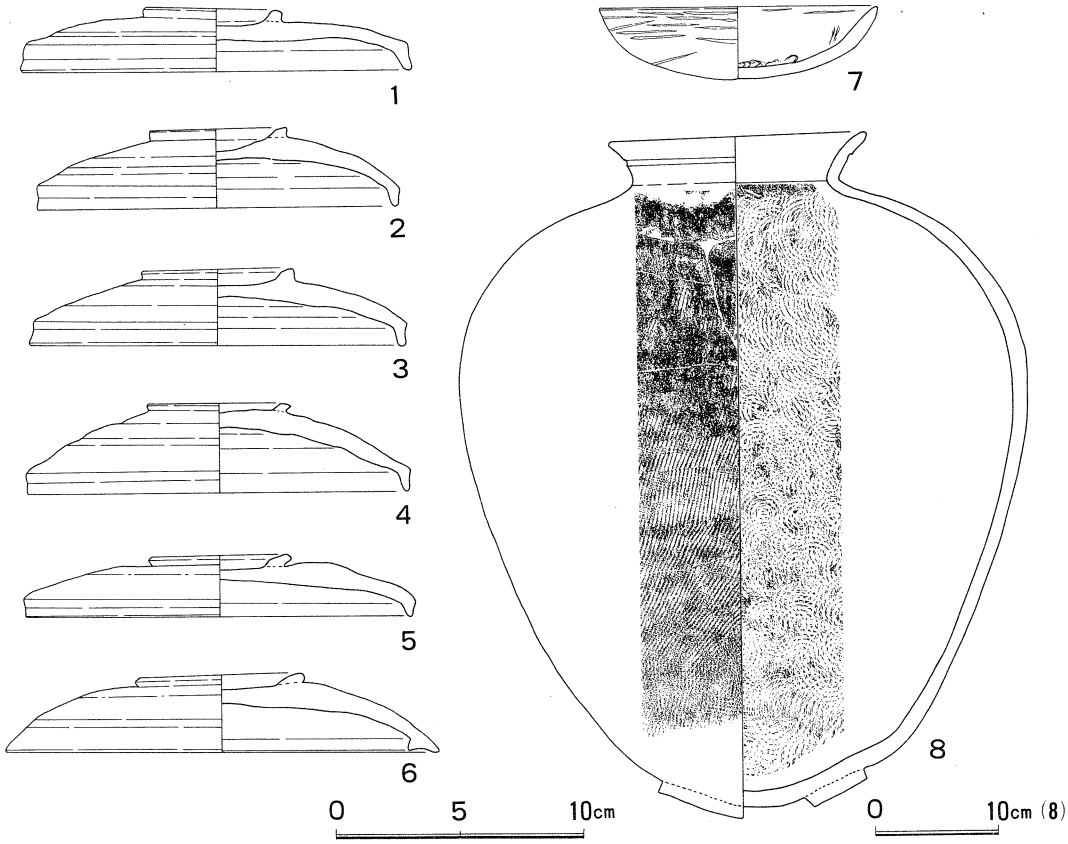
金属製品　耳環（90図１・２）はそれぞれ長径3.1cm、2.6cm、短径2.8cm、2.4cmを測り、銅部分のみ残っている。刀子（３）は関部に鉏が若干残っているものである。釘（４～８）は断面長方形で、４・８は頭部が「L」字状を呈す。５・６・８は木質が多く残っている。箍状鉄製品（９）は



第91図　S－4号横穴実測図



第92図　S－4号横穴玄室及び前庭部遺物出土状況実測図



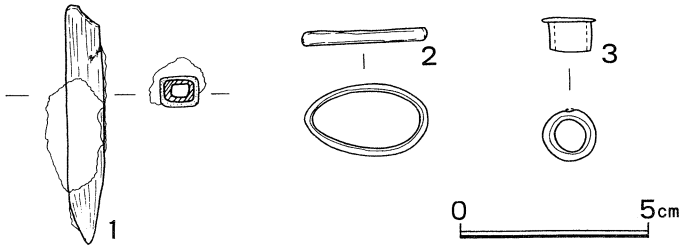
第93図　S－4号横穴出土遺物実測図

三叉状に先が別れるもので、着柄部を袋状に折り返している。

〔前庭出土遺物〕（第89図）

須恵器蓋坏類が出土している。蓋（10～12）は肩部に稜をもち、天井部外面にヘラ削りを施すもので、10・11は口縁部内面に沈線が廻る。坏身（13・14）は、13が直立気味に長く立ち上がる口縁部をもち、14が内傾気味に立ち上がるやや短めの口縁部のもので、底部外面にヘラ削りを施す。

S－4号横穴墓（第91図）



第94図　S－4号横穴出土金属製品実測図

S－3号横穴の東隣、標高31～33mで、S－3号横穴より約2m低い丘陵斜面に穿たれている。南方向に開口しており、玄室床面の標高は31.2mである。

〔前庭・羨道・玄門〕

前庭部は先端部分が削られており、残存長で3.6m、幅3.3～4.0mを測り、横断面は「コ」の字状に近い。前庭西袖側で、立てられた状態の須恵器甕１個体を検出したが、内部には土以外に何も認められなかった。羨道部は前庭奥壁中央に穿たれており、長さ1.5m、幅1.2～1.5mを測り、玄門側に開いているが、天井部は崩壊のため不明である。玄門は長さ1.18m、幅1.0～1.26m、高さ1.2mを測り、長方形の横断面を呈する。閉塞石は玄門入口で検出したが、床面から0.8～1.2m浮いた位置で、羨道側に倒れた状態で検出した。長さ1.2m、幅0.9m、厚さ10cmの１枚石で、表面にはノミ痕が観察された。

〔玄室〕（第92図）

玄室は奥行き2.6m、幅3.1m、高さ2.14mを測り、平面プランは長方形で、平入りの擬似四注式を呈している。壁面は風化の為かノミ痕は観察できなかった。床面には玄門部から玄室床面2/3にかけて幅1.1～1.25m、深さ12cmの溝を設けて、「コ」の字状の屍床を形成していた。しかし、検出時には、この屍床上ではなく、溝内に須恵器蓋を横に並べて置き、その周囲に人骨が散在していた。人骨の検出状況からみて、追葬時等に動かされたものと考えられる。

遺物は須恵器の他に、金属製品が出土している。

〔玄室出土遺物〕（第93・94図）

須恵器蓋６、土師器坏１、金属器３が出土している。

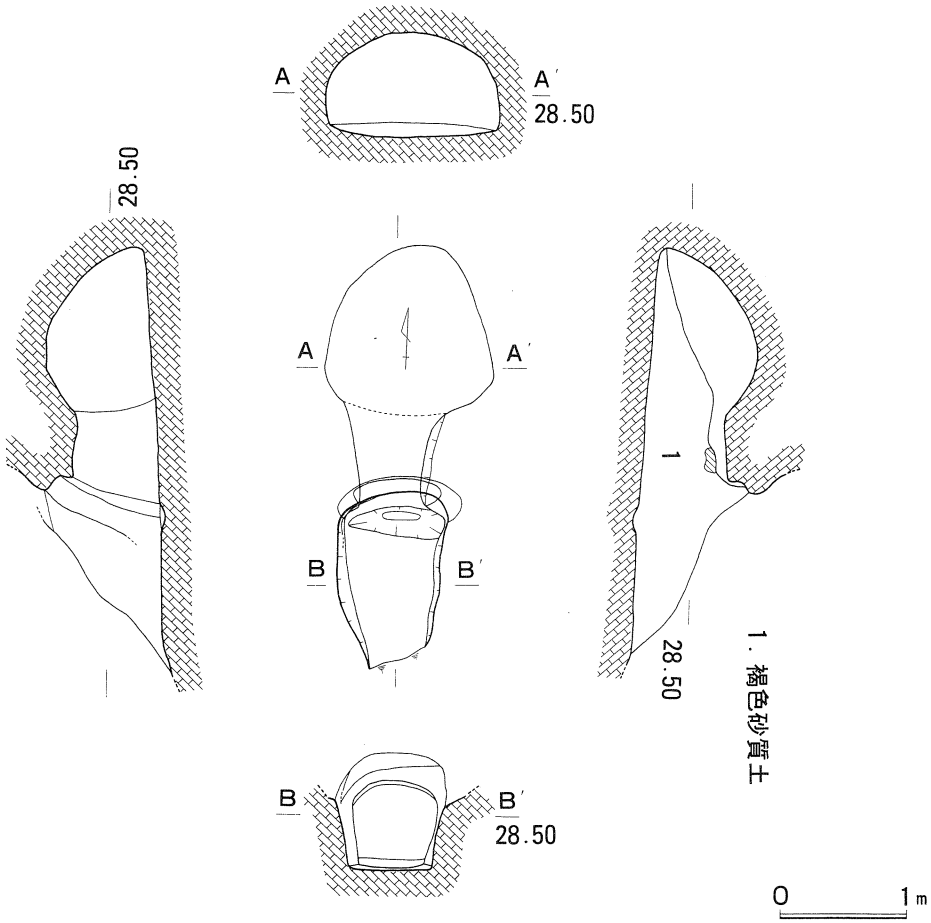
須恵器蓋（93図１～６）は、６が口縁部にかえりをもつものであり、それ以外はほぼ垂直に短く屈曲する口縁部をもつものである。天井部に低い輪状つまみを付けている。土師器坏（７）は内湾する口縁部で、端部を丸くおさめる。内面に螺旋状の暗文を施し、内外面に赤色顔料を塗布している。金属器の１は鏃の茎部で、外面は木質で覆われている(94図１)。断面は長方形を呈す。２は責金具で、幅3.5mmの鉄板を長径3.3cm、短径1.9cmの倒卵形に曲げる。３は径1.3cmの短筒状を呈し、一方端が肥大するもので、大刀の付属品か。

〔前庭出土甕〕（第93図８）　口縁部は外反してのび、端部は丸い。外面に沈線が１条廻る。肩部がよく張って、底部に至る。底部に他の土器片が溶着している。外面に平行叩き、内面に同心円状の叩きを施す。

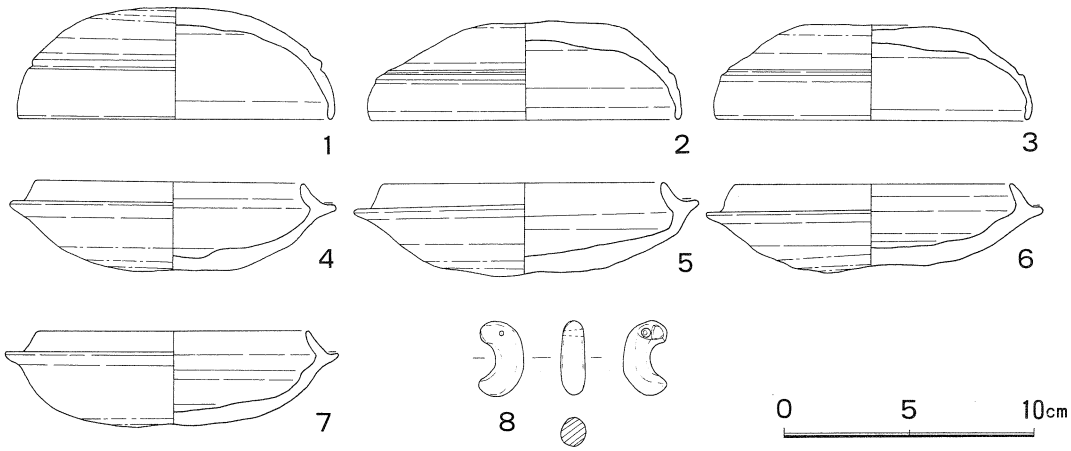
S－５号横穴墓（第95図）

S－１号横穴の東、標高28～29mの丘陵斜面に穿たれている、やや小型の横穴である。南方向に開口しており、玄室床面の標高は28.1mである。

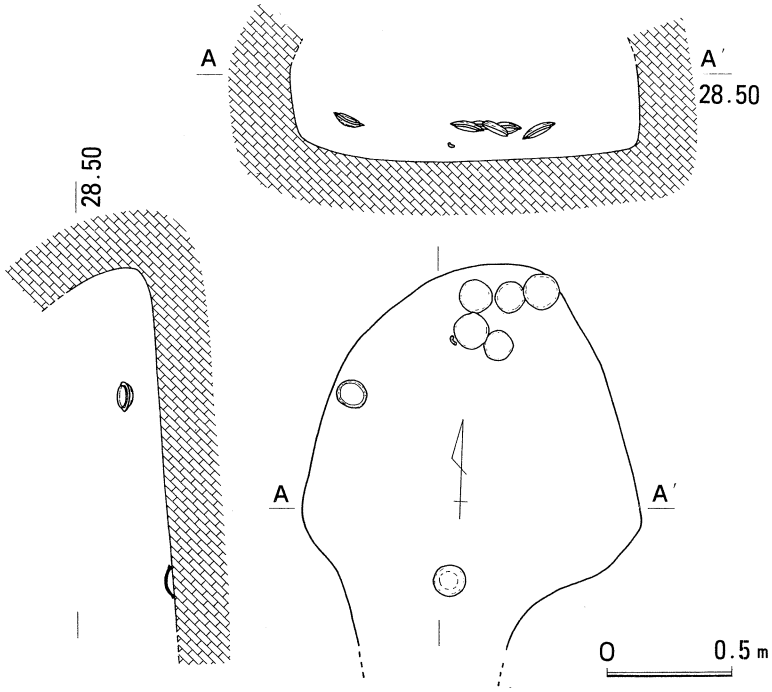
〔墓道・羨道〕



第95図　S－5号横穴実測図



第96図　S－5号横穴玄室内出土遺物実測図



第97図　S－5号横穴玄室内遺物出土状況実測図

墓道は長さ1.25m、幅47～82cmを測る。横断面は「コ」の字状を呈し、床面は平坦に作られている。羨道部は長さ75cm、幅50～75cmを測り、玄室側に開いている。天井部の高さは65cmと低いものであった。羨門入口床面に長さ75cm、幅25cm、深さ4cmの閉塞用の掘り込みを持つが、閉塞施設は確認できなかった。

〔玄室〕（第97図）

玄室は奥行き1.35m、最大幅1.35m、高さ85cmを測る。平面プランは卵形に近く、天井は丸天井形である。壁面にノミ痕は観察できなかった。

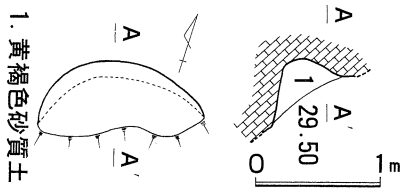
床面から須恵器蓋坏類7個体と碧玉製勾玉1個が出土している。

〔玄室出土遺物〕（第96図）

須恵器蓋（1～3）は肩部に稜をもち、口縁部内面に沈線を廻らせている。天井部外面にヘラ削りを施す。坏身（4～7）は内傾気味に立ち上がる口縁部をもち、受け部は外上方に短くのびる。底部外面にヘラ削りを施す。勾玉（8）は碧玉製で、長さ3.0cm、厚さ1.0cmを測る。穿孔は片面から行われ、表面は丁寧に磨かれている。

S－6号横穴墓（第98図）

S－5号横穴の東、標高29mに位置するが、ほとんど削平されており、玄室奥壁の一部を検出しただけである。奥壁残存部分は長さ55cm、幅1.35m、高さ50cmで、平面が半月状を呈していることから察すると、S－5号横穴同様の丸天井形であったと思われる。埋土中から須恵器片1片が出土していたが、実測は不能であった。



第98図　S－6号横穴実測図

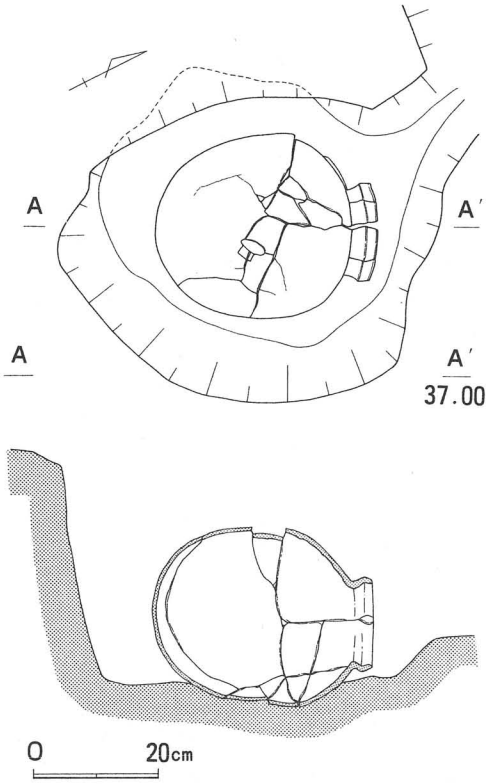
土器棺墓

土器棺墓は４基検出しており、３基はＥ区西端に位置する後背墳丘１の盛土下地山面から、１基は東へ約20m行った地点の丘陵尾根上平坦面から検出した。

１号土器棺墓（第99図）

Ｅ区西端の後背墳丘１調査後の緩斜面に位置し、Ｎ－５号横穴の後背南西側に当たる。墓壙は長径60cm、短径49cmの楕円形を呈し、深さは36cmを測り、底部は丸底に近い。この墓壙内に土師器の甕形土器を横倒しにして埋葬していた。土器内部やその周辺からは何も出土していない。

甕（第103図１）は複合口縁を有するもので、口縁部が短く内傾してのび、端部は丸くおさめる。複合口縁部の稜はやや鈍いものである。体部最大径が中央付近にあり、底部は丸底を呈している。



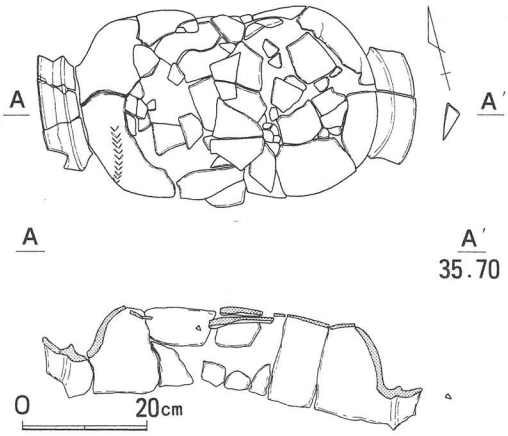
第99図　1号土器棺実測図

これらの特徴から１号土器棺の時期は古墳時代中期前半頃と考えられる。

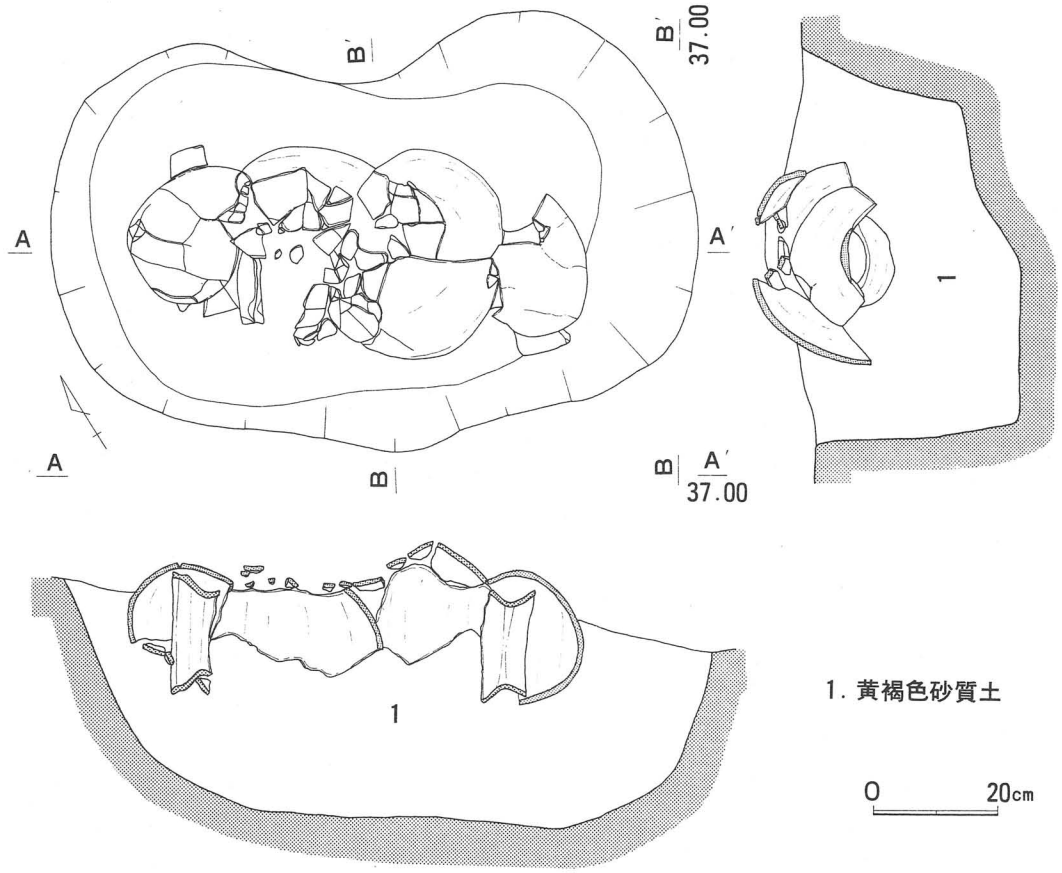
２号土器棺墓（第100図）

１号土器棺の東約10mの丘陵尾根上平坦面に位置するが、墓壙は確認できなかった。土器棺は、土師器の甕形土器を縦に真二つに割り、口縁部を正反対に向けて伏せたもので、長さ60cm、幅30cmを測る。本来は墓壙内に納めた遺体を土器片で覆ったものと思われるが、土器片の下方からは、何も出土していない。また、二つに割った土器片の底部を重ねたところに、拳大の石が支えのように置かれていた。

甕（第103図２）は複合口縁をもつもので、口縁部は大きく外傾してのびる。複合口縁部の稜は鈍く厚みを帯びる。体部は倒卵形で底部を欠いている。肩部に羽状文を施すが、半周しか廻っ



第100図　2号土器棺実測図



第101図　3号土器棺実測図

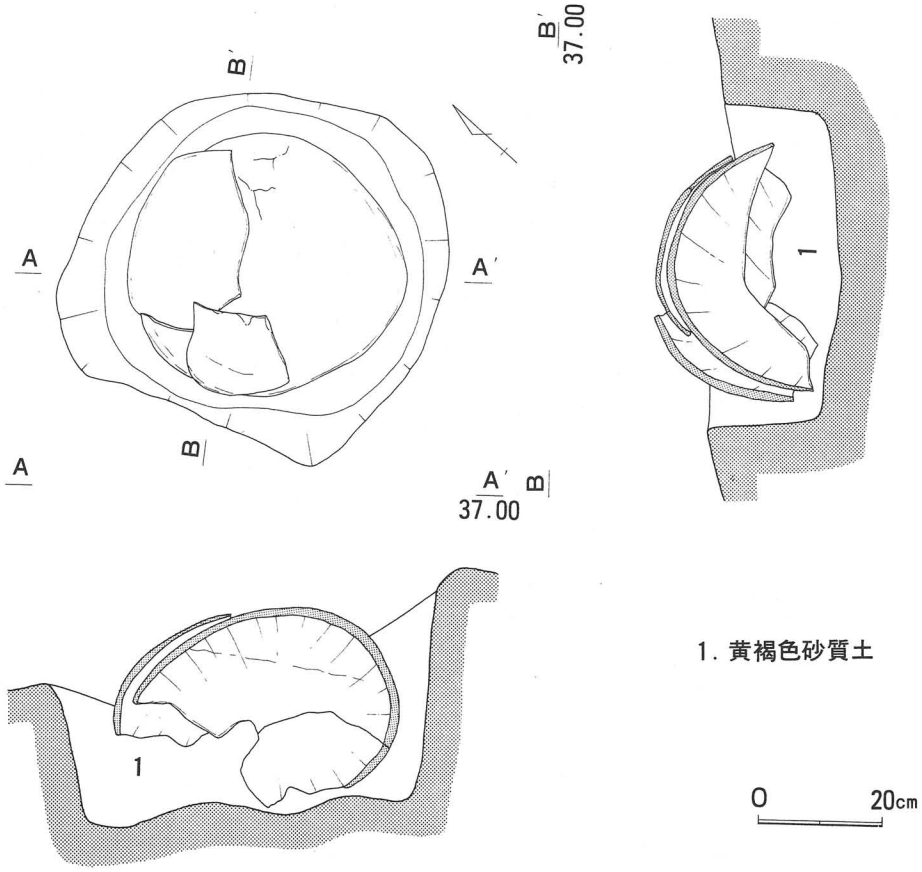
ていなかった。

2号土器棺の時期は古墳時代中期前半頃と考えられる。

3号土器棺墓（第101図）

2号土器棺の西隣で検出した。墓壙は長径1.0m、短径60cm、深さ30cmを測り、平面形は楕円形を呈している。土器棺は3個体の土師器壺・甕形土器で形成されていた。まず、二つの壺・甕形土器（第103図3・5）の底部を割り、一方の底部をもう一方の底部に挿入して重ね合わせて、口縁部が東・西方向の正反対に向くように横方向に置いていた。そして、この二つの口縁部を塞ぐために、残った別の甕形土器（第103図4）を縦に二つに割り、それを東向きの土器口縁（第103図3）には、口縁部を南に向けるようにかぶせ、西側の土器口縁（5）には、北に向けてかぶせていた。土器棺内や墓壙内からは何も出土していない。

3は東側の土器で、単純口縁を有する甕形土器である。口縁部は長く外傾してのび、口縁端部外面に平坦面を作り出す。体部は胴部中央に最大径をもつ。5は西側の土器で、複合口縁を有する壺



第102図　4号土器棺実測図

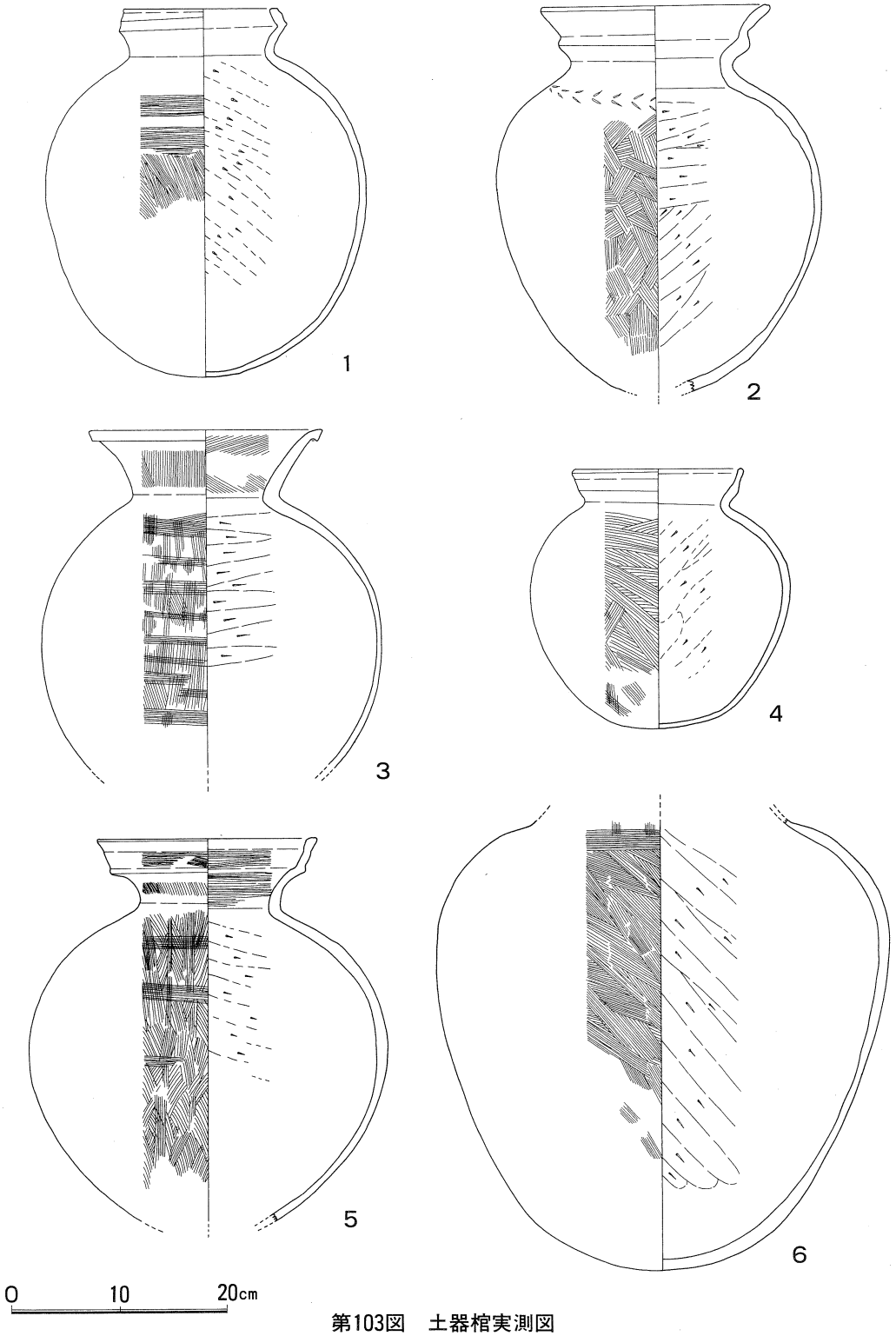
形土器である。口縁部は外傾してのび、端部は若干外側に肥厚して平坦面を作り出す。稜は横に突出しているが、やや鋭さに欠ける。体部は球形に近い。4は縦割りにした甕形土器である。口縁部は複合口縁を有するが、5に比べ稜は鈍く退化している。口縁部も短く外傾している。体部は肩部付近に最大径をもつ。

これらの特徴から3号土器棺の時期は、古墳時代中期前半に属すると考えられる。ただ、3の土器については、当該期の類例がないため詳細な時期については判断できなかった。

4号土器棺墓（第102図）

ＳＩ－05の東に位置する。墓壙は径60cm、深さ20cmで円形に近く、底面は凸凹している。土器棺は、土師器の壺か甕形土器であるが、口縁部は取り除かれていた。この体部だけの土器を、3枚程度の大きな破片に割って、かぶせるように伏せており、2号土器棺と同様、墓壙内に納められた遺体を土器片で覆ったものと考えられる。墓壙内から遺物は何も出土していない。

土器（第103図6）は口縁部を欠くもので、体部は肩部がよく張って底部に至る。底部は丸底を呈



第103図　土器棺実測図

している。

4号土器棺の時期については、口縁部を欠くため判断しがたいが、体部の形態や調整などからみて、概ね他の土器棺と同時期頃と考えられる。

1号墓（第104図）

横穴群の存在する東西に延びる丘陵が、南北に延びる丘陵と交差してT字形を呈しており、その南北方向の丘陵南端尾根上に位置し、標高は臼コクリ遺跡の中で最高所の56mを測る。尾根の幅は約13m程で、尾根幅いっぱいに築造されていた。

細粒風化花崗岩の岩盤を削り出して地山整形した後、若干盛土を施して墳丘を造り出している。墳丘の規模は、長軸で上端11.0m、下端15.0m、短軸で上端6.5m、下端9.0mを測り、いびつな楕円形を呈していたが、かなり流出しており、本来は長方形を呈していたものと思われる。検出時の高さは約1.3mを測る。

墳丘上には、6基の埋葬施設があり、北東墳裾側には、尾根に直交するように溝が設けられていたが、墓域を区画するためのものと考えられる。

〔第1主体部〕（第105図）

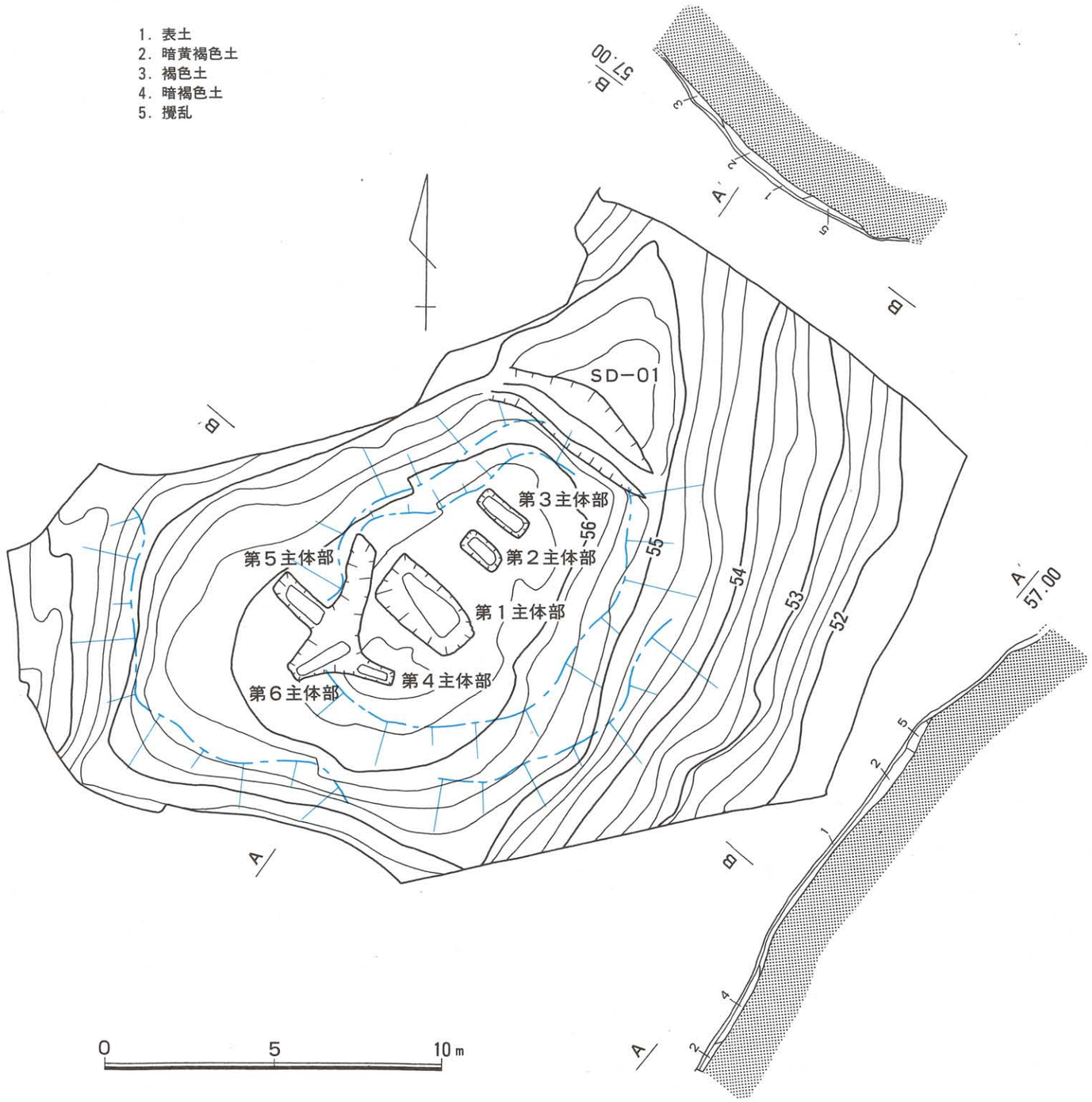
墳丘の中央、やや西寄りにあり、短軸にほぼ平行している。当初、1基の埋葬施設と思われたが、2基の土壙が切り合っていることが判明した。1基は長方形土壙、もう1つは楕円形の土壙であり、長方形の土壙上から掘り込まれていた。長方形土壙は、長軸2.9m、短軸1.2m、深さ8cmを測る。楕円形の土壙は2段掘りで、1段目の掘り方は、長軸2.8m、短軸1.4～0.8m、深さ14cmを測る。1段目の掘り方の底面は、18～30cmの幅でほぼ水平になっている。そこからさらに掘り込まれている2段目の掘り方は、長軸1.15m、短軸70～30cm、深さ30cmを測り、底面は平らに近い。また、この楕円形の土壙は南東側が広く造られていることから、頭位は南東向きであったと思われる。

遺物は楕円形土壙上面から、弥生土器が少量出土している。

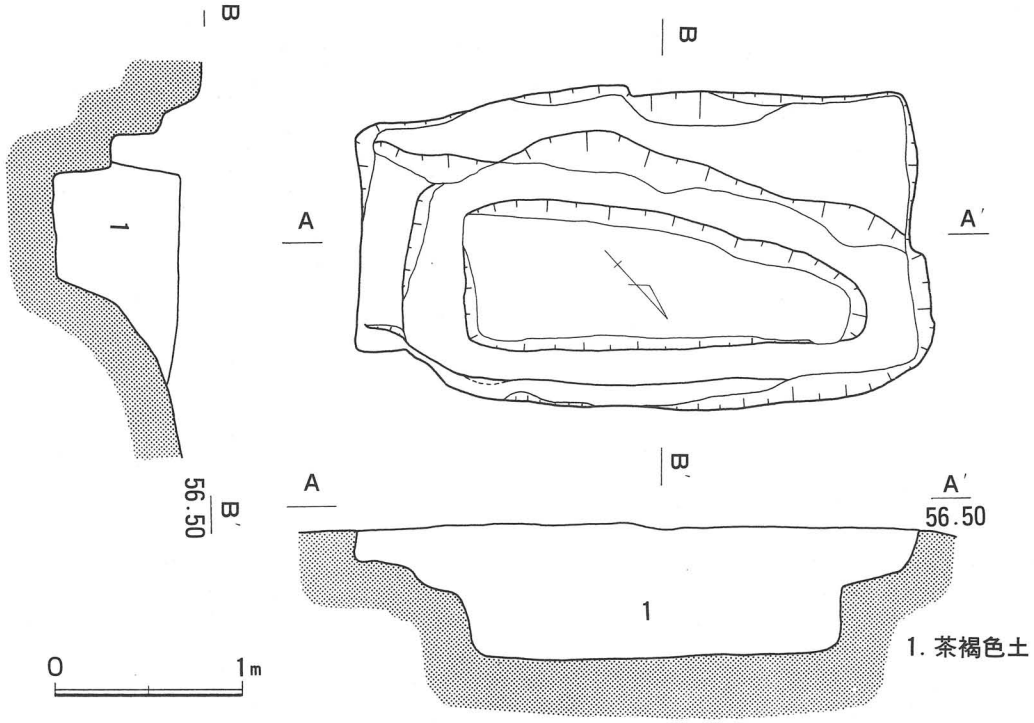
遺物（第109図）　1・2は複合口縁を有する甕形土器である。1は口縁部が直立してのび、端部付近で外傾するもので、複合口縁部の稜は段状を呈している。2は口縁部が短く、やや外傾してのびるもので、複合口縁部の稜は下方に突出している。口縁部外面に平行沈線を施し、1は肩部に平行沈線と貝殻腹縁刺突文を施している。3は鼓形器台の脚台部である。細い筒部からハの字状に開く裾部をもつ。

〔第2主体部〕（第106図）

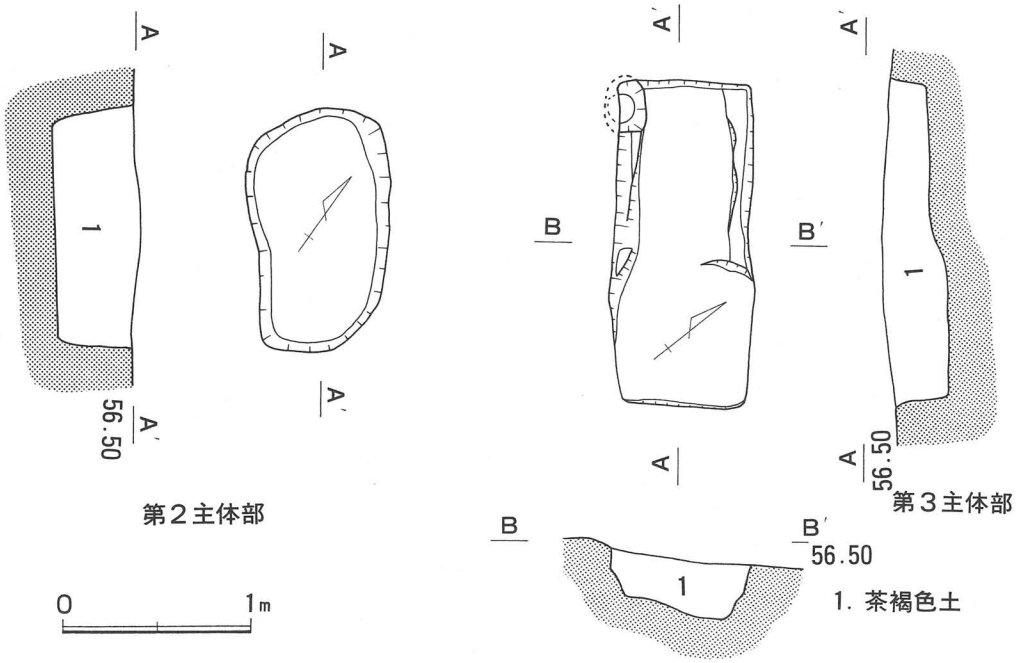
第1主体部の1.2m北東に位置し、墳丘短軸に平行である。長軸1.3m、短軸0.8m、深さ31cmを測り、平面形は楕円形を呈し、底面は平らに近いものである。



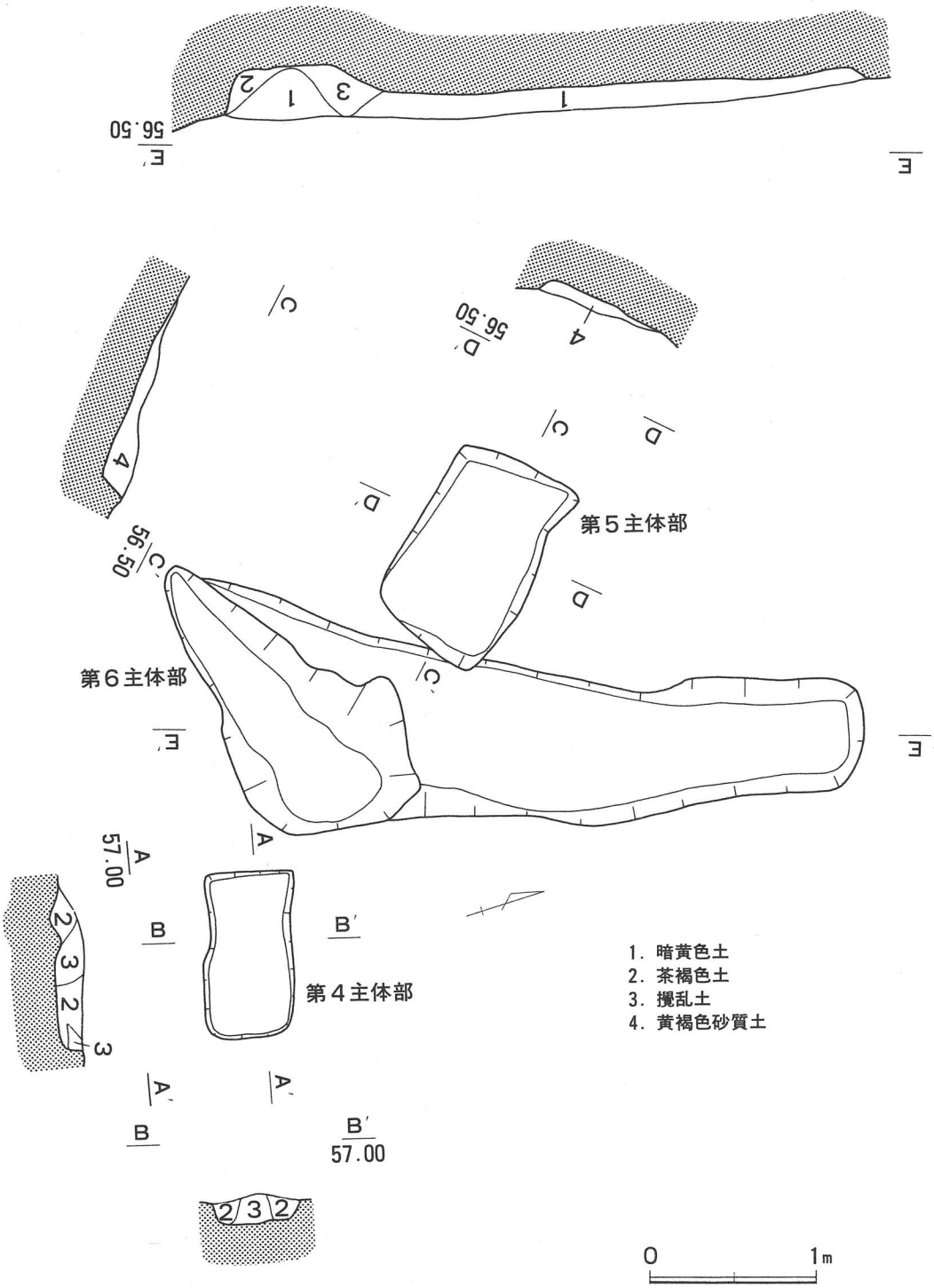
第104図　1号墓調査後測量図



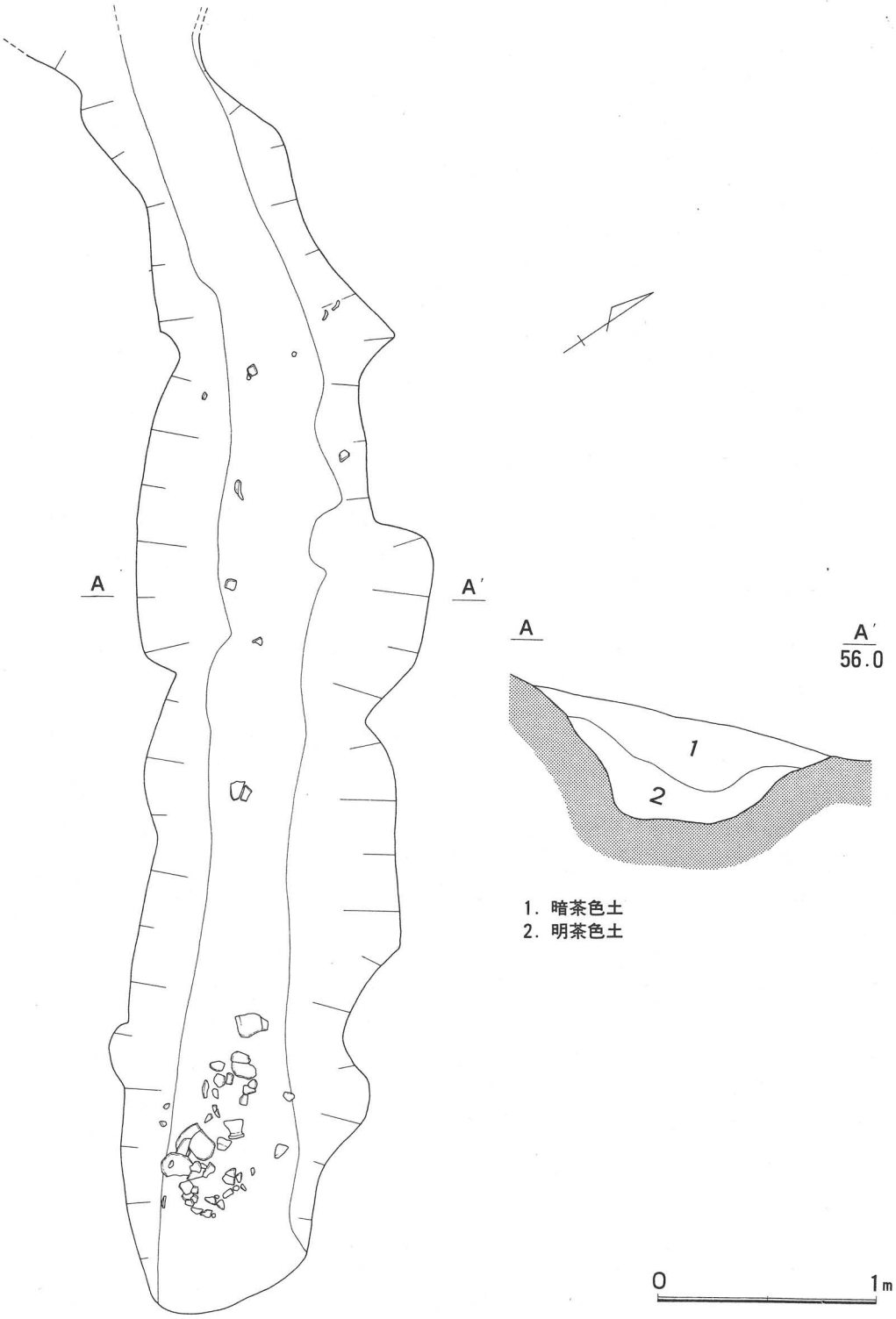
第105図　1号墓第1主体部実測図



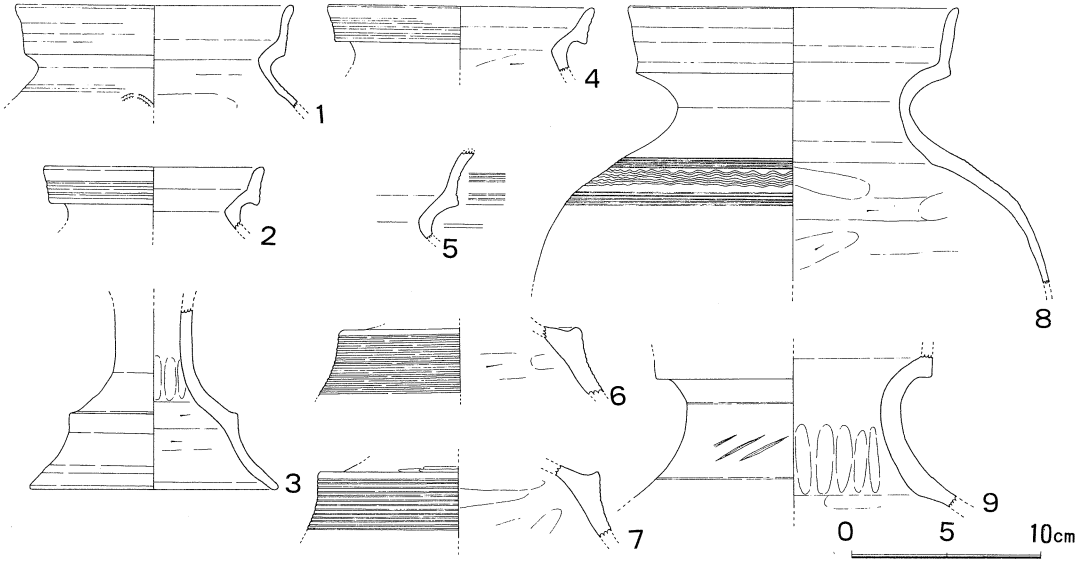
第106図　1号墓第２、３主体部実測図



第107図　1号墓第４、５、６主体部実測図



第108図　1号墓ＳＤ－01遺物出土状況図



第109図　1号墓出土遺物実測図

内部からは何も出土していなかった。

〔第3主体部〕（第106図）

第2主体部の約1.0m北東に位置し、墳丘短軸に平行である。長軸1.75m、短軸0.78m、深さ22cmを測り、平面形は長方形を呈する。底面の北西側は、若干高くなり、幅も狭くなっている。

内部から遺物は何も出土していない。

〔第4・5・6主体部〕（第107図）

第1主体部の西に位置するが、周囲が攪乱されているため、正確な規模は不明である。第4主体部は長軸0.95m、短軸0.5m、深さ15cmを測り、平面形は長方形を呈す。第5主体部は長軸1.25m、短軸0.8m、深さ13cmを測り、平面形は長方形を呈す。第6主体部は長軸2.0m、短軸1.0～0.3m、深さ40cmを測り、平面形は楕円形で東側が広がっている。

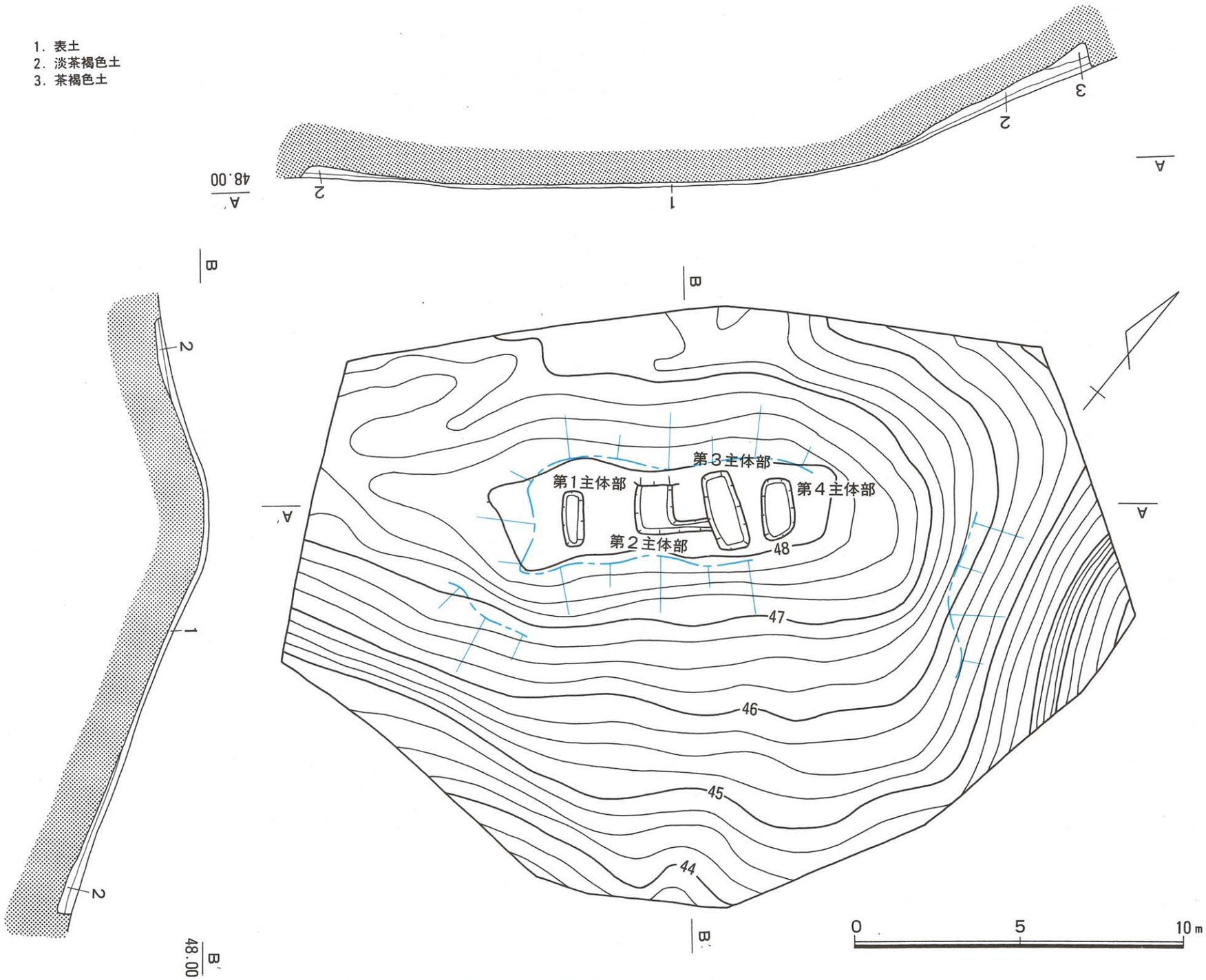
内部から遺物は何も出土していない。

〔ＳＤ－01〕（第108図）

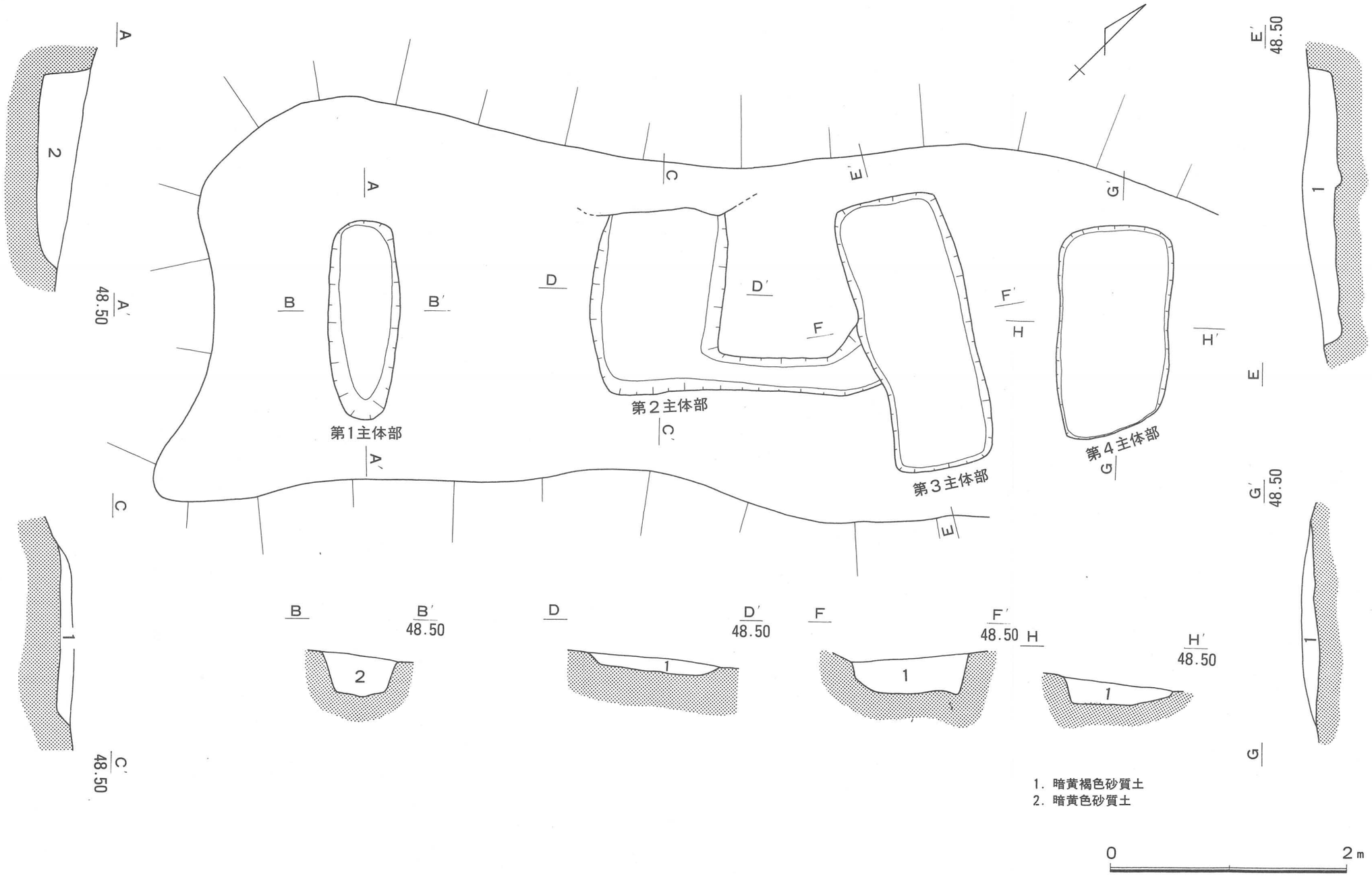
丘陵尾根上に直交して延びる溝で、墓域を区画するためのものと思われる。長さ5.8m、幅0.8～1.4mを測り、やや墳丘側に弧を描くが、ほぼまっすぐに延びる。深さは40～60cmを測り、墳丘側が若干高くなっているが、傾斜をもって掘り込まれていた。底面は平らに近く、中央がやや高くなっている。埋土は2層に分かれ、上層が暗茶色土、下層が明茶色土である。

遺物は底面からと、上層から弥生土器が出土している。

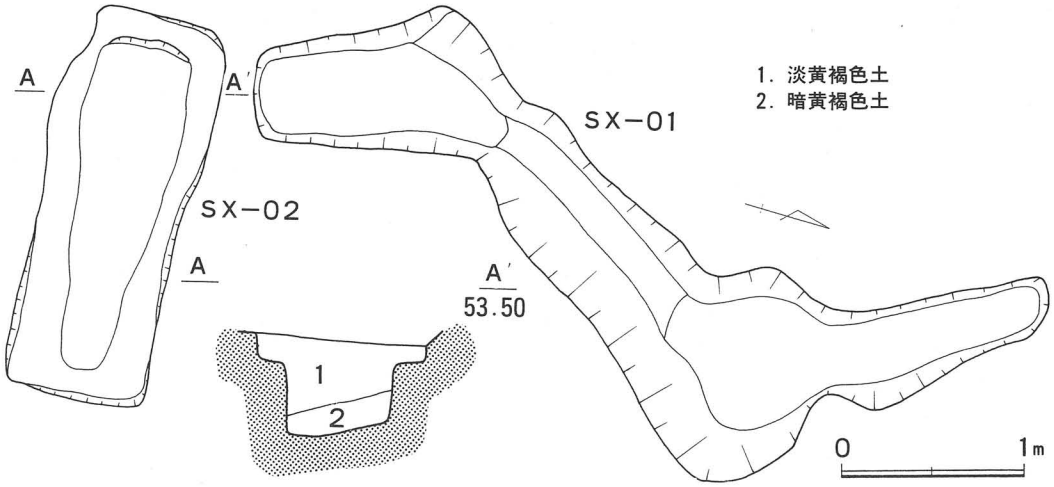
遺物（第109図）　4～7は第1層、8・9は底面出土のものである。4・5は複合口縁を有する甕口縁部である。4は外傾する短めの口縁部をもち、複合口縁部の稜は下方に突出する。5は口縁



第110図　2号墓調査後測量図



第111図　2号墓第1、2、3、4主体部実測図



第112図　SX−01、02実測図

端部を欠くものの、やや長めの口縁部をもち、複合口縁部の稜は横に短く突出する。いずれも外面に平行沈線を施す。6・7は鼓形器台の脚台部で、外面に平行沈線を施している。8・9は複合口縁を有する壺形土器である。8は外傾する口縁部に、横方向に突出する稜をもつ。9の複合口縁部の稜は段状を呈するものである。8の肩部外面には平行沈線と波状文、9は頸部に斜行状の刺突文を施している。

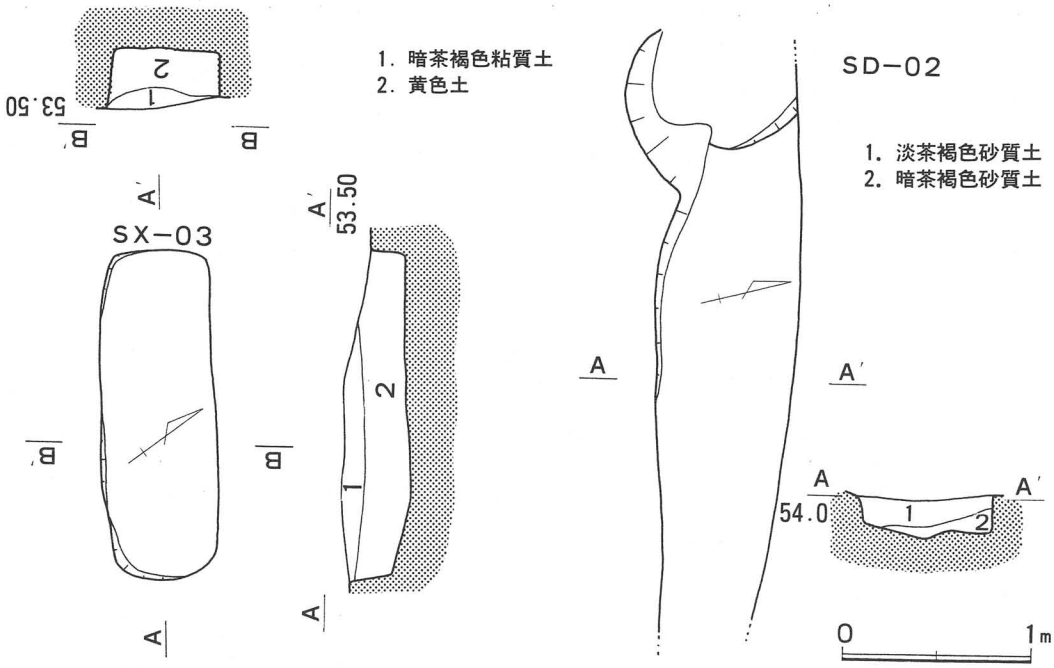
時期

遺物が第1主体部とSD−01しか出土していないため、それぞれの主体部の新古関係については不明であった。第1主体部から出土した土器は、弥生時代後期後半に比定されるもので、1号墓の築造年代もこの時期と推定される。また、SD−01の上層と下層遺物を観察すると、上層は弥生時代後期後半のもので、第1主体部と同時期頃であるが、下層はやや新相を示しており、古墳時代初頭頃と考えられる。このことから判断すると、SD−01は1号墓が造られた後に造られたものと思われ、その後、1号墓の土器が流出して、溝の上層に堆積したものと考えられる。

2号墓（第110図）

南北に延びる丘陵の北側の、標高約48mの尾根上に位置する。おもに自然地形の高まりを利用して造られているため、墳裾が不明であった。

1号墓同様、風化花崗岩の岩盤を少し削りだして地山整形した後、若干盛土を施して、墳丘を築造しているが、大部分が流出していた。墳丘の規模は、上端で長軸9.0m、短軸3.0mを測り、平面形は長方形を呈していたと考えられる。墳丘上から4基の埋葬施設を検出したが（第111図）、周囲に溝などは認められなかった。



第113図　SX−03、SD−02実測図

〔第１主体部〕

墳丘西端に位置し、墳丘短軸方向に平行である。長軸1.7m、短軸0.6m、深さ37cmを測り、平面形は長楕円形を呈するが、北側が若干広くなっている。底面はやや丸みをもつが、小口穴などは認められなかった。埋土は暗黄色砂質土１層である。遺物は何も認められなかった。

〔第２主体部〕

第１主体部の1.6m東に位置する。北側が削られており、残存長で長軸1.6m、短軸1.1m、深さ16cmを測り、平面形は長方形を呈する。底面は平らで、小口穴などは認められなかった。東隅から幅30cm、深さ10cmの溝が第３主体部に向かって延びているが、性格は不明である。埋土は暗黄褐色砂質土１層で、遺物は何も出土していない。

〔第３主体部〕

第２主体部の1.2m東に位置する。長軸2.35m、短軸0.9m、深さ20cmを測り、平面形は長方形を呈している。底面は平らに近く、小口穴などは認められなかった。西側は第２主体部から延びる溝と複合しており、新旧関係は本埋葬施設の方が新しいものである。埋土は暗黄褐色砂質土１層で、遺物は何も出土していない。

〔第４主体部〕

第３主体部の0.7m東に位置する。長軸1.8m、短軸0.94m、深さ13cmを測り、平面形は長方形を

呈す。底面に小口穴などは認められなかった。埋土は暗黄褐色砂質土１層で、遺物は何も出土していない。

時期

２号墓からは遺物が出土していないが、墳丘斜面下方から弥生時代後期後半の土器片が少量であるが出土しており、これが直接２号墓に伴うものかは不確実であるが、墳丘の構築の仕方などから判断して、１号墓と同時期頃と推定される。

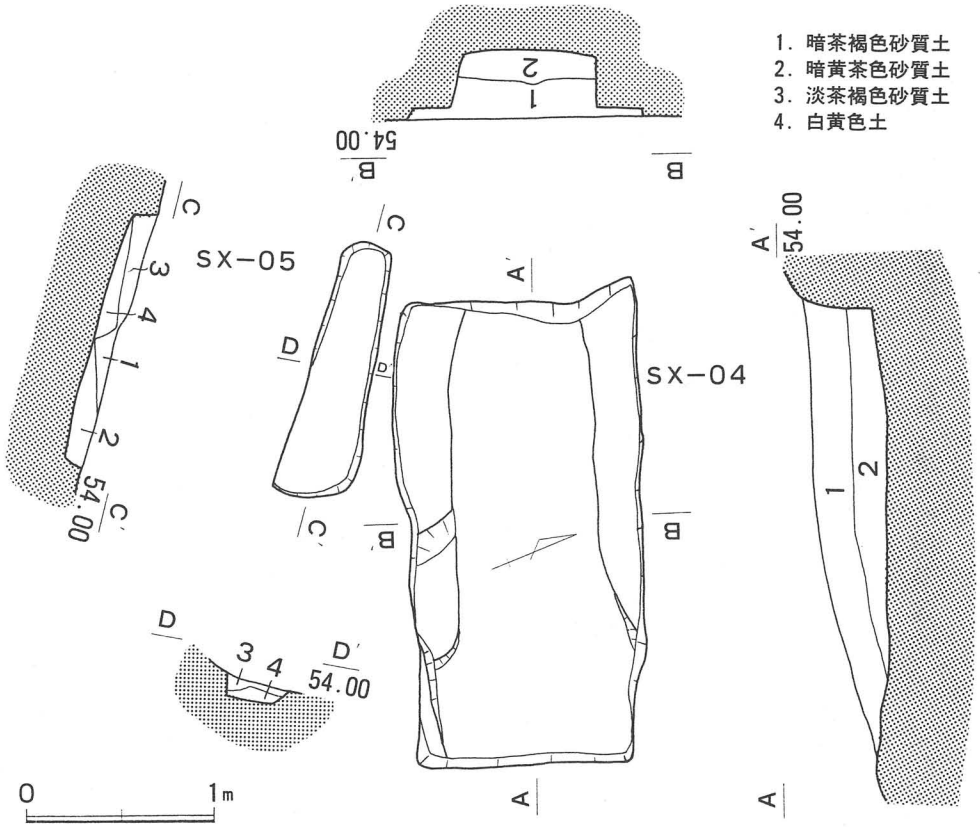
ＳＸ－01（第112図）

１号墓と２号墓の中間に位置し、標高約53mの、「Ｌ」字状に延びる溝の北端で検出した。長軸2.3m、短軸1.0～0.3m、深さ30cmを測り、北側が広く造られている。溝と複合しているが、平面形は楕円形を呈するものと思われる。

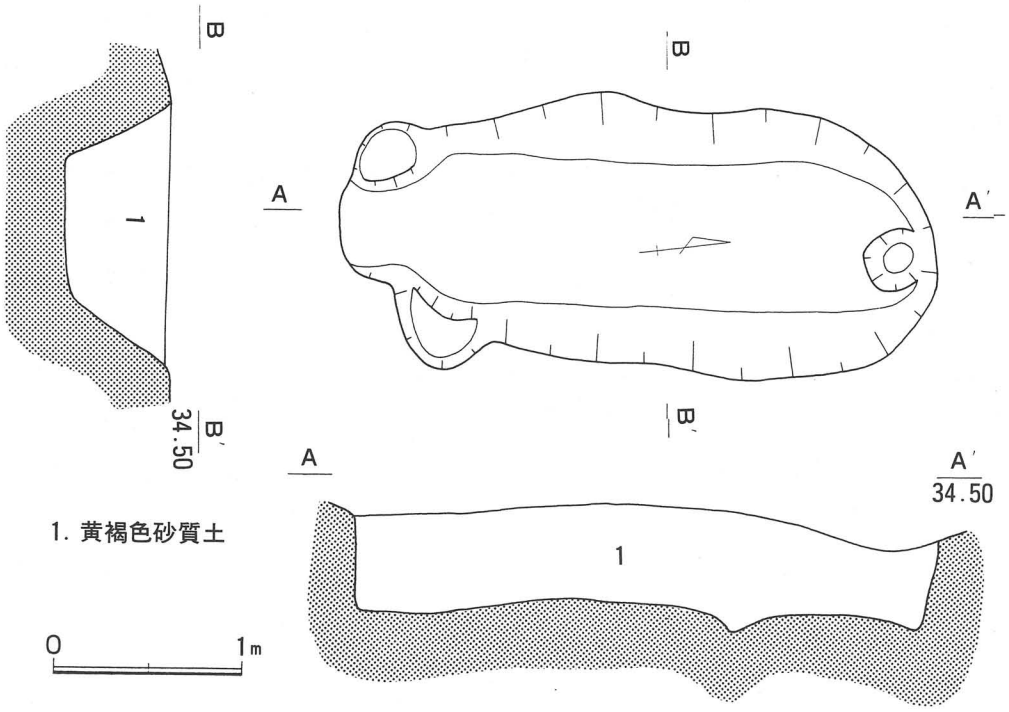
遺物は何も出土してないので時期は不明である。

ＳＸ－02（第112図）

ＳＸ－01の南に位置する。平面形は２段掘りの長方形で、１段目の掘り方は、長軸2.18m、短軸0.8～0.9m、深さ13～17cmを測る。１段目の掘り方のテラス状の底面はほぼ水平で、幅10～24cmを



第114図　ＳＸ－04、05実測図



第115図　ＳＸ－０６実測図

測り、そこから掘り込まれている２段目の掘り方は、長軸1.9m、短軸0.5～0.25m、深さ30～42cmを測る。底面は長軸1.82m、短軸0.5～0.25mを測り、北側が高くなっている。また、壁面は垂直気味に掘り込まれていた。１段目の掘り方から底面までの深さは最大で59cmを測り、埋土は２層に分かれ、遺物は上層から壺形土器と把手が出土している。また、本埋葬施設の南１mの地山面から特殊器台の破片が出土しており、注意を引いた。

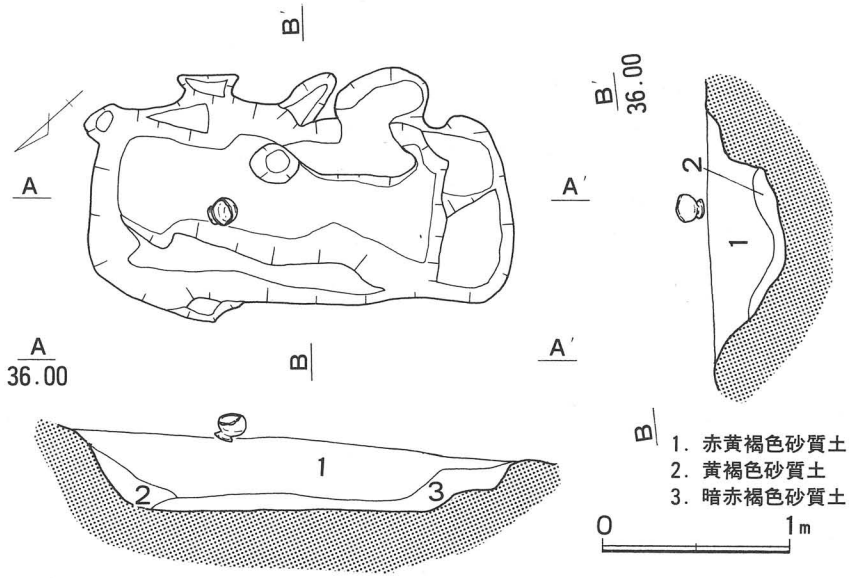
遺物　壺形土器（118図１）は口縁部と胴部を欠くものであるが、複合口縁を有する。複合口縁部の稜はやや下方に突出する。把手（２）は磨滅が著しいが甑形土器のものか。特殊器台（７）は脚台部の破片である。脚部は短く内傾するもので、端部は丸みをもつ。裾部との変換点には、つまみ出した形の突帯が廻る。脚部内外面はヨコナデ、裾部内面にヘラ削りを施す。裾部外面には沈線文が廻り、鋸歯文で飾られる。外面に丹の痕跡が認められる。

ＳＸ－03（第113図）

ＳＸ－02の南方に位置する。長軸1.85m、短軸0.6m、深さ22～30cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平らで、壁面は垂直気味に掘り込まれている。埋土は２層に分かれるが、内部からは何も出土していないため、時期は不明である。

ＳＸ－04（第114図）

ＳＸ－03の南方に位置するが、東側は削られて低くなっている。平面形は長方形で、南北側面に



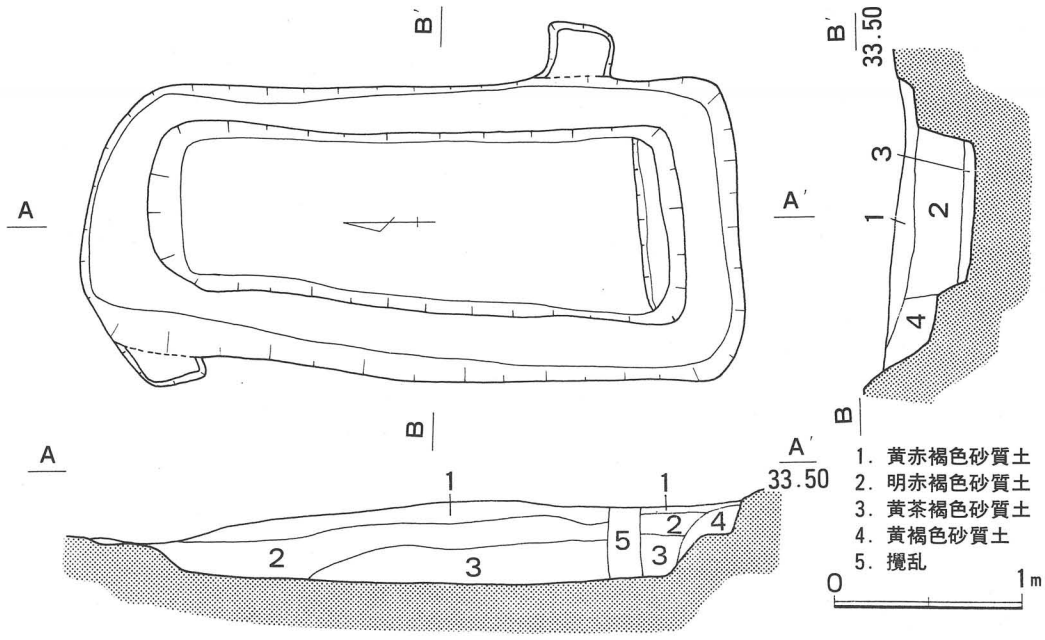
第116図　ＳＸ－０７実測図

はテラスをもっており、長軸2.45m、短軸1.1～1.3m、深さ６～42cmを測る。側面のテラスは上面から５～10cmの深さにつくられ、幅24cmで、東側は削られている。底面に小口穴は認められない。埋土は２層に分かれ、上層から低脚坏の脚部が出土している。時期は弥生時代後期後半～古墳時代初頭と思われる。

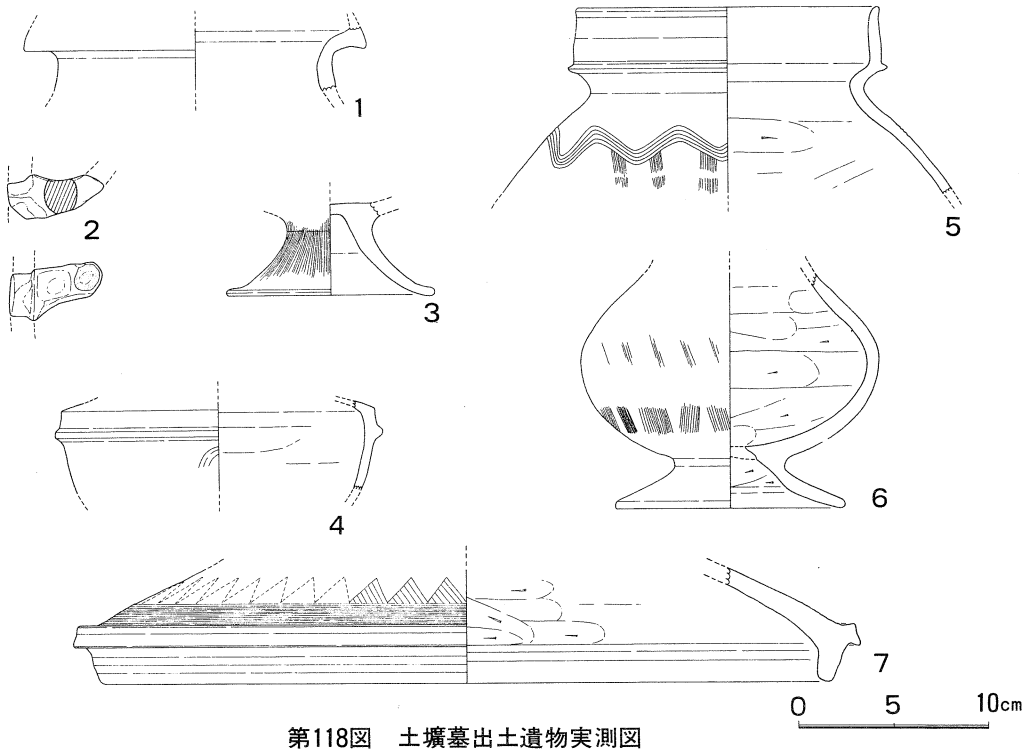
遺物　低脚坏（第118図３）は脚部のみで、ハの字状に開く脚部で、外面にハケ目を施す。

ＳＸ－05（第114図）

ＳＸ－04の南隣りで検出した小さな土壙墓である。長軸1.4m、短軸0.24～0.4m、深さ20cmを測



第117図　ＳＸ－０８実測図



第118図　土壙墓出土遺物実測図

り、東側が広く作られ、平面形は長楕円形を呈する。底面に小口穴等は認められなかった。遺物も出土していないため、時期については判断できなかった。

ＳＤ－02（第113図）

ＳＸ－05の南で検出した。長さ3.2m、幅0.78m、深さ25cmを測り、西端は攪乱されていた。埋土は２層に分かれているが、遺物は何も出土していないため、時期については判断できなかった。

ＳＸ－06（第115図）

ＳＢ－04・05の南側で検出した。周辺には多数のピットがあり、本埋葬施設もその影響を受けていた。長軸2.2m、短軸1.4m、深さ54cmを測り、平面形は長楕円形を呈す。埋土は黄褐色砂質土１層であり、遺物は何も出土していない。時期については判断できなかった。

ＳＸ－07（第116図）

後背墳丘１調査後の地山面で検出した。長軸2.2m、短軸1.1m、深さ40cmを測り、平面形は攪乱を受けているが、長方形を呈している。底面・側面も攪乱のため凸凹しており、小口穴などは不明であった。掘り方上面にはワイングラス状の土器が供献されており、また、本埋葬施設周辺から、壺形土器と甕形土器が出土している。時期は弥生時代後期後半頃と考えられる。

遺物（第118図）　６は土壙墓上面出土のワイングラス状の土器で、ハの字に開く脚部をもつ。口縁部を欠くが、体部は玉葱形を呈している。４は体部に突帯を廻らせる壺形土器で、突帯の下に刺

突文を施しており、特殊壺の類と思われる。５は複合口縁の甕である。稜は鋭く横に突出し、口縁部は垂直気味にのびる。胴部下半を欠くが、外面に波状文とハケ目を施す。

ＳＸ－08（第117図）

調査区西端に位置し、後背墳丘の西側斜面で検出した。平面形は２段掘りの隅丸長方形を呈している。１段目の掘り方は、長軸3.5m、短軸1.6m、深さ６～22cmを測る。１段目の底面はほぼ水平で、幅は18～22cmである。そこからさらに掘り込まれている２段目の掘り方は、長軸2.84m、短軸0.8～1.06m、深さ18～30cmを測る。底面の規模は、長軸2.6m、短軸0.7～0.94mを測り、１段目の掘り方上面から底面までの深さは、最大で42cmを測る。底面南側には幅14cm、深さ２～３cmの小口穴が認められた。

遺物は何も出土していないため、時期については判断できなかった。

ＳＩ－01（第119図）

調査区西端斜面から検出した。西側半分は流出し、南側はＳＩ－03によって切られていた。平面形は残存部分から推定すると円形を呈すると思われ、床面規模は残存長で南北軸3.7m、東西軸3.0mを測り、床面標高は32.3mである。壁高は東壁側で最大60cmを測り、やや傾斜して立ち上がる。周溝は幅６～26cm、深さ６cmで、壁沿いに廻っている。床面はほぼ平坦であるが、西端は削平されて傾斜している。柱穴は５個検出しているが、主柱穴に対応するものは確定できなかった。柱穴の上縁径は30～70cm、深さは10～47cmを測る。

遺物は何も出土していないため、時期については判断できなかった。

ＳＩ－02（第120図）

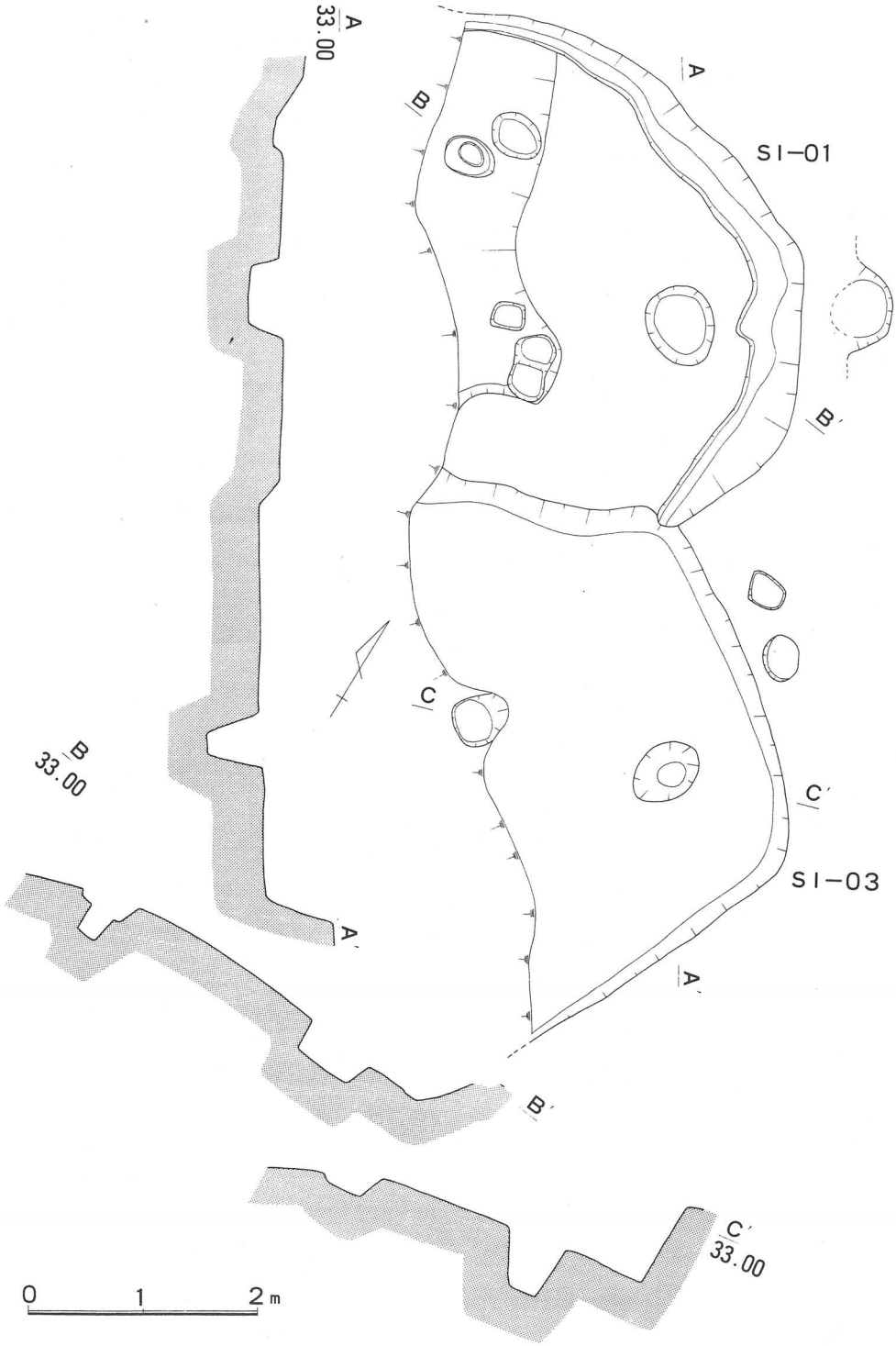
調査区西端の、南向き斜面で検出した。２棟の住居跡が切り合っており、新旧関係で、新しい方を02ａ、古い方を02ｂとする。

（ＳＩ－02ａ）　南側は削平されていたが、平面形は復元すると、五角形を呈すると思われる。床面規模は残存長で東西軸5.0m、南北軸3.4mを測り、床面標高は29.2mである。壁高は北壁隅で最大66cmを測り、やや傾斜して立ち上がる。壁沿いに周溝等は認められなかった。床面はほぼ平坦であるが、南端部分は若干傾斜していた。

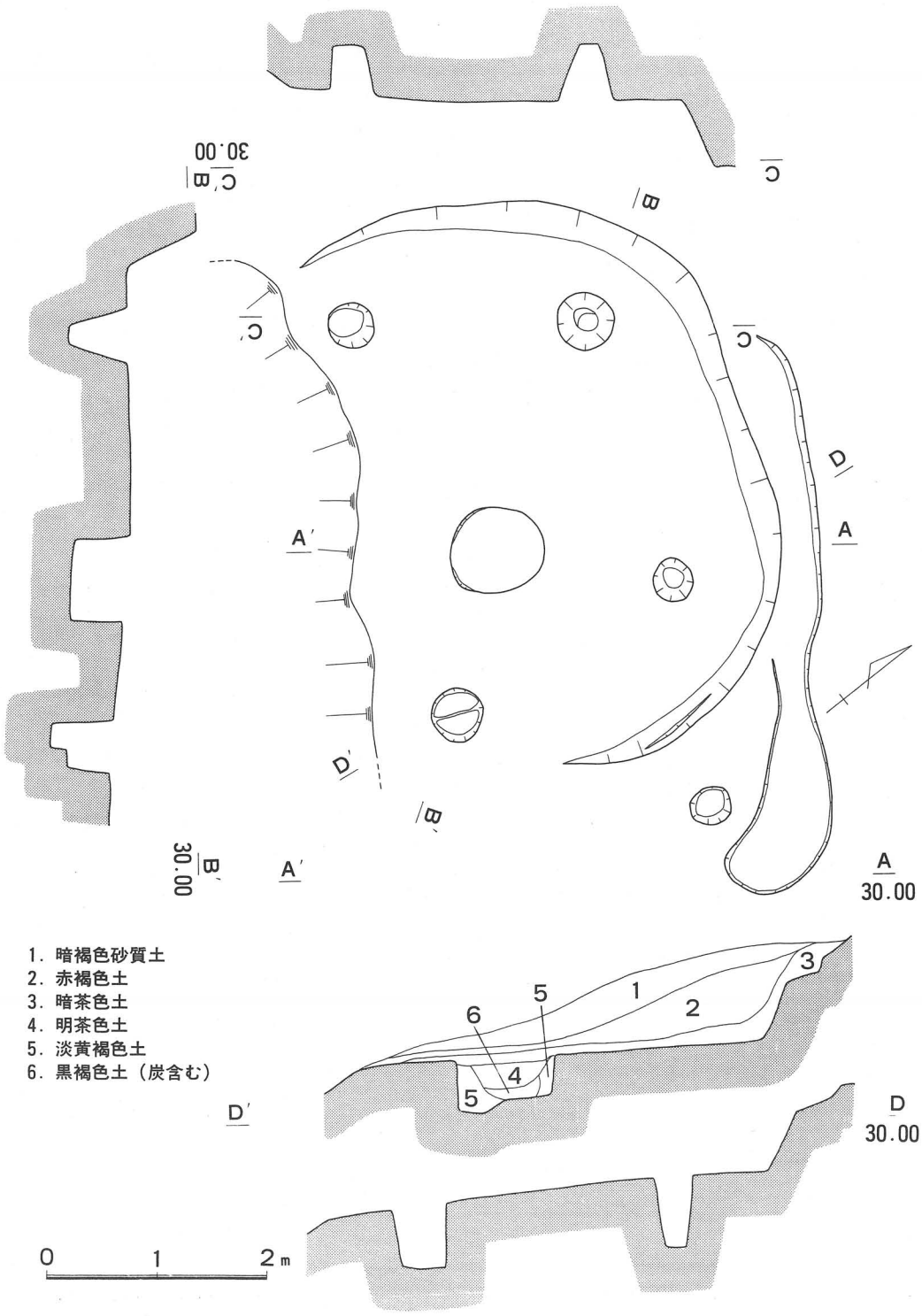
床面から柱穴４個と中央ピット１個を検出した。柱穴の上縁径は40～50cm、深さ44～64cmを測り、柱穴間の間隔は2.2～2.5mを測る。中央ピットは円形で、径約84cm、深さ61cmを測り、壁面側に黒褐色土（炭入り）が堆積していた。

遺物は床面付近から弥生土器の甕７点と高坏１点が出土している。

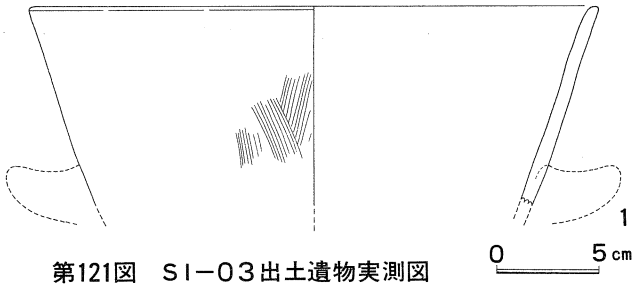
（ＳＩ－02ｂ）　02ａの北壁側、約70cm高い位置で検出した。幅36～64cm、長さ約5.0m、深さ約14



第119図　SI−01、03実測図



第120図　SI－02実測図



第121図　SI－03出土遺物実測図

cmの溝と、径36cm、深さ42cmのピットのみ検出したが、平面形は判断できなかった。

遺物は何も出土していない。

出土遺物（第122図）

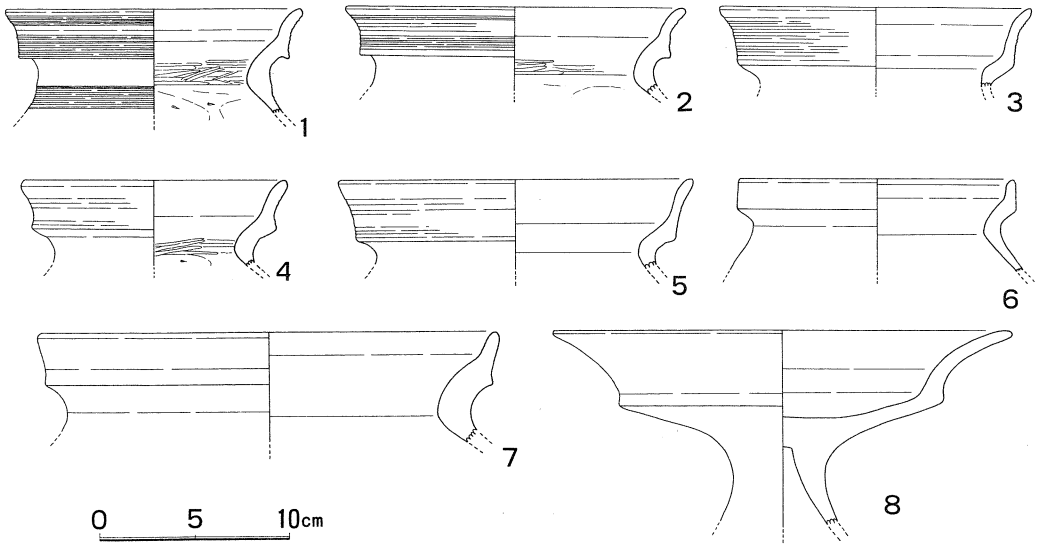
甕（1～7）は、外反してのびる口縁部で、外面に平行沈線を施すもの（1～5）と、直立気味にのびる口縁部で、平行沈線を施さないもの（6・7）があり、いずれも口縁部片だけであった。高坏（8）は、口縁部と底部の境に段を有するものであり、口縁部は外反して開く。これらの遺物の時期は、弥生時代後期後半頃と考えられる。

ＳＩ－03（第119図）

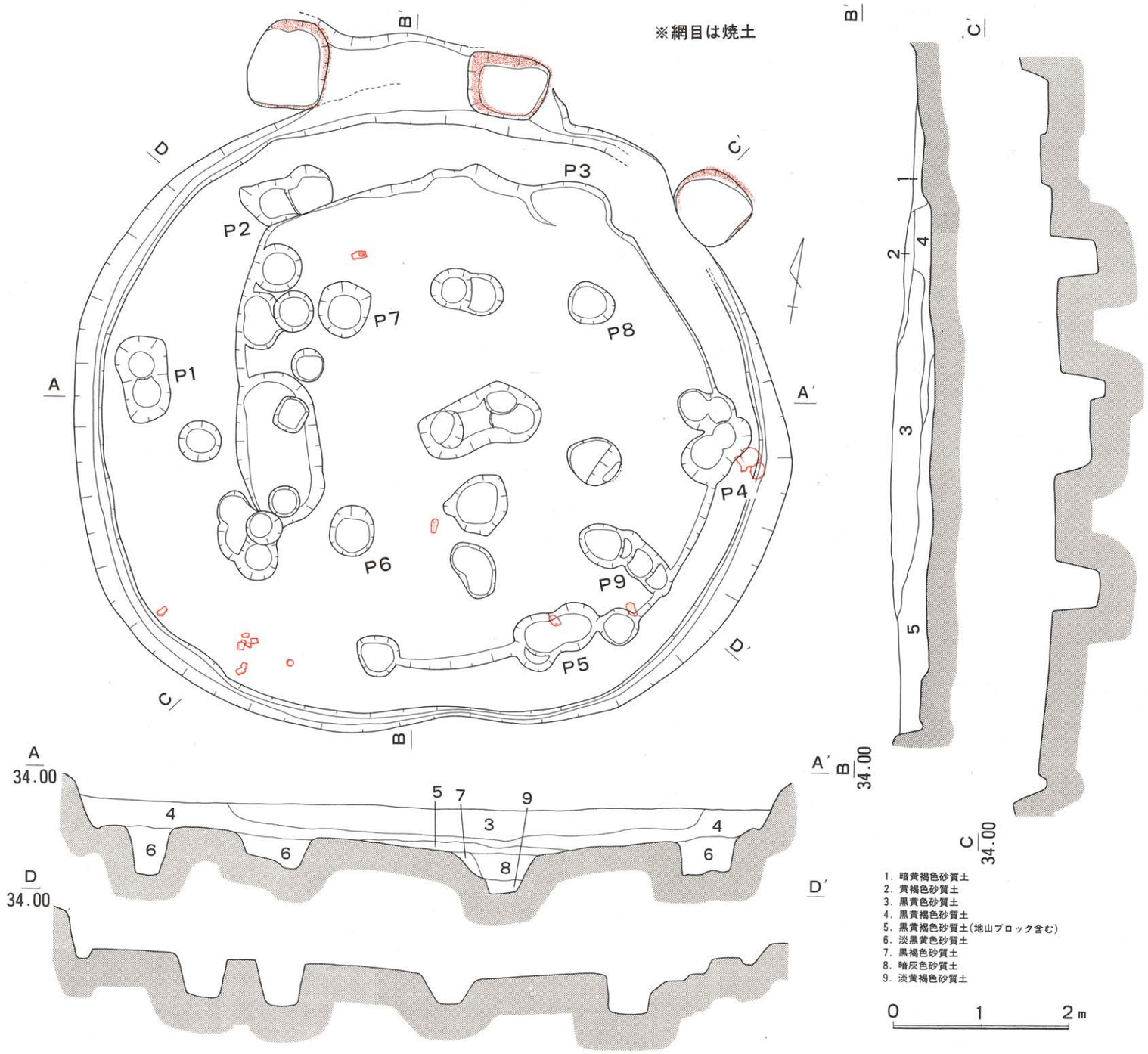
調査区西端で、ＳＩ－01と切り合っている竪穴住居跡である。ＳＩ－01の南側を少し削って掘り込まれており、床面の高さはＳＩ－01より、約20cm低く位置する。南側半分は削平されていたが、平面形は東・西壁が外に広がっていることから推定すると、六角形を呈していたと思われる。床面規模は残存長で東西軸4.6m、南北軸2.4mを測る。壁高は北壁で最大77cmを測り、垂直気味に立ち上がるが、壁沿いに溝等は認められなかった。床面はほぼ平坦で、地山を削り床としており、貼り床等は確認できなかった。柱穴は２穴検出しており、径50～64cm、深さ23～44cmを測る。

遺物は床面から土師器甑が出土している。

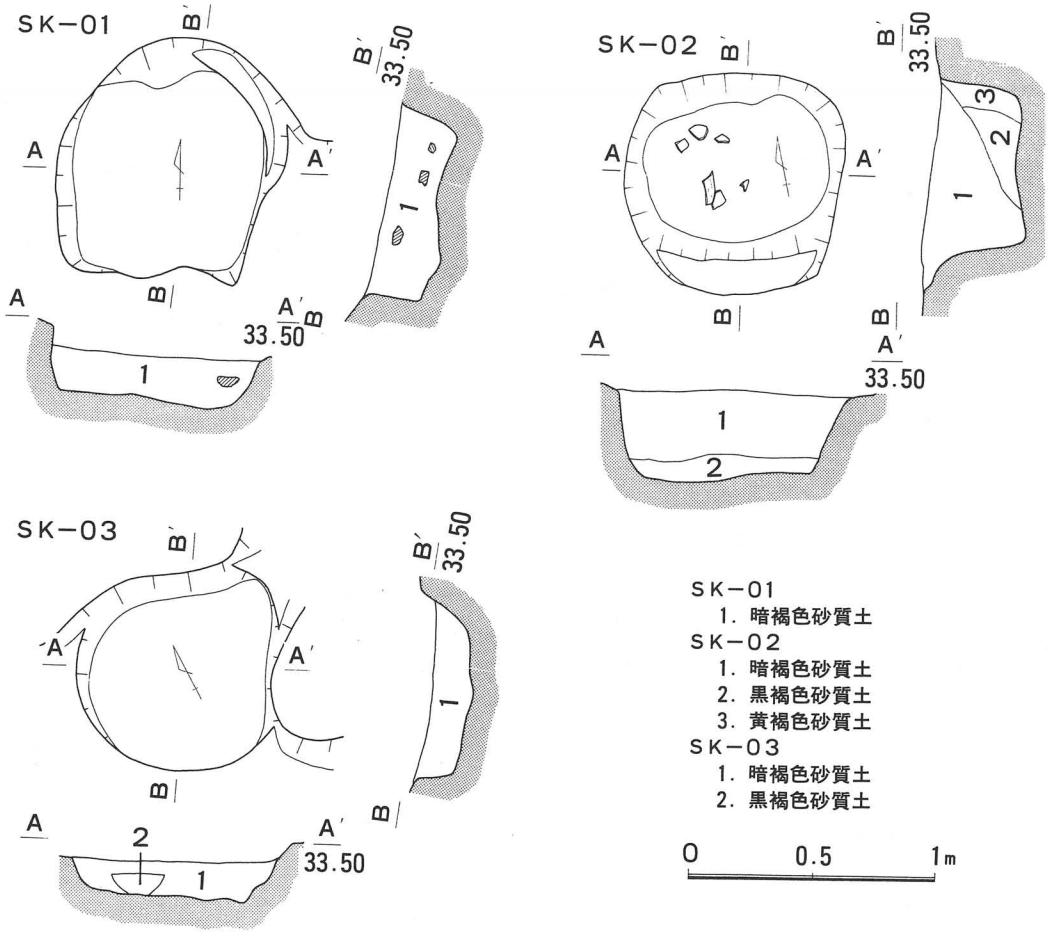
出土遺物（第121図）



第122図　SI－02出土遺物実測図



第123図　SI−04実測図

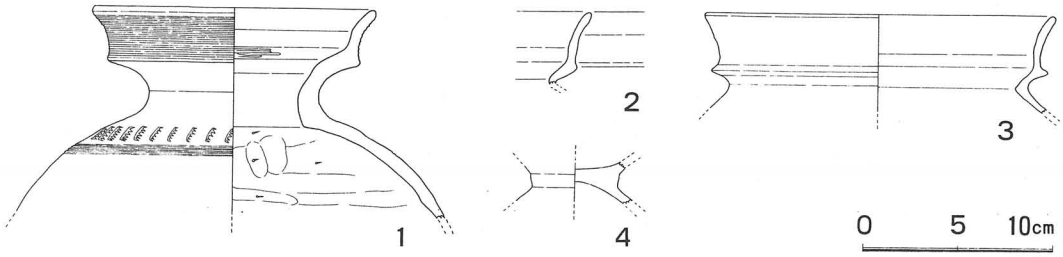


第124図　SK−01、02、03実測図

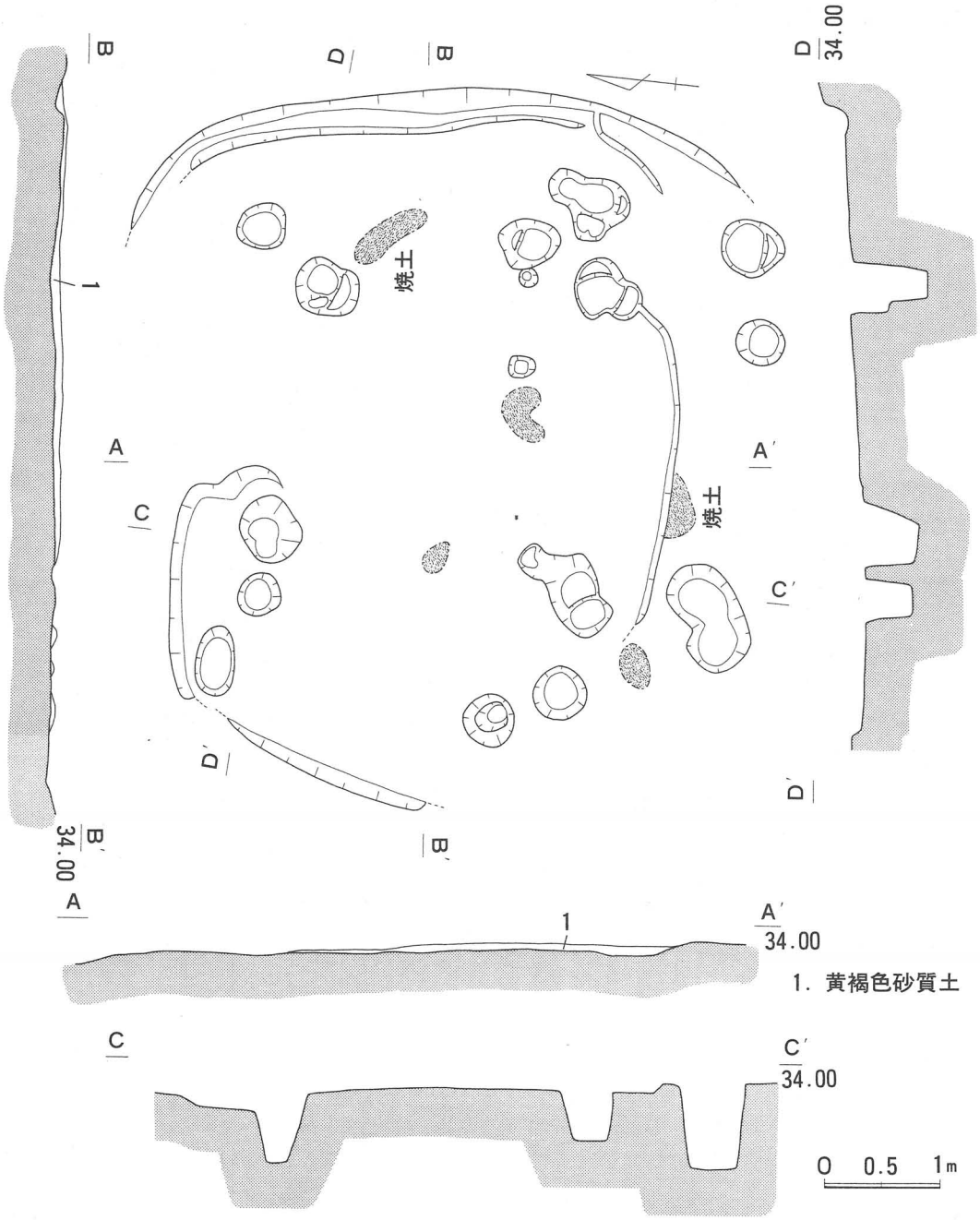
甑は把手を欠くが、体部に痕跡が認められた。口縁部は外傾してのび、端部は平坦に近い。外面にハケ目が施される。時期は古墳時代前期〜中期頃と考えられる。

SI−04（第123図）

調査区西端、後背墳丘1より東の尾根上平坦面に位置する竪穴住居跡である。住居内には多数の柱穴を検出したが、その柱穴を切るように、浅い円形の掘り込みが認められた。これは建て替えが



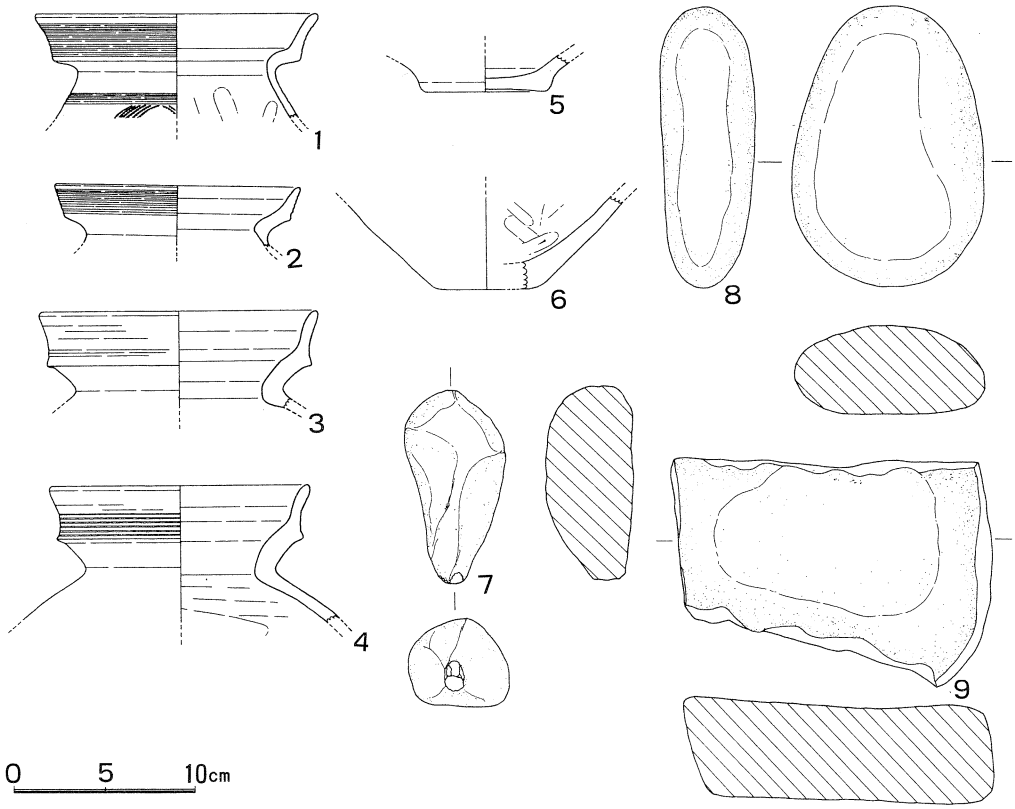
第125図　SI−04出土遺物実測図



第126図　SI－05実測図

行われたことを示しており、建て替え前をＳＩ－04ａ、建て替え後をＳＩ－04ｂと呼称する。また、北壁側は３個の焼土土壙と切り合っており、これらを西から順にＳＫ－01～03とする。

（ＳＩ－04ａ）



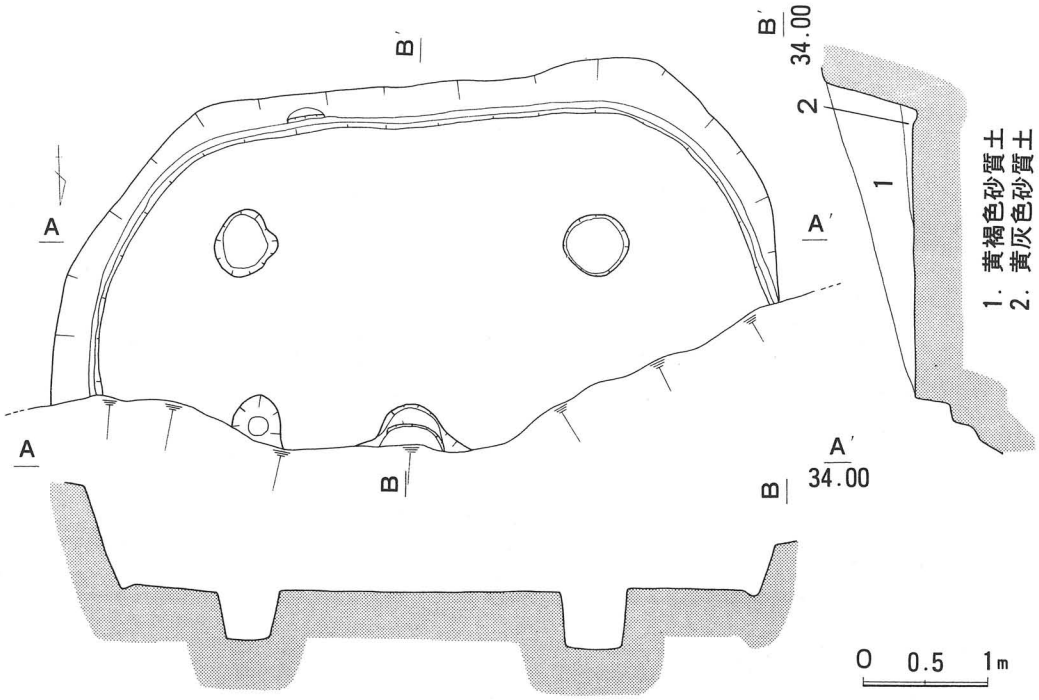
第127図　SI－05出土遺物実測図

平面形は円形を呈し、東西軸8.2m、南北軸7.2mを測り、床面標高は33.2mである。壁高は西壁で最大54cmを測るが、北壁側は3個の土壙によって壁が削られていた。壁沿いには幅約12cm、深さ7～8cmの溝が廻っている。床面の遺存状態は不良であったが、ほぼ平坦に作られており、貼り床等は認められなかった。

床面で柱穴を多数検出しており、主柱穴はP1～P5の5本が対応するものと思われるが、本来は6本柱であったと考えられる。これらは04bによって若干削られているが、平面形が不整形で、底面が2段ないしは、ひょうたん形を呈していることから、建て替えの際に柱を抜き取ったものと考えられる。柱穴の規模は、長軸1.0m、短軸54～60cmを測り、深さは36～64cmを測る。柱穴の間隔は2.8～3.0mである。

（SI－04b）

平面形は円形を呈するもので、東西軸5.4m、南北軸5.6mを測り、規模が縮小されて建て替えられている。床面の高さは04aより約8cm低く、周りに溝は廻っていなかった。また、貼り床等の痕跡も認められなかった。



第128図　SI－06実測図

多数の柱穴のうち、主柱穴はＰ６～Ｐ９の４本が対応するものと思われ、上縁径46～62cm、深さ43～53cmを測り、柱穴の間隔は2.6～2.8mを測る。また、これら主柱穴の中央で、中央ピットを検出した。平面形は不整形で、長軸1.4m、短軸0.74m、深さ29～52cmを測る。内部からは、少量の土器片が出土している。

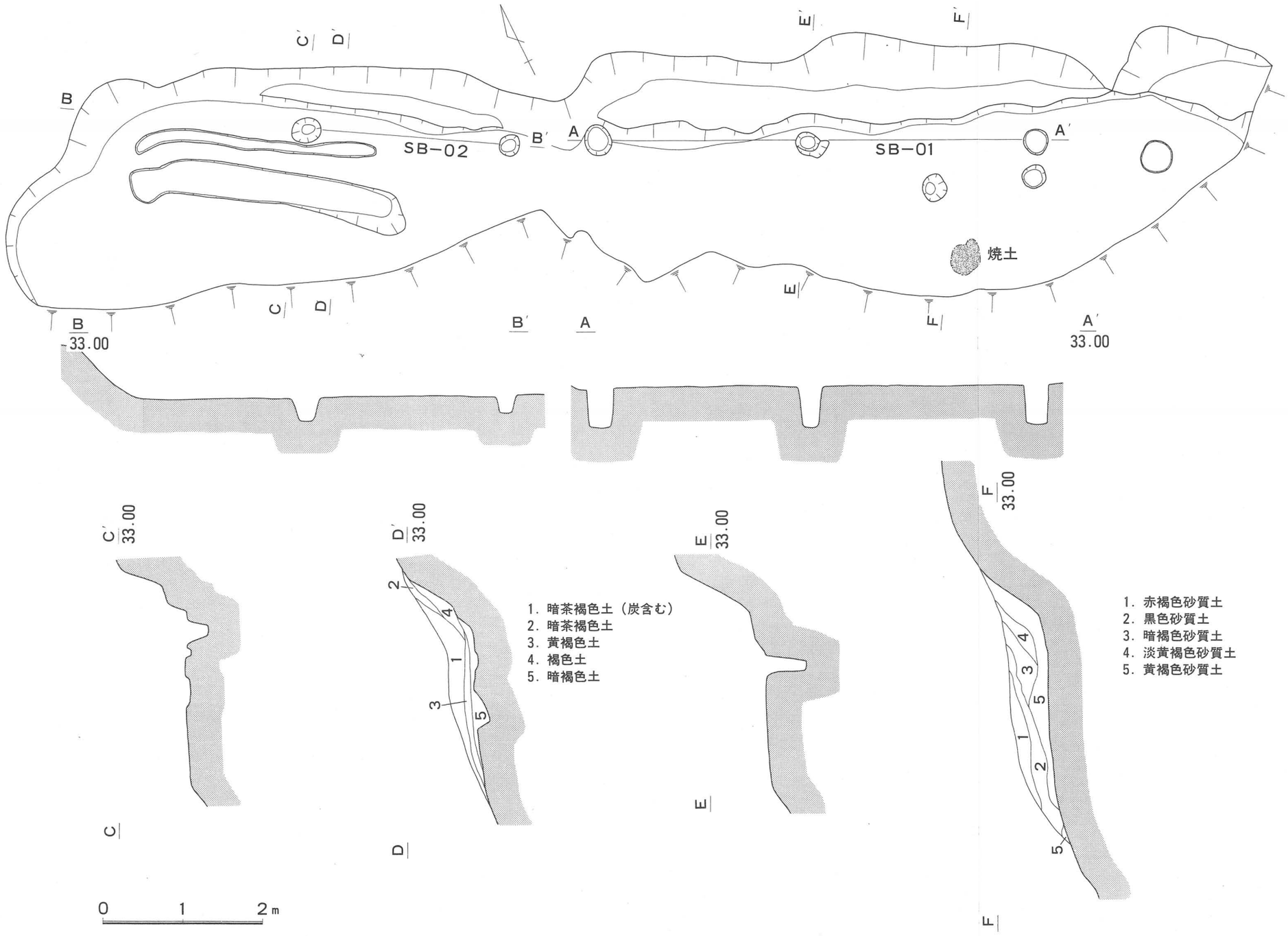
（焼土土壙）（第124図）

ＳＫ－01は、長軸1.0m、短軸0.9m、深さ34cmを測り、平面形は隅丸方形を呈している。壁面は焼土化していたが、底面には認められず、また、炭等も認められなかった。内部には拳大の礫が約10点程入っていた。ＳＸ－02は、長軸0.9m、短軸0.7m、深さ44cmを測り、平面形は隅丸方形状を呈している。壁面のみが焼土化しており、内部からは須恵器甕片が出土している。ＳＸ－03は、径0.85×0.8m、深さ27cmを測り、平面形は円形に近い。壁面が薄く焼けていたが、内部に炭等は認められなかった。

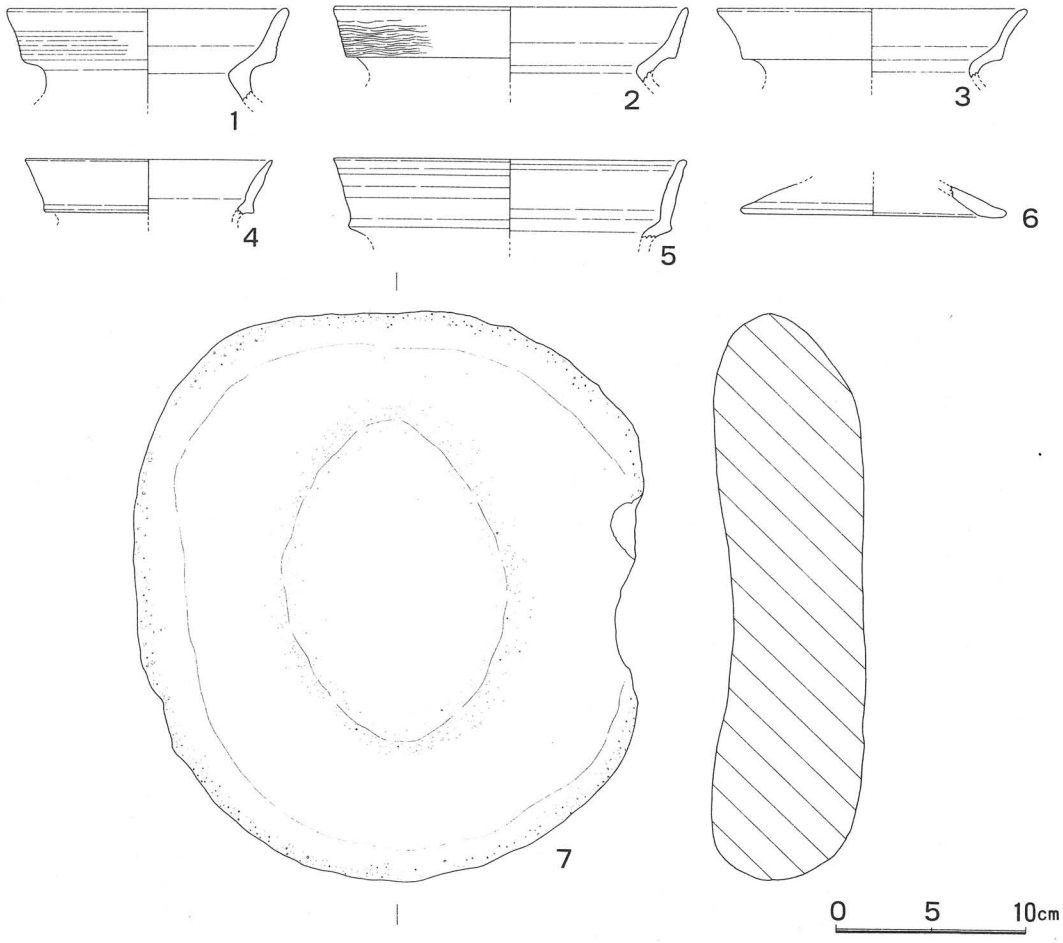
出土遺物（第125図）

床面遺物で図化できたものは、壺形土器１、甕形土器２、低脚坏１であった。壺形土器（１）は、

第129図　SI－06出土遺物実測図



第130図　E区SB−01、02実測図



第131図　ＳＢ－01、02出土遺物実測図

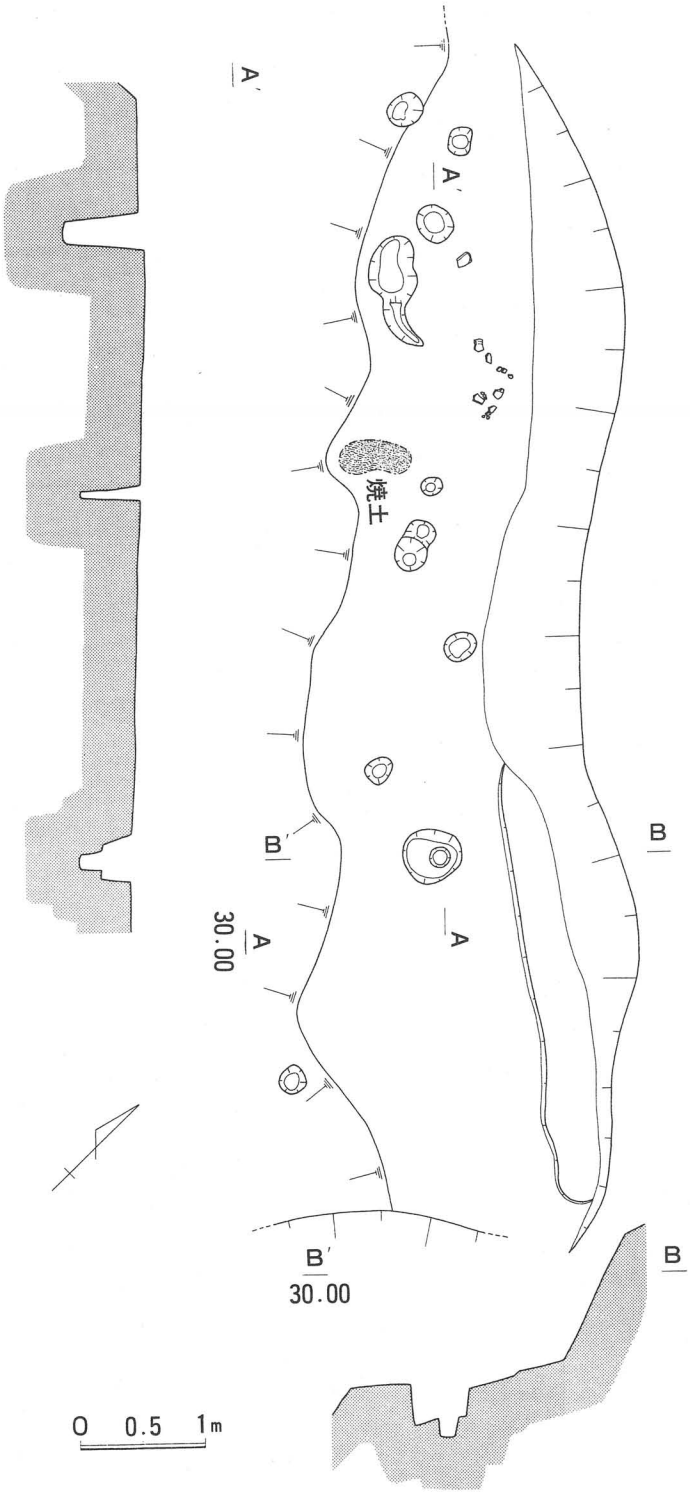
複合口縁を有するもので、口縁部が外反してのび、外面に平行沈線を施す。頸部内面にヘラ磨き、肩部外面に櫛描刺突文と平行沈線を施している。甕形土器（２・３）は、複合口縁の稜が横外方に突出して、口縁部は外傾してのびるものである。低脚坏（４）は坏部と脚部を欠いている。これらの時期は、１が弥生時代後期後半、それ以外は古墳時代前期と考えられる。

ＳＩ－05（第126図）

ＳＩ－04の東隣りに接しており、床面標高が約20cm高い位置にある。上面がかなり削り取られており、ほとんど床面だけの状態で検出した。住居跡内には、多数の柱穴と、ＳＩ－04同様の掘り込みが認められ、これが焼土面を切っていることから、建て替えが行われたことを示している。建て替え前をＳＩ－05ａ、建て替え後をＳＩ－05ｂと呼称する。

（ＳＩ－05ａ）

平面形は溝の一部分しか残っていないが、復元すると隅丸方形を呈していたと思われる。規模は



第132図　E区SB－03実測図

推定で約6.0m、壁高は最大で20cmを測る。床面で多数の柱穴と焼土を検出したが、主柱穴については判断できなかった。

（SI－05b）

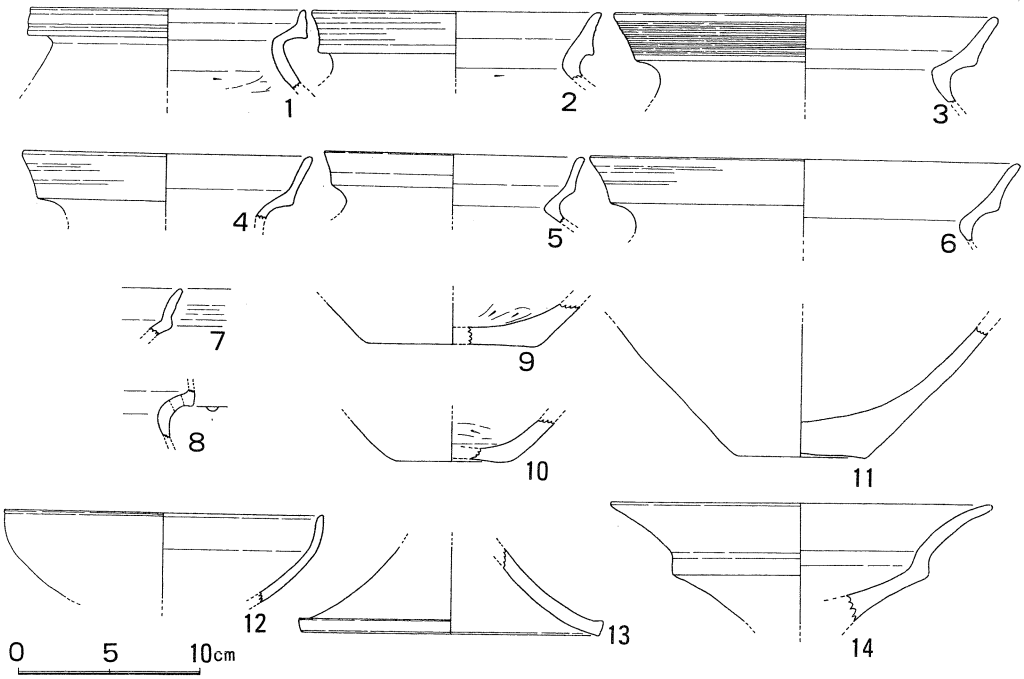
規模を縮小して建て替えられた住居跡で、05aの床面から約8～10cm低い位置にある。南壁部分しか検出できなかったため、平面形や規模については不明である。また、主柱穴についても判断できなかった。

出土遺物（第127図）

遺物は弥生土器の甕4、底部2、石製品3が出土している。甕形土器（1～4）は複合口縁を有するもので、口縁部は外傾および外反してのび、外面に平行沈線を施すものである。1は肩部に平行沈線と貝殻腹縁刺突文を施している。底部（5・6）はいずれも平底である。7～9は磨石である。7は先端に使用痕が認められる。8・9は片面に使用痕が認められる。これらの時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

SI－06（第128図）

後背墳丘2の下方、北向き斜面に位置し、東隣りにN－7号横穴が存在する。北側が半分以



第133図　ＳＢ－０３出土遺物実測図

上削平されていた。平面形は隅丸方形を呈し、残存長で長軸5.8m、短軸3.0mを測る。壁高は南壁側で最大72cmを測り、やや傾斜して立ち上がり、壁沿いには幅約10cm、深さ３cmの溝が廻っていた。床面はほぼ水平で、貼り床などは認められなかった。

柱穴は、主柱穴が２本（Ｐ１・Ｐ２）と中央ピットがある。主柱穴は、上縁径50cm、深さ37～46cmを測り、柱穴の間隔は2.8mである。中央ピットは大部分が削られていたが、２段に掘り込まれていた。

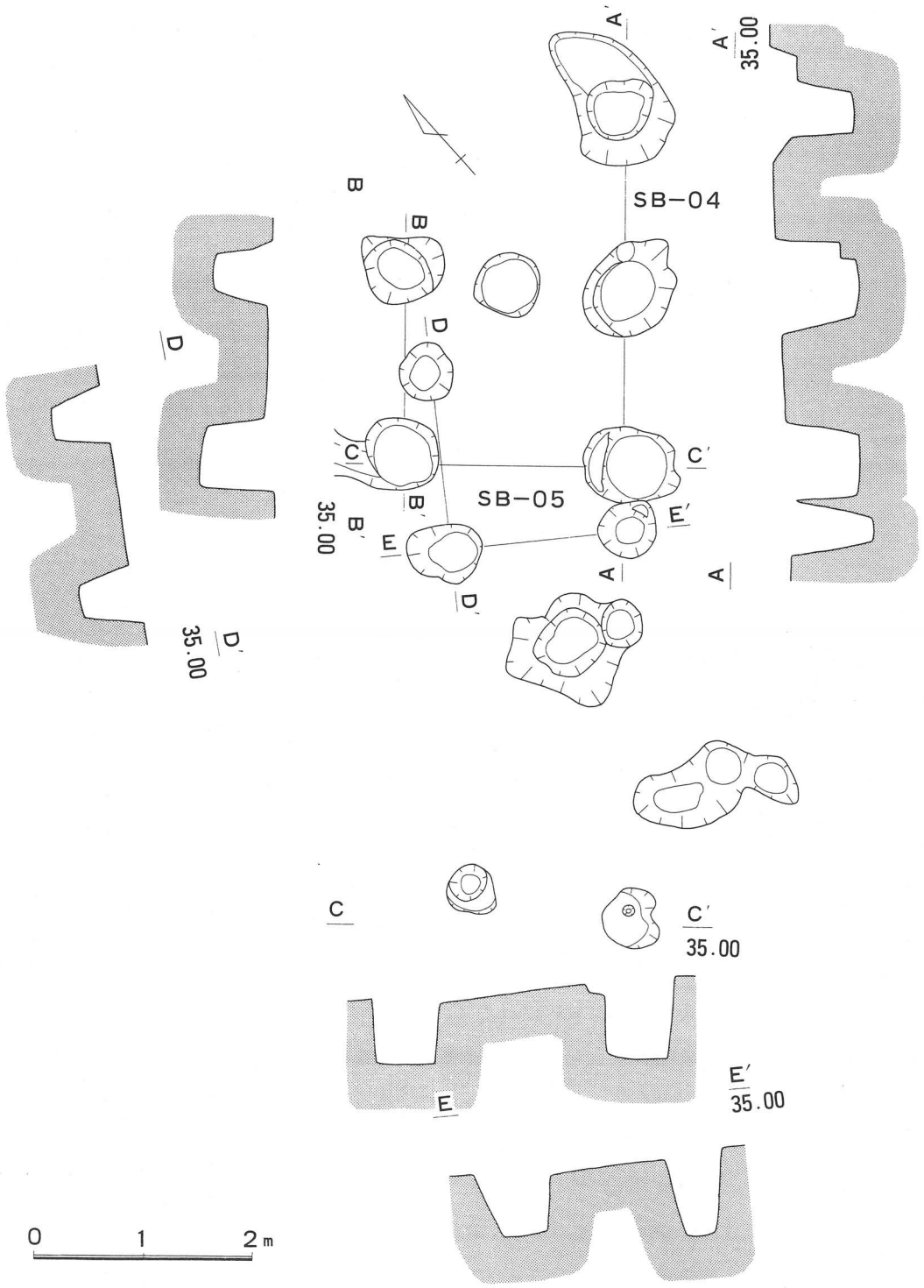
遺物は床面から少量の土器片が出土している。

出土遺物（第129図）

１は鼓形器台の器受部である。口縁部は外傾してのび、端部は丸い。２は甕形土器の口縁部片で、複合口縁部の稜が横外方に突出するものである。３は平底の底部である。これらの時期は、古墳時代前期頃と考えられる。

ＳＢ－01（第130図）

調査区西端の南向き斜面で検出した掘立柱建物跡である。当初、西隣りに続くＳＢ－02と同一の建物跡と思われたが、２棟の建物跡が切り合ってることが判明した。やや急な斜面を削って平坦面をつくりだしていたが、西側はＳＢ－02によって若干削られていた。また、壁側に１段高いテラス状の平坦面があることから、建て替えられた可能性もある。床面規模は現存長で長軸8.5m、短軸2.6



第134図　E区SB−04、05実測図

m、床面標高は31.3mを測り、ほぼ平坦になっている。壁高は最大で1.1mを測り、やや傾斜して立ち上がる。建物跡は、桁行２間（5.4m）を検出しており、柱穴の規模は上縁径30～32cm、深さ48～54cmを測る。床面南端で40×50cmの範囲で焼土を検出した。

ＳＢ－02（第130図）

ＳＢ－01の西隣りに位置し、壁は01のやや手前から削り込まれていた。床面規模は長軸6.9m、短軸1.0～2.4mを測り、床面レベルは01より約10cm低く、ほぼ平坦になっている。壁高は北壁で最大85cmを測り、傾斜して立ち上がる。建物跡は桁行１間（2.5m）を検出しており、柱穴の規模は上縁径26～34cm、深さ23～27cmを測る。床面には幅約14cm、深さ６cmと、幅約50cm、深さ６～28cmの２本の溝が、床面長軸と平行に走っていた。壁側に幅約20cmのテラス状の平坦面があることから、建て替えが行われた可能性がある。

遺物は埋土中から甕形土器５、高坏１、石器１が出土しているが、ＳＢ－01と02が混在している。

出土遺物（第131図）

甕形土器（１～５）は複合口縁を有するものであり、口縁部外面に平行沈線を施すもの（１・２）と、平行沈線は無く、複合口縁部の稜が、横方向に突出するもの（３～５）がある。高坏（６）は、脚裾部のみである。７は台石で、表面がくぼんでいる。これらの時期は、１・２が弥生時代後期後半、その他が古墳時代前期初頭と考えられる。

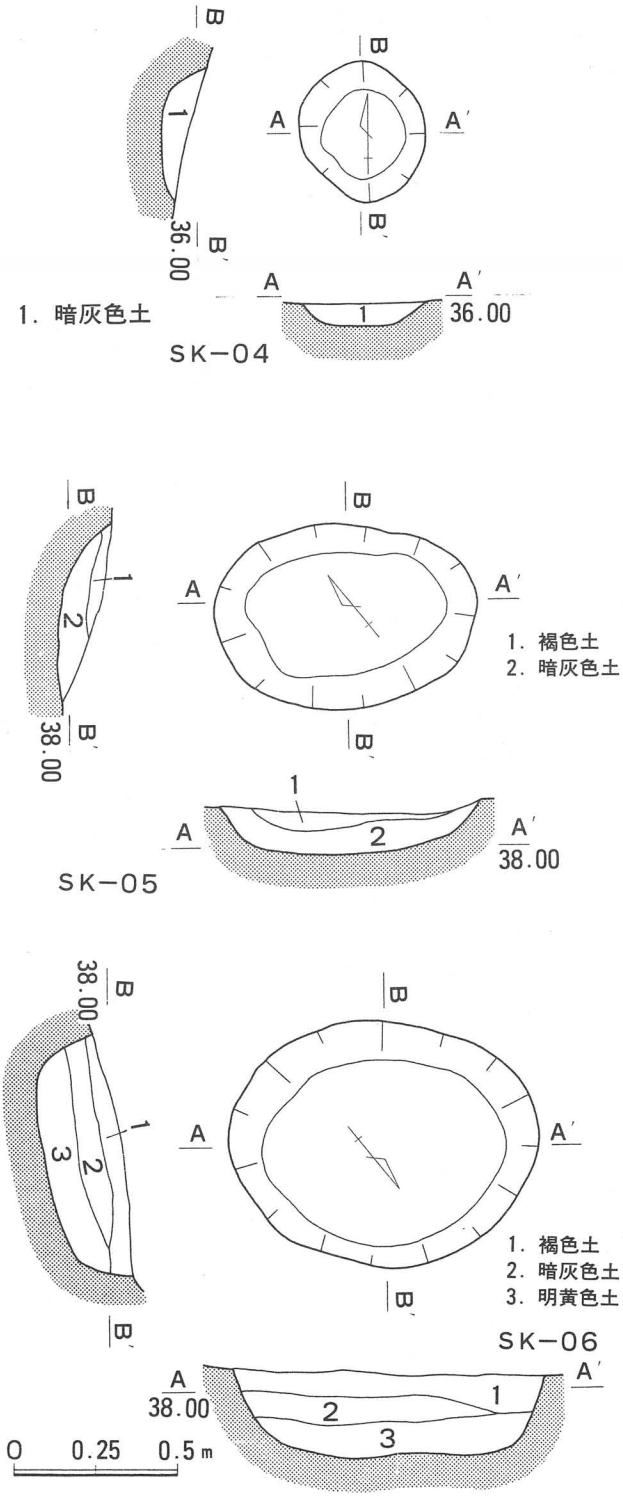
ＳＢ－03（第132図）

ＳＢ－01・02の下方、ＳＩ－02の西隣りに位置する。斜面を削って平坦面をつくりだしている。床面規模は残存長で長軸約9.0m、短軸1.4～1.9m、床面標高は29.1mを測り、ほぼ平坦に近い。壁高は最大で1.15mを測り、傾斜して立ち上がる。東端側に幅約40cmのテラス状の平坦面があることから、建て替えが行われた可能性もある。建物跡は桁行２間（5.0m）を検出しており、柱穴は上縁径20～44cm、深さ31～65cmを測る。また、床面に24×58cmの焼土面を検出した。

遺物は床面上と埋土中から、甕形土器７、壺形土器１、底部３、高坏３が出土している。

出土遺物（第133図）

甕形土器は、いずれも複合口縁を有するものである。口縁部が内傾して短くのび、外面に凹線を施すもの（１）、口縁部が外傾してのび、外面に平行沈線を施すが、複合口縁部の稜があまり突出せず、屈曲するもの（３～７）、稜が下方にのびるもの（２）がある。壺形土器（８）は頸部片であるが、複合口縁を有するもので、頸部に穿孔がある。底部（９～11）はすべて平底である。高坏（12～14）は坏部が内湾するもの（12）、口縁部と底部の境に段を有するもの（14）、脚部でハの字形に開くもの（13）がある。これらの時期は、弥生時代後期前半～古墳時代初頭にかけてのものと考えられる。



第135図　SK−04、05、06実測図

ＳＢ−04（第134図）

ＳＩ−05の東隣りで検出した。平坦面に柱穴を穿ったもので、現存で桁行２間（3.3m）×梁間１間（2.2m）の建物跡である。柱穴は上縁径0.5〜1.1m、下縁径44〜58cm、深さ50〜64cmを測り、比較的大きなものである。また、この建物の中央から、４号土器棺を検出している。

ＳＢ−05（第134図）

ＳＢ−04と重複している建物跡である。現存で桁行１間（1.6m）×梁間１間（1.6m）の規模である。柱穴は上縁径50〜68cm、下縁径26〜42cm、深さ50〜74cmを測る。

遺物が何も出土していないため、時期については判断できなかった。

ＳＫ−04・05・06（第135図）

Ｓ−４号横穴の後背斜面で検出した焼土土壙である。ＳＫ−04は長軸86cm、短軸74cm、深さ18cmを測り、平面形は楕円形を呈する。ＳＫ−05は長軸1.6m、短軸1.14m、深さ26cmを測り、平面形は楕円形を呈する。ＳＫ−06は長軸1.9m、短軸1.5m、深さ54cmを測り、平面形は楕円形を呈している。内部から遺物は出土していない。また、これらの性格については不明であった。

3　小　　結

臼コクリ遺跡は発掘調査の結果、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡、弥生時代後期～奈良時代の掘立柱建物跡、弥生時代後期頃の土壙墓、古墳時代中期頃の土器棺墓と古墳、古墳時代後期の横穴墓群と多量の遺物が検出された。近年、これらについては当地域において調査例が増加しており、徐々にその様相等が明らかになりつつある。以下にはこれらの成果を援用しながら、当遺跡の遺構や遺物について若干の検討を行い、まとめとしたい。

(1) 横　穴　墓

E区の丘陵斜面から計16基検出された。このうち10基が北側斜面に、残り6基が南側斜面に存在していた。北側斜面の横穴墓群については、N－10号横穴墓が未完成のままで放棄されているが、これは地形的な制約よりも地質的なものが影響していたと考えられる。N－1～N－9号横穴墓の穿たれている地山は細粒風化花崗岩であるが、N－10号横穴墓からの地山は、花崗岩の層を流紋岩の岩脈が貫くことによって熱水変質した花崗岩である。前庭部・羨道部は風化花崗岩の軟らかい層を穿って造られていたが、中断部分には硬い流紋岩の層が覗いており、これによって放棄せざるをえなかったもののようである。築造工程を観察すると、前庭部は丁寧に加工調整されて完全に仕上げられていたが、羨道部はやや粗い面を残しており、これは陰田横穴墓群で考察された横穴墓の築造工程と一致している[(1)]。当初、N－10号横穴墓の東にも横穴墓の存在が考えられたが、この状況から判断して、N－10号横穴墓が北側斜面の東限に位置するものと推測される。

また、本報告では北側斜面・南側斜面の2グループに分けて説明したが、これらの横穴墓群が遺存する丘陵尾根上には、2つの後背墳丘が存在しており、この後背墳丘を中心に横穴が穿たれていることからみれば、本来は後背墳丘1を中心とするグループ（N－1～6・S－1・5・6）と後背墳丘2を中心とするグループ（N－7～10・S－2～4）の群構成で捉えるべきかもしれない。ただ、これらも北側・南側等で小支群に細分されるものと思われるが、ここでは墳丘を中心に考え、これらをA群（後背墳丘1）とB群（後背墳丘2）としてみることにする。A群・B群でみた場合、若干の相違が認められ、その特徴を示すと以下のとおりである。

A群

1）標高25～30mの範囲に穿たれている。

2）大形のものと、やや小形の横穴が混在しており、玄室形態は大形のものが擬似四注式平入り、小形の横穴は丸天井形を呈している

3）玄室内に須恵器屍床を形成するものがある（N－1～3）。

4）玄室中軸線に沿った排水溝を有する。

5）閉塞施設に石材を使用するものと使用しないものがある。

B群

1）標高30～35mの範囲に穿たれている。

2）玄室が大形で、天井は擬似四注式を呈し、平入りである。

3）玄室内に石棺を内蔵するものがある。（N－7号も本来は石棺を内蔵していたものであろう）

4）玄室壁面沿いに排水溝を有するものがある。

5）閉塞施設に石材を使用する。

この様にA群とB群を比較すると、大雑把であるが以上のような相違が認められる。ただ、遺構の規模、副葬品等にはさほど相違が認められず、これらの時期的な差異については後述するが、追葬や盗掘等があり、明瞭には判断できなかった。以下、A・B群を中心に、2、3の問題点について、さらに検討してみたい。

（横穴墓の構造）

横穴墓の構造分類・名称等は、これまでの報告・研究論文等で玄室の天井形態によって行われ、様々に呼称されてきた。本報告書では横穴墓の構造を玄室・玄門・羨道・前庭として説明しており、これは横穴墓と石棺式石室を比較検討し、前庭から玄室にいたる総体的構造による検討の必要性があることを明らかにした、安来市高広遺跡[(2)]の報告を基にしている。以下、これらについて簡単に説明したい。

前庭部は大きく掘り込まれ、横断面が逆台形を呈するものが主流となっている。特徴的なものにN－2号横穴墓がある。前庭部はかなり広く造られ、ここに土壙墓4基が掘り込まれていた。これは当初から土壙墓を掘り込むことを前提として広く作り出されていたのではないかと考えられ、玄室内に埋葬される人々と前庭に埋葬される人々の存在が指摘できる。松江市のヒノサン山横穴群[(3)]や奥山遺跡[(4)]では横穴墓の脇に土壙墓が穿たれているものがあり、類例は少ないものの、当時の墓制を知る上で貴重な資料となるであろう。また、N－5号横穴墓の西壁側から小横穴1基を検出した。安来市の高広遺跡、松江市の狐谷横穴群[(5)]・十王免横穴群[(6)]にも小横穴の存在が認められており、それらの性格については、埋葬用と供献用の二通りの考えが示されているが、それらを裏付ける遺物が何も検出されなかったため、その性格を捉えることはできなかった。

羨道部は、長さが1mを越えるものが多く、S－2号横穴墓のそれは2.1mと長いものであり、幅は玄門部に向かって広がるのが普通である。N－7・9号横穴墓のように、前庭部より1段高くなるものもみられる。

玄門部は奥行き0.7～1.9mまでのもので、S－2号横穴を除けば1m前後におさまり、羨道より

も狭く、天井部も低くなる。横断面形は釣鐘形か方形を呈している。

玄室については、天井形態と平面形に分けてみることにする。天井形態は、天井と四壁に境界線の無い擬似四注式が11例、丸天井系が4例認められ、擬似四注式のものはすべて平入りを呈している。N－9号に関しては、天井と壁との境に掘り込みを設けて軒先を表現しており、家形をかなり意識していると思われ、「便化家形」の範疇に属すると思われるが、断面形が他の横穴と同様に三角形を呈していることから、ここでは一応擬似四注式に属するものと考えた。丸天井系のものは、やや小形の横穴墓のみに認められる現象で、四注式系との間に時期差は認められなかった。平面形は、丸天井系のものを除けば、ほぼ正方形か横長の長方形を呈しているが、N－9号横穴墓は五角形ないしは六角形を呈しており、断面形も家形を意識した作りであることから、他の横穴墓と若干様相を異にしている。

（排水溝）

玄室床面に排水溝を有するものが多く認められる。しかし、これが排水用のためだけでなく、玄室内部を区画するものと両者の性格を有するものがあることが指摘されている[(7)]が、ここでは一応排水溝として呼ぶことにする。本横穴墓群の排水溝を検討すると、先述のA群とB群で様相が違っており、A群のものは玄室中軸線に沿って直線的に走るもので、B群のものは中央と周囲に設けられている。A群では9基中5基に認められ、N－1～3号横穴墓は玄室内に須恵器屍床を形成するもので、N－1号は溝の左側、N－2・3号は右側に須恵器破片が敷き詰められていた。これは須恵器屍床によって玄室が区画されているが、溝を挟んで左右どちらかに形成されていることからみれば、排水はもとより、溝によって玄室を区画することも意識していたと思われる。B群では7基中2基に認められ、玄室中央から左右どちらかの壁に廻るものであることから、排水とともに、屍床を意識したものと考えられる。

（石棺・須恵器屍床）

本横穴群中、S－2号横穴墓から1基、S－3号横穴墓から2基の計3基の石棺が内蔵されていた。N－7号横穴墓も玄室内には遺存してないが、前庭部に石棺蓋が置かれていたことからみれば、本来石棺を内蔵していたものと思われ、計4基内蔵していたことになる。このように出雲地方では、横穴墓の内部に石棺を内蔵するものが多数報告されており、現在知るところでは57遺跡63例ある（第3表）。このうちの15遺跡16例が安来平野で確認されており、石棺を内蔵する横穴墓の集中する地域でもある。また、これら石棺のほとんどが組合せ横口家形石棺であり、この種の石棺の系譜は九州の横穴式石室に置かれた平入りの横口家形石棺が、石屋形化する流れの中に求めることができるとされている[(8)]。

ここで本横穴墓の石棺についてみると、N－7号横穴の石棺身については不明であるが、他3基

についてはいずれも組み合わせ式で、横口をもつ家形石棺である。材質は、通称「荒島石」と呼ばれる角礫凝灰岩を使用している。S－2号横穴の石棺は、玄室西壁に沿って置かれており、前壁2枚、奥壁2枚、側壁各1枚、床石1枚、蓋石1枚と前方に3枚の板石を敷いて構成されている。蓋は頂部に平坦面をもち、方形状の縄掛突起が3箇所施されるもので、若干古い様相を呈している。[9] S－3号横穴の石棺は、玄室東壁・西壁に沿って置かれていた。1号石棺は前壁2枚、奥壁2枚、側壁各1枚、床石5枚、蓋石2枚と前方に3枚の板石で構成され、2号石棺は1号石棺と類似の形態をもつが、前壁が3枚、床石が6枚、前方の板石が2枚と若干の差異が認められる。また、1号石棺は玄室奥壁側が、2号石棺は玄室入口側が広がっており、頭位は逆方向に埋葬されたもののようである。

これら3基の石棺のうち、S－2号横穴墓の石棺側石の前方床面に2個の穴が穿たれており、石棺に付属する何らかの施設と考えられた。最近調査された宮内遺跡II区1号穴[10]にも石棺が内蔵されていたが、この石棺は、前方に石柱を有する特異な構造をするものであった。本横穴墓の玄室内にも、柱状の石が遺存していることから、本来は宮内遺跡同様に石柱が立てられていたと考えられる。このような例は他に、松江市御崎山古墳[11]、福岡県寿命大塚古墳[12]に認められるものの、どのような意味あいをもつのか捉えることができなかった。今後、他の横穴墓や古墳に内蔵される石棺を詳細に検討していけば、同様な例が発見される可能性も高く、類例を待って検討したい。

須恵器屍床を有する横穴墓は、N－1～3号横穴墓の3例である。これらは須恵器の大甕を1、2個破砕して、玄室内の左右どちらかに敷き詰めたものである。近年の調査で須恵器屍床を伴う横穴墓が増加しており、松江市狐谷横穴群、島根町宮尾横穴群[13]、米子市陰田遺跡、同大埒山横穴群[14]、同東宗像遺跡[15]等で確認されている。陰田遺跡の報告では、屍床に用いられる甕は、大小の2個がセットになって構成されると指摘されているが、N－2号横穴墓の須恵器屍床は、口縁部を欠く大甕1個体と大甕の底部下半のもので構成されており、器種構成や破砕の仕方等について、今後慎重に検討する必要があるものと思われる。

（閉塞）

本横穴墓群の閉塞状況をみると、盗掘をうけていたり、何らかの原因で横倒しになっていたりして、全体の状況を把握できないが、石材を使用しているものと、石材を使用しないものの2通りがある。石材を使用しているものは、B群（N－8・10号を除く）とA群のN－5号、S－1号横穴墓の7例である。このうちS－1・2・4号の3例は1枚の板石で塞ぎ、これらを除く4例は2枚の板石を使用して塞いでいたと考えられる。これらの材質は、石棺と同様の「荒島石」を使用していた。石材を使用しないものは上記以外のものであり、いずれも閉塞部の床面に、横長の溝を有している。これは閉塞施設を固定させるために掘り込まれたものの可能性が高く、閉塞施設としては、

板材の使用が考えられる。玄室内まで土砂が入り込んでいることから、閉塞に使用した板材の腐朽によって土砂が流入したものであろう。ただ、N－1・3号横穴の玄室内堆積土は意図的に埋められた可能性があり、あえて閉塞を必要としなかったとも考えられる。

（後背墳丘）

臼コクリ遺跡では、横穴の存在する斜面の後背丘陵尾根上に2基の墳丘が存在する。墳丘1は直径約10m、高さ1mの円形を呈しており、旧表土上に直接盛土をしたものであった。墳丘上には埋葬施設の存在は認められず、周溝も確認できなかった。墳丘2は大半が流出していたものの、北側で盛土を確認した。残存部分から察すると、規模は不明だが、墳丘1と同様に円形の盛土墳丘であったと考えられる。埋葬施設、周溝等は確認していない。この墳丘周辺に横穴墓が穿たれていることから、主体部が横穴墓であった可能性が高い。近年、墳丘を有する横穴墓の調査例が増加しており、鳥取県米子市の陰田横穴墓群で9基、同大埒山横穴群で2基、臼コクリ遺跡に隣接する宮内遺跡で1基、大原遺跡[16]で1基の後背尾根上に墳丘を伴う横穴墓が確認されている。大埒山横穴墓群では、墳丘はすべての横穴墓に伴うものではないとされ、墳丘を有する横穴墓は、墳丘を有さない横穴墓より、規模、副葬品、立地等において優位にあり、小支群の核となる横穴墓が墳丘を伴っている傾向が窺えるとされ、また、陰田横穴墓群では各小支群中で、最古期に築造された横穴墓に伴っているとされている。宮内遺跡・大原遺跡の横穴墓は単独で存在するものの、内部には石棺を内蔵しており、宮内遺跡のそれは、副葬品も優秀であり、横穴構造も古い様相を呈していることから、先の傾向が容易に当てはまる。本横穴墓群では、墳丘を中心に大きく分けてA・Bの2群に分かれるものと考えた。墳丘がすべての横穴墓に伴わないとするならば、墳丘直下に存在するN－5号横穴墓が墳丘1、N－7号横穴墓が墳丘2を有する横穴墓と考えられる。ただ、この2つの横穴墓は、盗掘等により明確な構築時期や遺物が不明であり、他の横穴墓との優位性についても確かめることができなかった。A群では須恵器屍床や円頭大刀・玉類を伴うN－1～3号横穴墓が、B群では石棺を安置し、単竜環頭大刀を副葬するS－2・3号横穴墓が各群のなかで卓越しているが、直接墳丘を有している訳でもなく、他の横穴墓との時間的な差があまり認められない。このことから考えれば、本来は1基の横穴墓のために構築された墳丘であっても、高塚古墳を強く意識する被葬者集団の要求に伴って、墳丘周辺に構築された後期群集墳の一形態として把握できるかもしれない。

（環頭大刀）

S－2号横穴墓から出土した単竜環頭大刀は、破砕された状態で出土したため、全体を把握することは困難であるが、玄室内に分散して出土した把筒金、把縁金具、鞘口金具、鞘の筒金具が出土していることから、ある程度復原が可能と思われる。柄頭は銹化が著しく、細部が明瞭でないが、環体が偏平で、竜頭の角が長く延び、竜の頸の後ろに小さな翼をもっている。これに類似した例は、

大阪府高槻市塚原Ｐ１号墳[17]、千葉県香取郡小見川町城山１号墳[18]、岡山県赤磐郡山陽町岩田14号墳[19]、長野県飯田市川路古墳[20]出土のものがあり、そのうちもっとも類似したものとして、城山１号墳出土品があげられ、これらは穴沢咏光・馬目順一氏らによって、「塚原系列」と称されているものである[21]。年代については、岩田14号墳や城山１号墳出土品からみて、６世紀後半頃に比定されるものと考えられる。

日本国内における単竜・単鳳環頭大刀の出土例は穴沢咏光・馬目順一両氏によれば、出土地が判明しているもので108例、出土地不明等のものが30例以上あるのではないかとされている[22]。島根県ででの単竜・単鳳環頭大刀の出土例は、安来市元鷺の湯病院横穴[23]と益田市鵜ノ鼻古墳群[24]出土品の２例が知られており、臼コクリ遺跡出土品は３例目となる。またこのほかに、島根県内で出土した環頭大刀には、双竜環頭のものが５例知られているが、このうちの２例が安来平野に認められるもので、高広遺跡Ⅳ－１号横穴とかわらけ谷横穴[25]出土品がある。ここで注目されるのが、単竜・単鳳環と双竜環合わせて８例のうち４例が安来平野に集中しており、さらにこの４例がいずれも横穴墓から出土していることである。この事については、高広遺跡の報告の中で詳細に検討されており、今回新たにもう１例発見されたことは、家形石棺を内蔵することと合わせて、古代の安来平野における横穴墓が一体何を象徴するものなのか考えていかなければならないであろう。

次に環頭大刀の出土状態についてみると、石棺前方の板石の上に、柄頭と把筒金等が置かれていたが、鞘の筒金具はこれらと離れて置かれていた。これが故意に破砕されたのか、追葬に際して寄せられたものか問題となるところであるが、銹化が著しく、打撃痕は観察できなかった。意図的に破砕されたものとして、高広遺跡、福島県いわき市平神谷作白穴東１号横穴・同平下高久八幡24号横穴、静岡県榛原郡榛原町仁田山ノ崎古墳出土の６世紀末以降の双竜環頭大刀に認められるが、６世紀後半の単竜・単鳳環頭大刀にはそれほど多くないとされている[26]。このことから考えれば、本遺跡出土の単竜環頭大刀は興味ある資料と言える。

（時期）

本横穴墓の年代について、出土遺物から検討してみたい。本来なら本遺跡の中での編年案が必要であると思われたが、今回はそれを怠った。そこで、同じ安来市の高広遺跡の報告の中で、詳細な編年が試みられているので、ここではそれを援用して、本横穴墓の時期についてみることにする（第２表）。

築造時期は、Ａ・Ｂ群ともに、Ｓ－４号横穴墓を除くとさほど時期差がなく、高広ＩＡ期（６世紀後半頃）から構築され始め、最終埋葬時は、Ａ群ではＮ－２号横穴墓が前庭部に墓壙が穿たれていることから、追葬の時期にやや幅をもつが、他は高広ＩＡ～ＩＢ期のごく短期間で最終埋葬が終了している。Ｂ群では高広ⅢＢ期まで追葬がみられ、特に石棺を内蔵する横穴墓に認められる。こ

の中でＳ－４号横穴墓は、他の横穴墓が最終埋葬を終える頃の、ごく短期間に営まれており、本横穴墓群の中では特異な存在である。

以上のことから、本横穴墓群はほぼ同時期に築造され、追葬を含めながら、Ａ群は７世紀前半、Ｂ群は７世紀末～８世紀前葉まで営まれたものとすることができる。

(2) 土 壙 墓 群

今回の調査で墳丘墓２基、土壙墓８基を検出した。墳丘墓は流出しているため本来の形態を留めていなかったが、長軸で10m前後の長方形状を呈していたものと思われる。１・２号ともに地山を削り出して墳丘基盤を形成し、盛土を行っている。周囲に貼石等は認められなかったが、１号墓には墓域を区画するための溝を有していた。ただこの溝は、１号墓が構築された後に掘り込まれたと考えられ、隣接する土壙墓の構築に関連するのかもしれない。１号墓の主体部は６基、２号墓は４基検出しているが、１号墓の第１～３主体部は、墳丘の短軸方向にほぼ平行することから、同時期と考えられるものの、第４～６主体部は規則性が認められず、後出的なものといえる。２号墓の主体部は、いずれも墳丘の短軸方向に平行することから、ほぼ同時期と考えられる。遺物は１号墓の第１主体部から弥生時代後期後半の土器が出土しているだけで、２号墓からは何も出土していないが、墓壙の穿たれ方に同様の規則性が認められ、おそらく１号墓の時期とほぼ同じくするものと理解される。土壙墓については、立地からみて、墳丘墓に隣接してつくられるものと、そこから約200m離れてつくられたものがあり、２つのグループの存在が指摘できる。遺物を伴うものが少なく、時期決定の決め手に欠くが、墳丘墓と同時期、もしくは若干後出するものが混在していると思われる。出土遺物の中で注意されるのが、特殊器台と特殊壺形土器の存在である。いずれも小片で全体を窺い知ることはできないものであったが、出雲地方においては本遺跡のものを含めて、出雲市西谷墳墓群[27]、同矢野遺跡[28]、伯太町カウカツ遺跡[29]の４例しか認められず、古代吉備との関係を考えるうえで貴重な資料となるであろう。

(3) 土 器 棺 墓

本遺跡の丘陵尾根上平坦面から４基の土器棺墓を検出したが、これらはいずれも違う構成をしていた。ここでもう一度簡単に触れると、１号土器棺は１個体の甕形土器を横倒しにして埋葬するもの、２号土器棺は１個体の甕形土器を縦に真二つに割り、口縁部を正反対に向けて伏せて、遺骸を覆ったものである。３号土器棺は３個体の壺・甕形土器で構成されるもので、２つの土器の底部を割って底部を重ね合わせたものに、残りの１個体の土器を縦割りにして、２つの土器の口縁部を塞いだものである。４号土器棺は口縁部を取り除いた土器１個体を大きな破片に割って伏せたものである。４基とも内部に遺物が伴っていないことから、被葬者については判断できなかった。また、これら土器棺は、複合口縁を呈するものであったが、３号土器棺の３個体のうちの１個体は、他の

土器と様相が異なっており、他地域との関連も考慮しなければならないであろう。

(4) 竪穴住居跡・掘立柱建物跡

E区から弥生時代後期後半～古墳時代初頭の竪穴住居跡6棟と掘立柱建物跡5棟を、D区から古墳時代後期～奈良時代頃の掘立柱建物跡5棟を検出した。

竪穴住居跡については、ＳＩ－02・04・05が弥生時代後期後半、ＳＩ－03・06が古墳時代前期～中期と考えられ、平面プランは、円形、多角形、隅丸方形が混在しており、重複するもの、建て替えが行われたものが認められた。ＳＩ－02・06には中央ピットが付属しており、ＳＩ－02のそれには炭化物が含まれていた。竪穴住居跡の中で注目されるのは、ＳＩ－04・05の存在である。これらは丘陵尾根上の狭い平坦面いっぱいにつくられていた円形住居で、ＳＩ－04は径約8.0m、05は径約6.0mを測るやや大型のものであった。両者とも建て替えが行われており、ＳＩ－０４は径約6.0m、05については明確にし得なかったが、規模を縮小して建て替えられていた。この縮小が何に起因するものなのか把握できなかったが、立地や規模等が他の住居と比較すると差異が認められることから、特殊な用途の建物跡であった可能性も考えられ、今後の資料の増加を待って検討したい。

掘立柱建物跡は、E区で検出したものは竪穴住居跡と同時期で、D区のものは古墳時代後期～奈良時代頃と考えられる。これらの建物跡は斜面を垂直に削り込んで平坦面と壁面を作りだし、その平坦面に建物を構築したものが多く認められる。斜面であるが故に、そのほとんどが流出していたため、正確な規模や形態については捉えることができなかった。このように斜面をカットして建物を建てる例は多数見つかっており、安来市では宮内遺跡、越峠遺跡[30]、島田南遺跡[31]、高広遺跡などがある。E区の掘立柱建物跡は、竪穴住居跡と併存しており、当時の集落形態や規模を考えるうえで新しい資料を提供したものと思われる。

(5) おわりに

以上、簡単ではあるが臼コクリ遺跡で検出された遺構・遺物について検討してきた。横穴墓については、古墳時代後期に特徴的な横穴式石室の認められない安来平野において横穴墓の研究は重要であり、今回の調査で16基もの横穴墓を発見したのは貴重な成果であった。今回は横穴墓の構造、石棺や環頭大刀等について簡単に触れただけであり、横穴墓の被葬者等の問題について、今後さらに検討していかなければならないであろう。

註

(1) 米子市教育委員会『陰田』　1984年

(2) 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』　1984年

(3) 山本　清「小規模古墳について　補注」『山陰古墳文化の研究』　1971年

(4) 島根県教育委員会『奥山遺跡発掘調査報告書』　1988年

(5) 横山純夫「狐谷横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第VII集　1977年

(6) 島根大学考古学研究会「十王免横穴群発掘調査報告」『菅田考古』10号　1968年

(7) 前掲5と同じ

(8) 山本　清「山陰地方における石棺を内蔵する横穴について」『斎藤忠先生記念論集』

(9) 和田晴吾「出雲の家形石棺」『展望アジアの考古学』　1983年

(10) 島根県教育委員会『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV－宮内遺跡・越峠遺跡』　1993年

(11) 勝部　昭「御崎山古墳」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』　1975年

(12) 梅原末治・小林行雄「筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告第15冊』　1915年

(13) 島根町教育委員会『宮尾横穴群』第2集　1992年

(14) 鳥取県教育文化財団『大塔山横穴墓群』　1987年

(15) 鳥取県教育文化財団『東宗像遺跡』　1985年

(16) 本報告書　V大原遺跡より

(17) 穴沢咏光氏の御教示による

(18) 前掲17と同じ

(19) 岡山県山陽町教育委員会『岩田古墳群』　1976年

(20) 前掲17と同じ

(21) 穴沢咏光・馬目順一「単龍・単鳳環頭大刀の編年と系列」『福島考古』第27号　1986年

(22) 前掲21と同じ

(23) 穴沢咏光・馬目順一・中山清隆「相模出土の環頭大刀の諸問題」『神奈川考古』第6号　1979年

(24) 新谷武夫「環状柄頭研究序説」『考古論集－慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集』　1977年

(25) 前掲23と同じ

(26) 穴沢咏光・馬目順一「井上コレクションの単鳳環頭大刀把頭」『井上コレクション弥生・古墳時代資料図録』

(27) 島根大学法文学部考古学研究室『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』　1992年

(28) 出雲考古学研究会「出雲平野の集落遺跡II－矢野遺跡とその周辺－」『古代の出雲を考える』5　1986年

(29) 伯太町教育委員会「カウカツ遺跡」『伯太町安田地内試掘調査報告書』　1992年

(30) 前掲10と同じ

(31) 島根県教育委員会『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書III（島田南遺跡）』1992年

第２表　臼コクリ遺跡横穴墓一覧表

※時期については高広編年を使用している

横穴番号	全長	前庭幅	玄室奥行	玄室幅	玄室高さ	玄室形状	玄室屍床	備考	ⅠA	ⅠB	ⅡA	ⅡB	ⅢA	ⅢB	ⅣA
N－1号	7.4	2.6	2.8	2.95	2.5	擬似四注式平入	須恵器屍床		←→	←→					
N－2号	8.9	4.4	2.5	3.3	1.9	擬似四注式平入	須恵器屍床	前庭部に墓壙４基あり	←→	←→	----	----			
N－3号	9.4	1.7～2.5	2.3	2.65	2.0	擬似四注式平入	須恵器屍床	円頭大刀	←→	←→					
N－4号	4.7	0.5～0.9（墓道）	2.4	0.9～1.4	1.1	丸天井形			←→	←→					
N－5号	9.7	1.7～2.0	2.84	3.3	2.4	擬似四注式平入		前庭部に小横穴あり	←→	←→	----				
N－6号	3.94	0.7～1.2	0.74	1.44	0.64	ドーム形			←→	←→					
N－7号	9.12	1.6	2.5	3.0～3.2	2.2	擬似四注式平入		前庭部に石棺蓋遺存	←	—	—	—	—	→	
N－8号						N－9玄室に向かって穿たれた直径50cm、長さ2.5mの小穴									
N－9号	8.6	2.1～2.3	2.7	2.8～3.7	2.34	便化家形			←	—	→				
N－10号	5.2	2.0				玄室未完成		未完成横穴							
S－1号	7.75	1.6～1.8	1.85	1.8～2.0	1.9	擬似四注式平入			←→	←→					
S－2号	11.9	2.9～3.1	3.3	3.8	2.38	擬似四注式平入	石棺１基	単竜環頭大刀	←	—	—	—	—	→	
S－3号	9.6	2.0	2.4	3.2	2.38	擬似四注式平入	石棺２基		←	—	—	—	—	→	
S－4号	8.88	3.3～4.0	2.6	3.1	2.14	擬似四注式平入							←	→	
S－5号	3.35	0.47～0.82（墓道）	1.35	1.35	0.85	丸天井形			←→	←→					
S－6号			0.55	1.35	0.5	丸天井形？ 玄室の最奥部のみ残存									

第３表　石棺を内蔵する横穴一覧

番号	遺　跡　名	所　在　地	棺　型　式	棺数	玄室形態	主要遺物	時　期	文献	備　考
1	臼コクリ遺跡Ｓ－２号	安来市佐久保町	組合せ、家形、横口	1	擬似四注式（平入り）	単竜環頭大刀	6c末～7c初		後背墳丘あり
2	臼コクリ遺跡Ｓ－３号	安来市佐久保町	組合せ、家形、横口	2	擬似四注式（平入り）		6c末～7c初		後背墳丘あり
3	大原１号横穴	安来市佐久保町	組合せ、箱形	1	擬似四注式（平入り）	大刀	Ⅳ期		後背墳丘あり
4	穴神横穴	安来市吉佐町	組合せ、家形、横口	1	便化家形	鉄刀	Ⅳ期	①⑪	棺蓋に丹塗りあり
5	堤谷横穴	安来市宮内町	組合せ、厨子形	1	丸天井	耳環、玉類	Ⅲ期	①⑪	
6	鳥木横穴	安来市鳥木町	組合せ、家形、横口	1	便化家形	圭頭大刀、金銅冑	Ⅲ期	①⑪	
7	矢田横穴群１－３号	安来市矢田町	くり抜き、家形、横口	1	丸天井		Ⅲ～Ⅳ期	②⑪	
8	矢田横穴群２－１号	安来市矢田町	組合せ、家形、横口	1	便化家形		Ⅲ期	②⑪	
9	矢田横穴群２－２号	安来市矢田町	組合せ、家形、横口	1	便化家形		Ⅳ期	②⑪	
10	矢田横穴群３－１号	安来市矢田町	組合せ、家形、横口	1				②⑪	
11	矢田横穴群　消滅	安来市矢田町	組合せ、家形	1				②⑪	
12	矢田横穴群(広江宅)	安来市矢田町	家形	1				②⑪	
13	元鷺の湯病院横穴	安来市植田町植田	組合せ、家形、（口無し）	1		単鳳環頭大刀、馬具		①⑪	
14	高広遺跡４－１号	安来市黒井田町	組合せ、家形、横口	1	擬似四注式（平入り）	双竜環頭大刀	6c末～7c初	③	
15	宮内横穴	安来市宮内町	組合せ、家形、横口	1	丸天井	馬具、大刀	Ⅲ期	④	後背墳丘あり
16	湯谷横穴１号	東出雲町	組合せ、厨子形	1	便化家形		Ⅲ期	⑤	
17	東光台横穴	松江市東津田	組合せ、家形	1	四注式（平入り）			⑥	
18	狐谷横穴群２号	松江市山代町狐谷	組合せ、横口	1	擬似四注式（妻入り）		Ⅳ期	⑥	
19	狐谷横穴群３号	松江市山代町狐谷	組合せ、家形、横口	1	擬似四注式（平入り）			⑥	
20	狐谷横穴群15号	松江市山代町狐谷	組合せ、横口	1	擬似四注式（妻入り）		Ⅳ期	⑥	壁画あり
21	狐谷横穴群16号	松江市山代町狐谷	組合せ、横口	1	擬似四注式（妻入り）		Ⅳ期	⑥	
22	十王免横穴群２号	松江市矢田町十王免	組合せ、家形、横口	1	家形		Ⅳ期	⑦	線刻壁画
23	十王免横穴群20号	松江市矢田町十王免	組合せ（石棺痕）	1				⑧	
24	十王免横穴群21号	松江市矢田町十王免	組合せ（石棺痕）	1				⑧	
25	桜崎横穴	松江市東奥谷町桜崎	組合せ、厨子形	1				①⑪	
26	稲磯横穴群１－１号	松江市佐草町	箱形	1				①⑪	
27	ヒヤクダ横穴	松江市比津町	家形	1	家形			①⑪	
28	北小原横穴	松江市西浜佐陀町	横口式家形、横口式組合せ	2	四注式（妻入り）		Ⅳ期	⑨	閉塞石の陽刻
29	論田横穴２号	松江市西津田町論田	組合せ、家形、横口	1				⑩	

番号	遺　跡　名	所　在　地	棺　型　式	棺数	玄室形態	主要遺物	時　期	文献	備　考
30	弥陀原横穴１号	松江市乃白町	組合せ、横口	1	家形			⑫	
31	亀田横穴	松江市東奥谷		1				⑪	
32	御津貝塚横穴２号	鹿島町御津	箱式	1	擬似四注式		Ⅳ期～	⑰	
33	徳連場横穴	玉湯町玉造徳連場	便化家形	2	蒲鉾形			⑪	
34	花立横穴群１号	玉湯町玉造	箱形	1	蒲鉾形		Ⅲ期	⑬	
35	花立横穴群２号	玉湯町玉造	箱形	1				⑬	
36	花立横穴群４号	玉湯町玉造	箱形	2	蒲鉾形			⑬	
37	小金松横穴	玉湯町湯町		1				⑬	
38	穴薬師横穴群	玉湯町林村別所		1	寄棟（平入り）			⑬	
39	山崎横穴	玉湯町布志名		1				⑬	
40	栗屋山横穴群３号	宍道町上来待	組合せ、厨子形	1	家形			⑪⑭	
41	松石横穴	宍道町東来待	組合せ、家形	1			Ⅲ期	⑪⑭	
42	下倉横穴墓群２号	宍道町白石	組合せ、家形、横口	1	家形			⑭	
43	女ケ峠横穴墓	宍道町白石	組合せ、箱式	1	丸天井	金環、鉄鏃		⑭	棺床に須恵器片
44	角田横穴墓群１号	宍道町上来待	箱式	1				⑭	埋没
45	平田横穴群１号	加茂町岩田	箱形	1	四注式（妻入り）		Ⅲ期後半	⑨	
46	上塩冶横穴群32－１号	出雲市上塩冶町	組合せ、家形、横口	2	四注式（妻入り）		Ⅳ期	⑮	
47	上塩冶横穴群32－６号	出雲市上塩冶町	組合せ、家形、横口	1	丸天井		Ⅳ期	⑮	
48	井上横穴群Ｃ－５号	出雲市古志町	家形	2		銀装大刀		①	
49	妙蓮寺横穴	出雲市古志町	組合せ、家形？、横口	1				①	
50	福知寺横穴群１号	出雲市知井宮町	組合せ、家形、横口	1	家形			⑪	
51	小浜横穴	出雲市神西沖町小浜	家形、横口	1				⑪	
52	東谷横穴	出雲市神門	組合せ、家形、横口	1	四注式			⑪	
53	八幡宮横穴群４号	湖陵町西三部	組合せ、家形、横口	1	擬似四注式（妻入り）		Ⅳ期	⑯	
54	下阿井横穴	仁多町下阿井	略式箱形	1	便化家形			⑪	
55	滝ノ尻谷横穴墓	横田町稲原	箱式	1	擬似四注式（妻入り）			⑱	
56	小池奥７号	横田町中村	箱式	1	擬似四注式			⑲	
57	天狗松５号	横田町下横田	箱式	1	四注式（妻入り）			⑳	

参 考 文 献

① 山本清「西山陰の横穴について」『島根大学論集（人文科学）』8号　1958年

② 山本清「安来・矢田横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅰ集　1969年

③ 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』　1984年

④ 島根県教育委員会『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－宮内遺跡・越峠遺跡』　1993年

⑤ 池田満雄「松江・東光台横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅰ集　1969年

⑥ 横山純夫「狐谷横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅶ集　1977年

⑦ 島根大学考古学研究会「十王免横穴群発掘調査報告」『菅田考古』10号　1968年

⑧ 岡崎雄二郎「十王免横穴群」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』　1975年

⑨ 岡崎雄二郎「松江・北小原横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅴ集　1974年

⑩ 松江市教育委員会「論田遺跡発掘調査報告」1980年

⑪ 山本清「山陰地方における石棺を内蔵する横穴について」『斎藤忠先生記念論集』

⑫ 岡崎雄二郎・飯塚康行「松江・弥陀原横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第ⅩⅦ集　1991年

⑬ 勝部衛「玉湯・花立横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第ⅩⅤ集　1989年

⑭ 宍道町教育委員会『宍道町歴史史料集（古墳時代編Ⅰ）』　1993年

⑮ 島根県教育委員会『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財報告』　1980年

⑯ 近藤正「湖陵・三部八幡宮横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅰ集　1969年

⑰ 鹿島町教育委員会『御津貝塚横穴群発掘調査報告書』Ⅰ　1984年

⑱ 横田町教育委員会『滝ノ尻谷横穴発掘調査概報』

⑲ 横田町教育委員会『小池奥横穴群発掘調査概報』　1989年

⑳ 横田町教育委員会『天狗松横穴群発掘調査概報』　1990年

臼コクリ土器観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
10図－1	52	周溝内	須恵器	蓋	口径 12.2cm 器高 6.6cm	緻密	良好	内面淡灰色、外面濃灰色	回転ヘラケズリ、回転ナデ
10図－2	52	周溝内	須恵器	蓋	口径 12.5cm 器高 6.5cm	長石粒を少々含む	良好	内、外、断面ともに淡灰色	回転ヘラケズリ、回転ナデ
10図－3	52	周溝内	円筒埴輪		最大径 25cm	2.5㎜までの砂粒を含む	良好	内面茶褐色、外面橙褐色	ハケ目、ナデ
10図－4	52	周溝内	円筒埴輪		口径 28.8cm 残存高 24.8cm	密	良好	内、外面ともに橙褐色	ハケ目
17図－1	52	加工段床面	土師器	甕	口径 12.0cm 器高 10.9cm 最大径 13.6cm	2.5㎜までの砂粒を含む	良好	内、外面ともに橙褐色	指頭圧痕、ナデ、ヘラ削り
17図－2	52	加工段床面	土師器	甕	口径 11.4cm 器高 10.1cm 最大径 12.8cm	2㎜までの砂粒を含む	良好	内面黒褐色暗褐色、外面橙褐色	ヘラ削り、ナデ、指頭圧痕
17図－3	53	加工段床面	土師器	甕	口径 13.2cm 器高 10.1cm 最大径 14.0cm	3㎜までの砂粒を含む	良好	内、外面ともに黄橙色	ヘラ削り、ナデ、指頭圧痕
17図－4	53	加工段床面	土師器	手捏土器	口径 3.0cm 器高 3.1cm	1.5㎜までの砂粒を含む	良好	内、外面ともに橙褐色	手づくね
17図－5	53	加工段床面	土師器	甕	口径 23.0cm 残存高 18.0cm 最大径 24.0cm	2㎜までの砂粒を含む	良好	内、外面ともに黄褐色	ヘラ削り、ナデ、ハケメ
17図－6	53	加工段床面	土師器	甑	口径 31.0cm 底径 12.0cm 器高 29.9cm	2㎜までの砂粒を含む	良好	内、外面ともに黄褐色	ヘラ削り
17図－7	53	加工段床面	土師器	甑	口径 27.0cm 器高 29.4cm	3㎜までの砂粒を含む	良好	内面黄褐色、外面橙褐色	ヘラ削り、ナデ、ハケメ
23図－1	54	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.7cm 器高 5.1cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
23図－2	54	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.1cm 器高 4.5cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに黒灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
23図－3	54	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.6cm 器高 4.7cm	緻密、微粒子含む	やや不良	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
23図－4	54	玄室内	須恵器	蓋	口径 11.6cm 器高 4.6cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
23図－5	54	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.9cm 受部径 14.0cm 器高 4.3cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ、ヘラ切り痕あり
23図－6	54	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.5cm 受部径 13.4cm 器高 4.1cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ナデ、ナデ、削り
23図－7	54	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.5cm 受部径 13.8cm 器高 4.3cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
23図－8	54	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.2cm 受部径 13.7cm 器高 4.4cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ、ヘラ切り痕あり
23図－9	54	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.8cm 器高 3.4cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ、ヘラ切り痕あり
23図－10	54	前庭部	須恵器	蓋	口径 13.6cm 器高 4.4cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
23図－11	54	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.6cm 器高 4.2cm	緻密、1㎜前後の粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
23図－12	54	羨道	須恵器	蓋	口径 13.4cm 器高 4.5cm	緻密、1～2㎜弱の砂粒含む	良好	内、外面ともに濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ
23図－13	55	羨道	須恵器	蓋	口径 13.0cm 器高 4.2cm	緻密、1～2㎜弱の白色砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
23図－14		羨道	須恵器	蓋	口径 13.0cm 器高 3.2cm	緻密、1㎜前後の砂粒含む	良好	内、外面ともに淡～濃灰色	回転ナデ
23図－15	55	前庭部	須恵器	坏身	口径 10.7cm 器高 4.8cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
23図－16	55	前庭部	須恵器	坏身	口径 11.1cm 器高 4.8cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
23図－17	55	羨道	須恵器	坏身	口径 10.6cm 器高 4.2cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
23図－18	55	羨道	須恵器	坏身	口径 11.1cm 器高 4.0cm	緻密、1㎜前後の白色砂粒含む	良好	内面淡灰色、外面濃灰色	回転ナデ
23図－19	55	羨道	須恵器	坏身	口径 11.0cm 器高 4.0cm	緻密、1～2㎜弱の白色砂粒含む	良好	内面淡灰色、外面濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ
23図－20	55	羨道	須恵器	坏身	口径 11.0cm 器高 3.7cm	緻密、1～2㎜弱の白色砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ
23図－21		羨道	須恵器	直口壺	器高 10.3cm 底径 5.6cm	緻密、1㎜前後の白色砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ
23図－22	55	前庭部	須恵器	直口壺	口径 9.4cm 器高 12.2cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ、ヘラ切り痕あり
23図－23	55	羨道	須恵器	壺	口径 8.4cm 器高 13.8cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ、カキ目
24図－1	56	羨道	須恵器	甕	口径 10.5cm 器高 10.7cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ
24図－2	56	羨道	須恵器	高坏	口径 13.2cm 器高 11.0cm 底径 10.7cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰黒色	回転ナデ、ナデ
24図－3	56	羨道	須恵器	提瓶	口径 11.4cm 器高 21.5cm	1～2㎜前後の白色砂粒含む	良好	内面灰黒色、外面暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、平行タタキ
30図－1	57	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.0cm 器高 4.3cm	やや粗、5㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ナデ、ナデ
30図－2	57	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.1cm 受部径 13.0cm 器高 4.0cm	やや粗、2㎜までの砂粒含む	良好	内面青灰色、外面暗灰色	回転ナデ、ナデ
30図－3	57	玄室内	須恵器	甕	口径 11.2cm 器高 13.6cm	やや密、4㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ
30図－4	57	玄室内	須恵器	甕	口径 10.9cm 器高 14.2cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
30図－5	57	玄室内	須恵器	高坏	口径 14.0cm 脚部径 10.3cm 器高 10.0cm	やや密、3㎜までの白色砂粒含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ナデ、ナデ
30図－6	57	玄室内	須恵器	提瓶	口径 15.6cm 最大径 25.2cm 器高 28.4cm	密、3㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに灰黒色	回転ナデ、格子状タタキ
30図－7	57	玄室内	須恵器	提瓶	口径 14.8cm 最大径 21.0cm 器高 23.8cm	やや密、8㎜までの砂粒を含む	良好	内面灰色、外面暗灰色	回転ナデ、回転カキ目
31図－1	58	玄室内	須恵器	提瓶	口径 10.4cm 器高 18.0cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、回転ナデ後カキ目
31図－2	58	玄室内	須恵器	提瓶	口径 6.0cm 器高 18.0cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ナデ、回転ナデ後タタキ、カキ目
31図－3	58	玄室内	須恵器	提瓶	口径 8.7cm 最大径 15.5cm 器高 21.6cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰黒色	回転ナデ、回転ナデ後カキ目
31図－4	58	玄室内	須恵器	提瓶	口径 10.0cm 器高 19.8cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ナデ、回転ナデ後カキ目
32図－1	58	玄室内	須恵器	高坏	口径 10.2cm 器高 12.3cm 底径 8.2cm	密	良好	内、外面ともに灰黒色	回転ナデ、静止ナデ

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
32図－2	58	玄室内	須恵器	高坏	口径 15.2cm 脚部径 11.0cm 器高 12.3cm	やや粗、5㎜までの白色砂粒含む	良好	内面暗灰色、外面灰色	回転ナデ、静止ナデ
32図－3	59	玄室内	須恵器	高坏	口径 14.5cm 器高 10.4cm 底径 10.6cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
32図－4	59	玄室内	須恵器	直口壺	口径 7.4cm 最大径 10.4cm 器高 11.0cm	やや密、3㎜までの砂粒を含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
32図－5	59	玄室内	須恵器	直口壺	口径 9.4cm 最大径 12.0cm 器高 11.5cm	やや密、6㎜までの砂粒を含む	良好	内面暗灰色、外面灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
32図－6	59	羨道	須恵器	蓋	口径 12.4cm 器高 4.3cm	やや密	やや不良	内面淡灰色、外面灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
32図－7	59	羨道	須恵器	蓋	口径 13.0cm 器高 4.4cm	密	良好	内面暗灰色、外面灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
32図－8	59	羨道	須恵器	蓋	口径 12.8cm 器高 4.5cm	密	やや不良	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
32図－9	59	羨道	須恵器	蓋	口径 12.8cm 器高 3.9cm	密	良好	内面青灰色、外面灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ、ヘラ切り痕あり
32図－10	59	前庭部	須恵器	蓋	口径 13.0cm 器高 3.4cm	密	良好	内、外面ともに青灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
32図－11	59	前庭部	須恵器	蓋	口径 11.0cm 器高 4.2cm	やや密、4㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ、ヘラ切り痕あり
32図－12	60	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.6cm 器高 3.9cm	緻密、微粒子含む	良好	内面灰色、外面淡灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
32図－13	60	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.1cm 器高 4.0cm	緻密、微粒子含む	良好	内面濃灰色、外面灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
32図－14	60	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.4cm 器高 4.3cm	白色小砂粒含む	良好	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
32図－15	60	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.0cm 器高 3.6cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ、ヘラ切り痕あり
32図－16	60	羨道	須恵器	蓋	口径 12.9cm 器高 4.6cm	白色砂粒含む	良好	内面淡青灰色、外面灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
32図－17	60	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.6cm 器高 3.5cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ、ヘラ切り痕あり
32図－18	60	前庭部	須恵器	坏身	口径 11.2cm 受部径 14.2cm 器高 4.8cm	やや粗、5㎜までの白色砂粒含む	やや良好	内面黄灰色、外面灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
32図－19	60	前庭部	須恵器	坏身	口径 10.6cm 受部径 13.6cm 器高 3.8cm	密	やや不良	内面暗灰色、外面淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
32図－20	60	羨道	須恵器	坏身	口径 11.2cm 受部径 14.0cm 器高 4.2cm	密	やや不良	内面灰色、外面淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
32図－21	60	前庭部	須恵器	坏身	口径 10.8cm 受部径 13.4cm 器高 3.5cm	密	良好	内面黒灰色、外面暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
32図－22	60	前庭部	須恵器	坏身	口径 10.8cm 受部径 13.4cm 器高 3.4cm	密	良好	内面青灰色、外面暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
33図－1	60	前庭部	須恵器	坏身	口径 10.9cm 受部径 13.8cm 器高 3.6cm	密	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
33図－2	61	前庭部	須恵器	坏身	口径 10.5cm 受部径 13.5cm 器高 4.0cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
33図－3	61	前庭部	須恵器	坏身	口径 9.2cm 受部径 12.4cm 器高 3.8cm	密	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
33図－4	61	羨道	須恵器	坏身	口径 11.6cm 受部径 13.8cm 器高 4.3cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに青灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
33図－5	61	羨道	須恵器	坏身	口径 10.5cm 受部径 13.5cm 器高 4.1cm	白色小砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
33図－6	61	前庭部	須恵器	坏身	口径 11.2cm 受部径 13.7cm 器高 3.7cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
33図－7	61	前庭部	須恵器	坏身	口径 11.1cm 受部径 14.1cm 器高 4.1cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ、ヘラ切り痕あり
33図－8	61	前庭部	須恵器	坏身	口径 11.7cm 受部径 14.6cm 器高 4.9cm	白色砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
33図－9	62	前庭部	須恵器	直口壺	口径 9.2cm 最大径 11.8cm 器高 12.6cm	やや密、3㎜までの白色砂粒含む	良好	内、外面ともに暗灰褐色	回転ヘラ削り、回転ナデ
33図－10	61	前庭部	須恵器	直口壺	最大径 12.6cm 器高 7.6cm 底径 6.4cm	密	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
33図－11	61	羨道	須恵器	直口壺	口径 9.6cm 最大径 11.9cm 器高 12.2cm	密	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
33図－12	61	前庭部	須恵器	直口壺	口径 9.1cm 最大径 11.0cm 器高 11.5cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ、ヘラ切り痕あり
33図－13	61	前庭部	須恵器	子持壺	口径 9.4cm 器高 7.6cm	密	良好	内面暗灰色、外面灰黒色	回転ナデ、ナデ、ヘラ切り痕あり
33図－14	62	羨道	須恵器	堤瓶	口径 11.0cm 最大径 14.9cm 器高 18.0cm	やや密、3㎜までの白色砂粒含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ナデ、カキ目
34図－1	62	S X 01	須恵器	蓋	口径 12.4cm 器高 4.2cm	0.5～1㎜の白砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
34図－2	62	S X 01	須恵器	坏身	口径 10.6cm 受部径 13.4cm 器高 4.2cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ、ヘラオコシ
34図－3	62	S X 02	須恵器	壺底部	高台径 7.6cm 器高 6.7cm	密	良好	内面暗灰色、外面灰色	回転ナデ、ナデ、静止ナデ
34図－4	62	S X 02	須恵器	堤瓶	口径 4.3cm 器高 16.4cm	緻密、微粒子含む	良好	灰色、濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ、ヘラオコシ
40図－1	65	玄室内	須恵器	堤瓶	口径 16.4cm 器高 30.7cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ナデ、カキ目後タタキ
41図－1	65	羨道	須恵器	蓋	口径 13.4cm 器高 5.2cm	緻密、微粒子含む	良好	内面灰白色、外面灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ、ヘラオコシ
41図－2	65	羨道	須恵器	蓋	口径 12.6cm 器高 4.3cm	緻密、微粒子含む	良好	内面淡灰色、外面灰黒色一部灰色	回転ナデ、ナデ、ヘラ切り未調整
41図－3	65	羨道	須恵器	蓋	口径 12.0cm 器高 3.8cm	緻密、1㎜前後の粒子含む	良好	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
41図－4	65	羨道	須恵器	蓋	口径 13.4cm 器高 4.2cm	白色微砂粒含む	良好	内面淡青灰色、外面灰色一部灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
41図－5	65	羨道	須恵器	蓋	口径 12.7cm 器高 4.0cm	2～3㎜の白色砂粒含む	良好	内面灰色、外面灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
41図－6	65	羨道	須恵器	坏身	口径 11.0cm 受部径 13.7cm 器高 4.6cm	緻密、微粒子含む	良好	内面灰色、外面灰黒色と灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ、ヘラ切り痕あり
41図－7	65	羨道	須恵器	坏身	口径 10.2cm 受部径 13.0cm 器高 4.1cm	緻密、2㎜前後の粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
41図－8	66	羨道	須恵器	坏身	口径 12.0cm 受部径 14.5cm 器高 4.2cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ナデ、ナデ、ヘラオコシ
41図－9	66	羨道	須恵器	坏身	口径 11.0cm 受部径 13.8cm 器高 4.1cm	緻密、2～3㎜までの粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
41図－10	66	羨道	須恵器	坏身	口径 11.7cm 受部径 14.2cm 器高 4.5cm	白色小砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ナデ、ナデ、ヘラ切り痕あり

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
41図－11	65	羨道	須恵器	高坏	口径 11.1cm 器高 12.7cm 底径 9.1cm	1㎜前後の白色小砂粒含む	やや不良	内、外面ともに灰色	回転ナデ、回転カキ目
43図－1	67	N－1	須恵器	甕	口径 50.6cm 器高102.8cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	ナデ、カキ目、タタキ
43図－2	67	N－2	須恵器	甕	胴部の推定径 100cm 器高107.8cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	カキ目、タタキ
43図－3		N－1	須恵器	甕	最大径 61.0cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	カキ目、タタキ
46図－1	68	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.5cm 器高 4.4cm	1～2㎜程度の砂粒含む	良好	内面黄褐色、外面暗黄褐色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
46図－2	68	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.0cm 受部径 13.4cm 器高 4.5cm	1㎜程度の砂粒含む	不良	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
46図－3	68	前庭部	須恵器	蓋	口径 13.2cm 器高 4.3cm	1～2㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに濃灰色	回転ナデ、ナデ
46図－4	68	前庭部	須恵器	直口壺	口径 10.0cm 最大径 12.5cm 器高 12.6cm	2㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
50図－1	68	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.2cm 器高 4.4cm	微粒子含む	良好	内面暗紫灰色、外面淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
50図－2	68	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.2cm 受部径 14.0cm 器高 4.3cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
50図－3	68	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.4cm 受部径 14.0cm 器高 3.8cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
50図－4	68	玄室内	須恵器	高台坏	口径 14.1cm 器高 6.7cm	密	不良	内、外面ともに淡黄褐色	回転ナデ、ナデ、回転糸切り
50図－5	68	玄室内	須恵器	坏	口径 11.3cm 器高 4.2cm 底径 5.8cm	緻密、微粒子含む	不良	内、外面ともに淡黄褐色	回転ナデ、回転糸切り
50図－6	68	玄室内	須恵器	底脚坏	口径 9.8cm 器高 3.8cm 底径 5.6cm	緻密	不良	内、外面ともに淡白桃色	回転ナデ
50図－7	69	玄室内	須恵器	底脚坏	器高 3.1cm 脚部径 6.4cm	砂粒含む	不良	内、外面ともに淡黄赤褐色	回転ナデ、ナデ
50図－8	69	玄室内	須恵器	高坏	口径 9.5cm 器高 13.4cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰黒色	回転ナデ、ナデ
50図－9	69	玄室内	土師器	土錘	長さ 6.5cm 最大径 1.9cm	緻密、微粒子含む	良好	白、わずかに褐色	摩滅のため不明
50図－11	69	前庭部	須恵器	坏身	口径 11.2cm 受部径 14.0cm 器高 4.1cm	2㎜までの白砂粒多く含む	良好	内面灰白色、外面淡青灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
50図－12	69	前庭部	須恵器	坏身	口径 11.8cm 受部径 13.5cm 器高 3.9cm	2㎜までの白砂粒多く含む	良好	内、外面ともに青灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
50図－13	69	前庭部	須恵器	壺	口径 9.1cm 最大径 12.2cm 器高 10.8cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
50図－14	69	前庭部	須恵器	子壺	最大径 5.8cm 器高 5.4cm 底径 4.4cm	微粒子含む	不良	内、外面ともに明赤褐色	ナデ
50図－15	70	前庭部	須恵器	子壺	口径 3.1cm 最大径 5.8cm	微粒子含む	不良	内、外面ともに明赤褐色	ナデ
50図－16	70	前庭部	須恵器	子壺	最大径 6.3cm	緻密、微粒子含む	不良	内、外面ともに茶褐色	ナデ
50図－17	70	前庭部	須恵器	子壺	口径 3.3cm 最大径 5.8cm 器高 5.6cm 底径 5.5cm	微粒子含む	不良	内、外面ともに明赤褐色	ナデ
50図－18	70	前庭部	須恵器	子壺	最大径 6.0cm	微粒子含む	不良	内、外面ともに明赤褐色	ナデ

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
50図－19	70	前庭部	須恵器	子壺	口径 3.4cm 最大径 5.3cm 器高 5.2cm	微粒子含む	不良	内、外面ともに明赤褐色	ナデ
50図－20	70	前庭部	須恵器	子壺	最大径 5.5cm 底径 5.0cm	微粒子含む	不良	内、外面ともに明赤褐色	ナデ
50図－21	69	前庭部	須恵器	親壺	タガ径 19.2cm	緻密、微粒子含む	不良	内、外面ともに明桃褐色	ナデ
54図－1	71	墓道	須恵器	蓋	口径 12.6cm 器高 4.4cm	密	良好	内面灰色、外面灰黒色	回転ナデ、ナデ
54図－2	71	墓道	須恵器	坏身	口径 10.4cm 受部径 13.3cm 器高 3.9cm	小砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
58図－1	71	玄室内	土師質	坏	口径 12.3cm 器高 4.7cm 底径 6.2cm	微小砂粒少々含む	不良	内、外面ともに黄褐色	摩滅のため不明
58図－2	71	玄室内	土師質	高台坏	口径 15.5cm 器高 5.7cm 高台径 10.0cm	1㎜程度の砂粒含む	不良	内、外面ともに黄白色	回転ナデ、ナデ
58図－3	71	玄室内	土師質	高台坏	器高 6.8cm 高台径 10.4cm	1㎜大の砂粒含む	良好	内、外面ともに黄白色	回転ナデ、回転糸切り
58図－4	71	前庭部	須恵器	蓋	口径 13.7cm 器高 4.7cm	長石、石英含む	良好	内、外面ともに濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、ナデ
58図－5	71	前庭部	須恵器	蓋	口径 9.5cm	1㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ナデ
58図－6	71	前庭部	須恵器	坏身	口径 9.6cm 受部径 12.9cm 器高 3.5cm	長石微粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
58図－7	71	前庭部	須恵器	坏身	受部径 14.5cm 器高 4.0cm	1～2㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
58図－8	71	前庭部	須恵器	坏身	口径 10.4cm 受部径 13.7cm 器高 4.4cm	1㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
58図－9	71	前庭部	須恵器	高台坏	口径 15.0cm 器高 4.7cm 高台径 8.4cm	1㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに茶灰色	回転ナデ、静止ナデ
58図－10	71	前庭部	須恵器	高台坏	口径 13.6cm 器高 5.2cm 高台径 8.8cm	2㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ナデ、静止ナデ
58図－11	72	前庭部	土師器	底脚坏	器高 3.1cm	2㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに黄灰色	ナデ
64図－1	72	玄室内	須恵器	蓋	口径 14.0cm 器高 4.3cm	3㎜までの砂粒多く含む	不良	内、外面ともに暗赤褐色、内面赤色顔料付着	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
64図－2	72	玄室内	須恵器	蓋	口径 11.8cm 器高 4.1cm	2㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
64図－3	72	玄室内	須恵器	蓋	口径 13.3cm 器高 4.7cm	1㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
64図－4	72	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.1cm 器高 4.3cm	1㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
64図－5	72	玄室内	須恵器	蓋	口径 13.5cm 器高 4.1cm	やや粗、微粒子含む	不良	内、外面ともに灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
64図－6	72	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.2cm 受部径 14.3cm 器高 3.9cm	1.5㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
64図－7	72	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.6cm 受部径 14.1cm 器高 4.1cm	やや粗、砂粒含む	不良	内、外面ともに灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ、ヘラ切り痕あり
64図－8	72	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.3cm 受部径 12.9cm 器高 4.0cm	2㎜弱の砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
64図－9	73	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.0cm 受部径 13.7cm 器高 4.2cm	1㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに黒褐色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
64図－10	73	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.4cm 受部径 12.9cm 器高 3.8cm	1.5㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
64図－11	73	玄室内	須恵器	高坏	口径 14.8cm 器高 7.2cm	1.5㎜までの白砂粒多く含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ナデ、静止ナデ、回転カキ目
64図－12	73	玄室内	須恵器	直口壺	口径 8.6cm 器高 12.0cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ
64図－13	73	玄室内	須恵器	提瓶	口径 12.2cm 器高 15.2cm	3㎜までの白砂粒多く含む	良好	内、外面ともに淡青灰色	回転ナデ、静止ナデ、回転カキ目
65図－1	73	羨道	須恵器	蓋	口径 11.9cm 器高 3.9cm	1.5㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
65図－2	73	羨道	須恵器	蓋	口径 13.8cm 器高 5.0cm	2㎜弱の砂粒多く含む	やや不良	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
65図－3	73	羨道	須恵器	蓋	口径 12.7cm 器高 4.1cm	微小砂粒少し含む	良好	内、外面ともに灰白色	回転ナデ、静止ナデ
65図－4	73	羨道	須恵器	蓋	口径 12.6cm 器高 4.1cm	やや粗	良好	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
65図－5	74	羨道	須恵器	坏身	口径 12.2cm 受部径 14.8cm 器高 4.7cm	白、黒砂粒多く含む	やや良好	内、外面ともに淡青灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
65図－6	74	羨道	須恵器	坏身	口径 11.4cm 受部径 13.9cm 器高 3.4cm	密、微小砂粒少し含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ナデ、静止ナデ
65図－7	74	羨道	須恵器	坏身	口径 10.6cm 受部径 13.4cm 器高 4.1cm	やや粗	良好	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ、ヘラ切り痕あり
65図－8	74	羨道	須恵器	坏身	口径 10.0cm 受部径 12.4cm 器高 4.0cm	微小砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
65図－9	74	羨道	須恵器	直口壺	口径 9.3cm 最大径 11.3cm 器高 12.8cm	1㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
65図－10	74	羨道	須恵器	高坏	口径 16.1cm 脚部径 11.8cm 器高 11.7cm	1㎜までの白砂粒多く含む	良好	内、外面ともに淡青灰色	回転ナデ、静止ナデ
70図－1	75	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.9cm 器高 4.3cm	1～2.3㎜前後の長石、石英少し含む	やや良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
70図－2	75	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.5cm 器高 4.4cm	1～2㎜前後の長石、石英含む	やや良好	内面灰色、外面淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
70図－3	75	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.0cm 器高 4.1cm	1㎜前後の長石含む	良好	内面灰黒色、外面暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
70図－4	75	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.9cm 器高 4.4cm	1㎜までの長石、石英含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
70図－5	75	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.2cm 器高 4.6cm	1㎜までの長石、石英含む	良好	内面暗灰色、外面灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
70図－6	75	玄室内	須恵器	蓋	口径 13.1cm 器高 4.6cm	1㎜前後の長石、石英少し含む	やや良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
70図－7	75	玄室内	須恵器	蓋	口径 13.0cm 器高 4.6cm	1㎜までの石英少し含む	良好	内面灰白色、外面灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
70図－8	75	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.8cm 受部径 14.8cm 器高 4.7cm	1㎜までの長石、石英含む	やや良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
70図－9	75	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.7cm 受部径 13.4cm 器高 4.0cm	1㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ナデ、静止ナデ
70図－10	75	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.7cm 受部径 13.9cm 器高 3.9cm	1㎜前後の長石、石英含む	良好	内面灰黒色、外面暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
70図－11	75	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.7cm 受部径 14.4cm 器高 4.6cm	1㎜前後の長石、石英少し含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
76図－1	76	玄室東隅	須恵器	蓋	口径 12.9cm 器高 4.5cm	やや密	良好	内面灰色、外面黒褐色、灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－2	76	玄室東隅	須恵器	蓋	口径 12.8cm 器高 5.0cm	密	良好	内、外面ともに淡青灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－3	76	玄室東隅	須恵器	蓋	口径 14.0cm 器高 5.0cm	やや密	良好	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－4	76	玄室東隅	須恵器	蓋	口径 11.3cm 器高 4.0cm	密	良好	内、外面ともに薄灰色	回転ナデ、静止ナデ
76図－5	76	玄室東隅	須恵器	蓋	口径 11.6cm 器高 4.6cm	密	良好	内、外面ともに薄灰色	回転ナデ、静止ナデ
76図－6	76	玄室東隅	須恵器	蓋	口径 13.0cm 器高 4.4cm	密	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－7	76	玄室東隅	須恵器	坏身	口径 11.0cm 受部径 14.3cm 器高 4.6cm	密、3㎜までの砂粒少し含む	良好	内面淡灰色、外面薄灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－8	76	玄室東隅	須恵器	坏身	口径 11.4cm 受部径 14.6cm 器高 5.0cm	密	良好	内面淡灰色、外面暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－9	76	玄室東隅	須恵器	坏身	口径 11.0cm 受部径 14.0cm 器高 4.4cm	緻密	良好	内面薄灰色、外面灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－10	76	玄室東隅	須恵器	坏身	口径 11.2cm 受部径 14.4cm 器高 4.6cm	密	良好	内面灰白色、外面灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－11	77	玄室東隅	須恵器	坏身	口径 11.1cm 受部径 14.0cm 器高 4.6cm	密	やや良好	内面薄茶色、外面灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－12	77	玄室東隅	須恵器	坏身	口径 11.2cm 受部径 14.3cm 器高 4.4cm	密	良好	内面薄灰色、外面濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－13	77	玄室東隅	須恵器	坏身	口径 11.2cm 受部径 14.2cm 器高 5.0cm	密	良好	内面灰白色、外面灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－14	77	玄室東隅	須恵器	坏身	口径 10.0cm 受部径 14.3cm 器高 4.6cm	密、1㎜までの砂粒少し含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－15	77	玄室東隅	須恵器	坏身	口径 11.0cm 受部径 13.6cm 器高 4.3cm	密	良好	内、外面ともに灰色	回転ナデ、静止ナデ
76図－16	77	玄室東隅	須恵器	坏身	口径 11.0cm 受部径 14.0cm 器高 4.4cm	密、4㎜までの砂粒少し含む	良好	内面やや暗い灰色、外面暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－17	77	玄室東隅	須恵器	坏身	口径 11.4cm 受部径 14.0cm 器高 4.6cm	密	良好	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－18	77	玄室東隅	須恵器	坏身	口径 10.2cm 受部径 13.6cm 器高 4.5cm	やや密、1.5㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
76図－19	78	玄室東隅	須恵器	坏身	口径 9.5cm 受部径 12.0cm 器高 3.8cm	密	良好	内面薄茶灰色、外面灰色	回転ナデ、静止ナデ
76図－20	78	玄室東隅	須恵器	坏身	口径 9.7cm 受部径 11.8cm 器高 3.8cm	密	良好	内面薄茶灰色、外面灰色	回転ナデ、静止ナデ
76図－21	77	玄室東隅	須恵器	提瓶	口径 8.2cm 最大径 14.0cm 器高 23.0cm	1～2㎜前後の白色砂粒含む	やや良好	内面暗灰色、外面灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、タタキ、カキ目
77図－1	77	玄室東隅	須恵器	直口壺	口径 10.5cm 器高 13.0cm 底径 6.0cm	2㎜までの白色砂粒含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ
77図－2	78	玄室内	須恵器	蓋	口径 13.4cm 器高 4.4cm	密	やや不良	内、外面ともに暗灰色及び淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
77図－3	78	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.4cm 器高 4.4cm	密	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
77図－4	78	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.9cm 器高 4.7cm	緻密	良好	内、外面ともに灰黄色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
77図－5	78	玄室内	須恵器	蓋	口径 13.4cm 器高 4.2cm	砂粒を含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
77図－6	78	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.0cm 器高 3.5cm	密、3㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
77図－7	78	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.2cm 器高 4.6cm	1㎜前後の白色砂粒少し含む	良好	内面灰色、外面暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ、ヘラ切り痕あり
77図－8	78	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.4cm 受部径 13.8cm 器高 3.8cm	密	良好	内、外面ともに灰黒色	回転ナデ、静止ナデ
77図－9	78	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.4cm 受部径 13.2cm 器高 3.9cm	小砂粒少し含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
77図－10	78	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.4cm 受部径 13.8cm 器高 3.4cm	小砂粒少し含む	良好	内、外面ともに濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
77図－11	78	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.0cm 受部径 13.5cm 器高 4.0cm	緻密、微粒子含む	不良	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ、ヘラ切り痕あり
77図－12	79	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.0cm 受部径 14.0cm 器高 4.6cm	4㎜までの砂粒少し含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
77図－13	79	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.8cm 受部径 13.2cm 器高 3.8cm	やや密、4㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
77図－14	79	玄室内	須恵器	高台坏	口径 13.4cm 器高 5.2cm 高台径 8.3cm	密	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ナデ、静止ナデ
77図－15	79	玄室内	須恵器	高台坏	口径 13.7cm 器高 4.7cm 高台径 8.2cm	密、砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ナデ、静止ナデ
77図－16	79	玄室内	須恵器	高台坏	口径 9.7cm 器高 3.5cm 高台径 5.8cm	密、砂粒含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ナデ、静止ナデ
77図－17	79	玄室内	須恵器	蓋	口径 14.6cm 器高 3.7cm つまみ径5.3cm	1～2㎜程度の砂粒含む	良好	内、外面ともに緑灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
77図－18	79	玄室内	須恵器	蓋	口径 15.7cm 器高 2.9cm つまみ径6.2cm	小砂粒少し含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
77図－19	79	玄室内	須恵器	高坏	口径 9.1cm 脚部径 6.0cm 器高 5.5cm	緻密	良好	内面灰黄色、外面灰黄緑色	回転ナデ、静止ナデ
77図－20	79	玄室内	須恵器	坩	口径 4.0cm 器高 5.8cm	緻密、1.5㎜程度の砂粒多く含む	良好	内、外面ともに明灰青色	静止ナデ
77図－21	79	玄室内	須恵器	坩	口径 4.2cm 器高 5.7cm	やや密、3㎜までの白色砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ナデ、静止ナデ
77図－22	80	玄室内	須恵器	甕	口径 11.3cm 器高 13.5cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、カキ目
77図－23	80	玄室内	須恵器	甕	口径 10.9cm 器高 15.4cm	緻密、微粒子含む	不良	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ、カキ目
78図－1	80	玄室内	須恵器	直口壺	口径 9.4cm 最大径 12.3cm 器高 13.4cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
78図－2	80	玄室内	須恵器	直口壺	口径 9.0cm 最大径 11.8cm 器高 12.1cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに濃白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
78図－3	80	玄室内	須恵器	直口壺	口径 9.6cm 最大径 12.4cm 器高 12.6cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ
78図－4	80	玄室内	須恵器	直口壺	口径 9.4cm 最大径 12.6cm 器高 13.0cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ、カキ目
78図－5	81	玄室内	須恵器	平瓶	口径 7.4cm 最大径 15.1cm 器高 14.1cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに濃灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ、カキ目
78図－6	81	玄室内	須恵器	短頸壺	口径 8.4cm 最大径 15.5cm 器高 14.2cm	密、3㎜までの砂粒含む	良好	内面暗灰色、外面灰色及び灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ、カキ目

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
78図－7	81	玄室内	須恵器	短頸壺	口径 7.8cm 最大径 14.3cm 器高 10.5cm	1～2㎜前後の石英、白色砂粒含む	良好	内面暗灰色、外面灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
79図－1	81	玄室内	須恵器	堤瓶	口径 13.7cm 最大径 22.8cm 器高 25.0cm	緻密、微粒子含む	やや不良	内、外面ともに灰色	回転ナデ、静止ナデ、カキ目、タタキ
79図－2	81	玄室内	須恵器	堤瓶	口径 8.6cm 最大径 16.4cm 器高 23.1cm	緻密、、微粒子含む	良好	内、外面ともに濃灰黒色	回転ナデ、カキ目
79図－3	81	玄室内	須恵器	直口壺	口径 12.8cm 最大径 23.8cm 器高 24.4cm	密、2㎜までの白色砂粒少し含む	良好	内面灰色、外面暗灰色	回転ナデ、ヘラ削り、平行タタキ、同心円状タタキ
80図－1	82	前庭部	須恵器	蓋	口径 13.2cm 器高 4.3cm	やや祖	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－2	82	前庭部	須恵器	蓋	口径 13.8cm 器高 4.4cm	密	良好	内、外面ともに淡青灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－3	82	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.6cm 器高 4.2cm	やや祖、砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－4	82	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.8cm 器高 4.2cm	やや祖、7㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－5	82	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.4cm 器高 4.2cm	密、砂粒少し含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－6	82	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.7cm 器高 4.3cm	やや祖、砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－7	82	前庭部	須恵器	蓋	口径 13.3cm 器高 5.1cm	やや祖、3㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－8	82	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.9cm 器高 4.4cm	やや祖、砂粒含む	良好	内面灰白色、暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－9	82	前庭部	須恵器	坏身	口径 12.8cm 受部径 12.9cm 器高 3.8cm	小砂粒少し含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－10	82	前庭部	須恵器	坏身	口径 10.8cm 受部径 13.2cm 器高 4.0cm	やや密、3㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－11	82	前庭部	須恵器	坏身	口径 11.8cm 受部径 14.1cm 器高 4.0cm	砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－12	82	前庭部	須恵器	坏身	口径 10.6cm 受部径 13.5cm 器高 4.1cm	密、2㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－13	83	前庭部	須恵器	坏身	口径 10.7cm 受部径 13.2cm 器高 4.0cm	砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－14	83	前庭部	須恵器	坏身	口径 11.5cm 受部径 14.2cm 器高 4.5cm	やや粗、砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ、ヘラ切り痕あり
80図－15	83	前庭部	須恵器	坏身	口径 10.7cm 受部径 13.1cm 器高 4.2cm	密	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－16	83	前庭部	須恵器	坏身	口径 11.2cm 受部径 13.8cm 器高 3.8cm	やや密、4㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－17	83	前庭部	須恵器	坏身	口径 11.0cm 受部径 13.2cm 器高 4.2cm	やや密、2㎜までの砂粒多く含む	良好	内、外面ともに青灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－18	83	前庭部	須恵器	坏身	口径 10.8cm 受部径 13.4cm 器高 4.1cm	やや粗、砂粒含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－19	83	前庭部	須恵器	坏身	口径 11.4cm 受部径 14.0cm 器高 4.2cm	密、砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
80図－20	83	前庭部	須恵器	高坏	口径 11.4cm	1㎜前後の白色砂粒少し含む	良好	内面灰褐色、外面青灰色	回転ナデ
80図－21	83	前庭部	須恵器	高坏	口径 10.6cm 器高 16.6cm 底径 10.6cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ナデ、静止ナデ

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
80図－22	83	前庭部	須恵器	高坏	口径 10.3cm 器高 14.4cm 底径 9.0cm	緻密	良好	内、外面ともに灰黄緑色及び黄白色	回転ナデ、静止ナデ
81図－1	84	前庭部	須恵器	瓹	口径 8.1cm 器高 10.5cm	緻密	良好	内、外面ともに灰黄色	回転ヘラ削り、回転ナデ
81図－2	84	前庭部	須恵器	子持壺	口径 9.5cm 器高 10.2cm 底径 6.8cm	1～2㎜前後の白色小砂粒含む	不良	内面灰色、外面灰白色	回転ナデ、指頭圧痕あり
81図－3	84	前庭部	須恵器	子持壺	口径 9.4cm 器高 7.3cm	砂粒含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ナデ、タタキ、指頭圧痕あり
81図－4	84	前庭部	須恵器	子持壺	口径 9.3cm 器高 7.0cm	砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ナデ、静止ナデ、タタキ、指頭圧痕あり
81図－5	84	前庭部	須恵器	子持壺	口径 8.9cm 器高 6.7cm	砂粒含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ナデ、静止ナデ、指頭圧痕あり、はりつけ痕あり
82図－1	85	前庭部	須恵器	壺	口径 12.6cm 最大径 21.1cm 器高 20.2cm	密	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ナデ、ヘラ削り、カキ目、同心円状タタキ、平行タタキ
82図－2	85	前庭部	須恵器	長頸壺	高台径 7.9cm 最大径 16.7cm 器高 22.5cm	密	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ナデ、ヘラ削り
82図－3	84	前庭部	須恵器	横瓶	口径 11.4cm 長径 30.4cm 短径 21.4cm 器高 23.2cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ナデ、カキ目、タタキ
89図－1	87	玄室内	須恵器	蓋	口径 13.6cm 器高 4.0cm	砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
89図－2	87	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.0cm 器高 3.8cm	砂粒含む	良好	内面暗灰色、外面淡灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
89図－3	87	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.8cm 器高 4.1cm	砂粒含む	良好	内、外面ともに黒褐色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
89図－4	87	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.8cm 受部径 13.4cm 器高 4.4cm	密	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
89図－5	87	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.3cm 受部径 13.1cm 器高 3.9cm	密	良好	内面暗灰色、外面灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
89図－6	87	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.8cm 受部径 13.4cm 器高 3.9cm	密	良好	内、外面ともに灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
89図－7	87	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.2cm 受部径 13.5cm 器高 4.9cm	密	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
89図－8	87	玄室内	須恵器	蓋	口径 13.6cm 器高 2.1cm	微粒子少し含む	良好	内面暗灰色、外面灰色及び黒色	回転ナデ、静止ナデ
89図－9	87	玄室内	須恵器	高台坏	口径 12.1cm 器高 2.1cm 高台径 7.3cm	密	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ナデ、静止ナデ、ヘラ切り痕あり
89図－10	87	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.8cm 器高 3.7cm	密	良好	内、外面ともに暗黄灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
89図－11	87	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.4cm 器高 3.5cm	密	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
89図－12	87	前庭部	須恵器	蓋	口径 12.4cm 器高 4.0cm	密	良好	内面灰色、外面暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
89図－13	88	前庭部	須恵器	坏身	口径 10.0cm 受部径 12.0cm 器高 4.9cm	密、2㎜程度の砂粒少し含む	良好	内、外面ともに白褐色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
89図－14	88	前庭部	須恵器	坏身	口径 9.2cm 受部径 12.4cm 器高 3.6cm	密	良好	内面灰色、外面灰黒色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
93図－1	89	玄室内	須恵器	蓋	口径 15.8cm 器高 2.6cm つまみ径5.6cm	密	良好	内面灰色、外面暗灰色	回転ナデ、静止ナデ
93図－2	89	玄室内	須恵器	蓋	口径 14.6cm 器高 3.2cm つまみ径5.5cm	やや粗、砂粒含む	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ナデ、静止ナデ

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
93図－3	89	玄室内	須恵器	蓋	口径 15.2cm 器高 3.6cm つまみ径6.2cm	密	良好	内、外面ともに暗灰色	回転ナデ、静止ナデ
93図－4	89	玄室内	須恵器	蓋	口径 15.4cm 器高 3.6cm つまみ径5.7cm	微小砂粒含む	良好	内、外面ともに淡灰色	回転ナデ、静止ナデ
93図－5	89	玄室内	須恵器	蓋	口径 15.5cm 器高 2.5cm つまみ径5.7cm	やや密、3㎜までの砂粒含む	やや良好	内面淡灰色、外面灰色	回転ナデ、静止ナデ、ヘラ削り痕あり
93図－6	89	玄室内	須恵器	蓋	口径 17.5cm 器高 3.2cm つまみ径6.8cm	密	良好	内面灰色、外面やや暗灰色	回転ナデ、静止ナデ、ヘラ削り痕あり
93図－7	89	玄室内	土師器	坏身	口径 11.2cm 器高 2.9cm	密	良好	内、外面ともに赤褐色	ヘラ磨き
93図－8	89	前庭部	須恵器	甕	口径 20.3cm 器高 54.2cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	静止ナデ、カキ目、タタキ
96図－1	90	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.5cm 器高 4.0cm	緻密、微粒子含む	やや良好	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
96図－2	90	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.2cm 器高 4.0cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰白色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
96図－3	90	玄室内	須恵器	蓋	口径 12.4cm 器高 3.8cm	緻密、1㎜程度の粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
96図－4	90	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.6cm 受部径 13.2cm 器高 3.6cm	やや粗、2㎜程度の粒子含む	やや不良	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
96図－5	90	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.2cm 受部径 13.9cm 器高 3.7cm	緻密	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
96図－6	90	玄室内	須恵器	坏身	口径 11.1cm 受部径 13.5cm 器高 3.4cm	緻密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
96図－7	90	玄室内	須恵器	坏身	口径 10.8cm 受部径 13.4cm 器高 3.8cm	緻密	良好	内、外面ともに灰色	回転ヘラ削り、回転ナデ、静止ナデ
103図－1	91	E区	土師器	壺	口径 14.5cm 最大径 29.8cm 器高 34.4cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに淡黄褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、ハケ目
103図－2	91	E区	土師器	壺	口径 20.5cm 最大径 30.1cm 器高 36.0cm	やや粗、微粒子含む	良好	内面灰黒色、外面淡茶桃色、黒色斑点あり	ヘラ削り、ヨコナデ、ハケ目
103図－3	91	E区	土師器	壺	口径 21.2cm 最大径 31.5cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに黄褐色　淡黒色部あり	ヘラ削り、ヨコナデ、ハケ目
103図－4	91	E区	土師器	壺	口径 15.0cm 最大径 24.2cm 器高 24.2cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに淡灰黒色	ヘラヘラ削り、ヨコナデ、ハケ目
103図－5	91	E区	土師器	壺	口径 20.4cm 最大径 33.4cm 器高 35.5cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに黄褐色　黒色部あり	ヘラ削り、ハケ目
103図－6	91	E区	土師器	壺	最大径 42.0cm 器高 41.9cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに淡黄褐色	ヘラ削り、ハケ目、平行沈線
109図－1	92	第1主体部	土師器	甕	口径 14.6cm 器高 5.3cm	3㎜までの砂粒多く含む	良好	内、外面ともに淡橙褐色	ヘラ削り、平行沈線
109図－2	92	第1主体部	土師器	甕	口径 11.6cm 器高 3.3cm	2㎜までの砂粒多く含む	良好	内、外面ともに淡暗褐色	摩滅のため不明
109図－3	92	第1主体部	土師器	鼓形器台	脚部径 13.0cm 器高 9.5cm	3㎜までの砂粒多く含む	良好	内面黄褐色、外面黄褐色一部橙褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、指ナデ
109図－4	92	SD－01 第1層	土師器	甕	口径 14.0cm 器高 4.4cm	2㎜までの白色砂粒少し含む	良好	内面暗黄褐色、外面黄褐色	ヘラ削り
109図－5	92	SD－01 第1層	土師器	甕	不明	2㎜までの砂粒含む	良好	内面黄褐色、外面褐色	摩滅のため不明、平行沈線あり
109図－6	92	SD－01 第1層	土師器	鼓形器台の脚	不明	2㎜までの白色砂粒少し含む	良好	内、外面ともに黄褐色	ヘラ削り

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
109図－7	92	SD－01 第1層	土師器	鼓形器台の脚	最大径 14.6cm 器高 3.7cm	1㎜までの砂粒少し含む	良好	内、外面ともに黄褐色	ヘラ削り、ヘラ磨き、平行沈線あり
109図－8	92	SD－01 第2層	土師器	甕	口径 17.4cm 器高 14.4cm	1.5㎜までの砂粒含む	良好	内面橙褐色、外面やや赤褐色	ヘラ削り、平行沈線あり
109図－9	92	SD－01 第2層	土師器	壺	器高 7.9cm	4㎜までの砂粒含む	良好	内面黄褐色、外面褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、指頭圧痕あり
118図－1	93	SX－02 埋土中	土師器	壺	器高 3.3cm	3㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに黄橙色	摩滅のため不明
118図－2	93	SX－02 埋土中	土師器	把手	長さ 4.8cm	1.5㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに黄褐色	摩滅のため不明
118図－3	93	SX－04 第2層	弥生土器	高坏脚部	脚部径 11.0cm 器高 4.9cm	密、砂粒少し含む	良好	内、外面ともに黄褐色	ヨコナデ、ハケ目
118図－4	93	SX－07周辺	弥生土器	壺型土器	最大径 17.2cm 器高 4.7cm	微粒子少し含む	良好	内、外面ともに黄褐色	ヘラ削り
118図－5	93	SX－07周辺	土師器	甕	口径 16.0cm 器高 9.7cm	密、砂粒少ない	良好	内、外面ともに黄褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、ハケ目
118図－6	93	SX－07上面	弥生土器	ワイングラス状土器	脚部径 12.0cm 最大径 15.6cm 器高 12.4cm	2㎜までの白色砂粒少し含む	良好	内、外面ともに黄褐色、外面に少し赤色顔料付着	ヘラ削り、ヨコナデ、ハケ目
118図－7	93	E－4区 畦畔表採	弥生土器	特殊器台	脚部径 38.0cm 器高 6.0cm タガ径 41.4cm	5㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに橙褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、凹線文、鋸歯文
121図－1	93	床面	土師器	甑	口径 28.0cm 器高 9.8cm	1㎜までの砂粒少し含む	良好	内面黄褐色、外面黄褐色一部黒色	ハケ目
122図－1	94	埋土中	弥生土器	甕	口径 15.6cm 器高 5.5cm	密、1㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、ヘラ磨き
122図－2	94	埋土中	弥生土器	甕	口径 18.0cm 器高 4.5cm	1.5㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに橙褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、ヘラ磨き
122図－3	94	埋土中	弥生土器	甕	口径 16.4cm 器高 4.1cm	3.5㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに黄褐色	摩滅のため不明
122図－4	94	埋土中	弥生土器	甕	口径 14.0cm 器高 4.6cm	2.5㎜までの砂粒含む	良好	内面黒色一部褐色、外面褐色一部暗褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、ヘラ磨き
122図－5	94	埋土中	弥生土器	甕	口径 18.8cm 器高 4.7cm	3㎜までの砂粒多く含む	良好	内面暗灰色、淡黄橙色、外面黄橙色	摩滅のため不明
122図－6	94	埋土中	弥生土器	甕	口径 14.4cm	4㎜までの砂粒多く含む	不良	内、外面ともに赤黄褐色	摩滅のため不明
122図－7	94	埋土中	弥生土器	甕	口径 24.0cm	1㎜までの砂粒多く含む	良好	内、外面ともに暗黄褐色、赤黄褐色	摩滅のため不明
122図－8	94	埋土中	弥生土器	高坏	口径 24.2cm 器高 10.2cm	3㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに橙色	ヨコナデ
125図－1	94	床面	弥生土器	甕	口径 15.0cm 器高 10.9cm	2㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに黄褐色、外面に黒斑あり	ヘラ削り、ヨコナデ、ヘラ磨き
125図－2	94	床面	土師器	甕		密、砂粒少ない	良好	内、外面ともに淡黄色	摩滅のため不明
125図－3	94	床面	土師器	甕	口径 18.6cm 器高 5.0cm	1.5㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに淡黄色	摩滅のため不明
125図－4	94	床面	土師器	低脚坏		3㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに黄橙色	摩滅のため不明
127図－1	95	床面	弥生土器	甕	口径 15.6cm 器高 5.8cm	2㎜までの砂粒少し含む	良好	内面暗黄色、外面黄橙色 口縁部スス付着	ヘラ削り、ヨコナデ、凹線文、貝殻腹縁刺突文
127図－2	95	床面	弥生土器	甕	口径 13.6cm 器高 3.3cm	2㎜までの白色砂粒多く含む	良好	内面黄褐色、外面黄褐色 口縁部黒褐色	ヘラ削り、平行沈線

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
127図－3	95	床面	弥生土器	甕	口径 15.4cm 器高 5.4cm	4㎜までの砂粒含む	良好	内面黄褐色、外面黄褐色 口縁一部黒褐色	ヘラ削り
127図－4	95	床面	弥生土器	甕	口径 14.4cm 器高 7.6cm	3.5㎜までの砂粒多く含む	良好	内面暗黄褐色、外面橙褐色	ヘラ削り
127図－5	95	床面	弥生土器	甕底部	器高 2.0 cm 底径 6.6cm	3.5㎜までの砂粒含む	良好	内面暗褐色、外面暗赤褐色	ヘラ削り
127図－6	95	床面	弥生土器	甕底部	器高 5.1cm 底径 5.4cm	4㎜までの白色砂粒含む	良好	内面暗褐色、外面暗橙色一部黒色	ヘラ削り
129図－1	96	床面	土師器	鼓形器台	口径 15.0cm 器高 3.7cm	密	良好	内、外面ともに黄褐色	摩滅のため不明
129図－2	96	床面	土師器	甕		1.5㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに黄橙色	ヨコナデ
129図－3	96	床面	土師器	甕底部	器高 2.3cm 底径 3.8cm	2.5㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに黄褐色	ヘラ削り
131図－1	96	埋土中	弥生土器	甕	口径 14.8cm 器高 5.0cm	2㎜までの白色砂粒多く含む	良好	内面黄褐色、外面橙褐色	ヘラ削り、平行沈線
131図－2	96	埋土中	弥生土器	甕	口径 18.7cm 器高 4.0cm	2㎜までの砂粒含む	良好	内面褐色、外面黄褐色	ヨコナデ、平行沈線
131図－3	96	埋土中	土師器	甕	口径 16.4cm 器高 3.7cm	2.5㎜までの砂粒含む	良好	内面淡黄褐色、外面淡黄橙色	摩滅のため不明
131図－4	96	埋土中	土師器	甕	口径 13.0cm 器高 2.9cm	密、微粒子含む	良好	内、外面ともに黄褐色	摩滅のため不明
131図－5	96	埋土中	土師器	甕	口径 18.6cm 器高 4.1cm	4㎜までの砂粒含む	良好	内面黄褐色、外面黒色	摩滅のため不明
131図－6	96	埋土中	土師器	高坏	脚部径 14.0cm 器高 1.6cm	1㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに黄褐色	摩滅のため不明
133図－1	97	埋土中	弥生土器	壺型土器	口径 15.2cm 器高 4.4cm	2㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに橙褐色	ヘラ削り、ヨコナデ
133図－2	97	埋土中	弥生土器	甕	口径 16.0cm 器高 3.5cm	密、砂粒少ない	良好	内面暗黄褐色、外面暗褐色	ヘラ削り、ヨコナデ
133図－3	97	埋土中	弥生土器	甕	口径 21.2cm 器高 4.7cm	密、3㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに橙黄色	摩滅のため不明
133図－4	97	埋土中	弥生土器	壺	口径 16.0cm 器高 3.5cm	2㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに橙黄色	摩滅のため不明
133図－5	97	埋土中	弥生土器	甕	口径 14.4cm 器高 4.4cm	4㎜までの白色砂粒少し含む	良好	内、外面ともに黄褐色	摩滅のため不明
133図－6	97	埋土中	弥生土器	甕	口径 23.8cm 器高 4.3cm	3㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに橙黄色	摩滅のため不明
133図－7	97	埋土中	弥生土器	甕		1.5㎜までの砂粒含む	良好	内面暗黄褐色、外面暗褐色	摩滅のため不明
133図－8	97	埋土中	弥生土器	壺型土器		2㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに暗黄色	穿孔あり
133図－9	97	埋土中	弥生土器	壺型土器	器高 2.3cm 底径 9.4cm	2㎜までの砂粒多く含む	良好	内面茶褐色、外面褐色及び黒褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、指頭圧痕あり
133図-10	97	埋土中	弥生土器	底部	器高 2.3cm 底径 6.4cm	3㎜までの砂粒含む	良好	内面灰褐色、外面赤橙色	ヘラ削り
133図-11	97	埋土中	弥生土器	底部	器高 7.4cm 底径 7.0cm	5㎜までの砂粒多く含む	良好	内面褐色、外面暗橙色	摩滅のため不明
133図-12	97	埋土中	弥生土器	高坏	口径 17.6cm 器高 4.8cm	2㎜までの砂粒少し含む	良好	内面橙褐色、外面赤橙色	摩滅のため不明

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整
133図-13	97	埋土中	弥生土器	高坏	脚部径 16.4cm 器高 4.8cm	3㎜までの砂粒含む	良好	内、外面ともに橙黄色	摩滅のため不明
133図-14	97	埋土中	弥生土器	高坏	口径 21.0cm 器高 6.6cm	2㎜までの白色砂粒少し含む	良好	内、外面ともに橙褐色	摩滅のため不明

臼コクリ鉄製品観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	最大長	最大幅	最大厚	備考
25図－4	56	N－1号横穴	刀子	9.1cm	1.1cm	0.5cm	銹が著しい
35図－1	63	N－2号横穴	大刀	54.6cm	2.8cm	0.9cm	銹が著しい、茎に木質が残る
35図－2	63	N－2号横穴	大刀	27.8cm	3.0cm	1.3cm	銹が著しい、茎に目釘孔あり
35図－3	63	N－2号横穴	刀子	2.8cm	0.8cm	0.25cm	銹が著しい
35図－4	63	N－2号横穴	鏃	2.8cm	0.7cm	0.3cm	
35図－5	63	N－2号横穴	刀子	4.5cm	1.1cm	0.4cm	銹が著しい
35図－6	63	N－2号横穴	刀子	3.8cm	0.7cm	0.4cm	
35図－7	63	N－2号横穴	鏃	5.6cm	1.7cm	0.3cm	
35図－12	63	N－2号横穴	馬具（辻金具）	8.4cm	8.5cm	2.9cm	金メッキが残る
42図－1	66	N－3号横穴	大刀	42.7cm	3.3cm	0.9cm	
42図－2	66	N－3号横穴	鏃	11.4cm	0.4cm	0.3cm	銹が著しい
42図－3	66	N－3号横穴	鏃	11.5cm	0.4cm	0.2cm	銹が著しい
42図－4	66	N－3号横穴	鏃	13.2cm	0.9cm	0.4cm	
51図－1	70	N－5号横穴	鏃	7.8cm	1.5cm	0.3cm	木質が残る
51図－2	70	N－5号横穴	鐔	6.2cm	2.6cm	0.4cm	銹が著しい
51図－3	70	N－5号横穴	鏃	14.0cm	4.0cm	0.4cm	銹が著しい、茎に木質が残る
59図－1	72	N－7号横穴	刀子	26.9cm	2.3cm	0.5cm	銹が著しい
59図－2	72	N－7号横穴	刀子	23.8cm	2.4cm	0.5cm	茎に木質が残る
59図－3	72	N－7号横穴	弓飾金具	3.2cm	1.2cm	0.5cm	
66図－3	74	N－9号横穴	釘	4.9cm	0.6cm	0.5cm	木質付着
66図－4	74	N－9号横穴	釘	8.7cm	0.6cm	0.5cm	
66図－5	74	N－9号横穴	鏃	12.3cm	1.0cm	0.7cm	
71図－1	76	S－1号横穴	直刀	35.4cm	2.3cm	0.6cm	銹が著しい
83図－7	86	S－2号横穴	刀子	9.5cm	1.1cm	0.4cm	茎に木質が残る
83図－8	86	S－2号横穴	刀子	11.3cm	1.4cm	0.6cm	
83図－9	86	S－2号横穴	大刀	11.5cm	2.6cm	1.4cm	銹が著しい
83図－10	86	S－2号横穴	鉄斧	10.5cm	3.7cm	2.5cm	袋部に木質が残る
83図－11	86	S－2号横穴	不明	17.0cm	2.9cm	1.3cm	銹が著しい
83図－12	86	S－2号横穴	釘	6.1cm	1.1cm	0.7cm	木質が残る

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	最大長	最大幅	最大厚	備考
83図－13	86	S－2号横穴	釘	3.3cm	0.7cm	0.7cm	木質が残る
83図－14	86	S－2号横穴	釘	6.3cm	0.7cm	0.7cm	木質が多く残る
83図－15	86	S－2号横穴	釘	5.2cm	0.8cm	0.5cm	木質が残る
83図－16	86	S－2号横穴	釘	5.9cm	0.5cm	0.5cm	木質が残る
83図－17	86	S－2号横穴	釘	3.9cm	0.8cm	0.55cm	木質が残る
83図－18	86	S－2号横穴	釘	3.7cm	0.5cm	0.4cm	木質が残る
83図－19	86	S－2号横穴	釘	4.2cm	0.5cm	0.4cm	木質が残る
84図－1	85	S－2号横穴	単竜環頭大刀	長径6.4cm	短径4.6cm	1.1cm	銹が著しい
84図－2	85	S－2号横穴	筒金具	4.2cm	4.0cm	2.5cm	
84図－3	85	S－2号横穴	鞘口・把縁金具	18.05cm	4.9cm	2.6cm	
84図－4	85	S－2号横穴	鞘筒金具	4.3cm	3.9cm	2.1cm	
90図－3	88	S－3号横穴	刀子	7.7cm	1.3cm	0.5cm	
90図－4	88	S－3号横穴	釘	5.8cm	0.6cm	0.5cm	木質が残る
90図－5	88	S－3号横穴	釘	7.0cm	1.9cm	0.55cm	全体が木質で被われている
90図－6	88	S－3号横穴	釘	5.5cm	1.5cm	0.4cm	木質が多く残る
90図－7	88	S－3号横穴	釘	3.7cm	0.7cm	0.5cm	銹が著しい
90図－8	88	S－3号横穴	釘	6.2cm	1.1cm	0.8cm	木質付着
90図－9	88	S－3号横穴	ヤス	13.2cm	11.4cm	3.3cm	銹が著しい
94図－1	89	S－4号横穴	鏃	6.4cm	1.0cm	0.8cm	木質で被われている
94図－2	89	S－4号横穴	責金具	長径3.3cm，短径1.9cm	0.35cm	0.2cm	
94図－3	89	S－4号横穴	大刀の飾金具	1.3cm	0.9cm	0.2cm	

臼コクリ耳環観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	長径（cm）	短径（cm）	備考
25図－1	56	N－1号横穴	2.9	2.8	銅環
25図－2	56	N－1号横穴	2.9	2.6	銅環
25図－3	56	N－1号横穴	2.9	2.6	銅環
35図－8	63	N－2号横穴	3.1	2.8	銅環に金鍍金
35図－9	63	N－2号横穴	3.2	2.8	銅環に金鍍金
35図－10	63	N－2号横穴	3.0	2.6	銅環に金鍍金
35図－11	63	N－2号横穴	3.0	2.7	銅環
66図－1	74	N－9号横穴	2.9	2.7	銅環
66図－2	74	N－9号横穴	2.9	2.7	銅環
83図－1	86	S－2号横穴	2.9	2.6	銅環、腐蝕著しい
83図－2	86	S－2号横穴	2.9	2.6	銅環、腐蝕著しい

挿図番号	写真図版	出土地点	長径（cm）	短径（cm）	備考
83図－3	86	S－2号横穴	2.4	2.2	銅環に金鍍金
83図－4	86	S－2号横穴	1.9	1.75	銅環、腐蝕著しい
83図－5	86	S－2号横穴	1.9	1.75	銅環、腐蝕著しい
83図－6	86	S－2号横穴	1.9	1.75	銅環、腐蝕著しい
90図－1	88	S－3号横穴	3.1	2.8	銅環、腐蝕著しい
90図－2	88	S－3号横穴	2.6	2.4	銅環、腐蝕著しい

臼コクリ玉・石製品観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	種類	材質	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
36図－1	64	N－2号横穴	勾玉	メノウ	3.9		1.2	
36図－2	64	N－2号横穴	勾玉	水晶	2.65		0.75	
36図－3	64	N－2号横穴	勾玉	滑石	1.3		0.4	
36図－4	64	N－2号横穴	管玉	ガラス	1.16	0.5		
36図－5	64	N－2号横穴	管玉	ガラス	0.86	0.58		
36図－6	64	N－2号横穴	切子玉	水晶	2.18	1.5		
36図－7	64	N－2号横穴	切子玉	水晶	1.16	1.12		
36図－8	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.2	0.48		
36図－9	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.3	0.41		
36図－10	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.22	0.36		
36図－11	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.27	0.37		
36図－12	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.52	0.73		
36図－13	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.75	0.85		
36図－14	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.72	0.81		
36図－15	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.54	0.81		
36図－16	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.74	0.71		
36図－17	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.54	0.81		
36図－18	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.61	0.72		
36図－19	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.65	0.82		
36図－20	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.56	0.81		
36図－21	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.6	0.78		
36図－22	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.55	0.78		
36図－23	64	N－2号横穴	小玉	ガラス	0.65	0.68		
50図－10	69	N－5号横穴	砥石		13.2	4.4		
84図－5	86	S－2号横穴	小玉	安山岩	0.62	0.72		
84図－6	86	S－2号横穴	小玉	安山岩	0.43	0.57		

挿図番号	写真図版	出土地点	種　類	材　質	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備　考
84図－7	86	S－2号横穴	小　玉	安山岩	0.54	0.66		
84図－8	86	S－2号横穴	小　玉	安山岩	0.57	0.62		
84図－9	86	S－2号横穴	小　玉	安山岩	0.59	0.67		
84図－10	86	S－2号横穴	小　玉	安山岩	0.47	0.66		
84図－11	86	S－2号横穴	小　玉	安山岩	0.59	0.65		
84図－12	86	S－2号横穴	小　玉	安山岩	0.5	0.7		
84図－13	86	S－2号横穴	小　玉	安山岩	0.51	0.65		
84図－14	86	S－2号横穴	小　玉	安山岩	0.48	0.71		
96図－8	90	S－5号横穴	勾　玉	碧　玉	3.0		1.0	
127図－7	95	SI－05	磨　石		10.7	5.4	4.8	
127図－8	95	SI－05	磨　石		15.5	10.5	4.9	
127図－9	95	SI－05	磨　石		17.7	12.5	5.5	
131図－7	96	SB－01	台　石		29.8	25.7	8.3	

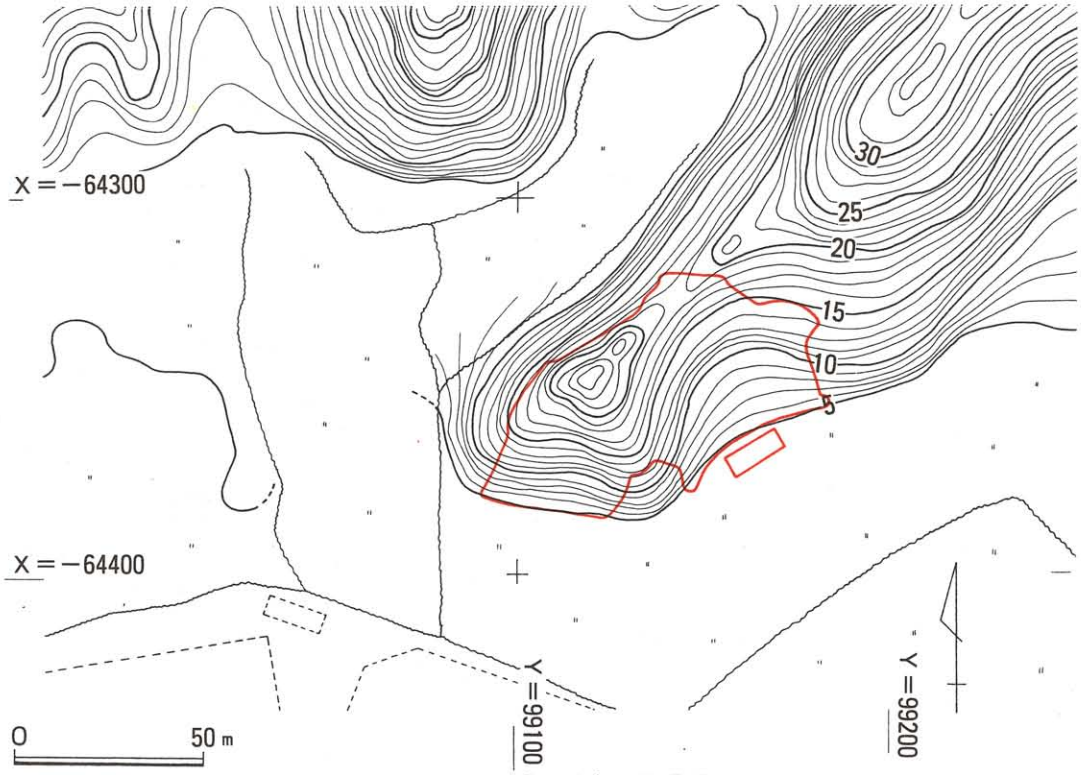
V 大 原 遺 跡

1 調査の概要

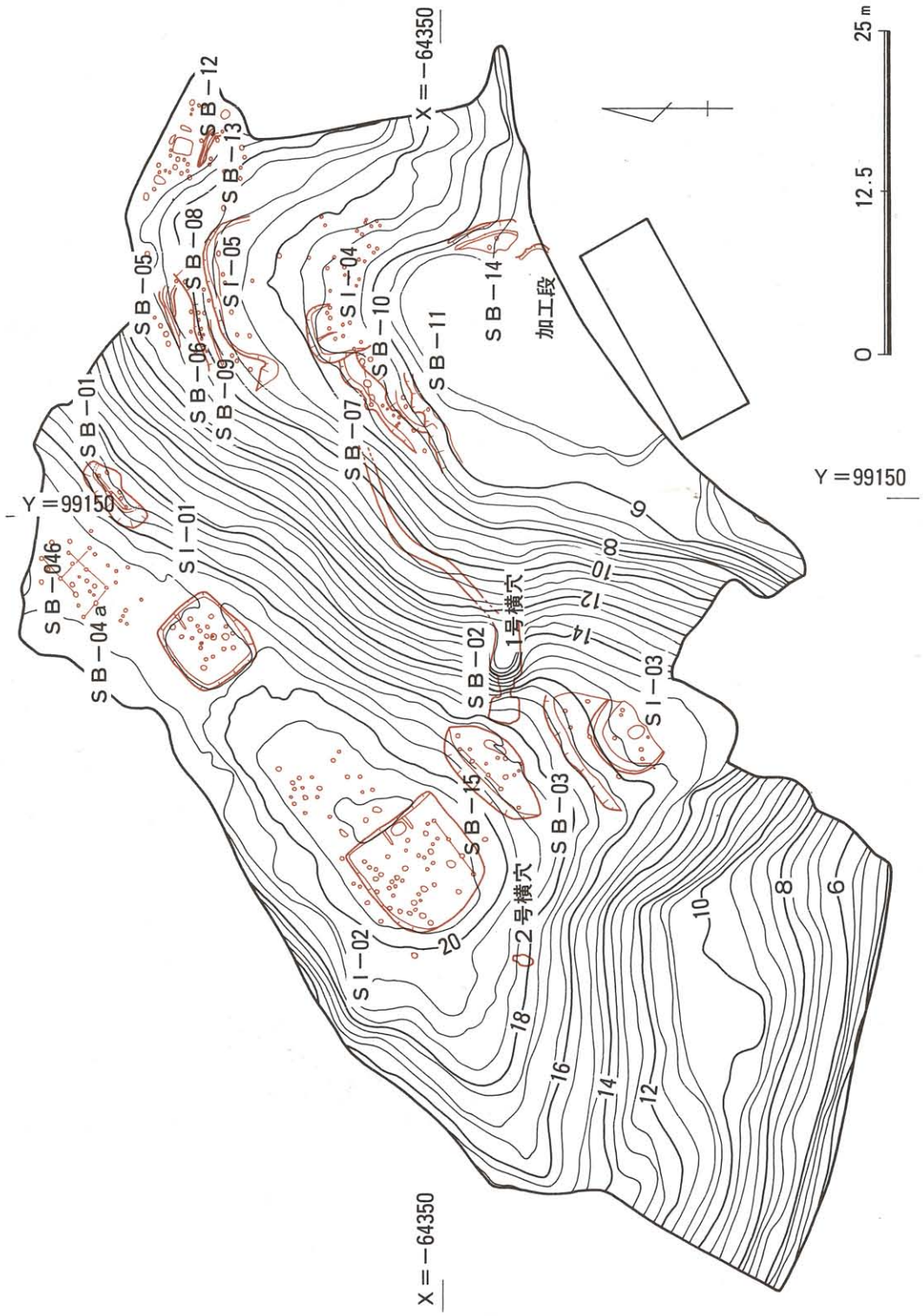
大原遺跡は、伯太川東岸の安来平野を臨む北東から南西に延びる低丘陵地に位置する。丘陵南西端の尾根上から南東側斜面が今回の調査対象地である(第1図)。調査の結果、尾根上から古墳時代中期の玉作工房跡2棟を検出した。斜面からは、弥生時代中期～奈良時代にかけての竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡多数と、古墳時代後期の横穴墓2基を検出した。このうち掘立柱建物跡については、斜面に存在しているため、ほとんどが流出していた。また、斜面下方から水田部にかけて、厚さ約4mの遺物包含層が堆積しており、弥生時代中期～奈良時代の土器と碧玉・瑪瑙片が多量に出土している（第2図)。

S I −01【玉作工房跡】(第3図)

調査区北東側の尾根上平坦面に位置する玉作工房跡で、竪穴住居と同一の形態をしている。風化花崗岩の岩盤に掘り込まれているため、床面の遺存状態はあまり良くなかったが、ほぼ水平であり、床面標高は約19mを測る。また、住居跡の南北軸から西壁の間に試掘トレンチが穿たれているため、



第1図　大原遺跡調査区位置図



第２図　大原遺跡遺構配置図

この部分の遺物の出土状況については把握できなかった。

平面形は、北西壁と南東壁が若干張り出すが、長方形を呈すると思われ、規模は上縁で長軸6.6m、短軸5.6mを測る。壁高は約40cmを測り、かなり傾斜をつけて掘り込まれていた。床面壁沿いに幅8～20cm、深さ4cm、断面U字形の溝が廻っていたが、北西壁内側でさらにもう1本検出した。この溝は幅10～24cm、深さ3cmを測り、床面北隅から弧状に延びて、西隅付近でP1によって切られていた。この状況から判断すると、規模を拡張して建て替えが行われたものと思われる。建て替え前の建物の規模は不明であるが、平面形は内側に見られる溝より推定すれば、円形を呈していたと考えられる。また、床面には多数の柱穴が穿たれていたが、これに伴う柱穴は判断できなかった。

建て替え後の建物跡に伴う柱穴は、P1～P4の4個が対応するものと思われる。これら主柱穴の規模は、上縁径44～50cm、深さ40～50cmを測り、各柱穴間の距離は南北方向が2.7m、東西方向が3.0mを測る。

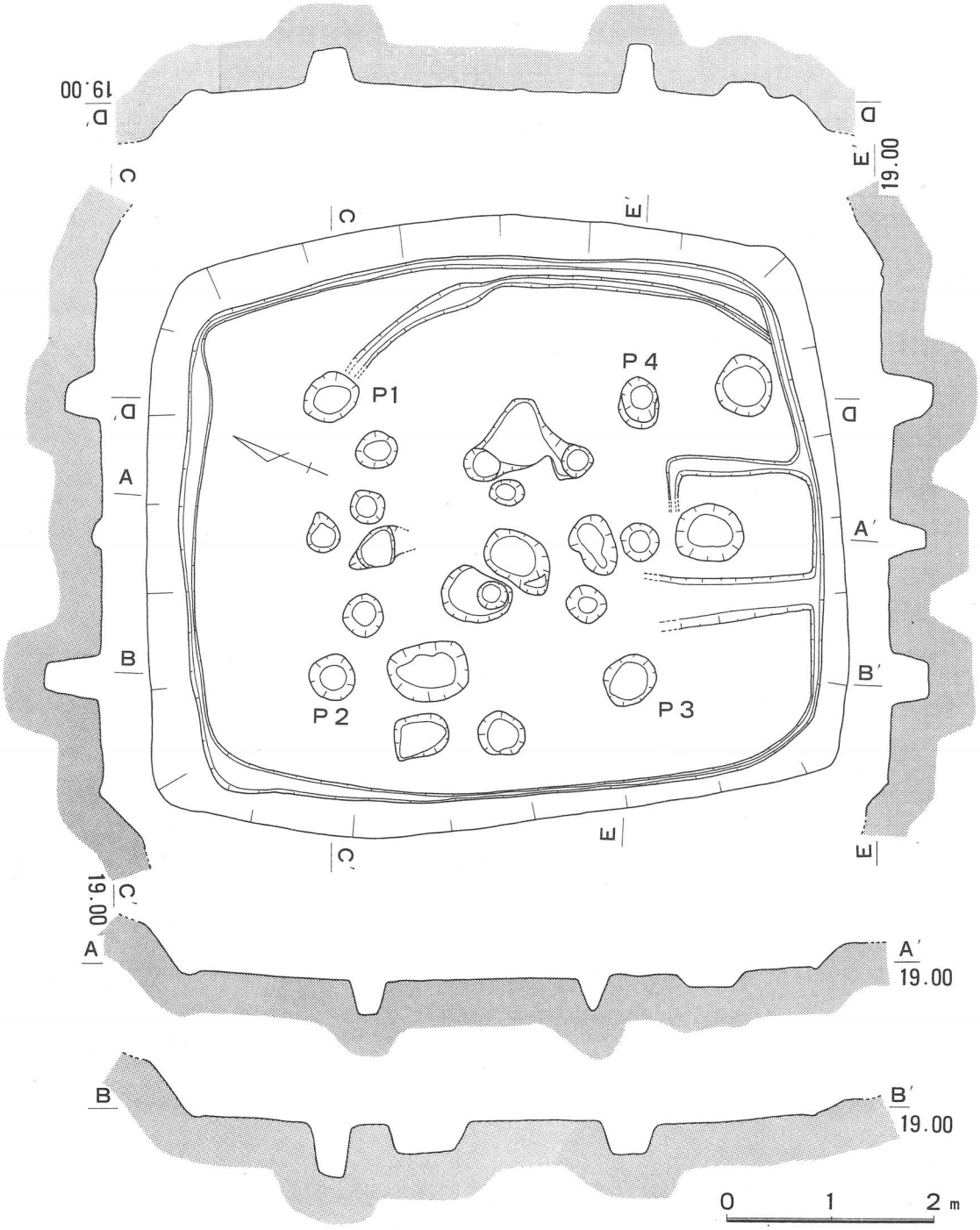
北東壁側の床面中央で、壁溝からさらに南西に延びる2本の溝と、それに挟まれたピットを検出した。溝は幅18～44cm、深さ6～10cmを測り、約1.4m延びて途切れている。ピットは楕円形を呈しており、長軸66cm、短軸56cm、深さ14cmを測る。やや浅めのピットであるが、溝に挟まれている事から判断すれば、工作用ピット等の特殊な用途のピットであった可能性も考えられる。

出土遺物は、土師器甕、高坏、碧玉製管玉未製品、同勾玉未製品、瑪瑙製勾玉未製品、滑石製勾玉未製品、同臼玉未製品、碧玉・瑪瑙の剝片多数、砥石、鉄滓等がある（第4図）。検出状況をみると、各層から出土しているが、おもに床面付近で多く、床面全体に分布している。また、この中で注意されるのが、鉄滓が出土していることである。鉄滓の出土状況を観察すると、住居跡西隅に多く認められ、各層から出土している。残念なのは鉄滓の集中している部分が試掘トレンチによって空白地帯となり、出土状況が把握できなかったことである。ただ、床面上・ピット内から数点出土していること、土層堆積状況に攪乱等が認められないことから、他の遺物と同時期頃と思われる。

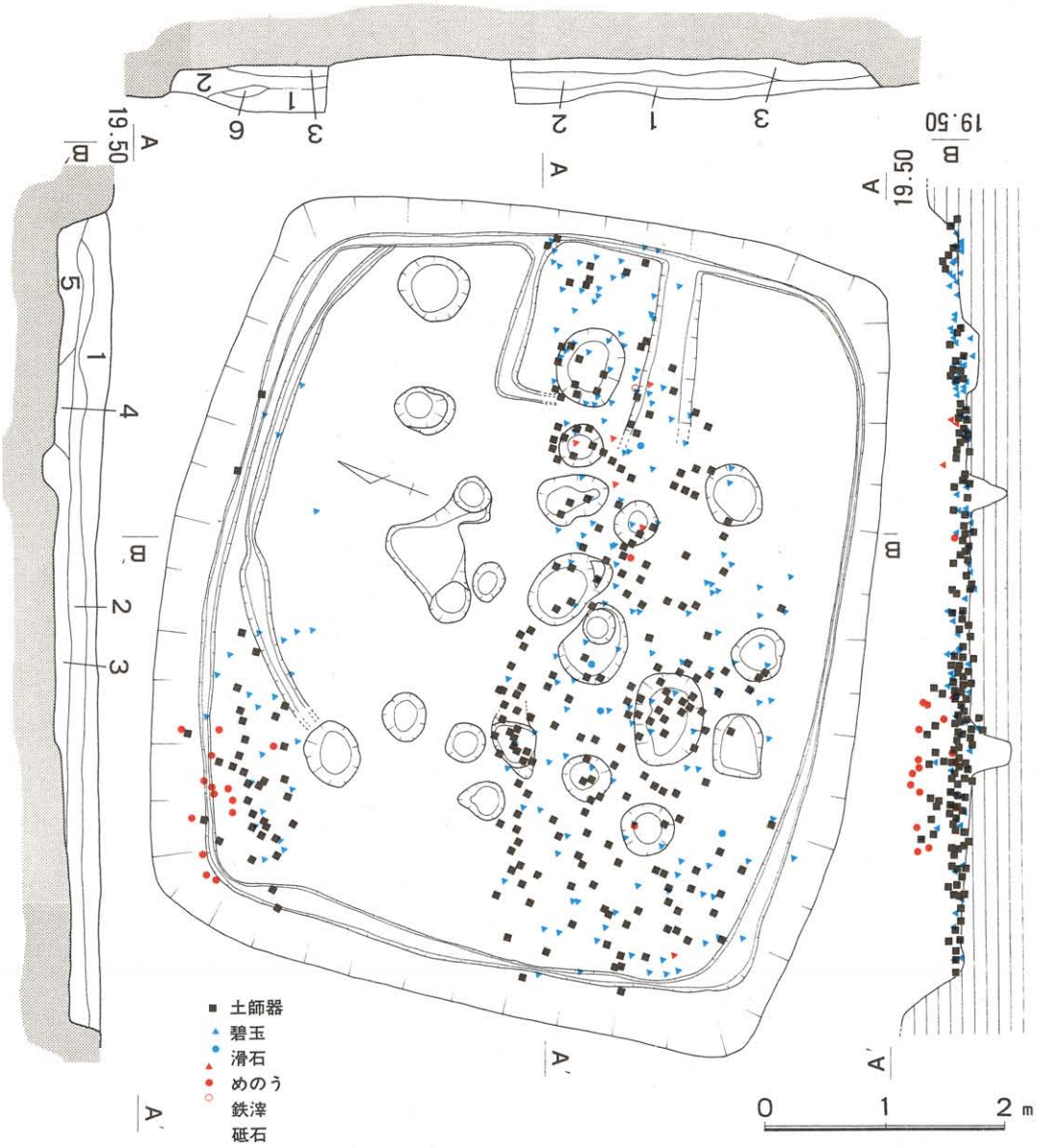
土師器（第5図）　甕形土器は4点（1～4）ある。1は複合口縁を有するもので、口縁部は直立気味にのび、複合口縁部の稜は若干鈍くなり、全体的に厚いつくりをしている。2～4は単純口縁のもので、口縁部は外傾してのびる。高坏は4点（5～8）あり、6・7は坏部外面に段をもつもので、口縁部は外反してのびて端部に至る。5は内湾する体部を有する坏部のものである。8は脚部で脚裾部はハの字に開く。

玉未製品（第6・7図）　玉材として管玉・勾玉の原石・未製品、臼玉未製品が出土している。

管玉未製品類は4点（第6図1～4）出土しており、いずれも碧玉製である。1・2は方柱状に分割したもので、側面調整を施していない段階のものである。3は方柱状に分割したものに研磨を施す段階であり、1側面および両端部に施されている。4は方柱状のものに研磨を施して多角柱を

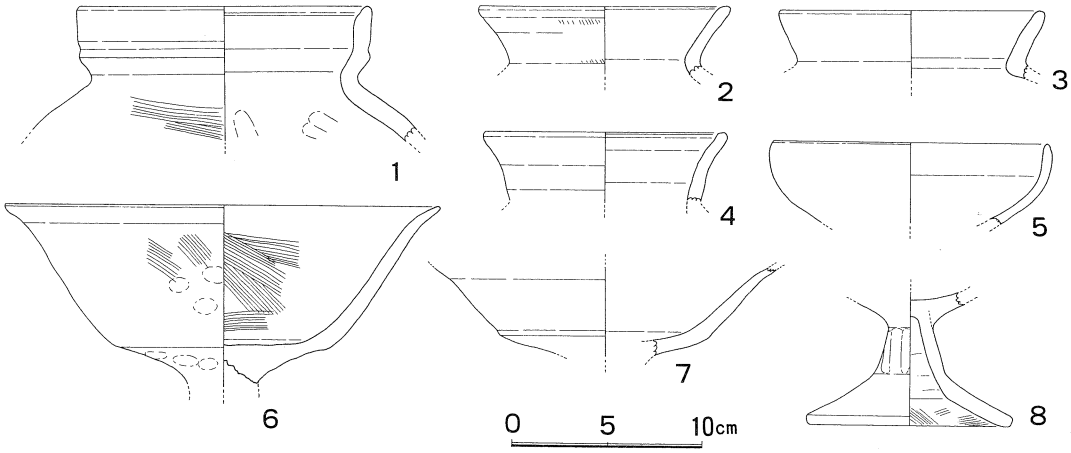


第3図　SI－01実測図



1. 暗黄茶色砂質土
2. 暗黄色砂質土
3. 黒色砂質土
4. 暗黄褐色砂質土
5. 暗褐色砂質土
6. 灰黄色砂質土

第４図　ＳＩ－０１遺物出土状況図

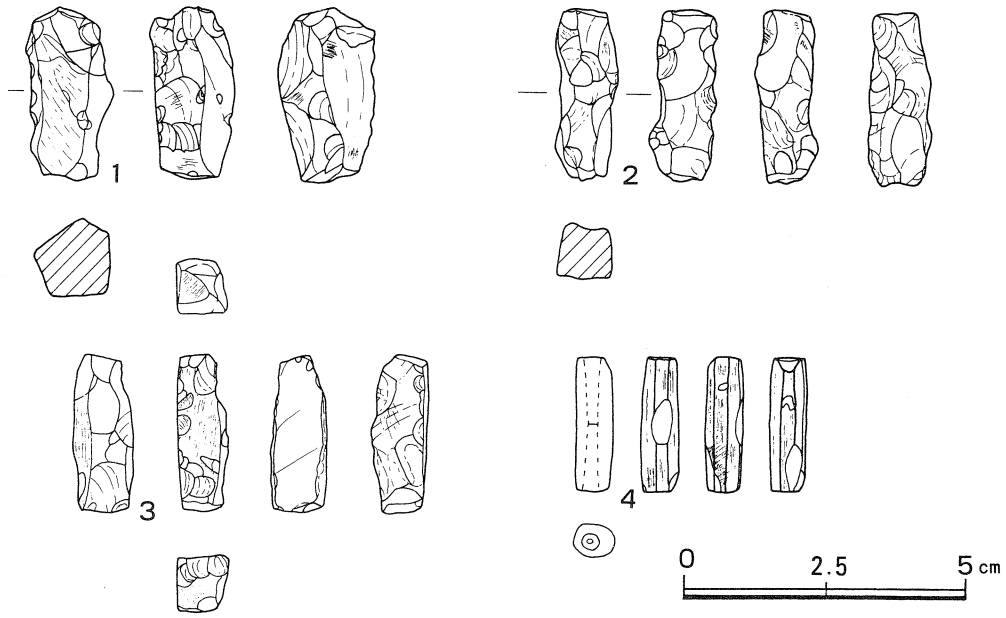


第５図　ＳＩ－01出土遺物実測図

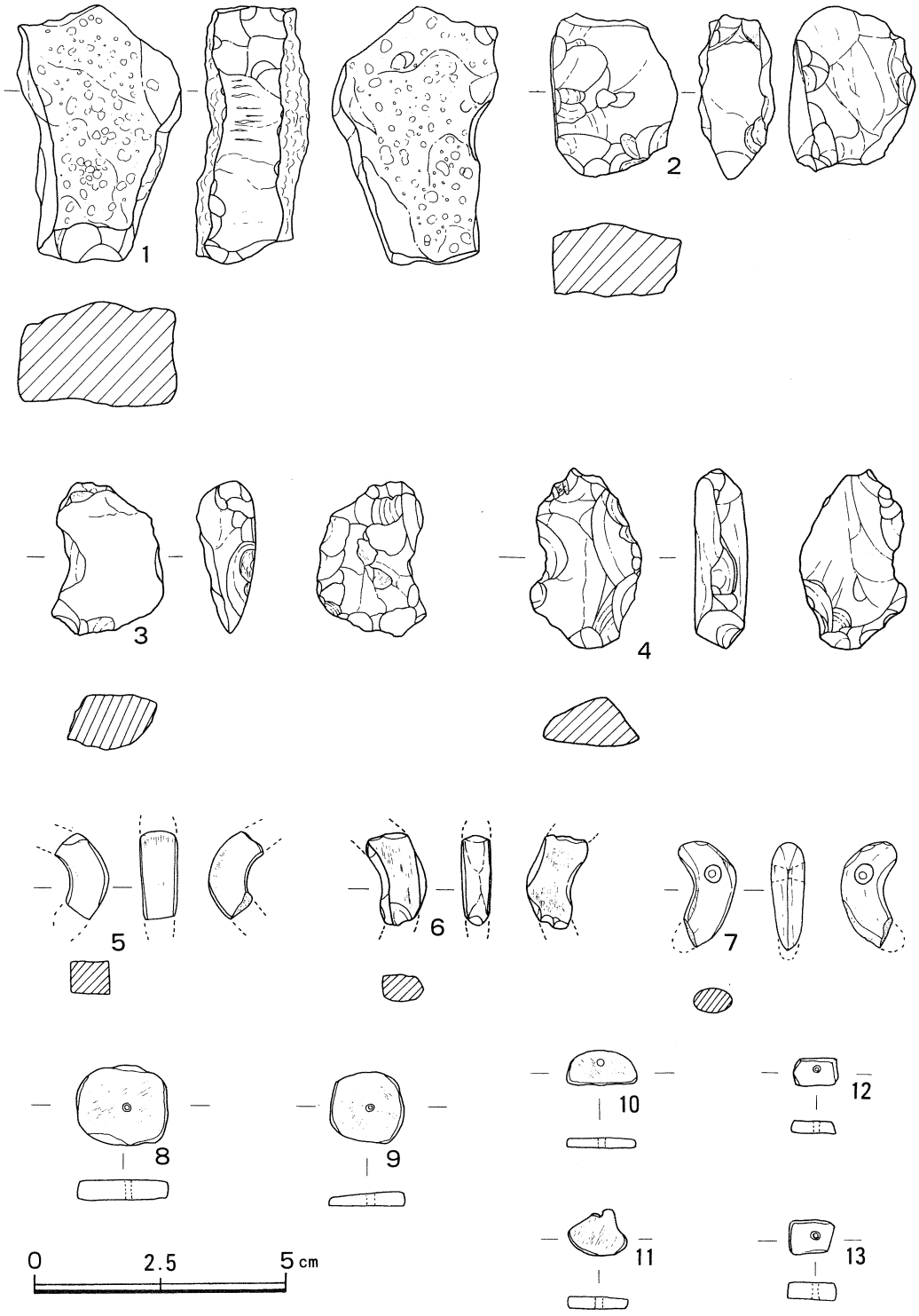
作りだして、穿孔を行う段階のものであるが、仕上研磨の途中で失敗したものと思われ、側面に４ヶ所剝離面が認められる。また、穿孔は両面から行われている。

勾玉未製品類は７点（第７図１～７）出土しており、２・３・６は碧玉製、１・４は瑪瑙製、５・７は滑石製である。１は形割で作り出された石核である。２・３・４は勾玉用石核片をＣ字状に調整したもので、研磨は認められない。５・６は全面に研磨を施すが、穿孔が認められないものである。７はほぼ完成した形態をもつが、研磨の稜が若干認められる。穿孔は両面から行われている。

臼玉未製品は６点（第７図８～13）出土しており、いずれも滑石製である。表裏に荒い研磨痕が



第６図　ＳＩ－01出土管玉製品実測図



第７図　ＳＩ－01出土勾玉、臼玉未製品実測図

残る。

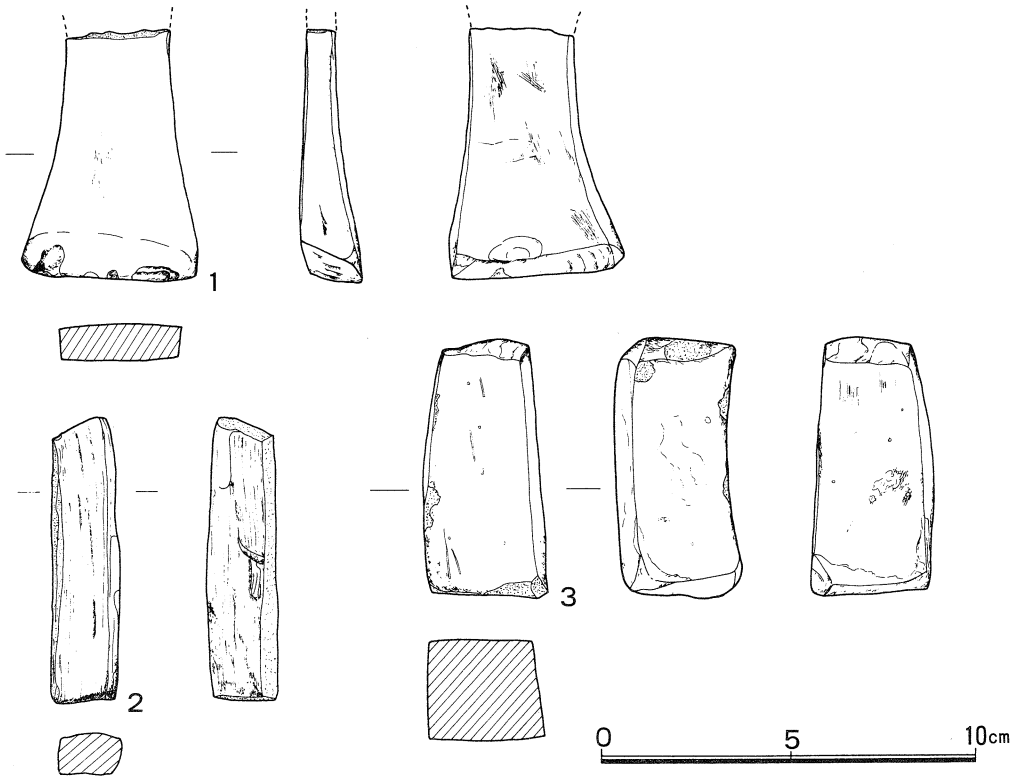
砥石（第８図）　１は安山岩製のもので、４面とも研磨による凹面をもち、細かい磨滅痕が認められる。２は細粒砂岩製のもので、４面のうち１面のみ凹面になり、キメの細かい磨滅痕がみられる。３は珪化木の内磨き砥石で、U字形を呈する側面に細かい磨耗痕が認められる。

ＳＩ－02【玉作工房跡】（第９図）

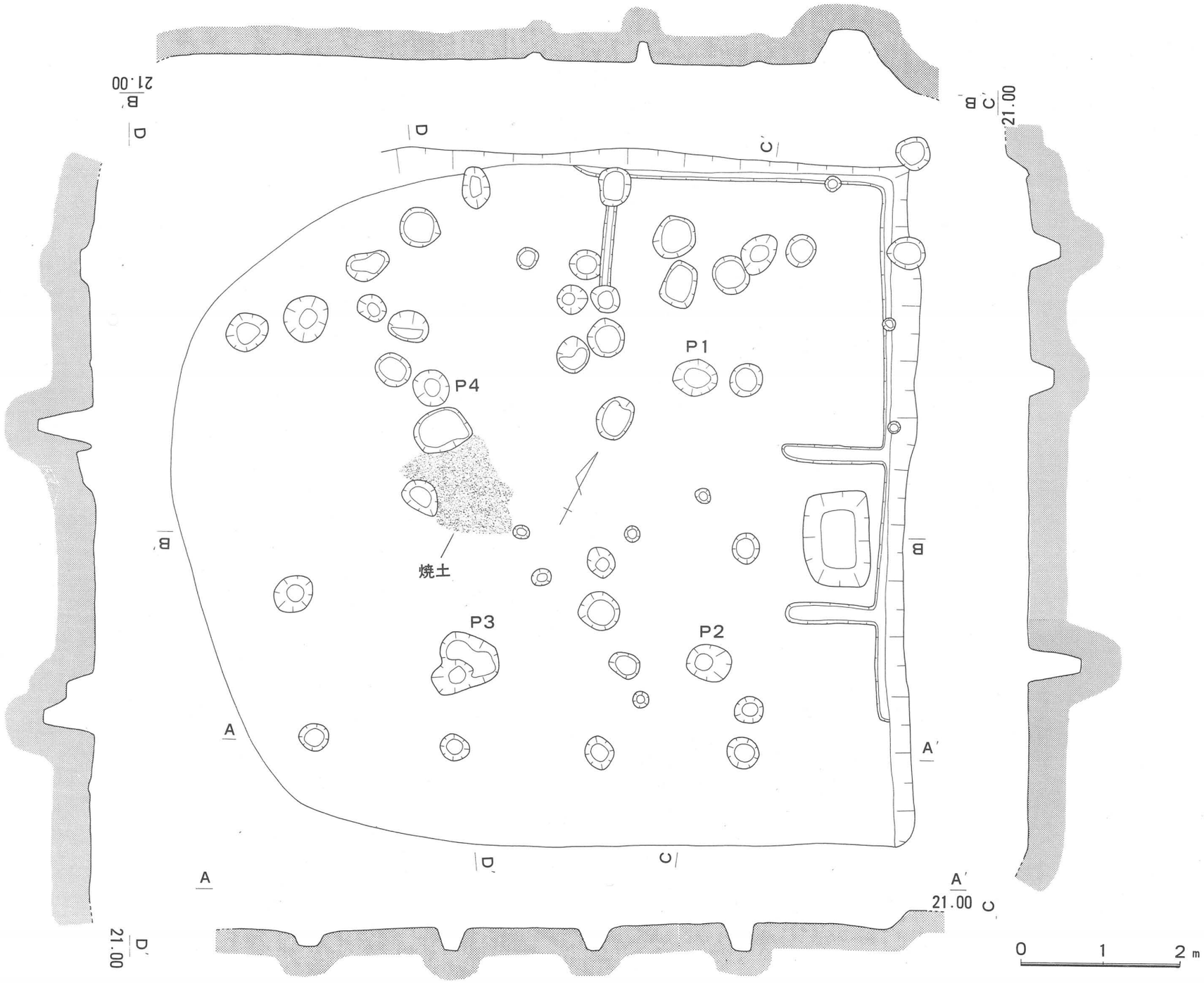
ＳＩ－01の南西約20m、丘陵先端頂上部の調査区最高所に位置し、調査前はここに径約10m、高さ60cmの円墳状の高まりが存在していた。調査の結果、主体部や周溝等の古墳に関する施設や遺物は認められなかったが、人為的に盛られたものと考えられる。後述するが、この盛土の下方南東斜面で横穴墓を検出していることから、横穴墓の後背墳丘の可能性が高い。本工房跡は、この墳丘直下の地山面から掘り込まれていた。

ＳＩ－01同様に風化花崗岩の地山に掘り込まれているため、床面等の遺存状態はあまり良くなく、貼り床等の有無については確認できなかった。また、床面中央から南東にかけて試掘トレンチが穿たれているため、この部分の遺物出土状況についても把握できなかった。

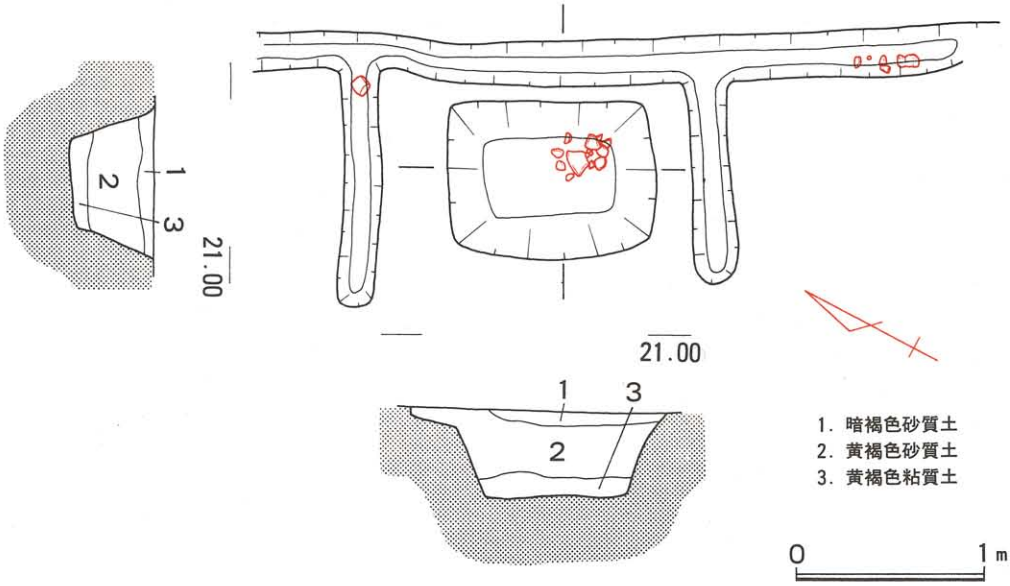
平面形は方形を呈すると思われるが、南西・南東壁が流出して残存していなかった。規模は１辺



第８図　SI－01出土砥石実測図



第9図　SI－02実測図



第10図　SI－02工作用ピット実測図

約８ｍを測る大型のものである。壁高は最大で40cmを測り、やや傾斜をもって掘り込まれていた。壁沿いに幅約10cm、深さ４cmの断面Ｕ字形の溝が廻っているが、北東壁側の中央では、ＳＩ－01と同様に長さ約1.2m、幅約20cm、深さ６cmを測る２本の溝が南西に向かって延びていた。また、この周溝内に３個の小ピットが掘り込まれていた。床面上から多数のピットを検出しているが、主柱穴はＰ１～Ｐ４の４個が対応すると思われる。平面形は円形および不整な楕円形を呈しており、長軸44～80cm、短軸44～76cm、深さ58～62cmを測り、柱穴の間隔は3.0～3.5mを測る。

北東壁側で２本の溝に挟まれたピットを検出した(第10図)。このピットは、長軸1.1m、端軸0.85m、深さ44cmを測り、平面形は長方形を呈する。底部に厚さ８cm程度の黄褐色粘土が貼られており、これは目張り用のものと考えられることから、工作用ピットに該当すると思われる。

出土遺物は、土師器甕、鼓形器台、小形丸底壺、高坏、須恵器蓋、鍔、碧玉製管玉未製品、同勾玉未製品、瑪瑙製勾玉未製品、碧玉・瑪瑙の剝片多数、砥石がある。検出状況をみると、各層からまんべんなく出土しているが、特に工作用ピット周辺において集中的に検出された（第11図)。

土師器（第12図）　甕形土器は２点（１・５）あり、１は若干退化しつつある複合口縁を有する甕口縁である。５は単純口縁の甕で、床面直上から出土した。口縁部は外傾してのび、端部は丸い。球形の体部をもち、外面にハケ目、内面にヘラ削りを施す。２は鼓形器台の受け部で、口縁部は外傾してのび、端部付近でさらに開いて端部に至る。３は小形丸底壺である。外傾して延びる口縁部と胴部がよく張る体部をもつ。４は高坏の脚部で、裾部がハの字状に開く。

須恵器（第12図）　蓋は３点（６～８）あり、６・７は口縁端部内面に段をもち、８は内傾する

平坦面をもつ。肩部外面に稜をもつが、6はやや退化したものである。9は甕の口縁部である。ラッパ状に開く口縁部で端部内面に段をもつ。頸部外面に波状文を施している。

玉未製品（第13・14図）　玉材として管玉・勾玉の未製品が出土している。

管玉未製品類は12点（第13図）出土している。8は滑石製で、他は碧玉製である。1は原石を荒割して作り出された板状の石核である。2・3は方柱状に分割したもので、側面調整を施していない段階のものである。4・5は方柱状のものに研磨を施す段階であるが、1側面のみに研磨が認められる。6・7はさらに研磨を施して多角柱状を呈するものである。8は全面に研磨が施されて打撃痕を残さず、研磨工程の終了段階にあるものと思われる。9～12は全面に研磨を施して多角柱を作りだし、穿孔を施す段階である。両面から穿孔が施されているが、貫通していない。11は穿孔途中で失敗したものと思われ、端部が破損している。12は製作途中で破損したものとみられるが、穿孔が2孔認められる。

勾玉未製品類は10点（第14図）出土しており、瑪瑙および碧玉を使用している。2・4・5・6・8・9は瑪瑙製、1・3・7・10は碧玉製である。1・2は形割によって作り出された石核である。3は勾玉用石核の素材をC字状に調整したものである。4～6はC字状および半月状に調整した石核片に研磨を施しているが、5は表裏、4・6は表裏と側面に研磨を施している。7は全面に研磨を施して、片面から穿孔されつつあるが、2㎜程度で放棄されている。8・9は整形研磨の終了段階にあるが、いずれも破損している。10はほぼ完成品に近く、片面から穿孔されているが、仕上研磨の段階で破損したものと思われ、研磨の稜が若干認められる。

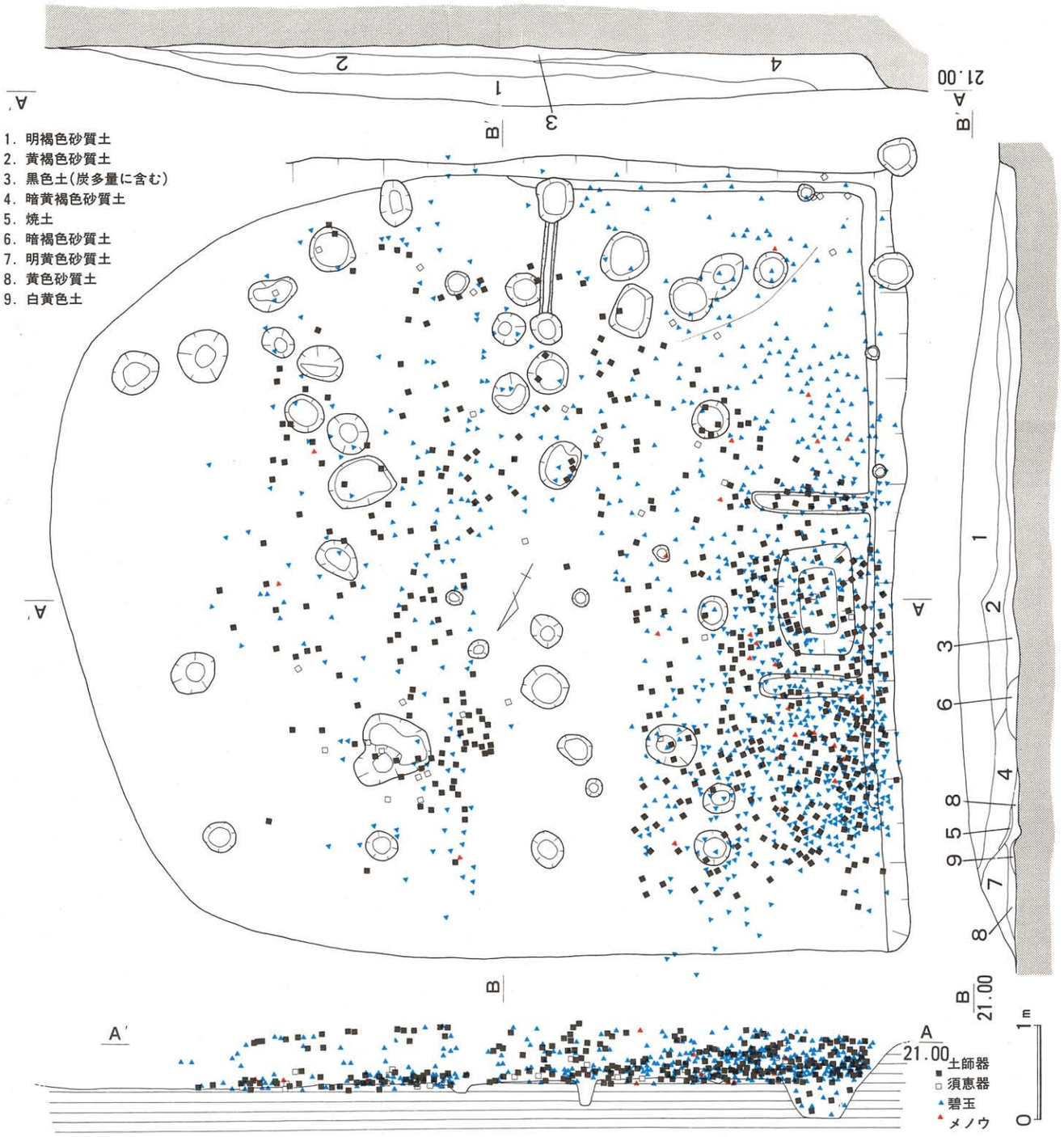
砥石（第15図）　いずれも内磨き砥石である。1・2は結晶片岩製のものであるが、破損のため使用痕は認められない。3は珪化木のもので、破損しているが断面U字状の側面に磨耗痕が認められる。

ＳＩ－03（第16図）

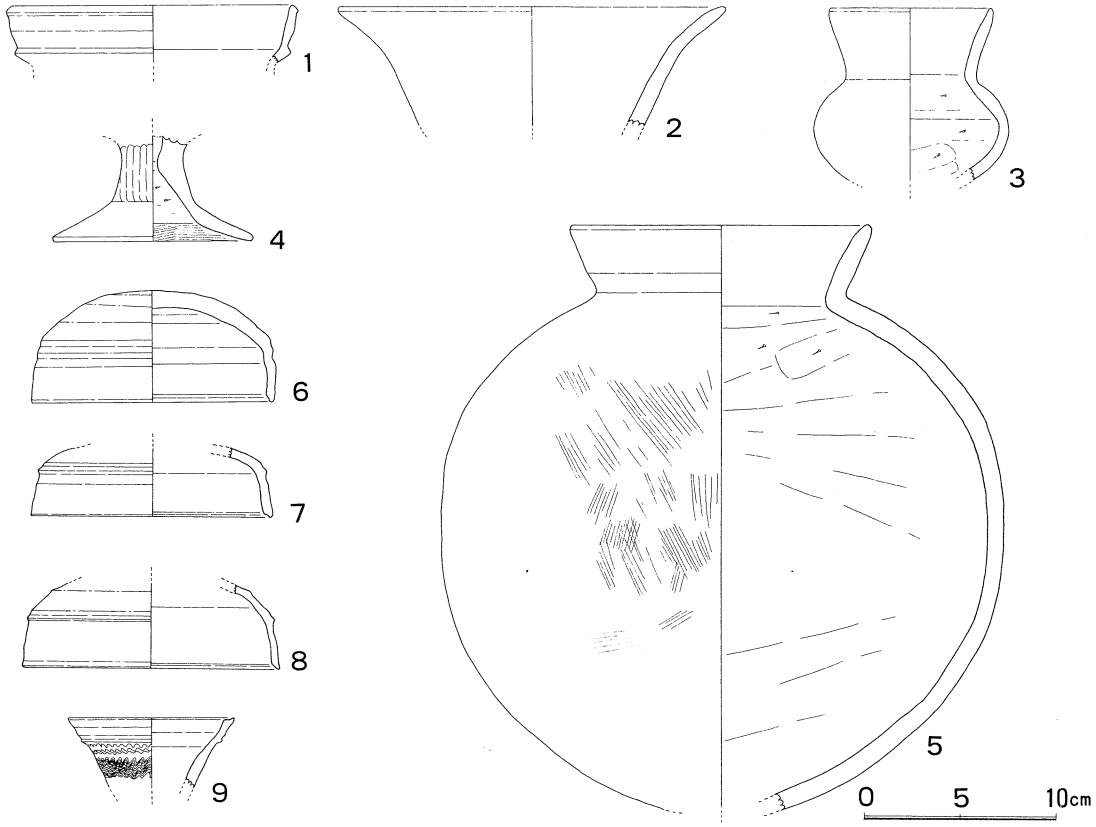
ＳＩ－02の南側下方の緩斜面に位置する。ＳＢ－03と切り合っており、両者はＳＩ－03(新)、ＳＢ－03（古）の新旧関係になる。斜面につくられているため、南側は削平されていた。住居内から大小合わせて11個のピットと2本の溝を検出しているが、内側の溝が柱穴と壁沿いに廻る溝によって切られていることから、建て替えが行われたことを示している。建て替え前をＳＩ－03ａ、建て替え後をＳＩ－03ｂと呼称する。

（ＳＩ－03ａ）

平面形は円形を呈しており、残存長で長軸5.2m、短軸3.3mを測る。溝は幅10～16cm、深さ5cmを測り、半円状に延びている。床面は平坦で、貼り床等の形跡は認められなかった。主柱穴はＰ1～Ｐ3の3個が対応するものと思われ、柱穴の規模は、上縁径34～40cm、深さ30～48cmを測り、柱



第11図　SI－02遺物出土状況図



第12図　SI－02出土遺物実測図

穴の間隔は2.3～2.4mを測る。

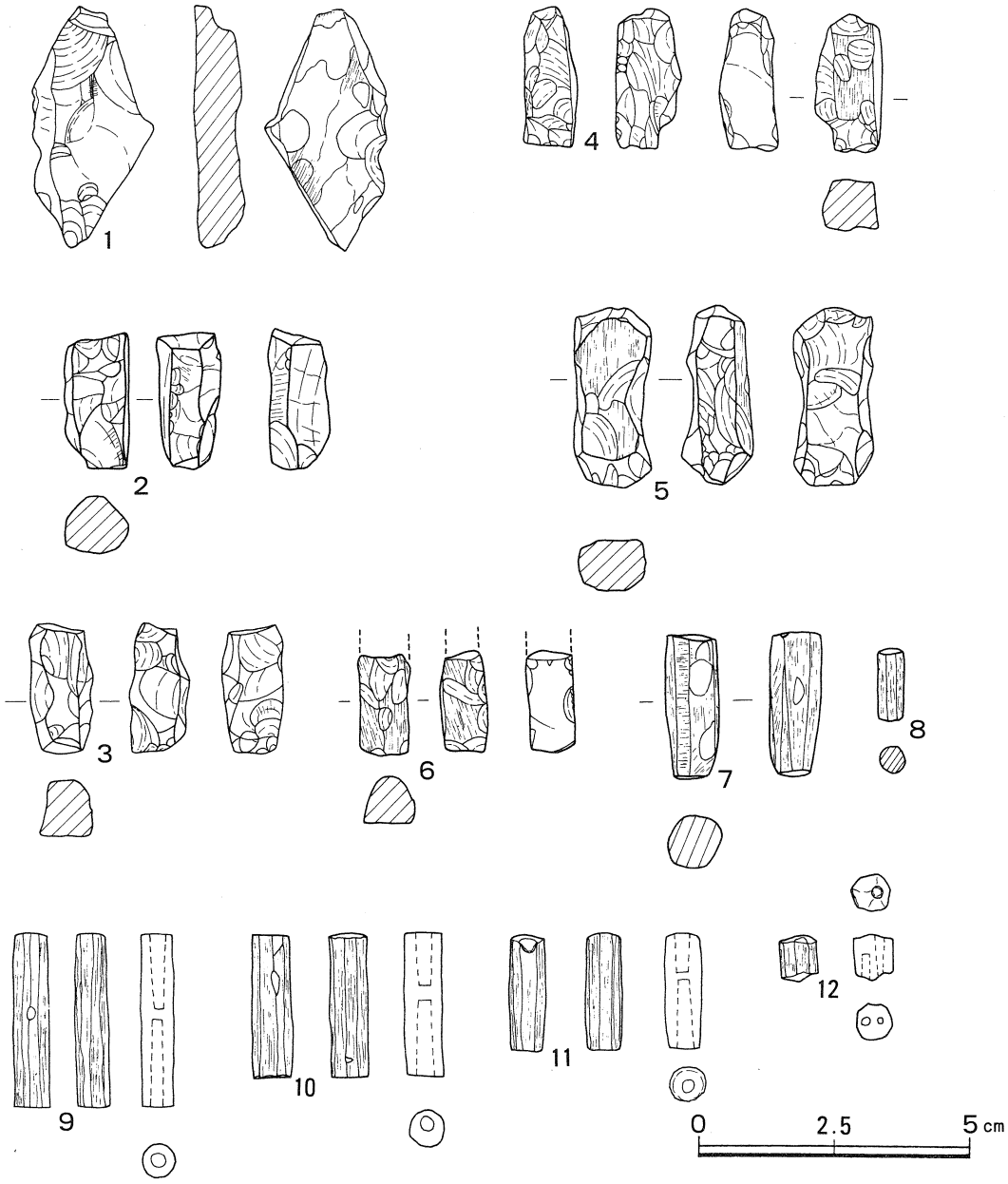
（SI－03b）

平面形は03aの平面プランを踏襲してそのまま拡張したもので円形を呈しており、床面も段差がつかず同一レベルであった。住居跡の規模は南側が削平されているが、長軸6.0m、短軸4.0mを測る。壁高は北壁側で最大値64cmを測り、やや傾斜をもって掘り込まれている。壁沿いに幅10～16cm、深さ5cmの溝が廻っており、これが03aの溝と切り合っていた。柱穴はP4～P6の3個が対応するものと思われる。柱穴の規模は、上縁径24～26cm、深さ34～52cmを測り、03aよりも少し小さいものであった。柱穴間の距離は2.6～2.8mを測る。

住居跡床面中央で不整形な中央ピットを検出した。若干攪乱を受けていたが、元は楕円形を呈していたと思われ、長軸1.4m、短軸1.1m、深さ50cmを測る。東側と西側に幅30～40cmの平坦面を伴い、2段状になっていた。柱穴の配置状況からみて、元は03aに付属していたと思われるが、03bに建て替えられてからも共有していたと考えられる。

遺物は床面西側から弥生土器の壺が立てた状態で出土している。

出土遺物（第17図）　1は弥生時代後期前半の壺である。口縁端部を内傾させ上下にやや拡張す



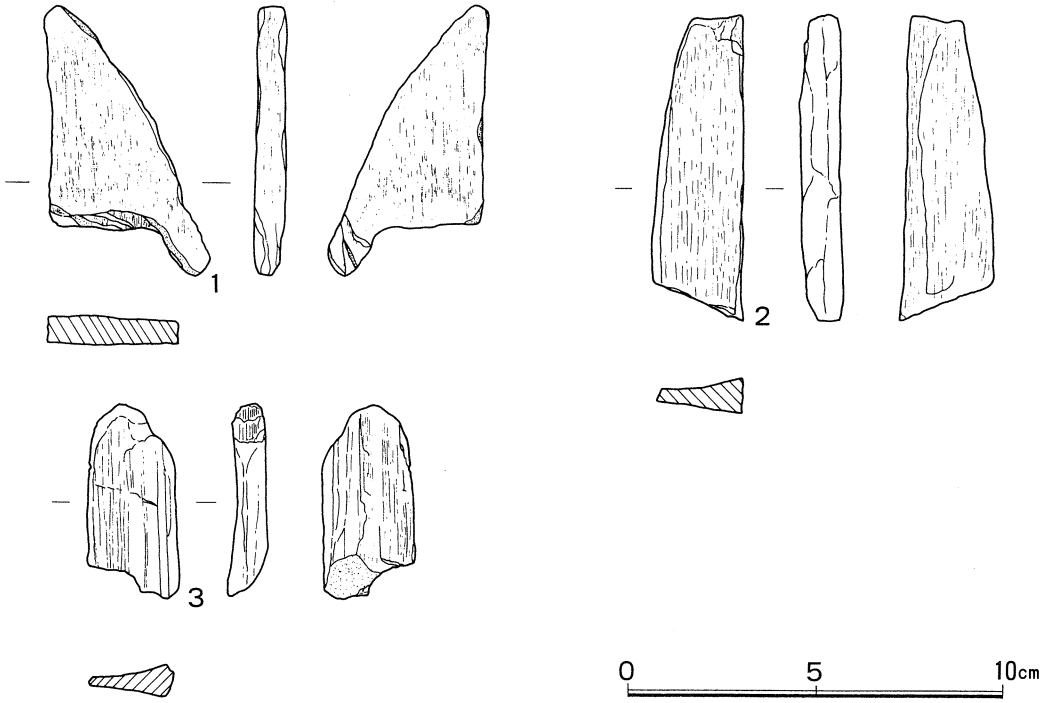
第13図　SI－02出土管玉未製品実測図

る、くりあげ口縁を有し、端部外面に2条の凹線文を施している。円筒状の頸部から強く外反して口縁部に至る。2は1の底部と思われる。

SI－04（第18図）

調査区南東斜面下方の平坦面から検出した竪穴住居跡である。平面形は方形を呈するが、南側は遺物包含層によって削平されており、床面も南に向かって緩やかに下っていた。残存長で東西軸4.2

第14図　ＳＩ－０２出土勾玉未製品実測図



第15図　SI－02出土砥石実測図

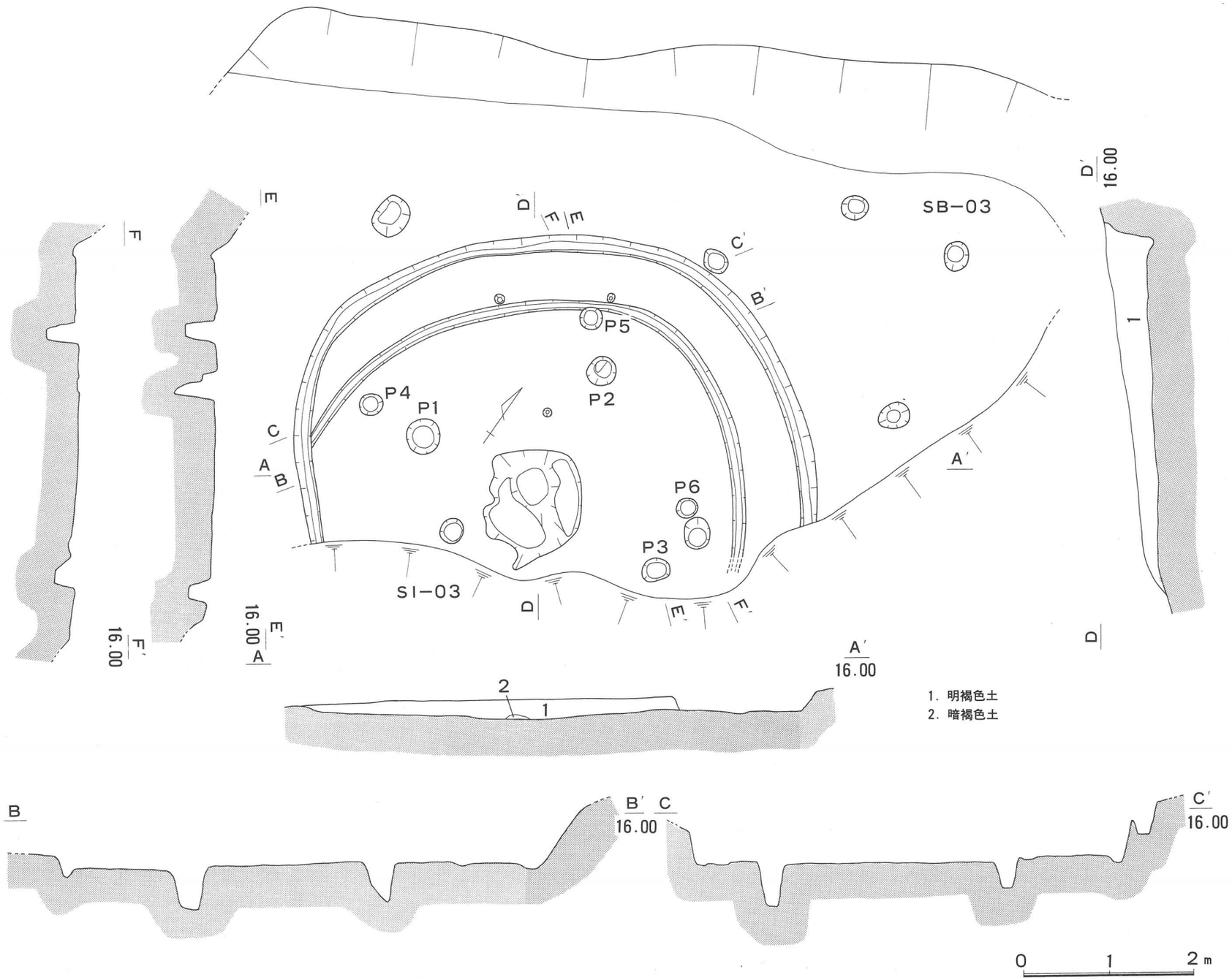
m、南北軸4.4mを測り、床面標高は6.9mと低い位置にある。壁高は北壁で最大値80cmを測り、傾斜をつけて掘り込まれていた。北壁から東壁にかけては壁沿いに幅8～14cm、深さ3cmの浅い溝が廻るが、西壁側には認められなかった。また、北壁側周溝の中央付近から南へ向かう溝も検出した。この溝は周溝より若干深く掘られており、深さ6cmを測る。床面から大小10個のピットを検出しているが、主柱穴は判断できなかった。ピットの規模は、上縁径18～44cm、深さ22～36cmを測る。

遺物は埋土中から弥生土器、土師器が出土している。

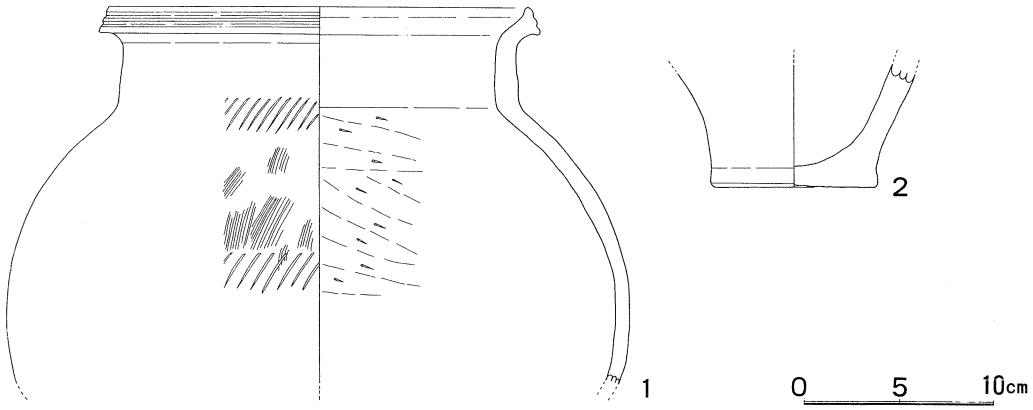
出土遺物（第19図）　1は弥生中期の壺である。大きく外反する口縁をもち、端部は肥厚する。端部外面に3条の凹線文を施している。2・4は弥生後期の甕で、複合口縁を有する。口縁部は外反するもので、2は外面に平行沈線を施している。3・5～7・9は土師器甕である。3・5は退化した複合口縁を有するもので、他は単純口縁のものである。7・9は口縁端部が内側に若干肥厚する。8は直立してのびる口縁部をもつ土師器壺である。10は土師器小形丸底壺で、外傾してのびる口縁部に、肩部がよく張る体部をもつ。11～13は土師器高坏で、坏部は湾曲するものである。12の脚柱部には円形の透かし孔が施されている。

SI－05（第20図）

SI－04の北東に位置し、SB－05・06・08・09と重複していた。南側半分は流出していたが、平面形は楕円形を呈するものと思われる。残存長で東西軸11.3m、南北軸4.0mを測るかなり大型の



第16図　SI−03、SB−03実測図



第17図　SI－03出土遺物実測図

住居跡である。床面は南に向かって緩やかに下っており、標高は約10mを測る。壁高は最大で44cmを測り、傾斜をもって掘り込まれていた。東壁から北壁中央にかけて幅28～80cm、深さ3～8cmの溝が廻っていた。ピットは7個検出しており、主柱穴は明確には判断できないが、壁側のピットが東西方向に並ぶことから、これらが柱穴の可能性がある。柱穴の規模は、上縁径24～32cm、深さ24～42cmを測る。

遺物はおもに周溝内から出土しており、弥生時代中期中葉の壺・甕等がある。

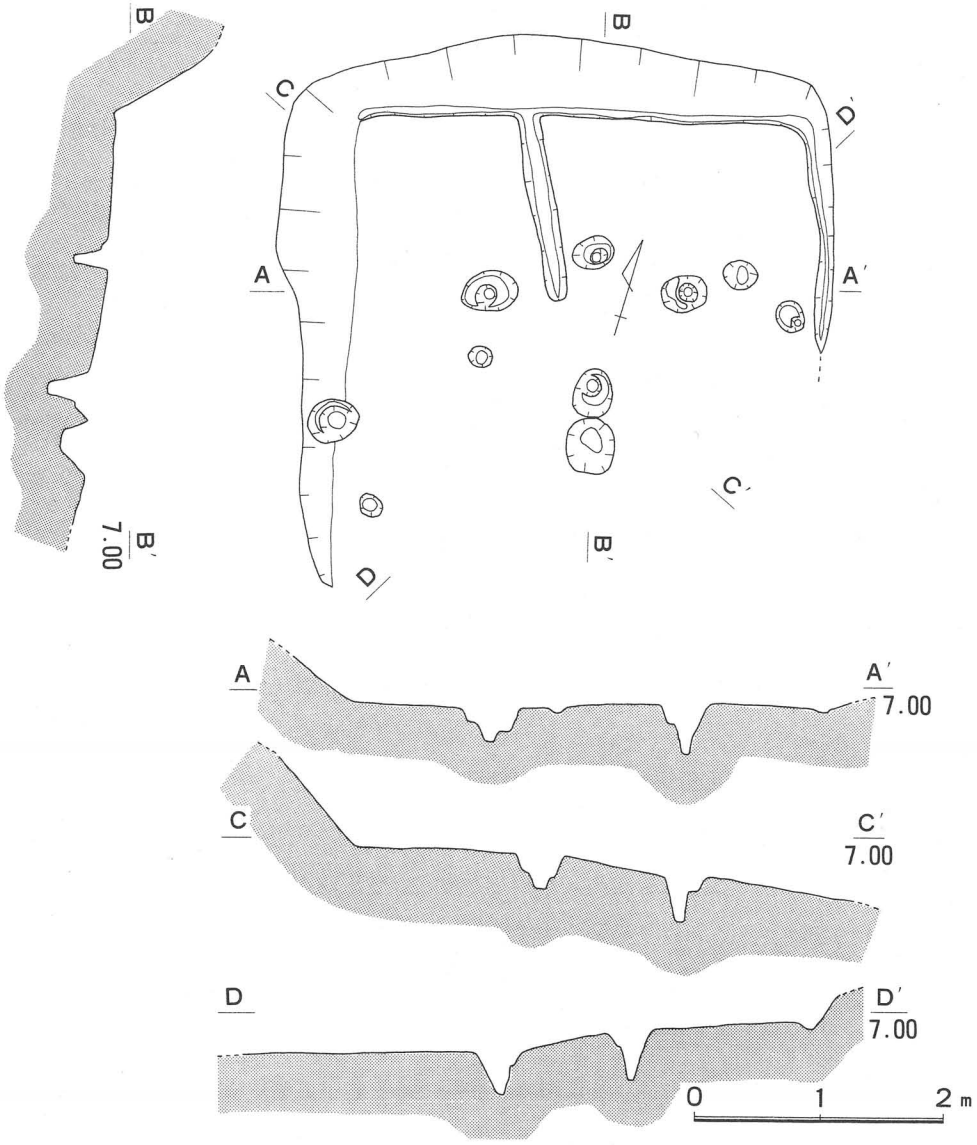
出土遺物（第21図）　壺は4点（1・6～8）ある。1は大きく外反する口縁部で、端部は肥厚する。端部外面に2条、口縁内面に5条の凹線文を施している。6は円筒状の頸部から外反する口縁部を有し、口縁端部は肥厚して内傾する平坦面をもつ。端部外面に2条の凹線文を施し、頸部下方に2条の突帯が廻る。体部は肩部がよく張って底部に至る。7・8は頸部片で、7は頸部から上方が逆「ハ」の字状に長くのび、外面に突帯を貼り付け、下半に平行沈線を施している。8は細長い頸部で、外面に平行沈線を施すものである。甕は4点（2～5）ある。いずれも口頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部が肥厚する。3～5は端部平坦面に2条の凹線文を施し、2は口頸部の屈曲部外面に指頭圧痕文帯をもつ。9は高坏の脚部である。ハの字状に開く脚部で、端部は肥厚して内傾する平坦面をもつ。3cm程度の間隔で二等辺三角形状の透孔を施す。

ＳＢ－05（第20図）

調査区南東側の緩斜面に位置し、ＳＢ－06によって切られていた。残存していたのは、平坦面とピットだけであり、床面標高は約11mを測る。床面は残存長で長軸4.3m、短軸1.4mを測る。ピットは上縁径30～50cm、深さ20～35cmのものを4個検出したが、建物跡は復元できなかった。

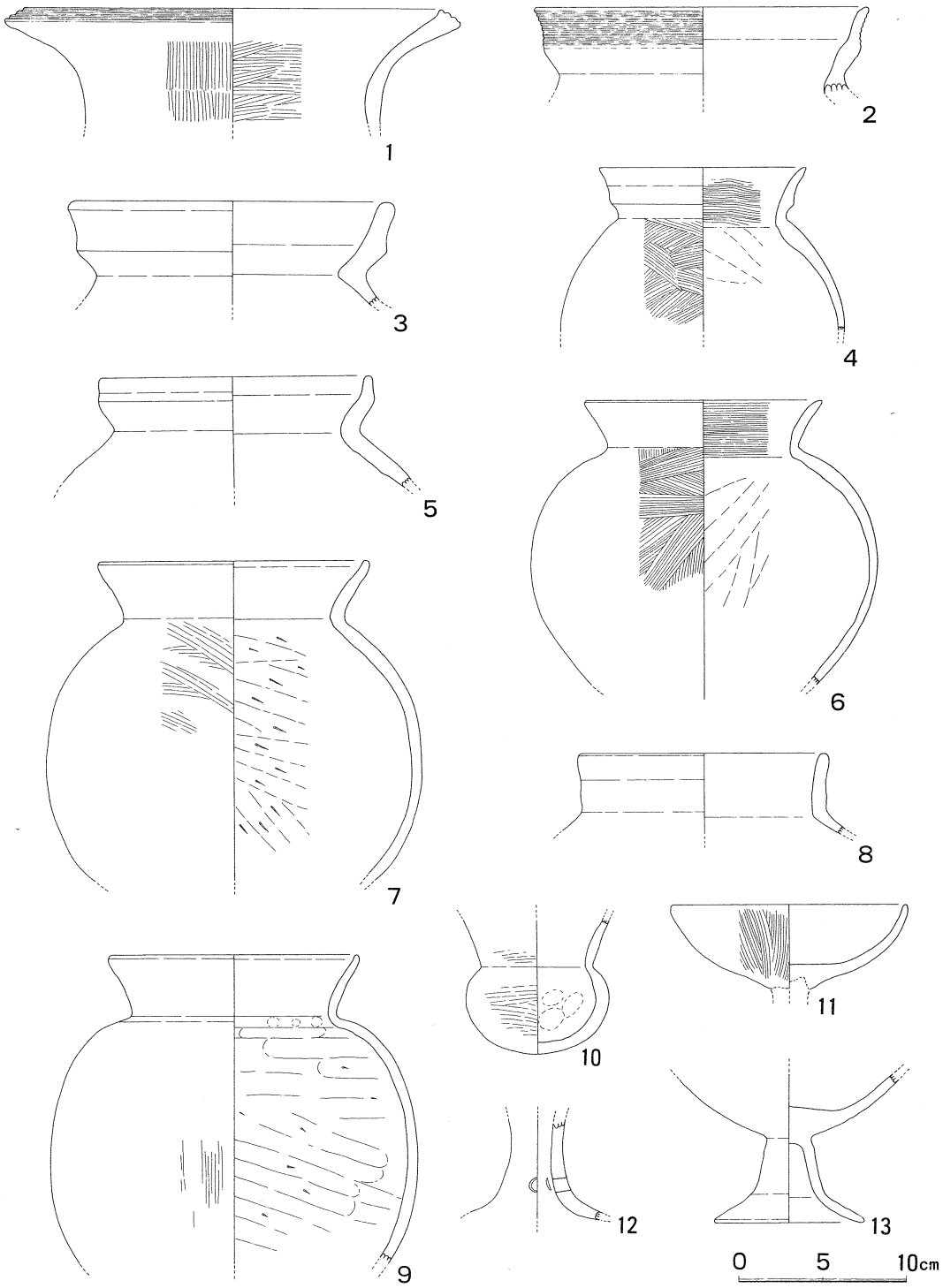
遺物は埋土中から弥生土器と土師器が出土している。

出土遺物（第22図）　1～6は弥生後期の甕である。口縁部は複合口縁を有し、直立気味およびやや外傾してのびる。外面に平行沈線を施すが、4は波状文も施している。また、1は頸部から肩



第18図　SI－04実測図

部にかけて櫛描刺突文、4・5は平行沈線を施している。7・8は土師器甕で、7は単純口縁、8は退化した複合口縁を有するものである。9は土師器小形丸底壺で、口縁部は短く外傾してのび、体部は胴部に最大径をもつものである。10・11は壺で、11は外傾してのびる口縁部である。11は直立してのびる口縁部をもつ。12～16は土師器高坏である。12はやや浅めの坏部で、口縁部付近で屈曲する。14は平らに近い坏底部をもち、そこから段をつけて口縁部に至るものである。13・15は内湾して口縁部に至る坏部をもつ。16はハの字状に開く脚部である。



第19図　SI−04出土遺物実測図

ＳＢ－06（第20図）

ＳＢ－05の南東隣りに位置し、ＳＢ－08によって切られていた。床面は残存長で長軸5.2m、短軸2.0mを測り、壁高は約20cmであった。壁沿いに２本の溝が認められるが、その状況から判断すると建て替えが行われたものと思われる。床面からピットを少数検出したが、径14cm、深さ20cmといずれも小さいもので、柱穴とするにはやや困難なものであった。

遺物は床面と埋土中から弥生土器と土師器が出土している。

出土遺物（第23図）　１は弥生後期の甕である。口縁部は端部を上下に拡張して、やや内傾したくりあげ状を呈するもので、外面に５条の擬凹線文を施す。５は弥生後期の壺である。大きく外傾する口縁部をもち、端部は上下に肥厚する。端部外面に４条の凹線文を施している。４は鼓形器台の受台部で、外面に平行沈線を施す。２・３は土師器甕である。２は複合口縁を有するもので、稜は鋭く横に突出する。肩部に２条の沈線とその間に貝殻腹縁刺突文を施したものを３条めぐらせている。３は短く外反する単純口縁をもつ。

ＳＢ－08（第20図）

ＳＢ－06の下方に位置する。ほとんど流出しており、ピット10数穴を検出しただけである。ピットは大小様々で径10～34cm、深さ14～20cmを測るが、建物跡は復元できなかった。

遺物は土師器高坏が１個出土している。

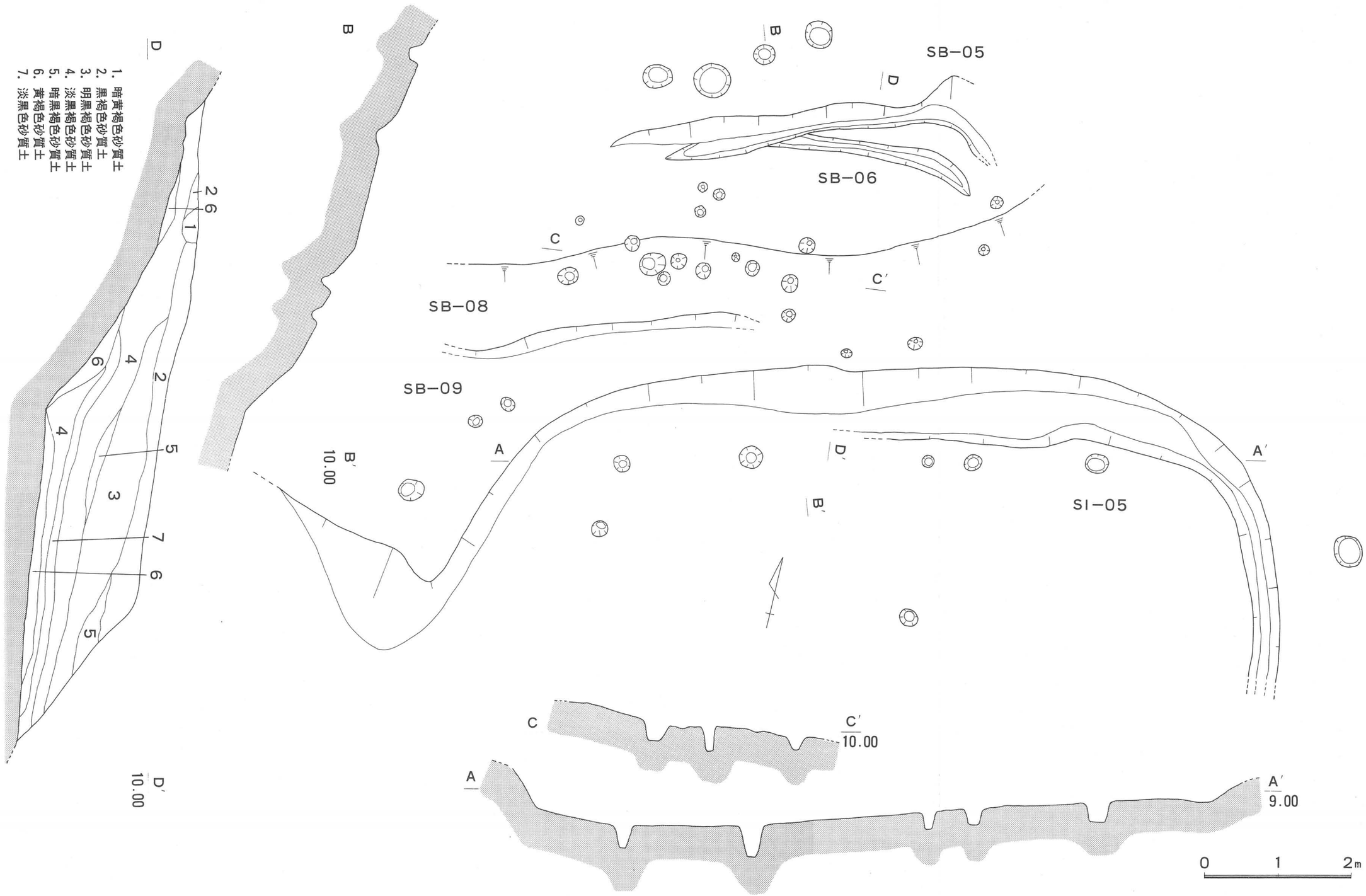
出土遺物（第24図９）　土師器高坏で、坏部は内湾する体部から外反する口縁部をもつ。脚部は裾部が大きく開くものである。

ＳＢ－09（第20図）

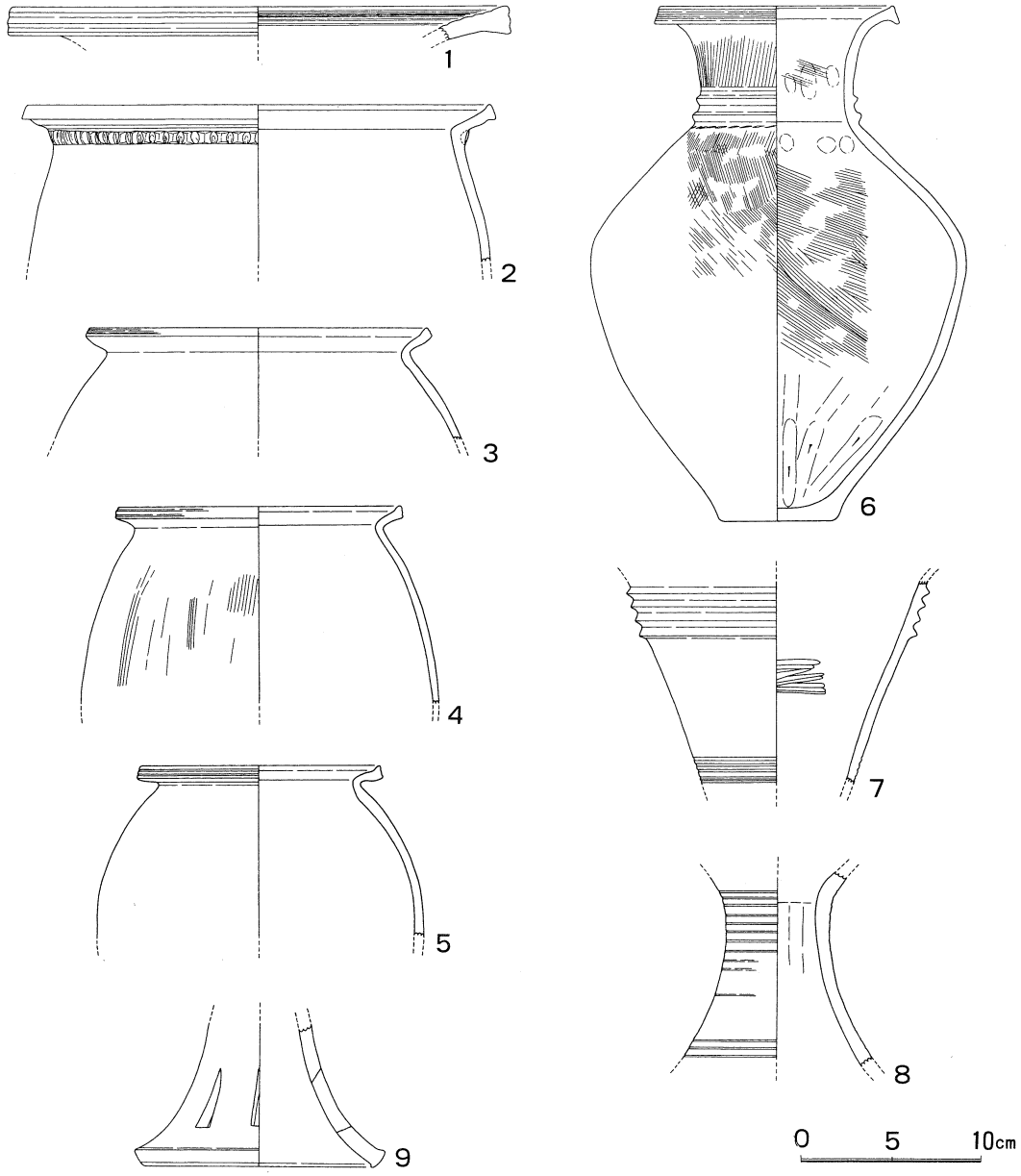
ＳＢ－08の下方、ＳＩ－05の上方に位置し、かなり削平されていたが、平坦面とピットを検出した。平坦面の規模は残存長で長軸約7.0m、短軸0.6～3.0mを測る。北側に壁が残っており、残存長3.9m、高さ約30cmを測る。床面で径14～32cm、深さ15～22cmのピットを数穴検出したが、建物跡は復元できなかった。

遺物は床面上とその付近から弥生土器が出土している。

出土遺物（第24図）　１・２は弥生中期の甕である。口頸部は「く」の字状を呈して屈曲するもので、口縁端部は肥厚する。端部平坦面に２～３条の凹線文を施し、口頸部外面に指頭圧痕文帯を貼り付ける。3・4は弥生後期の甕で、複合口縁を有する。口縁部はやや外反気味にのびるもので、外面に多条の平行沈線を施す。５は弥生後期の壺で、複合口縁を有する。口縁部は直立して内湾気味にのび、外面に擬凹線文を施している。６は小型丸底壺で、口縁部は複合口縁を呈している。７は器台形土器か高坏の脚部である。複合口縁状を呈し、外面に平行沈線を施す。８は鼓形器台の脚台部で、外面に平行沈線の痕跡が認められる。



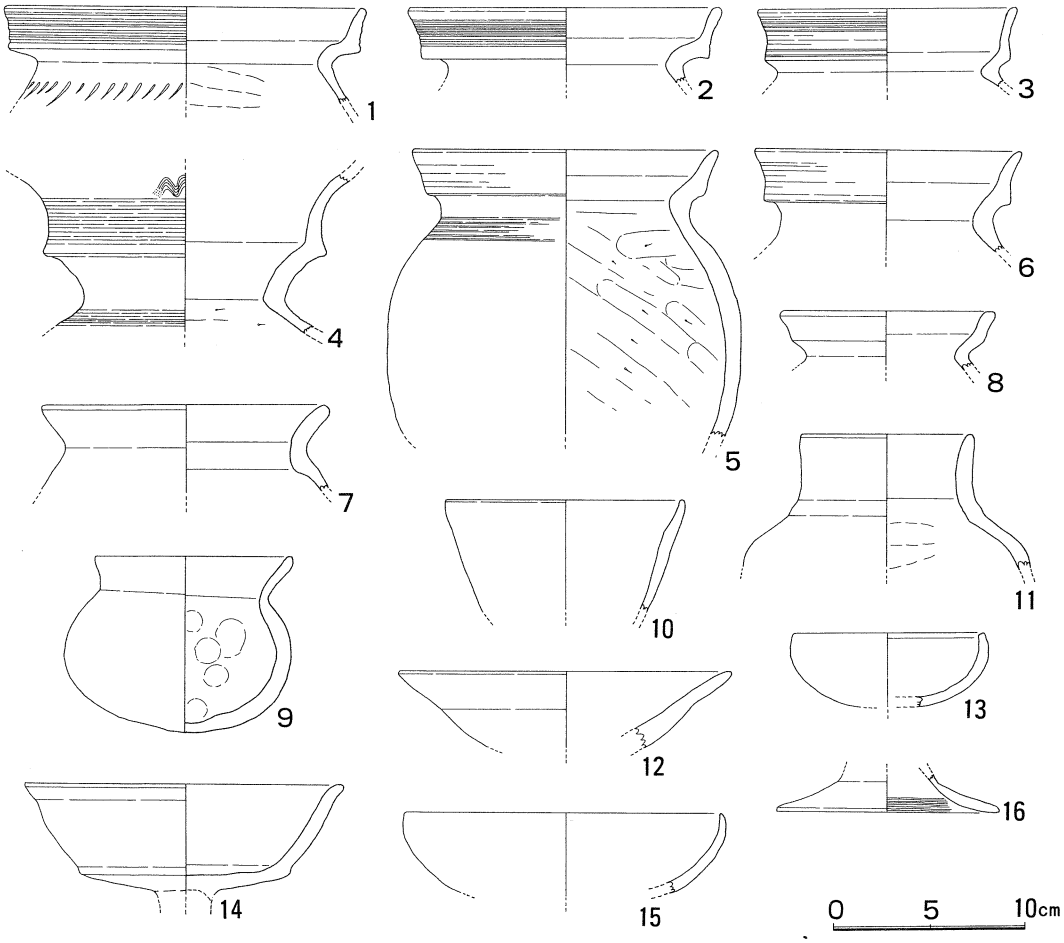
第20図　SI−05、SB−05、06、08、09実測図



第21図　SI－05出土遺物実測図

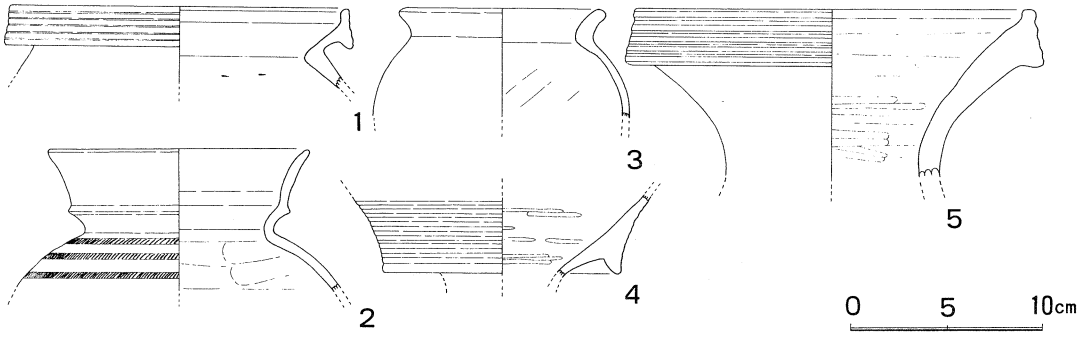
ＳＢ－01（第25図）

調査区北東に位置し、尾根上平坦面から斜面に移る地点で検出した。斜面を削って平坦面を作り出しているが、大半は流出していた。床面標高は約17mを測り、若干傾斜がついていた。残存規模は長軸5.8m、短軸2.4mを測り、壁高は最大で60cmを測る。壁沿いに幅14～22cm、深さ３～６cmの溝が「コ」の字状に廻っているが、途中で分岐していることから建て替えが行われたものと思われ

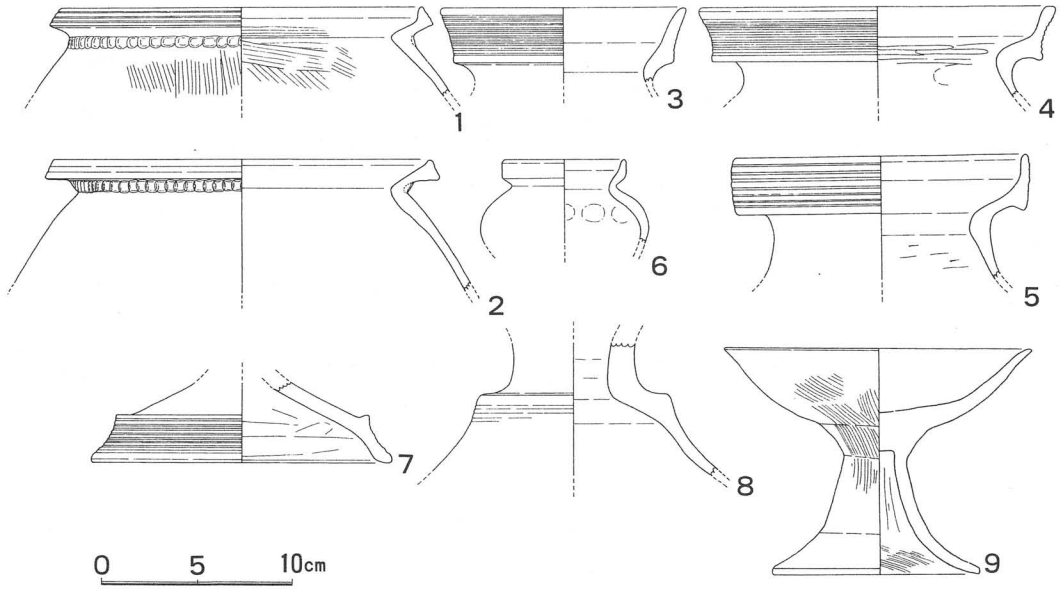


第22図　SB－05出土遺物実測図

る。床面から柱穴を5個検出したが、壁際の3個が対応するものと考えられ、床面や溝の形態から判断すれば、東西軸は2間までの建物跡と考えられる。柱穴はほぼ円形を呈するもので、上縁径25～36cm、深さ34～40cmを測り、柱穴の間隔は1.8mと一定である。



第23図　SB－06出土遺物実測図



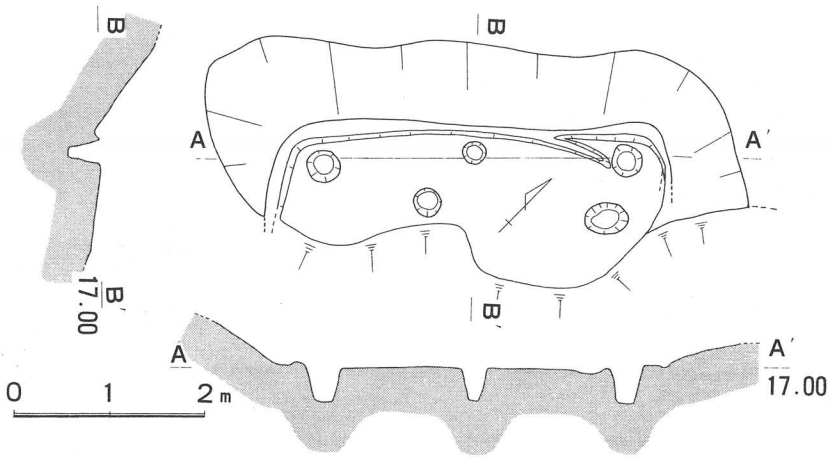
第24図　SB−08、09、出土遺物実測図

遺物は床面上から土製支脚片と甑の把手が出土している。

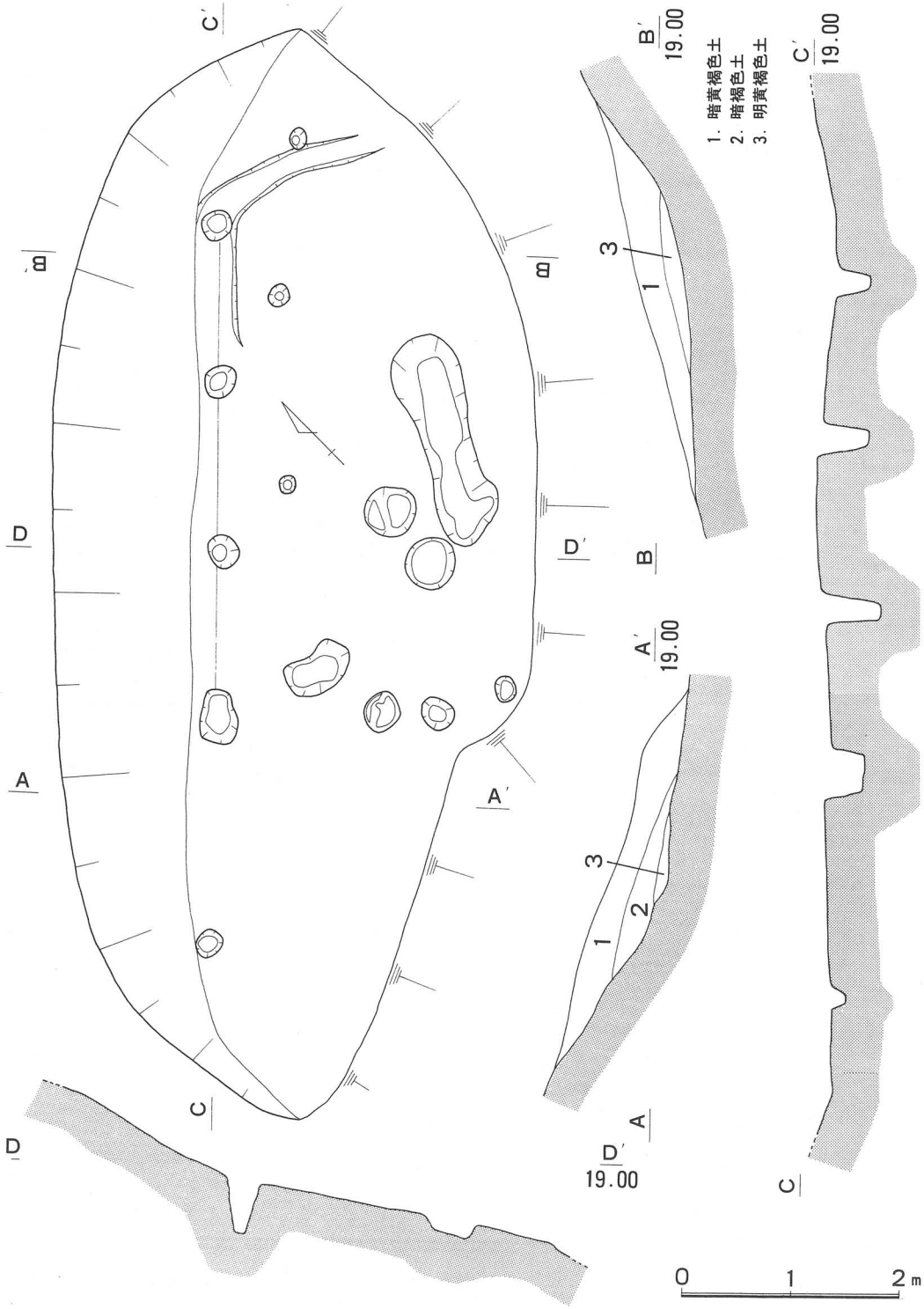
出土遺物（第27図１・２）　１は土製支脚の底部片で、表面に指頭圧痕が認められる。２は甑の把手である。

ＳＢ−02（第26図）

ＳＩ−02の下方、南東斜面に位置し、斜面を削って平坦面を作り出しているが、南東側は流出していた。残存長で長軸9.8m、短軸4.4mを測る比較的大型の加工段で、壁高は約1.0mであるが、か



第25図　SB−01実測図



第26図　ＳＢ－０２実測図